Ⅵ 遺 跡 地 解 説

1 目　次

(1) 大網西の内遺跡 161
(2) 大網堂峯遺跡 161
(3) 大網導専内遺跡 161
(4) 牛沢古墳 161
(5) 安養院跡 161
(6) 門前遺跡 162
(7) 堀の内城跡 162
(8) 田中堀の内遺跡 162
(9) 屋敷裏遺跡 162
(10) 岡平遺跡 162
(11) 向前遺跡 162
(12) 高谷内遺跡 163
(13) 延命寺跡 163
(14) 田中山口遺跡 163
(15) 御城山遺跡 163
(16) 御城山古墳群 163
(17) 徳次郎城跡 163
(18) 田中定済遺跡 164
(19) 西根遺跡 164
(20) 鎌堀館跡 164
(21) 中妻遺跡 164
(22) 東原遺跡 165
(23) 中妻寺跡 165
(24) 高谷林一里塚 165
(25) 下横倉城跡 165
(26) 下横倉遺跡 166
(27) 下横倉寺跡 166
(28) 下金井遺跡 166
(29) 野沢北遺跡 166
(30) 野沢遺跡 167
(31) 野沢石塚遺跡 169
(32) 宮内坪裏山遺跡 169
(33) 念仏塚遺跡 169
(34) 寺山供養塚群 170
(35) 星の宮神社裏遺跡 170
(36) 千貫坊遺跡 170
(37) 大久保牛塚 170
(38) 桜畑遺跡 170
(39) 欠の上遺跡 170
(40) 瓦塚日満北久保遺跡 171
(41) 立野高塚群 171
(42) 曽理部羅遺跡 172
(43) 上の台遺跡 172
(44) 北山古墳群 172
(45) 関堀土用地遺跡 175
(46) 野沢向内遺跡 175
(47) 上戸際一里塚 176
(48) 字都宮ゴルフ場遺跡 176
(49) 北原遺跡 176
(50) 上戸祭中ノ島遺跡 176
(51) 道半塚供養塚群 177
(52) 百穴裏遺跡 177
(53) 長岡百穴 177
(54) 瓦塚古墳群 179
(55) 谷口山古墳群 180
(56) 三本松遺跡 180
(57) 大塚古墳 180
(58) 大ジノ古墳群 182
(59) 松ケ丘遺跡 182
(60) 長山供養塚群 182
(61) 前坂供養塚群 183
(62) 姥ケ入供養塚群 183
(63) 田向遺跡 183
(64) 根河原瓦窯跡群 184
(65) 水道山瓦窯跡群 185
(66) 入畑窯跡群 188
(67) 払面遺跡 188
(68) 山本山古墳群 188
(69) 御蔵山古墳 190
(70) 堀之内遺跡 191
(71) 戸際兎田遺跡 191
(72) 溜山下遺跡 191
(73) 万城路古墳群 192
(74) 中居遺跡 192
(75) 先道路遺跡 192
(76) 内出遺跡 192
(77) 金山遺跡 192
(78) 中蜂遺跡 192
(79) 上篠井高尾神社南遺跡 193
(80) 寿福院跡 193
(81) 久保遺跡 193
(82) 中坪遺跡 193
(83) 加波山北遺跡 193
(84) 上小池一里塚 193
(85) 上小池古墳群 194
(86) 篠井金山跡 194
(87) 龍興寺跡 194
(88) 下ノ内遺跡 194
(89) 曲坂遺跡 194
(90) 原遺跡 194
(91) 林業センター内遺跡 195
(92) 古河遺跡 195
(93) 柳町遺跡 195
(94) 六本木一里塚 195
(95) 仲内遺跡 195
(96) 坊村遺跡 196
(97) 石郡田遺跡 196
(98) 岡坪遺跡 197
(99) 原供養塚 197
(100) 仲根供養塚 197
(101) 桑原遺跡 197
(102) 天王寺遺跡 198
(103) 柿の上遺跡 198
(104) 畑中遺跡 198
(105) 雨乞山遺跡 198
(106) 坂下遺跡 198
(107) 二ケ山遺跡 199
(108) 茗荷沢遺跡 199
(109) 岡崎遺跡 200
(110) 安五郎内遺跡 200
(111) 藤本館跡 200
(112) 大堀館跡1号 201
(113) 大堀高塚群 201
(114) 大堀館跡2号 201
(115) 御経塚 201
(116) 白岡遺跡 202
(117) 長林寺北遺跡 202
(118) 岩原神社西遺跡 202
(119) 西沢高塚群 202
(120) 御殿場遺跡 202

(121) 仁良塚遺跡 203
(122) 源道寺遺跡 203
(123) 山崎古墳群 203
(124) 妙吉塚 203
(125) 宝木古墳 203
(126) 和尚塚 204
(127) 戸用地遺跡 204
(128) 北ノ館跡 204
(129) 稲荷後遺跡 205
(130) 入唐沢遺跡 205
(131) 寺東遺跡 205
(132) 前原遺跡 205
(133) 日吉遺跡 205
(134) 多気城跡 205
(135) 佐宗前遺跡 207
(136) 大谷寺洞穴遺跡 207
(137) 瓦作古墳群 208
(138) 坂本高塚群 208
(139) 羽黒古墳 208
(140) 外和田高塚群 208
(141) 向山根遺跡 208
(142) 境木遺跡 208
(143) 漆久保遺跡 209
(144) 梅林遺跡 209
(145) 上の原遺跡 209
(146) 宗円塚古墳群 210
(147) 羽下薬師堂裏古墳 210
(148) 上の原古墳群 210
(149) 中城跡 211
(150) 御城跡高塚群 211
(151) 中丸北原遺跡 211
(152) 荒針高塚群 213
(153) サルボ山高塚群 213
(154) 大久保遺跡 213
(155) 台耕上遺跡 213
(156) 長坂天王寺遺跡 214
(157) 宝性寺跡 214
(158) 高田遺跡 214
(159) 筒花高塚群 214
(160) 鶴田中原遺跡 214
(161) 羽黒下団地遺跡 214
(162) 長峰遺跡 215
(163) 亀が窪古墳群 215
(164) 上欠団地遺跡 215
(165) 初網遺跡 216
(166) 高尾神遺跡 217
(167) 富士山台遺跡 217
(168) 亀岡坪遺跡 218
(169) 沓掛遺跡 218
(170) 亀岡前古墳群 218
(171) 定使古墳 218
(172) 植の内古墳 218
(173) 聖山公園遺跡 219
(174) 宿坪遺跡 222
(175) 稲荷古墳群 223
(176) 観音塚古墳 223
(177) 根古屋遺跡 223
(178) 並塚遺跡 223
(179) 不動前3丁目遺跡 223
(180) 不動前5丁目遺跡 224
(181) 陽南1丁目遺跡 224
(182) ガンセンター東遺跡 224
(183) 犬飼城跡 224
(184) 主計内遺跡 225
(185) 下低上愛宕塚古墳 225
(186) ひのき内遺跡 226
(187) 下低上古墳群 226
(188) 下欠北原遺跡 226
(189) 下低上下の内遺跡 226
(190) 西の内遺跡 227
(191) 大明神遺跡 227
(192) 亀塚古墳 227
(193) 辻の内遺跡 227
(194) 萩山遺跡 228
(195) 庭行保遺跡 228
(196) 塚山古墳群 228
(197) 旭ケ丘団地北遺跡 231
(198) 旭ケ丘団地遺跡 231
(199) 樋口城跡 231
(200) 権現山高塚群 231
(201) 鶴田西の宮遺跡 232
(202) 陽南市場南遺跡 232
(203) 若松原遺跡 232
(204) 一向寺別院付近遺跡 232
(205) 二軒屋遺跡 232
(206) 西原北遺跡 234
(207) 留西遺跡 234
(208) 十里木古墳 235
(209) 綾女塚古墳 235
(210) 赤沢高塚群 235
(211) 芋内遺跡 236
(212) 雀宮東浦遺跡 236
(213) 雀宮駅東遺跡 236
(214) 牛塚東遺跡 236
(215) 上坪遺跡 236
(216) 上坪新田遺跡 237
(217) 熊野神社南遺跡 237
(218) 立海道遺跡 237
(219) 見明遺跡 238
(220) 二子塚古墳 238
(221) 牛塚古墳 238
(222) 桜稲荷古墳 241
(223) 杉村遺跡 241
(224) 双子塚古墳 241
(225) 天狗原雀宮中前遺跡 242
(226) 島の前遺跡 242
(227) 赤岩遺跡 242
(228) 並木遺跡 242
(229) 三ツ矢遺跡 243
(230) 石川坪遺跡 243
(231) 赤土山遺跡 243
(232) 富士見団地北遺跡 243
(233) 宇都宮機器南遺跡 244
(234) 多功神塚古墳群 244
(235) 笹塚古墳 244
(236) 車塚古墳群 245
(237) 原古墳群 245
(238) 権現塚古墳群 245
(239) 松の塚古墳 246
(240) 鶴舞塚古墳 246
(241) 権現山北遺跡 246
(242) 権現山古墳群 252
(243) 茂原北原遺跡 252
(244) 富士見向山遺跡 253
(245) 西の前遺跡 253
(246) 大日塚古墳 253
(247) 愛宕塚古墳群 254
(248) 愛宕塚東遺跡 255
(249) 前畑遺跡 255
(250) 小薹遺跡 255
(251) 江面遺跡 256
(252) 上神主廃寺跡 256

(253) 本村上野遺跡 256
(254) 十ケ屋敷遺跡 257
(255) 西原境遺跡 258
(256) 雷電山遺跡 258
(257) 並松遺跡 259
(258) 江曽島北原遺跡 259
(259) 関道遺跡 259
(260) おしめ尽遺跡 259
(261) 大山祇神社古墳 260
(262) 大房林遺跡 260
(263) 下栗大塚古墳 260
(264) 大塚神社古墳群 260
(265) 追金仏遺跡 260
(266) 大久保台山遺跡 261
(267) 天王山古墳群 261
(268) 東原古墳 261
(269) さるやま城遺跡 261
(270) 南原古墳 262
(271) 西刑部西原遺跡 262
(272) 柿木坂遺跡 262
(273) 根本西台古墳群 263
(274) 根本遺跡 263
(275) 飯塚古墳 263
(276) 飯塚山古墳 263
(277) 大関台遺跡 263
(278) 大関高塚群 263
(279) 平塚原根岸遺跡 264
(280) 平出城跡 264
(281) 免の内台古墳 264
(282) 山下台高塚群 264
(283) 三日月神社古墳 264
(284) 三日月神社南古墳群 265
(285) 久部浅間山古墳 265
(286) 久部愛宕塚古墳群 266
(287) 石井城跡 269
(288) 石井久保田古墳群 269
(289) 古坂峯高塚 269
(290) 中丸遺跡 270
(291) 板戸愛宕塚古墳群 270
(292) 山田遺跡 270
(293) 不動上供養塚 270
(294) 不動山古墳群 270
(295) 不動遺跡 270
(296) 日陰坂上古墳群 271
(297) 鎮守林西遺跡 271
(298) 淡路城跡 271
(299) 向原遺跡 271
(300) 満美穴古墳群 271
(301) 赤高地遺跡 272
(302) 同慶寺館跡 272
(303) 竹下浅間山古墳 272
(304) 飛山城跡 276
(305) 竹下遺跡 278
(306) 千波ケ原遺跡 278
(307) 鑑山東原遺跡 278
(308) 氷室中の島遺跡 279
(309) 免の内遺跡 279
(310) 臼内遺跡 279
(311) 大杉神社古墳 279
(312) 中台西遺跡 279
(313) 氷室中妻遺跡 280
(314) 中台東古墳 280
(315) 東中台遺跡 280
(316) 土堂塚 280
(317) 中台遺跡 280
(318) 中台高塚 280
(319) おひじり塚古墳 281
(320) 千波稲荷神社古墳 281
(321) 小松原遺跡 281
(322) 妙音寺高塚群 281
(323) 中極高塚群 281
(324) 東田遺跡 282
(325) シドミ久保遺跡 282
(326) 西原庚申塚群 282
(327) 上籠谷笹塚古墳 282
(328) 西向遺跡 282
(329) 上籠谷和尚塚 283
(330) 小泉庚申塚群 283
(331) 下西原遺跡 283
(332) 下上遺跡 283
(333) 無宗古墳群 283
(334) 星の宮遺跡 283
(335) 電気掘跡 284
(336) 宝木用水堰 284
(337) 妙哲禅師の墓 284
(338) 下横倉念仏塚古墳 284
(339) 大堀供養塚群 284
(340) 滝明寺跡 285
(341) 川俣大塚古墳 285
(342) 谷口山権現南供養塚群 285
(343) 権現山供養塚群 285
(344) 戸際山兜塚古墳群 285
(345) 祥雲寺境内古墳 285
(346) 宇都宮タワー前古墳 286
(347) 御上人塚 286
(348) 樋爪氏の墓 286
(349) おしどり塚 286
(350) 宇都宮城跡 286
(351) 戸田氏の墓所 287
(352) 蒲生君平勅旌碑 287
(353) 旭陵遺跡 287
(354) 小原高尾神社古墳 289
(355) 桑島城跡 289
(356) 刑部城跡 290
(357) どどづか高塚 290
(358) 針ケ谷新田古墳群 290
(359) 幕田古墳群 291
(360) 猿山遺跡 291
(361) 瑞穂野団地遺跡 293

2 例　　言

(1) 本解説の掲載順序は，市遺跡番号の順とした。

(2) 解説の本文は，宇都宮市遺跡台帳（宇都宮市埋蔵文化財包蔵地調査カード）の概要を記したものである。

(3) 参考資料は，既刊の書籍等から抜粋して転載したもので，書籍名は次のとおりである。なお，下記書籍はそれぞれ引用箇所に書名を記した。

① 宇都宮市史第1巻原始古代編，昭和54年，宇都宮市
② 宇都宮市史第2巻中世史料編，昭和55年，宇都宮市
③ 宇都宮市史別巻，昭和56年，宇都宮市
④ 栃木県史料編考古1，昭和51年，栃木県教育委員会
⑤ 栃木県の中世城館跡，昭和57年，栃木県教育委員会
⑥ 聖山公園遺跡Ⅰ，昭和58年，宇都宮市教育委員会
⑦ 聖山公園遺跡発掘調査見学会資料，昭和58年，宇都宮市教育委員会
⑧ 飛山城跡，昭和52年，宇都宮市教育委員会
⑨ 宇都宮市瑞穂野団地遺跡，昭和53年，宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合，宇都宮市教育委員会
⑩ 猿山遺跡・付久部台古墳群，昭和56年，栃木県教育委員会
⑪ 猿山A遺跡，昭和53年・栃木県住宅供給公社，栃木県教育委員会
⑫ 旭陵遺跡，昭和57年，宇都宮市教育委員会
⑬ 雀宮牛塚古墳，昭和44年，宇都宮市教育委員会
⑭ 塚山古墳群，昭和54年，栃木県教育委員会
⑮ 竹下浅間山古墳，昭和51年，宇都宮市教育委員会
⑯ 山本山古墳，水道山瓦窯跡発掘調査報告書，昭和54年，栃木県教育委員会
⑰ 峰古第1号，昭和52年，宇都宮大学考古学研究会
⑱ 峰考古第3号，昭和56年，宇都宮大学考古学研究会
⑲ 栃木県考古学会誌第6集抜刷，昭和56年，小堀時蔵，梁木誠
⑳ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和57年，栃木県教育委員会
㉑ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和58年，栃木県教育委員会
㉒ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和54年，栃木県教育委員会

（分布図　28頁・図版299頁）

（ 1 ）大網西の内遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田・畑　　所在地　大網町437ほか
遺跡番号｛市 1／県 －｝

北西に傾斜する段丘上に位置する。現在，広い面積が水田となっている。段丘の下は南北に市道が通り，一面に平坦な水田となっており，田川が近くを南流している。

かっては，縄文土器の破片や石器等が濃密に分布したが，現在は少量しか散在していない。

（分布図　28頁・図版299頁）

（ 2 ）大網堂峯遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑・水田　　所在地　大網町282ほか
遺跡番号｛市 2／県 －｝

西方に広がる平坦な台地上に位置している。台地の東に高尾神社があり周囲は水田で，台地上は大部分畑地となっており，台地の突端に墓地がある。

昭和25年ごろ，台地の一面を削し開田の作業中住居跡と考えられる遺構が3基発見され，そこから縄文土器，石器類等が多数出土した。

（分布図　30頁・図版299頁）

（ 3 ）大網導専内遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田・畑　　所在地　大網町154ほか
遺跡番号｛市 3／県 －｝

西方に傾斜する段丘上に位置している。現在広い面積が農地となっており，台地の下を小川が南流し，田川に注いでいる。

昭和24年ごろには，縄文土器の破片がかなり散在していたが，現在はほとんど発見できない。

（分布図　30頁・図版299頁）

（ 4 ）牛沢古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　徳次郎町3172-2ほか
遺跡番号｛市 4／県 －｝

牛沢林道の北側に位置し，南に傾斜する山林の中にあり，古墳の東側を日光バイパスが南北に通っている。

墳丘の規模は，直径約5ｍ，高さ約2ｍの円墳であり，桧が生い繁っているが，保存状況は良好といえる。

（分布図　30頁・図版299頁）

（ 5 ）安養院跡

種別　寺院跡　　時期　江戸　　現状　墓地　　所在地　徳次郎町3156ほか
遺跡番号｛市 5／県 －｝

南がなだらかな傾斜地上に位置し，北側は山林，東に日光バイパスが南北に通る台地上にあるが，現在は墓地が残っているのみである。

安永5年の「道芝の露」の中に寺院名が出てくる。日光，東照宮参拝のおり，将軍や諸大名等の休憩所に寺院があてられたようである。

なお，現在土地の人々はこの土地を〝あんにょじ〟又は〝あんにょいん〟と呼んでいる。

（分布図 30頁・図版299頁）

（ 6 ）門前遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 水田・畑　所在地 徳次郎町1907ほか
遺跡番号 { 市 6 / 県 — }

南東に傾斜する段丘上に位置し，現在開墾され田畑となっている。
かっては，縄文土器片，石器類が発見されたが現在はあまり採取できない。

（分布図 30頁・図版299頁）

（ 7 ）堀の内城跡

種別 城館跡 時期 戦国　現状 水田・畑　所在地 徳次郎町1788ほか
遺跡番号 { 市 7 / 県 — }

西場街道に沿った台地上に位置し，現在は耕地となっている。
戦国争乱時代に築かれたと伝えられており，豊臣氏による宇都宮氏改易と共に廃城となったと伝えられている。

（分布図 30頁・図版299頁）

（ 8 ）田中堀の内遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 水田　所在地 徳次郎町1722ほか
遺跡番号 { 市 8 / 県 — }

南面するゆるやかな傾斜地に位置し，現在大部分が水田となっている。
近くに日光バイパスが南北に通っている。
かっては，縄文土器破片，石器等多数発見されたが現在はあまり見られない。

（分布図 31頁・図版299頁）

（ 9 ）屋敷裏遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 畑　所在地 上横倉町698ほか
遺跡番号 { 市 9 / 県 75 }

雷電山ろくの南に傾斜する台地上に位置している。現在は，開墾され畑地である。
昭和25年ごろ数多くの縄文土器の破片や石器類が出土していたが，現在は小破片がわずかに見られる程度である。
なお，この遺跡は県登録上横倉神社付近遺跡の一部である。

（分布図 30頁・図版299頁）

（10）岡平遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 畑・水田　所在地 上横倉町317ほか
遺跡番号 { 市 10 / 県 53 }

南面するなだらかな傾斜地に位置し，西側を田川が南流している。現在は，開墾され田畑になっている。
昭和25年ごろかなりの縄文土器の破片が見られたが，現在は土器の小破片が見られる程度である。
なお，この遺跡は県登録下町Ⅰ遺跡を改称したものである。

（分布図 31頁・図版299頁）

（11）向前遺跡

種別 集落跡　時期 縄文・古墳　現状 畑　所在地 上横倉町508ほか
遺跡番号 { 市 11 / 県 46 }

北西に傾斜する段丘上に位置し，現在は畑地となっている。台地の下を小川が南流し，田川に注いでおり，低地は水田となっている。
昭和25年ごろには，縄文土器破片が散在していたが，現在はほとんど発見できない。

（分布図　31頁・図版299頁）

（１２）高谷内遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　上横倉町６０８－１ほか
遺跡番号｛市　12
　　県　75

徳次郎より氏家に通じる県道北側沿の台地に位置し，附近に多藤神社がある。その台地の大部分は畑となっている。

昭和25年ごろには，土師器の破片も見られたが，現在はほとんど散在していない。

なお，この遺跡は県登録上横倉神社付近遺跡の一部である。

（分布図　31頁・図版299頁）

（１３）延命寺跡

種別　寺院跡　　時期　江戸　　現状　畑・山林
所在地　上横倉町６０６－２ほか　　遺跡番号｛市　13
　　県　－

徳次郎より氏家に通じる県道北側の台地に位置し，附近に多藤神社がある。台地の大部分は，畑になっている。

田原西方寺の末寺であったといわれ，寺の墓地と称せられているものが現存している。

（分布図　37頁・図版299頁）

（１４）田中山口遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　徳次郎町1514－1ほか
遺跡番号｛市　14
　　県　－

東に傾斜する河岸段丘に位置している。現在は，畑になっており台地の下を小川が南流している。

かっては，縄文土器の破片が散在していたが現在はあまり見られない。

（分布図　37頁・図版299頁）

（１５）御城山遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　徳次郎町１８１ほか
遺跡番号｛市　15
　　県　54

徳次郎城跡（市遺跡番号１７）の北東に位置する台地であり，北東面になだらかに傾斜している。

かっては，土師器の破片がかなり散見できたが現在はあまり散在していない。

なお，この遺跡は県登録下町Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図　37頁・図版299頁）

（１６）御城山古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　徳次郎町156ほか
遺跡番号｛市　16
　　県　55

徳次郎城跡（市遺跡番号１７）の北西部に位置する山林中に円墳４基が所在する。墳丘は最大のもので直径約５ｍ，高さ約２ｍ程度であるが保存状態は良好といえる。

なお，この遺跡は県登録下町Ⅲ古墳群を改称したものである。

（分布図　37頁・図版300頁）

（１７）徳次郎城跡

種別　城館跡　　時期　戦国　　現状　山林　　所在地　徳次郎町１５０ほか
遺跡番号｛市　17
　　県　－

城跡の西は日光街道，東には田川が流れている。現在遺構は内堀，中堀とそれに伴う土塁が現存している。

宇都宮城北方の守りとして宇都宮第２２代城主国綱の家臣新田徳次郎昌信の居城であったが，２代城主義定の慶長２年宇都宮城滅亡と共に廃城になったと伝えられている。

－参考資料－　栃木県の中世城館跡　（昭和５７年　栃木県教育委員会）

この城は，日光街道徳次郎宿の東北部，南流する田川が西に曲流する西岸に立地しており，東西１６０ｍ，南北３１５ｍの規模をもつ平城である。

城郭は，本丸および二の丸（外郭）から成る御殿山の部分とその北の隠岐殿屋敷といわれる部分から成る。本丸は東西９０ｍ，南北１０５ｍで，東南部に折れを持ち，土塁とその外側の堀で囲まれている。とくに，北側は堀・土塁とも二重になっており，東側は堀の両側に土塁を構築し，その東は田川の流れを利用している。郭内，東北隅に藁宝殿（わらほうでん）という神社が祭られており，北西隅には井戸跡がある。本丸を三方に囲んで二の丸（外郭）があり，これらは北・西・南と堀によって三つの部分に分割されている。この南外郭の南にも，もう一つの細長い郭があり，この郭は土橋で外郭に通じている。

北の隠岐殿屋敷といわれる部分は，堀で二つに区分され，西郭の中に３５ｍ×２５ｍの方形土塁に囲まれた物見櫓台がある。またこの周囲に三か所ばかりの丸い地ぶくれがある。物見櫓の西南の堀を埋立てて稲荷社が祭られているが，これは後の構築である。

城の大手は明確でないが，日光街道から稲荷社の前を通り，堀底道を通って，井戸付近で本丸に入る通路が考えられる。

この城は戦国時代宇都宮国綱の家臣新田徳次郎昌信の居城と伝承されており，城主名が，城名ないし，地名に転化していったものと考えられる。この新田氏は上野国の支族のようであるが，系統は不明である。

（分布図　37頁・図版300頁）

（１８）田中定済遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　畑　　**所在地**　徳次郎町1386ほか
遺跡番号　市　18　／　県　－

南東に傾斜する河岸段丘上に位置し，畑になっている台地の下を小川が南流している。

かって縄文土器の破片，石器等が多数発見されたが，現在は，少数の土器の破片が散在している程度である。

（分布図　37頁・図版300頁）

（１９）西根遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　水田・畑
所在地　徳次郎町1211－6ほか　　**遺跡番号**　市　19　／　県　－

西側が山林，東にゆるやかに傾斜する段丘上に位置している。現在は，田畑として開墾されており，台地の下を小川が南流している。

かって縄文土器の破片や石器等が出土していたが，現在はあまり散在していない。

（分布図　37頁・図版300頁）

（２０）鎌堀館跡

種別　城館跡　　**時期**　戦国　　**現状**　水田　　**所在地**　徳次郎町861－1ほか
遺跡番号　市　20　／　県　－

日光バイパスと日光街道沿いに挟まれた水田地帯に位置している。

戦国時代に築城されたと伝えられており，堀の一部が鎌の形に現存しているところから鎌堀の名称が生まれたといわれている。

（分布図　37頁・図版300頁）

（２１）中妻遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　水田・畑　　**所在地**　徳次郎町536ほか
遺跡番号　市　21　／　県　－

日光バイパス西側に位置し，大部分が平坦地で現在は田畑になっている。

かっては，縄文の土器破片，石器等が多数見られ現在もある程度，土石器が散在している。

（分布図 37頁・図版300頁）

（22）東原遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　徳次郎町829－1ほか
遺跡番号（市 22　県 －）

平地に位置し，東側は山林，西側は開墾され畑地となっている。

かっては，縄文土器の破片が散在していたが，現在はほとんど見られない。

（分布図 37頁・図版300頁）

（23）中妻寺跡

種別　寺院跡　　時期　戦国　　現状　水田・畑
所在地　徳次郎町542－3ほか　　遺跡番号（市 23　県 －）

日光宇都宮道に沿った平坦地に位置し，南に市営の山王団地，東に鎌堀館跡（市遺跡番号20）がある。現在は，田畑になっているが鎌堀館に関係ある寺であったといわれている。

中妻寺は，戦国時代に建立されたと伝えられており，道路公団が日光宇都宮道工事の際基壇等が出土した。

（分布図 39頁・図版300頁）

（24）高谷林一里塚

種別　一里塚　　時期　江戸　　現状　土手　　所在地　上金井町892ほか
遺跡番号（市 24　県 －）

日光街道沿いの土手にある一里塚であり道の両側に現存している。

（分布図 40頁・図版300頁）

（25）下横倉城跡

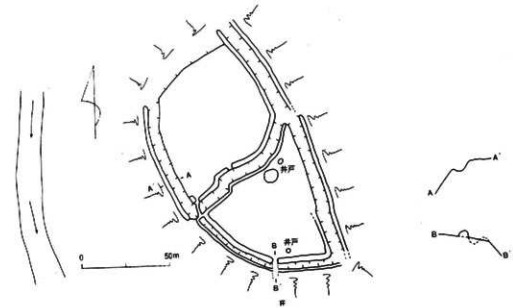
種別　城館跡　　時期　戦国　　現状　山林　　所在地　下横倉町644ほか
遺跡番号（市 25　県 －）

下横倉の山の中腹に位置し，ふもとを南方に市道が通り，西方に田川が南流している。山城で堀の一部が現存している。

戦国時代に築かれた城であり，宇都宮氏滅亡と共に廃城になったと伝えられている。

－ 参考資料 － 栃木県の中世城館跡 （昭和57年 栃木県教育委員会）

宇都宮市の北部，宇都宮丘陵の突端部に位置し，西の崖面直下を42mの比高で田川が迂回して流れている。標高200mの頂上は平坦にされ，東西40m，南北50mの範囲で二つの郭が並んで構築されている。それぞれが両側に土塁を持つ堀によって囲まれ（一部はない），二つの郭は土橋によって，相互に連結され，また南の郭は土橋によって外に通じている。郭内にはそれぞれ井戸跡があり，もっとも保存状態のよい平山城である。宇都宮氏の家臣横倉氏の居城と伝えられ，宇都宮領の北の防備の拠点と考えられる。また小字名「家老内」，城の南に居住する横倉氏の子孫といわれる磯野家の屋号「入城」がある。



下横倉城略測図

（分布図　40頁・図版300頁）

（２６）下横倉遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　下横倉町３３８ほか
遺跡番号（市　26
　　県　－

南に傾斜する段丘上に位置し，北の山林には下横倉城跡（市遺跡番号２５）がある。

かっては，縄文の土器，石鏃等が散在していたが，現在はあまり見られない。

（分布図　40頁・図版300頁）

（２７）下横倉寺跡

種別　寺院跡　　時期　戦国　　現状　山林　　所在地　下横倉町２５３－１ほか
遺跡番号（市　27
　　県　－

下横倉山ろくの傾斜地に位置し，西側に市道が南北に通っている。

下横倉城主の寺で，那須雲巌寺の関連寺であったと伝えられている。なお，この寺院と関連があると思われる〝寺の下〟の地名が現存しているが寺名は定かではない。

（分布図　40頁・図版300頁）

（２８）下金井遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田・畑　　所在地　下金井町３６６ほか
遺跡番号（市　28
　　県　－

南北に延びる平坦地で，すぐ東側に田川が南流している。野沢遺跡（市遺跡番号３０）の北方に位置している。

かっては，多数の縄文土器片，石器が散在していたが現在はわずかである。

（分布図　50頁・図版300頁）

（２９）野沢北遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文～古墳　　現状　果樹園　　所在地　野沢町701ほか
遺跡番号（市　29
　　県　－

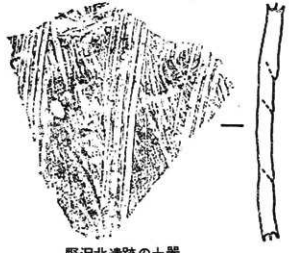
農業試験場のほぼ北端に位置し，すぐ東下を田川が南流している。

昭和24年ごろには，数多くの縄文及び弥生の土器片，石器等が発見されたが現在はほとんどが試験場の農場になっている。

－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻（昭和５４年　宇都宮市）

本遺跡は野沢町県農業試験場の果樹園の一部になっている。田川の支流である釜川上流の水源地近くに立地し，弥生時代中期の遺跡である。弥生土器の出土する範囲は広くないが，ここは野沢遺跡として知られている地続きである。この意味では野沢式土器の標式遺跡となったところをＡ地点とよぶならば，野沢北遺跡をＢ地点として整理した方が適切なのかも知れない。

ここに示した土器片は，小堀時蔵が採集し所蔵されているものである。これは野沢Ⅱ式に比定されるもので，胴部下半の破片であるが，器面に刻痕が残っている。野沢Ⅱ式土器の胴部以下は斜方向の浅く粗い条痕文を器面全体に施すものが多い。刻痕のあるこの土器片は，胎土に小石を若干含んでいるが，焼成はきわめて良好であり，堅緻である。色調は表面は黒褐色であるが，内面は茶褐色を呈し篦なでがなされ，輪積痕が残っている。器肉は４～５㎜ほどで北較的薄い。刻痕の大きさは長さ6.5㎜，最大幅４㎜ぐらいである。



野沢北遺跡の土器
（胴部に刻痕がある）

中期弥生土器に刻痕を残している例は少ない。本市域では本遺跡と野沢遺跡のみである。

（分布図　50頁・図版300頁）

（３０）野沢遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文～古墳　　現状　畑・水田
所在地　野沢町６４１ほか　　遺跡番号｛市 30 / 県 34｝

農業試験場のほぼ中央に位置し，現在は農場として使用されている。

昭和24年ごろには，縄文・弥生の土器片や石斧，勾玉，管玉，石鏃等が多量に発見されている。

なお，この遺跡は県登録一本桐遺跡を改称したものである。

－　参考資料　－　宇部宮市史第１巻　（昭和５４年　宇都宮市）

野沢町にある弥生時代中期の遺跡で，栃木県農業試験場の西側畑地がその位置である。野沢式土器の標式遺跡として学史上著名であるが，昭和４０年前後の開田工事や農業試験場の建設に伴う工事によって，かっての野沢遺跡としての景観はまったくみられず湮滅同然である。ここは釜川上流の水源地近くにあたり，標高１７０ｍ，附近の低地からの比高は２～３ｍを示す低地性遺跡である。いまここに野沢遺跡の土器が注目を集めた経緯を記述しておきたい。

野沢遺跡の土器

野沢遺跡を最初に調査したのは小林与三郎で，明治２７年のことである。これは明治１７年東京市本郷区向ケ岡弥生町で，いわゆる弥生土器が発見されてから１０年後にあたる。弥生町の土器は，坪井正五郎博士によって『東洋学芸雑誌』（明治２２年）に発表されたが，まだ弥生土器の名称は用いられていない。名称が付されたのは明治２９年に蒔田鎗次郎が「弥生式土器（貝塚土器に似て薄手のもの）発見ニ付テ」（『東京人類学会雑誌』第１１巻第１２２号）と題し発表したのが最初である。これは野沢遺跡が発掘された直後のことである。

ところで，野沢遺跡出土の遺物は明治３２年東京帝大人類学教室に寄贈された。この翌年に小林与三郎の報告に沼田頼輔博士が加筆して「下野国河内郡野沢村発見の土器に就て」（『東京人類学会雑誌』第１５巻第１６６号）として発表した。この中で土器に管玉が伴出したこと，特殊な顔面付土器が出土したことを特記している。また沼田頼輔はその註解で土器についての所見をのべ，土器の形態は弥生式に類しているが，施文されている縄文や文様は縄文式土器と異ならないことを記している。野沢遺跡の土器に関するこの考えは，北関東の弥生中期土器の特徴を簡明に記した卓見であった。

大正年間は野沢遺跡の土器についての研究は進展しなかった。昭和に入ると山内清男は「下野国河内郡国本村野沢の土器」（『史前学雑誌』第４巻第１号昭和７年）と題して，顔面付土器・壺形土器・筒形の特殊な土器の項目に分け，文様，器形の特徴などを詳述している。そして野沢式の器形が弥生式的ではあるが，弥生町出土の弥生土器とは文様において非常に異なっていることを指摘し，"上野・下野方面には弥生式的な形態を示し，傍ら縄文を有する土器が知られている。これを含む土器形式は未だ確定していない。野沢式との関連も全く不明である"という記述を行っている。これは後述する弥生後期のいわゆる"二軒屋式"土器についての考えであろう。また山内清男は野沢の土器は"陸前の桝形式に多少近似している"とのべ，桝形囲貝塚（宮城県）出土の土器との対比，縄文土器との比較を行い，"安行式以後に位置する"という編年的位置づけをなした。こうして，野沢遺跡の土器は山内清男によって型式編年がなされ，世の注目を集めることとなった。

一方，八幡一郎は「弥生式土器の布目」（『人類学雑誌』第４６巻第９号，昭和６年）と題して，野沢の土器底部に布の圧痕があることを注目された。また杉原荘介は「下野・野沢遺跡及び陸前・桝形囲貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」（『考古学』第７巻第８号，昭和１１年）の中で，〝同地域における弥生式文化編年に野沢期なる時期を認め，また南関東に於ける小田原期前期に相当する第１例・第２例土器を包括する時期を野沢期前期，また同小田原後期に相当する第３例・第4例・第5例・第6例土器を包括する時期を野沢期後期としたい〟と野沢式土器を二期に細分した。これは今日，野沢Ⅰ式，野沢Ⅱ式と呼称されるものと大略同じである。ただ筒形土器（第７例）については，弥生土器と認めながらもその編年的位置づけについて苦慮されていた。また，杉原は八幡一郎が布目痕のある土器として発表した弥生式土器について，〝土器形成後，人工的に穿たれた孔が認められる。なお本土器底部に刻痕がある〟ことを記している。

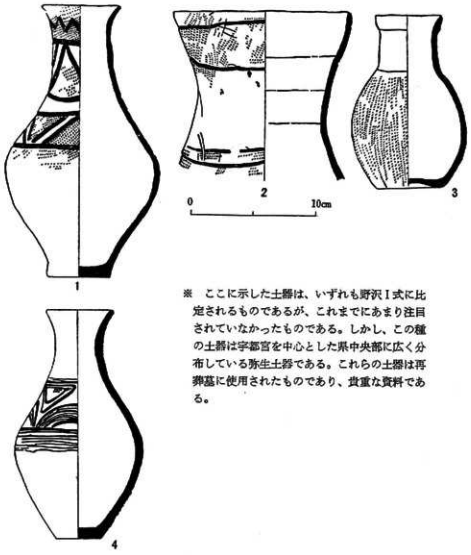
野沢遺跡の土器は上述のように，山内清男・杉原荘介らによって編年，細分されたが，ここでは戦前までの資料については両者の発表を参考にし，その後の新資料については若干の説明を付したい。

第１５４図１～４は宇都宮大学に所蔵されているものである。１は口径6.4，器高２２.２，底径5.3各cmのもので，口縁がゆるやかに外反する壺形土器で，胴部の最大幅は１２.５cmである。細かい縄文は口縁部から頸部，胴部上半に施され，幅広の篦状工具によって山形文，横線文，斜走文などが施されている。２は口頸部のみで胴部以下が欠損している。口径１４.５cmで縄文を地文としここに沈線が横走している。３は口径５.５，器高１４.１，底径5.6各cmであげ底になっている。

この土器は複合口縁の小形壺で，球状の胴部に円筒状の頸部，口縁はわずかに外

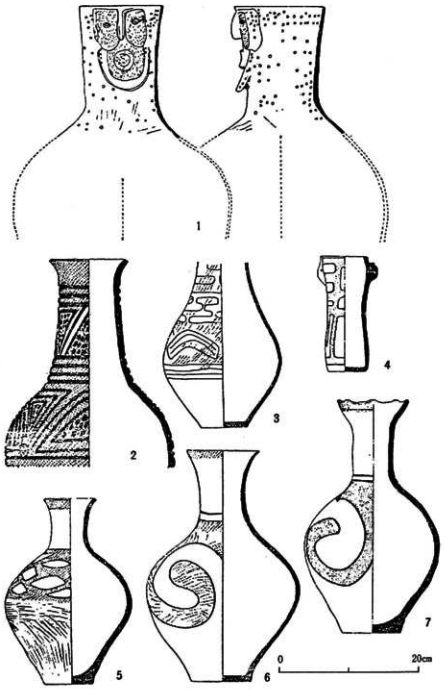
反している。胴部にのみ縦に縄文が施文されている。4は口縁部が欠損しているが，実測図は復原推定のものである。胴部下半は無文であるが，胴部上半には半月状の文様を多数の沈線によって描き，半月状の間に三角形の沈線文を二重に描き，そこには縄文が施されている。半月状の文様と三角文様の上下には数条の横走する沈線がめぐっている。これら1～4は野沢Ⅰ式に比定されるものである。

第155図1は顔面付土器で，壺形土器の口頸部に顔面を現わしている。胴部以下は欠損し，口径は12～12.8㎝である。2は胴部下半を欠くが細頸長胴の壺形土器で，胴部最大径25㎝である。3は頸部から胴部にかけて細かい縄文が施され，ここに繊細な沈線文が加えられている。文様は頸部と胴部とに2分され，前者は平行沈線化された工字状文様である。胴部は下限に四条の沈線文が施され，頸部文様の下限との間に半月状の波文が描かれ，その間隔の上に下向きのV字状文様が施されている。口縁部は欠損しているが残存高さ23.5㎝で，胴部最大径16.2㎝である。4は筒形土器で磨消縄文が施され，縦線と横線との連続からなっている。口辺部に耳状の突起が付され，底部は縄文と木葉の圧痕がみられ，これに円形の溝線が加えられている。器高は16.5㎝である。5は口縁部に縄文，頸部は無文である。胴部上半に縄文を施し，菱形の沈線文を施してその中を磨消している。胴部下半から底部にかけては条痕を横走，斜走させている。器高26.8㎝である。6～7は渦巻文が発達している。6は底部が欠損しているが，残存高さ31㎝である。口辺は波状を呈している。7は器高33㎝で，底部には布目痕がある。この6～7は野沢式土器でも新しいもので，野沢Ⅱ式に比定されるものである。



※　ここに示した土器は、いずれも野沢Ⅰ式に比定されるものであるが、これまでにあまり注目されていなかったものである。しかし、この種の土器は宇部宮を中心とした県中央部に広く分布している弥生土器である。これらの土器は再葬墓に使用されたものであり、貴重な資料である。

野沢遺跡出土の土器



野沢遺跡出土の土器（杉原・小林編『弥生式土器集成』本編より）

（分布図 50頁・図版301頁）

（31）野沢石塚遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・弥生　　現状　水田
所在地　野沢町５３４－２ほか　　遺跡番号｛市 31 県 2

農業試験場の西南に位置し，中央を釜川が南流している。
昭和24年ごろには，縄文・弥生の土器片が見られた。
なお，この遺跡は県登録野沢遺跡を改称したものである。

（分布図 41頁・図版301頁）

（32）宮内坪裏山遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　横山町１０４２ほか
遺跡番号｛市 32 県 ―

横山町下組字宮内の裏山丘陵東傾斜地に位置し，現状は畑である。
その中をぬって河内町との境界になっている農道が通っており，その農道を挟んで土師・須恵器片の散布がみられる。

（分布図 53頁・図版301頁）

（33）念仏塚遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　横山町９４１ほか
遺跡番号｛市 33 県 ―

横山町下組の農協倉庫を宮内に向ってなだらかな念仏坂を約５００ｍ登りつめると，切通しの坂の頂上に出る。遺跡はそこから，少し下った道路の西側なだらかな東傾斜の段状の畑である。
遺物は，表土上に土師と須恵器片を見ることができる。

（分布図 50頁・図版301頁）

（34）寺山供養塚群

種別 供養塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 横山町1389－1ほか
遺跡番号 { 市 34 / 県 － }

横山町と下横倉町の境界に位置し，南傾斜の尾根上に約7～8m間隔でほぼ一直線に並んでいる。

高塚は全部で6基あり大きいのは直径8m，高さ1.5mほどであり，地名が寺山であることから供養塚と考えられる。

（分布図 50頁・図版301頁）

（35）星の宮神社裏遺跡

種別 集落跡　時期 古墳　現状 畑　所在地 横山町1388－1
遺跡番号 { 市 35 / 県 － }

横山町上組の星の宮神社の北側約50mのなだらかな南傾斜の段状の畑に位置する。

遺物は，表土上に須恵・土師器片を主体として見られる。

（分布図 53頁・図版301頁）

（36）千貫坊遺跡

種別 寺院跡・供養塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 横山町426ほか
遺跡番号 { 市 36 / 県 － }

豊郷北小学校の東南側丘陵の東端に位置している。現状は，東側はなだらかであるが，南西側は急はんになっており市道に接している。突端の北東部は空堀りと土塁が巡っている。

千貫坊という名称であるので寺院の跡と思われるが出城跡とも考えられる。また土塁内に2基，東方に9基の供養塚が点在している。

（分布図 52頁・図版301頁）

（37）大久保牛塚

種別 高塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 瓦谷町1183ほか
遺跡番号 { 市 37 / 県 － }

瓦谷上組の中央部田川を南の丘陵方向にゆるやかな太郎坂を約400mほど登りつめた頂上に位置し，南方は宇都宮ゴルフ場に面している。

塚の大きさは直径4m，高さ1mほどである。土地の人の言い伝えによるとこの土地で戦争があった時，身分の高い人が戦死し，ここに埋葬されたといわれている。

（分布図 50頁・図版301頁）

（38）桜畑遺跡

種別 集落跡　時期 縄文・古墳　現状 畑　所在地 瓦谷町1120ほか
遺跡番号 { 市 38 / 県 － }

瓦谷上組の中央部田川を南の丘陵方向に渡りゆるやかな太郎坂を約300mほど登った山林に囲まれた畑地で中央青年の家附近から東西に延びる丘陵上の一角，丘陵尾根より北面してやや平坦地に位置している。

遺物は，表土上に縄文・土師・須恵の土器片及び石鏃等が散見できる。

（分布図 53頁・図版301頁）

（39）欠の上遺跡

種別 集落跡　時期 縄文・古墳　現状 畑　所在地 瓦谷町1345ほか
遺跡番号 { 市 39 / 県 － }

瓦谷町上組の中央部田川を南の丘陵方向に渡り山ろくに突き当たった小高い所に位置している。

遺跡の東はひな段状の段畑で沢地に落ちこみ，字笹山の丘陵に対し更に南側はゆるやかな斜面になって丘陵地帯が長岡町から戸祭町附近まで続いている。

遺物は表土上に須恵器のほか，土師器とわずかながら縄文加曽利E$_2$土器片が見られる。

なお，遺跡地内に須恵器を焼成した窯跡の所存が確認されている。

－　参考資料　－　栃木県考古学会誌第６集　（昭和５６年　栃木県考古学会）

本窯跡は，田川の右岸を東西に走る丘陵から馬の背状にのびる支尾根の北斜面に立地し，田川との距離は，水田地帯を狭み約３００ｍを測る。今回，資料を採集した地点は，この北麓斜面をゆるやかな傾斜を持って曲りながら尾根に続く幅約２ｍ程の林道の下であり，３０～４０度程の東面する傾斜地である。

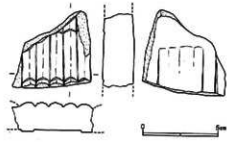
現地は篠竹や藤蔓が生い茂るため，残念ながら窯跡本体の確認には至らなかったが，採集した資料より付近に窯跡が存在したことは，まず間違いないものとみられる。

瓦谷町一帯は，豊郷地区内でも遺跡の分布が濃密な所であり，本窯跡をのせる丘陵上にも縄文土器とともに土師器，須恵器の散布がみられる欠ノ上遺跡が存在する。とりわけこの田川右岸の丘陵上には，欠ノ上遺跡と同様な性格を持つ散布地が密集している。遺跡としては，桜畑，笹山，日満，才ノ内などが知られている。

本窯跡が操業されていた当時，付近一帯はかなり大規模な集落としてひらけていたものと考えられる。

欠ノ上地内には，本窯跡以外にも集中して須恵器を出土する地点があったらしく，窯跡群を形成していた可能性が高い。

尚，本窯跡から南へ約２㎞の地点に，瓦の生産を中心とした戸祭古窯跡群が存在していたことは，よく知られている。



欠ノ上窯跡付近出土瓦塔破片

（分布図　55頁・図版301頁）

（４０）瓦塚日満北久保遺跡

種別　集落跡・高塚　　時期　縄文・古墳　　現状　山林

所在地　瓦谷町１５３２ほか　　遺跡番号｛市 40 / 県 －

瓦谷町下組の水田地帯を隔て南方に広がる丘陵の頂部一帯に位置する。

頂部の北側は字瓦塚，瓦塚に続く北側の窪地を字北久保，南側は字日満と言う。日満は南面の段状の畑が山ろくの湿地に続く。また，字瓦塚の一角に方形の高塚がある。この高塚は，古墳か古墳以外の塚なのかは定かでない。

遺物の散布状態は，縄文中期の土器片の他石鏃，打製石斧，摩製石斧，石棒，石辺，石小刀，石錐，石槍等の石器類の他土師，須恵器片が集中して見られる。

なお，本遺跡に隣接する字笹山，麻屋畑，小間，日向，立野，地蔵前，中田一帯の広大な地域に縄文期の遺物が散見できる。

また，本遺跡は昭和５５年住宅団地造成に先行して発掘調査が実施された。

（分布図　55頁・図版301頁）

（４１）立野高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　瓦谷町1645ほか

遺跡番号｛市 41 / 県 －

瓦谷町下組地内にかかる田川を渡った南の丘陵の中腹の雑木林に直径３ｍ高さ0.5～1ｍほどの円形高塚が６基，更に頂部に高さ1.5ｍ，直径６ｍの方形高塚がある。

北側は急坂断崖となって田川に落ち込み，田川水面との比高差は約３０ｍである。なお，高塚群の近傍には墓地，神社があり更に規模が小さく中世以降の供養塚と思われるが断定しがたい。

（分布図　53頁・図版301頁）

（４２）曽理部羅遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑　　所在地　瓦谷町５０８－3ほか
遺跡番号｛市　42
　　県　－

ニュー富士見ケ丘団地進入路に接する西側に位置する。

遺跡の北は横山町字塩平のニュー富士見ケ丘丘陵地帯となり，更に南は谷田と称する湿田地帯が続き田川に接する。

遺物としては，表土上に縄文・土師，須恵の土器片の散布を見ることができる。

－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻　（昭和５４年　宇都宮市）

本遺跡から出土している土器は，中期の阿玉台式・加曽利ＥⅠ式・Ⅱ式に比定されるものである。阿玉台式の土器には輝雲母・石英岩粒などが混入し，色調は茶褐色・褐色・黒褐色などを呈している。一般に焼成は良好である。文様は１条～３条の結節沈線文が施されたもの，口唇部から肩部にＸ状に断面三角形の隆線が貼付されているもの，竹管（ちくかん）の腹によって二条の結節沈線文が三角形の文様をつくっているもの，爪形の刺突（しとつ）文を施したもの，把手（とって）状の隆帯が山形に突起しているものなどさまざまである。

宇都宮市域における阿玉台式土器の分布は広範囲にわたっているが，まだこの時期の集落跡の調査はすすんでいない。中期初頭における生活様式を知るには，このころの集落跡を究明する必要があろう。

（分布図　55頁・図版302頁）

（４３）上の台遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　水田　　所在地　瓦谷町３２０－1ほか
遺跡番号｛市　43
　　県　5

遺跡は，瓦谷町下組字上の台地内にあり両側は曽理部羅遺跡（市遺跡番号４２）に接する一連の台地上に位置する。

遺跡の南方は水田地帯を隔てて，瓦谷，長岡町の丘陵が続き，北方は，北山霊園の丘陵で北山古墳群（市遺跡番号４４）があり関掘土用地遺跡（市遺跡番号４５）と共に当遺跡が北山古墳群と関連ある遺跡であると考えられる。

なお，遺跡の表土上には土師（鬼高），須恵器片が散見できる。

（分布図　55頁・図版302頁）

（４４）北山古墳群（市指定）

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　瓦谷町３２の2ほか
遺跡番号｛市　44
　　県14，15

北山霊園東南端に位置し，丘陵頂部よりゆるやかな東南斜面を利用し築造されている。

宮下古墳，権現山古墳，雷電山古墳の３基の前方後円墳と宮下古墳の前に位置する５基の円墳が残存するが，以前は権現山古墳及び雷電山古墳にも数基の小円墳が伴っていた。

いずれの古墳も６世紀中葉から後半にかけて築造されたと考えられる。

なお，この古墳群は県登録北之入古墳群と宮下古墳群を併合したものである。

－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻　（昭和５４年　宇都宮市）

瓦谷町にある本墳は，市街地の北方に発達する宇都宮丘陵の尾根上にあり，標高約１９９ｍのところに所在する。丘陵の東側，約５８ｍ下には沖積地が展開し，水田として利用されている。また西側眼下には，田川が大きく流路を変えて南流している。宮下古墳の東側，丘陵の東斜面は，市営北山霊園が造成されている。

この附近には現在，３基の前方後円墳と５基の小円墳があり，宮下古墳群（北ノ入古墳群）と呼ばれている。宮下古墳は，古墳群の主墳であり，丘陵の最高所を占めている。宮下古墳の南東約１５０ｍに雷電山古墳，その南約１００ｍに権現山古墳がある。５基の円墳は，宮下古墳の前方部の前面にあり，丘陵の西側斜面にあたる。そのほか，雷電山古墳と権現山古墳の間にも，３基の円墳が存在したが，道路工事のために削平されてしまった。

宮下古墳は，主軸をＮ－４５度－Ｗにとる前方後円墳である。全長４３ｍ，後円部径２９ｍ，前方部幅３２ｍ，高さ約４ｍを測る。前方部と後円部の高さの差は，ほとんどない。周湟は，みられない。本墳は，明治３２年の発掘の後，墳丘を整備しているため，計測数値はかならずしも信用できるものではない。

内部主体は，発掘の後に埋めもどされたため，現在は見ることができない。明治３２年５月２０日付の『東京人類学会雑誌』第１５８号に掲載された高橋鐵吉の

「下野国河内郡豊郷村宮下の古墳」によると，内部主体は，凝灰質砂岩を使用した片袖形横穴式石室である。石室全長は，8.48ｍを測る。玄室は長さ4.39ｍ，奥壁前面の幅1.69ｍ，同高さ2.49ｍ，玄門部幅81.8㎝を測る。

奥壁は，巨石２枚をもって造られている。側壁には，若干の持ち送りがみられる。羨道部は，長さ4.09ｍ，羨門部幅81.8㎝，高さ69.7㎝を測る。床面は玄室にも羨道部にも河原石が敷かれ，河原石の間には粘土が詰められている。玄室床面は，羨道部床面よりも一段低くなっている。天井石は玄室部で３枚，羨道部で６枚が使用されている。羨道部の主軸と玄室の主軸は，平行ではなく羨道部の主軸が若干西に片寄った状態で造られている。

出土遺物は，直刀２・鏃（鉾）１・轡１組・鉄製花形品１・鉄片２・鈴杏葉３・馬鈴３・管玉３・水晶製切子玉２２・土師器片２であった。（後略）

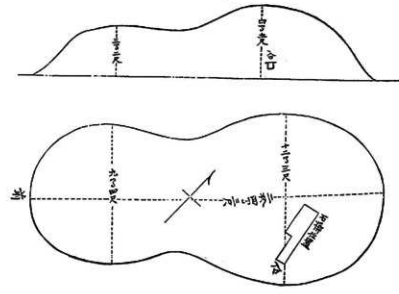
本墳（雷電山古墳）は，古墳群の中心と思われる宮下古墳の南東約１５０ｍにあり，丘陵尾根の東端部に位置する前方後円墳である。主軸を，Ｎ－１５度－Ｗにとる。墳丘全長41ｍ，後円部径24ｍ，同高さ3.5ｍ，前方部幅18ｍ，同高さ３ｍを測る。墳丘には葺石が見られる。

内部主体は，後円部にある。南東面する横穴式石室である。石室は，凝灰質砂岩の割石積みであるが，羨道部には，一部に河原石も使用されている。現在は，石室内への立入りはできない。明治22年５月の『東京人類学会雑誌』第158号に掲載された「下野国河内郡豊郷村の横穴と塚穴」によれば，石室は両袖形横穴式石室である。規模は，全長２間８尺８寸（6.30ｍ），玄室長１間５尺８寸（3.57ｍ），奥壁幅３尺４寸５分（1.30ｍ），羨門部幅２尺３寸（0.80ｍ）を測る。床面は，玄室のほうが，羨道部より一段低く造られている。天井は，玄門部において石を１個低く突き出して境としている。（後略）

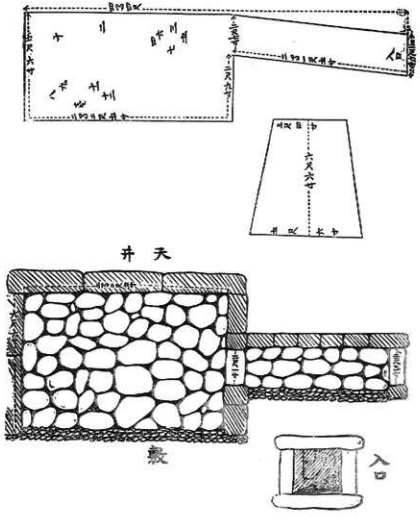
権現山古墳は，主軸をＮ－５０度－Ｗにとる。墳丘全長５５ｍ，後円部径３０ｍ同高さ４ｍ，前方部幅28ｍ，同高さ３ｍを測る。墳丘裾部には，葺石がよく残っているが，墳頂に近いところは，残りがよくない。

内部主体は後円部にある。南面する袖無形横穴式石室である。石室は，宇都宮丘陵の基盤である，砂質凝灰岩の割り石積みである。内部は，流入した土砂が３０～４０㎝の深さで堆積しているため，床面の状態は不明である。石室の全長は，7.8ｍである。玄室と羨道の区分は，左右両側壁に組み込まれた，巨石によってなされている。また天井は，天井石の１個を内部に突き出させて区分している。玄室は，全長4.65ｍ，奥壁前面での幅1.2ｍを測る。入口の幅は53㎝であり，奥壁から入口に向かって漸次狭くなっている。

かって，前方部南側裾部が盗掘され，円筒埴輪数個と埴輪馬が出土した。円筒埴輪は，墳丘の主軸に直交するように，5本が並び，円筒埴輪にはさまれて埴輪馬があった。出土した埴輪は，大部分が散逸し，現在は埴輪馬の足１本と円筒埴輪１本が残るだけである。

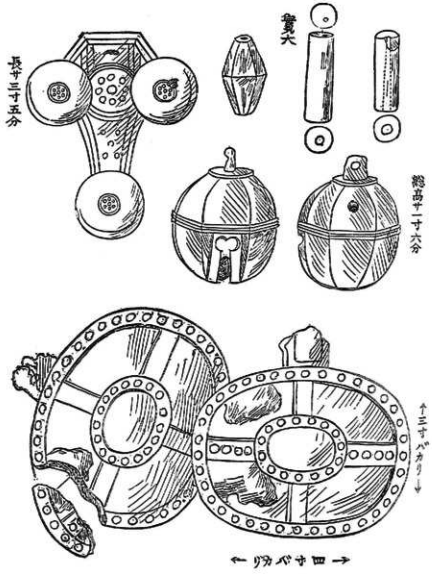


宮下古墳の墳丘見取図（『東京人類学会雑誌』第158号より）



（縮尺不明）

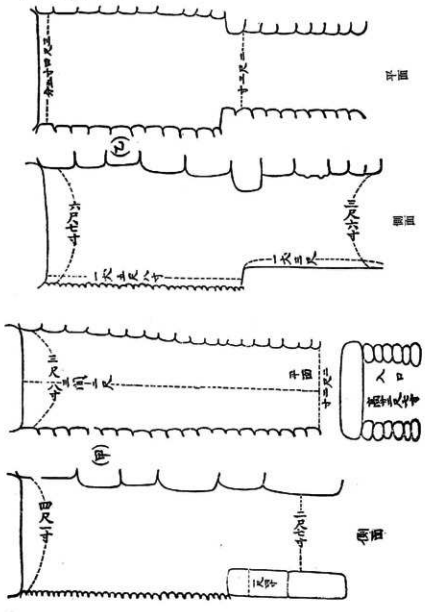
宮下古墳石室見取図（『東京人類学会雑誌』第158号より）



（縮尺不明）

宮下古墳出土遺物（『東京人類学会雑誌』第158号より）

図ノ墳古本岩



雷電山古墳石室見取図（『東京人類学会雑誌』より）
権現山古墳石室見取図（　　〃　　）

（分布図　55頁・図版302頁）

（45）関堀土用地遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　水田　　所在地　関堀町1048ほか
遺跡番号｛市　45
　　県　－

田川左岸，微高地に立地している。

かって開田中に出土した多量の土師器からすると，古墳時代後期を中心とする時期の所産と考えられる。

（分布図　50頁・図版302頁）

（46）野沢向内遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田・畑　　所在地　野沢町467ほか
遺跡番号｛市　46
　　県　56

中央青年の家から宇都宮ゴルフ場に続く丘陵地帯より西面して釜川に接する緩やかな台地上に位置し，現況は水田及び畑になっている。

表土上には，縄文土器片の散布が見られる。

なお，この遺跡は県登録向内遺跡を改称したものである。

－　参考資料　－　宇都宮市史第1巻　（昭和54年　宇都宮市）

向内遺跡から出土した土器・石器類は小堀時蔵が保管している。

これらの遺物は後期の堀之内Ⅰ式から加曽利BⅡ式にかけてのものであるが，主体土器は堀之内Ⅰ式のようである。石器には石鏃・打製石斧・磨製石斧・石錘・敲石・石皿・石棒などがある。このほか土製品として土偶の顔面が発見されている。

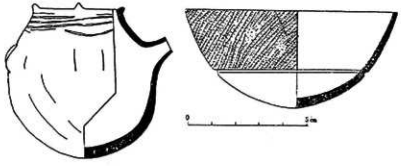
図示した完形に近い釣手付注口土器は，器高6.2㎝，口径4㎝，胴部径6.2㎝のもので，底部は球形状をなし安定性を欠く。口縁部には四個の小突起があり，その下方には篦状工具によって不規則に3～4条の沈線文が横走し，口縁部下の肩部辺には4個の釣手が残っている。胎土にはわずかに小石が含まれているが，焼成は良好である。この土器は加曽利B式に比定されるものであろう。

図示した右側の土器は完形品ではなく，推定実測図である。中央より底部寄りに一条の沈線文がめぐっている。この沈線文の上部には無節斜縄文が施され，下部は無文であり，加曽利B式に比定されるものである。

土器破片のなかには堀之内式に該当するものが多数みられ，縄文を地文としたところに沈線文が施され，口縁部に8字形の小突起を付したものもみられる。

石鏃には有柄・無柄・刳葉の形状を示すものがあり，漁労具としての石錘は，偏平な河原石を利用したものであるが多数出土している。次に土偶について記そう。

土偶の顔面は6.5㎝で両耳間の幅が4.5㎝，厚さは厚いところで3.5㎝，薄い部分で2㎝，小砂を含むが焼成は良好である。色調は頭部と裏面に黒味がみられるが顔全体としては薄茶色である。頭部と眉，口の周囲に刺突文が施されている。頭部は毛髪を，眉部は眉毛を，口の周囲は口髭を表しているものであろう。とくに頭部は裏面にまで刺突文を施しているところから，明らかに毛髪を示している。頭部の中央と眉のすぐ上には太い沈線がみられ，目と口は粘土紐を付着させている。この土偶の時期決定は難しいが，土器の出土品などからみて縄文時代後期初頭に位置づけてよいであろう。



向内遺跡出土の土器（『足跡』第2号より）

（分布図 52頁・図版302頁）

（47）上戸祭一里塚

種別　一里塚　　時期　江戸　　現状　土手　　所在地　上戸祭町38−1ほか
遺跡番号｛市　47
　　県　−

日光街道沿いの径4～5m，高さ1m弱の一里塚で，街道の両側に残っている。東側の盛り土は，一部分削平されている。

（分布図 52頁・図版302頁）

（48）宇都宮ゴルフ場遺跡

種別　集落跡・古墳　　時期　縄文・古墳　　現状　山林
所在地　長岡町987−1ほか　　遺跡番号｛市　48
　　県　76

宇都宮カントリークラブ内の丘陵頂部に位置している。

遺跡は，浮ノ森古墳と縄文時代の集落跡が複合している。

浮ノ森古墳は現状では定かでないが前方後円墳の可能性が大きい。また古墳周辺の表土には，縄文土器片，石器の散布がみられる。

なお，浮ノ森古墳の南東に近接して破壊された石室の一部が確認できる。

（分布図 70頁・図版302頁）

（49）北原遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳～平安　　現状　畑
所在地　上戸祭町104−3ほか　　遺跡番号｛市　49
　　県　−

釜川右岸段丘上端に位置している。

住宅が建ち並ぶ中にわずかに残された畑から土師器片，縄文式土器片が散布している。土師器は，小片で時期を明確にし難いが，縄文式土器は中期の所産と考えられる。

なお，釜川をはさんだ東方には上戸祭中ノ島遺跡（市遺跡番号50）がある。

（分布図 70頁・図版302頁）

（50）上戸祭中ノ島遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑　　所在地　上戸祭町108−1
遺跡番号｛市　50
　　県　57

東側は，宇都宮ゴルフ場の丘陵地帯，西側は釜川に接する地点に位置している。

主に畑地で一部水田となっており表土上の遺物散布は，縄文，土師，須恵の土器

片及び石鏃である。

なお，この遺跡は県登録上戸祭北Ⅰ遺跡を改称したものである。

（分布図 52頁・図版302頁）

（５１）道半塚供養塚群

種別　供養塚　　時期　江戸　　現状　山林・墓地
所在地　長岡町９５８－２ほか　　遺跡番号｛市 51 県 －

長岡町より宇都宮ゴルフ場に至る山道沿いに位置している。

道に沿って整然と５基の供養塚が並んでいるが，現在一部は墓地になっており１基は山道を広げる際半壊された。

（分布図 73頁・図版302頁）

（５２）百穴裏遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　山林・畑
所在地　長岡町３６９ほか　　遺跡番号｛市 52 県 79

県指定史跡長岡百穴（市遺跡番号53）の北側に接して位置する。

ほとんどが山林のため遺跡の範囲は正確には確認できないが，東傾斜の畑に縄文及び土師器片の散布が見られる。

（分布図 73頁・図版302頁）

（５３）長岡百穴（県指定）

種別　横穴　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　長岡町３７３ほか
遺跡番号｛市 53 県 17

長岡町内の県道下岡本－上戸祭線に接する丘陵南斜面の凝灰岩に掘り込まれている。

現在５２基が開口しているが，風化が著しい。

なお，後世奥壁に仏像が刻まれ百観音と称している。

－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻　（昭和５４年　宇都宮市）

長岡横穴群は，田川と鬼怒川との間に発達する宇都宮丘陵の，南端に近い標高約９８.６ｍから１０５.７ｍまでの間にある。

宇都宮丘陵は，基盤層が砂質凝灰岩であり，きわめて掘削しやすく，横穴を営むための好条件を備えている。長岡横穴群は，砂質凝灰岩が露頭している長岡町百穴に所在している。

横穴は現在，５２基が開口しており，全て南面する。しかし，凝灰岩特有の崩れやすさと，後世の加工が著しく，原形を留めるものはほとんどみられない。特に室町時代後期の仏像の彫刻が，横穴の破壊に拍車をかけたものと思われる。

『栃木県史』資料編考古一で，大和久震平が指摘したように，長岡横穴群は，山地丘陵の斜面の下部に掘り込まれたものである。また掘られている横穴の多くは，玄室の側壁が垂直に近く，天井部が平坦になっている。この点について大和久震平は，古墳時代末期の切石積横穴式石室との関連を指摘している。

５２基の横穴は，大きく２群に分かれて掘られている。西群は全部で８基，東群は４４基である。東群の横穴群のうち，現在の水田面とほぼ同じレベルに玄室の床面を持つ横穴は，斜面の上部に位置するものに比べて，やや小形であり，保存状態も比較的良好である。

５２基の横穴のもっとも基本的な形態は，羽子板形の玄室から玄門を経て，直接に八字形または台形の前庭部へと続く形であり，羨道部を指摘できるものはみられない。

玄室床面は，羽子板形を呈しており，奥壁から玄門に向うわずかな傾斜をもっている。

奥壁は，アーチ形をしており，ほぼ垂直に削られている。側壁は，中央部がもっとも高く，奥壁寄りと玄門寄りに低くなっているが，その差はわずかである。

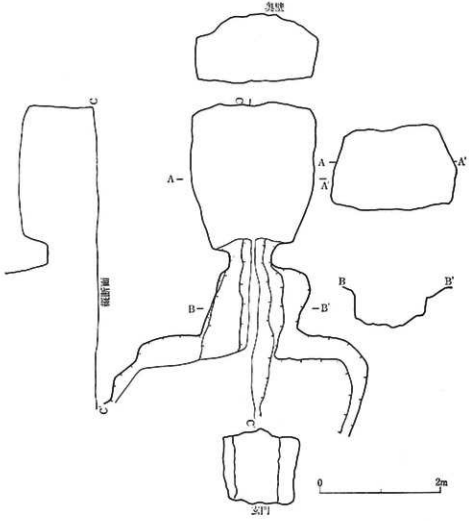
玄門は，奥壁と同じ形の前壁のほぼ中央部に，長方形に穿っている。玄門の外側には，扉石をはめ込んだとみられる切り込みの残るものがある。多くの横穴は，壁面の剥離が著しいため，扉石用の切り込みを残していないが，かってはこのような施設が，ほとんどの横穴に存在したのではなかろうか。

このような形態的共通性をもつ横穴群は，床面の排水溝によって次のように分類することができる。

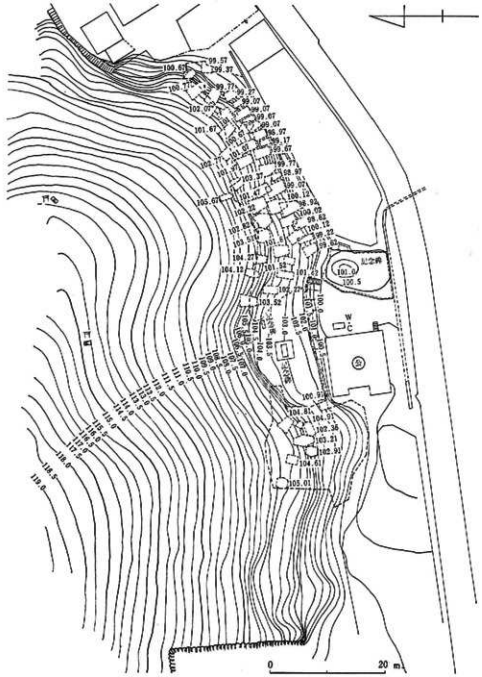
(1) 床面の排水溝がないもの
(2) 排水溝が主軸に平行して前庭部まで延びるもの
(3) 排水溝が主軸に直交するもの
(4) 2本の排水溝がT字形となるもの

以上の4つに分けられるが，これらは東群，西群ともに混在しており，このような相違が時期的な違いであるのか，あるいは横穴を造営した集団の違いなのか，または，被葬者相互の差異なのかは不明である。

ただ長岡横穴群の所在する丘陵の尾根上にある瓦塚古墳群が，七世紀の前半代に集中して築造された古墳群であることから考えて，古墳群の真下に位置する長岡横穴群も，なんらかの形で直接的に関係のある横穴群であろう。



長岡横穴の実測図



長岡横穴群の全体図

（分布図 55頁・図版302頁）

（５４）瓦塚古墳群

種別 古墳　時期 古墳　現状 桑畑・山林　所在地 長岡町１１８２ほか
遺跡番号｛市 54 県 16

長岡町の南側丘陵の南斜面及び尾根上に瓦塚古墳と呼ばれる前方後円墳と，３０基ほどの円墳が散在している。

なお，古墳の築造はいずれも後期に属するものと考えられる。

－ 参考資料 － 宇都宮市史第１巻 （昭和５４年 宇都宮市）

本古墳群は，市街地の北方，宇都宮丘陵の尾根上にあり，標高約１８０ｍを測る。丘陵の北裾から東裾のところを田川が大きく流路を変えながら南流している。本古墳群の南側眼下には，東西に延びる水田が開かれ，また，丘陵の東側には，広大な水田が開けている。

本古墳群は，かっては３０基以上の古墳が存在したが，現在は，宅地造成によって壊滅し，前方後円墳１基，円墳２０基が知られるだけである。本古墳群の南南西約５００ｍの丘陵南斜面には，長岡横穴群が存在する。

瓦塚古墳は，丘陵の尾根上に立地する前方後円墳で，瓦塚古墳群の主墳である。主軸をＮ－約４０度－Ｗにとる。全長４５ｍ，後円部直径約２０ｍ，高さ３ｍ，前方部幅約２５ｍ，高さ約３ｍを測り，後円部と前方部の高さの差はほとんどない。周囲には幅約１０ｍ，深さ約1.３ｍの周溝が確認されている。

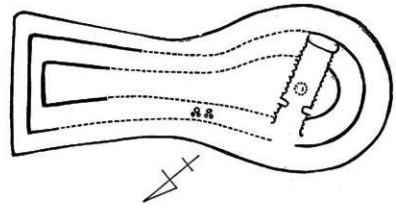
本墳は，明治３１年（１８９８）に発掘が行われている。明治３２年（1899）２月２０日の『東京人類学会雑誌』第１５５号に掲載された八木奘三郎の「下野国河内郡長岡の古墳」によると，「埴輪は二列に廻らし更に石棚の上部即ち後円の中央に一大円筒を樹立せり」とあり，墳丘には，２段の埴輪列の存在したことが知られ，さらに，後円部墳頂部に円筒埴輪１本が立てられていたことがうかがわれる。また 埴輪馬，人物埴輪も出土している。

内部主体は，凝灰岩切石を使用した両袖形横穴式石室である。石室は，全長四間１尺２寸（７.６５ｍ），玄室長３間１尺２寸（５.８３ｍ），奥壁幅４尺４寸（1.33ｍ），玄門幅３尺（９１㎝），羨道長７尺（２.１ｍ），幅３尺８寸（１.１５ｍ）である。石室は，南東に開口し，両側壁とも凝灰岩切石である。奥壁は，凝灰岩の一枚石である。玄室床面は「石棚の敷へ小石を詰め上部に木炭を敷きつめたる風なり，此木炭の厚さは壱寸五分位有り」となっている。玄室と羨道は，框石によって区切られ，羨道部床面が玄室床面よりも若干低くなっている。

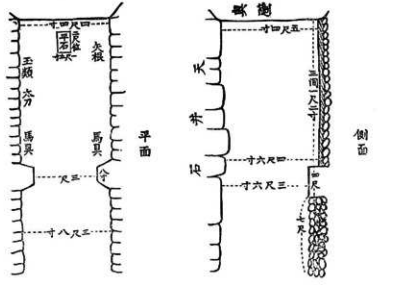
前記の人類学雑誌によれば，遺物は，大半が玄室からの出土である。出土遺物は，鐙４・兵庫鎖２・雲珠５・鈸具２・直刀４（大２・小２）・刀子１０数本・鏃２・鉄鏃１０数本・金環２・出雲石製管玉６・水晶切子玉７・緒締玉２・瑠璃製小玉１２・土師器５個・須恵器２個などであった。これらの遺物に対する説明は，きわめて簡単である。

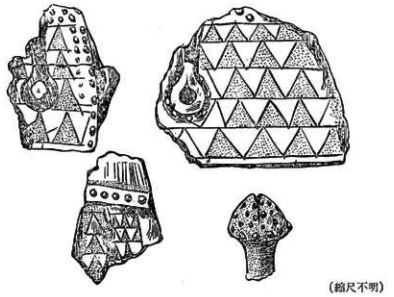
墳丘から出土した埴輪は，人物埴輪の首４（男子２，女子２），人物埴輪腕１７・人物埴輪の着衣裾部２・埴輪馬1組分（鈴八），埴輪鞍１・埴輪靫１であった。

出土遺物のうち花形座金付飾鋲や馬具から考えて，七世紀初頭ないし前半代に位置づけることができよう。



瓦塚古墳（『東京人類学会雑誌』第155号より）（縮尺不明）





上・石室見取図
下・出土埴輪片（埴輪馬の一部）（『東京人類学会雑誌』第155号より）

（分布図 73 頁・図版302頁）

（５５）谷口山古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　長岡町１１７６ほか
遺跡番号｛市　55
　　県　－

田川右岸丘陵突端の南側急傾斜面に立地し，現在円墳５基が確認できる。

古墳は現状ではいずれも径１０ｍ前後，高さ１ｍ前後で後期型の古墳と考えられる。

（分布図 70 頁・図版303頁）

（５６）三本松遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　上戸祭町４４０の２ほか
遺跡番号｛市　56
　　県　－

釜川右岸段丘上に立地している。

附近は，住宅が建ち並びわずかに残された畑中に石鏃が散在している。範囲は明確にし難いがそれほど広範囲に広がる遺跡ではないと思われる。土器片の散布はほとんどみられないが，縄文中期の所産と思われる。

（分布図 70 頁・図版303頁）

（５７）大塚古墳（県指定）

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　上戸祭町２９８２－１ほか
遺跡番号｛市　57
　　県　28

上戸祭町と長岡町とが境を接する山林中に位置している。

墳丘，石室とも県内有数の規模をもつ円墳であり墳丘は，径５３.４ｍ，高さ6.2ｍ２段築成である。周濠が認められている。なお，築造時期は古墳時代後期と考えられる。

－ 参考資料 － 栃木県史資料編考古１ （昭和５１年 栃木県）

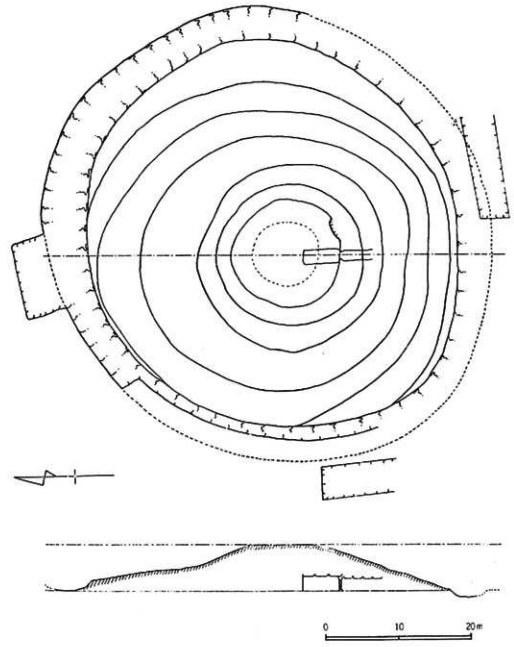
鬼怒川流域の地域にある大形の円墳である。宇都宮丘陵の末端に近い尾根通りにあり，周囲に１５基ほどの小円墳が散在している。標高はおよそ１８０ｍ，北側の眼下に長岡百穴横穴群を見下す位置にある。

墳丘は二段築成で，基底の直径は５３.４ｍ，第一段の高さが3.4ｍ，墳頂の高さが6.2ｍで，頂部は直径約９ｍの範囲が平坦となり，墳丘は形のよい截頭円錐形をなしている。周湟は戦時に壕がつくられたため完形を保っていないが，外縁はほぼ墳丘を円形にめぐっている。周湟の幅は6.6ｍ，深さ約１ｍである。

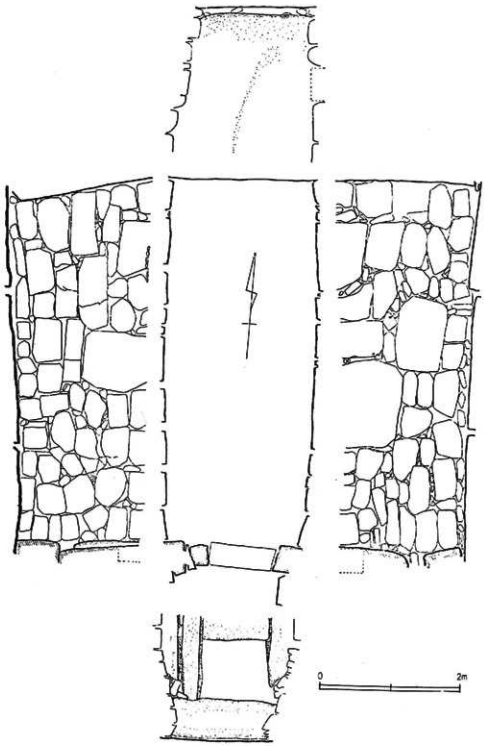
内部主体は南面の横穴式石室である。凝灰岩の割り石を平積みした石室で，全長は不明であるが，玄室の長さは5.17ｍ，奥壁前縁の幅が1.95ｍ，最大幅は玄室の中央付近にあって2.1ｍである。玄室の高さは玄門付近で1.75ｍ，奥壁の前で2.14ｍであるから，奥に向って天井がしだいに高くなるように造られている。奥壁は巨石の１枚造り，天井石も巨石３枚で構成されている。

玄門は側壁から室内に張り出した両側の柱石と，両端が側壁に組み込まれた部厚いまぐさ石と，下方にはこれに対する間仕切り石があって，門の空間が構成されている。門の内のりは，縦が８５㎝，横が８０㎝で正方形に近く，この閉塞には凝灰岩の厚い切り石が用いられている。

墳丘に対する石室の位置は，奥壁の前面中央と，墳丘の中心の距離が約2.8ｍあり，この分だけ石室が南によっているわけである。玄室の縦横比は最大幅をとると2.5になる。２回以上の追葬が明確に指摘できる石室で，６世紀中葉から後半にかかるころの築造と考えられる。



大塚古墳墳丘実測図



大塚古墳玄室実測図

（分布図　70頁・図版303頁）

（５８）大ジノ古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　上戸祭町３０１１−３ほか
遺跡番号｛市　58
県　−

大塚古墳（市遺跡番号５７）のほぼ北側に近接して築造された比較的大型の円墳群である。

緩やかな南側傾斜地を利用し，現在８基が確認できる。小規模な１基をのぞいて他の７基は１５ｍ〜２５ｍの径をもち高さは１〜２ｍぐらいある。

いちばん斜面の下にある６号墳は，１枚を残して天井石が取り払われ緑石，側壁の一部を見ることができる。それによると，凝灰岩の切石積みの横穴式石室で土に埋った緑石が見られる。

なお，他の古墳の中にも天井石が露出しているものがある。

（分布図　73頁・図版303頁）

（５９）松ケ丘遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑　　所在地　戸祭町８０３ほか
遺跡番号｛市　59
県　71

大塚古墳（市遺跡番号５７）の南東約５０ｍの緩やかな南傾斜に位置している。

表土上に散見できる遺物は，縄文，土師，須恵器の破片である。

なお，この遺跡は県登録水道山北遺跡を改称したものである。

（分布図　73頁・図版303頁）

（６０）長山供養塚群

種別　供養塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　長岡町７９３−５ほか
遺跡番号｛市　60
県　−

長岡百穴（市遺跡番号５３）から上戸祭町へぬける道路の赤坂を登りつめた俗

称柴山の北東に位置する。

現在4基の塚が確認できるほか「文政7年」銘の庚申塔がある。

（分布図 73頁・図版303頁）

（61）前坂供養塚群

種別 供養塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 長岡町786－7ほか
遺跡番号 { 市 61 / 県 － }

姥ケ入供養塚群（市遺跡番号62）から西方へ山道を進んだ山林に位置している。

4基の塚が整然と並んでいる。

（分布図 73頁・図版303頁）

（62）姥ケ入供養塚群

種別 供養塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 長岡町778－5ほか
遺跡番号 { 市 62 / 県 － }

田川右岸丘陵東端近くに立地する4基の供養塚群で南側斜面下には田向遺跡がある。

現状の塚の規模は1号径6～7m高さ1.5m，2号径5m高さ0.5m，3号径3m高さ0.5m，4号径3m高さ0.5mであるが，1号は1基のみ単独で構築されており古墳の可能性もある。

（分布図 73頁・図版303頁）

（63）田向遺跡

種別 散布地　時期 縄文・古墳　現状 山林　所在地 長岡町680ほか
遺跡番号 { 市 63 / 県 － }

富士見ケ丘団地の丘陵北東のふもとのわずかな平坦地に位置し，すぐ南を田川が南流している。田川との間，水田面との比高差は約3mで遺跡の南側を小川が田川に注いでいる。

表土上には，縄文期の石器類や土器片等が散見できる。

－ 参考資料 － 宇部宮市史第1巻 （昭和54年 宇都宮市）

この遺跡は小瀬時蔵によって発見され，たび重なる表採によって貴重な資料が一括保存されている。本市北半部地域における縄文時代の最重要遺跡として注目される。

採集された遺物によると，後期後半の安行Ⅰ式の大洞C_1式C_2式に比定される土器が出土しているが，石器類・土製品類および石器製作の素材となった瑪瑙の原石・剥片が膨大な量出土している。石器には有柄式のものを主体とした石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・敲石・磨石・石錘などがあり，土製品には高さ9.5cmのものと6cmの2個の土偶や土錘が発見されている。2個の土偶は完全なものではないが，いずれも晩期に属するものと思われる。小形の頭部とすんなりとした胴部，目は小さく文様はない。土偶衰退期の特徴をそなえたものとして特筆される。また多くの玉類が出土している。

本遺跡の特徴は無数の石鏃とこれを作る瑪瑙の原石が多出していることである。おそらく集落内に石器製造の場所があったのであろう。また漁撈用具としての石錘・土錘が豊富に存在し，さらに装飾品としての縄文時代勾玉・管玉・丸玉などが多数検出されている。ここに縄文時代勾玉などと記したのは，弥生時代以降のものと区別する必要があったからである。丸玉はほぼ球形を呈し，中央に貫通孔をあけた飾玉であるが，なかには瓢斗形の大きな孔をあけたものや硬玉製品がある。丸玉には土製と石製のものとがある。勾玉は弥生時代以降のものとは明瞭に区別されるもので，長楕円形のものから湾曲したいわゆる勾玉形のものがみられるが，頭部に両面から孔をうがち，勾玉の祖型として本遺跡のものは重要である。また管玉は弥生時代以降のものとは異なり，両端が丸みをおび，なかには形状が長瓢斗形を呈するものがある。これにも土製と石製のものとが発見されている。

なお，本遺跡からは図示したような打製石器が出土している石鹿丁形を呈するも

ので，みごとな刃部がみられ，おそらく皮剥ぎ用具と思われるが一考すべき石器である。これに類した石器は本市域はもとより栃木県下からは発見されていない。

（分布図　70頁・図版303頁）

（64）根河原瓦窯跡群

種別　瓦窯跡　　**時期**　奈良　　**現状**　宅地
所在地　上戸祭町636ほか　　**遺跡番号**｛市 64 / 県 －

水道山瓦窯跡群（市遺跡番号65）とは釜川を挟んで相対した段丘斜面に位置している。

現状は，石垣の中にかくれている状態であるが，水道山周辺の瓦窯跡として貴重な遺跡である。

－　参考資料　－　　山本山古墳・水道山瓦窯跡発掘調査報告書　（昭和54年　栃木県教育委員会）

本瓦窯跡は，宇都宮台地東縁の上戸祭（旧字下原及び根瓦）に確認された。ここは，宝木台地中位面上を通り野沢町付近で宇都宮丘陵南部との間に小支谷をつくりつつ南流する釜川の右岸にあたっている。

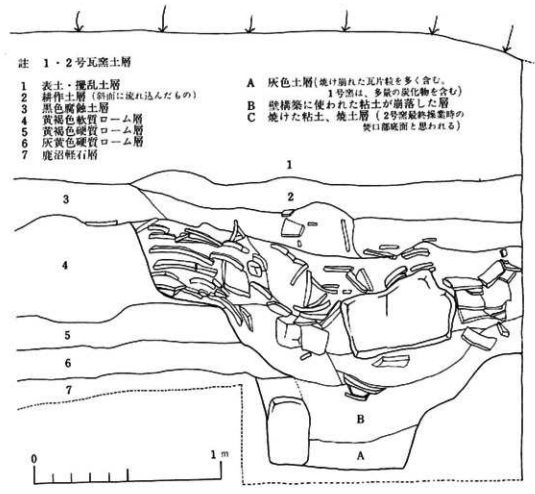
この釜川右岸の台地東縁には，考古学史上有名な野沢式土器を出土した弥生時代の野沢遺跡が存在し，かつ土師器を大量に散布させる古墳時代の集落遺跡が存在（含予測）している。この地は各時代に亘って居住の適地とされていたようである。釜川に左する宇都宮丘陵上には，宮下古墳，瓦塚古墳，長岡百穴横穴群，山本山古墳群などが造営されている。

ところでこの釜川は，宇都宮市街地を南流通過して宇都宮城跡の東方で田川に注ぎこみ，田川は，宝木台地の東縁部に添って流れ逝って茨城県に入り鬼怒川に流入する。

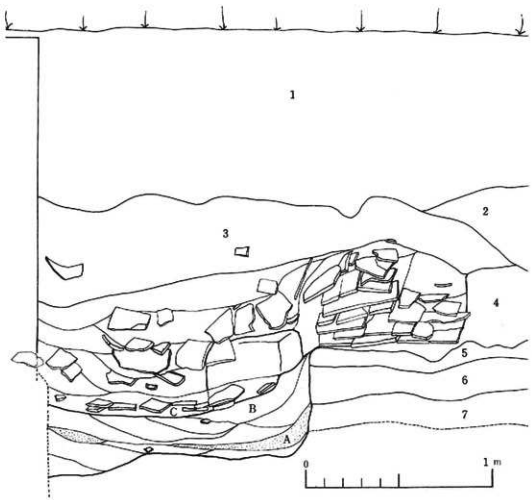
この田川右岸の台地上には，本瓦窯跡の製造になる瓦を使用した雀宮町（宇都宮市）と上三川町にまたがる茂原・上神主遺跡，上三川町の多功遺跡，また南河内町の日本三戒壇の一つである下野薬師寺跡が南北につらなって点在している。

これら歴史時代の重要遺跡は，古代交通の面からみて河川による結びつきが考察されており，瓦運搬の便宜上からも田川やその支流の釜川との脈絡が注目される。

古代東山道が上野国新田郷の駅家より下野国の都賀郡に在った国府に至り，宝木台地東縁上を通って衣川の駅家へと抜けたであろうと一般に考えられていることもあわせて注意されることである。



根瓦　1号瓦窯跡



根瓦　2号瓦窯跡

（分布図　72頁・図版304頁）

（65）水道山瓦窯跡群

種別　瓦窯跡　　**時期**　奈良　　**現状**　山林　　**所在地**　中戸祭町2899－4ほか
遺跡番号｛市65 県29

水道山南ろくの小さな谷地に面して構築されている。

何基あるかは定かでないが，調査によって3基が確認されている。地下式無階無段の登窯であり，下野薬師寺，上神主廃寺の瓦の供給窯として著名である。

なお，この遺跡は県登録戸祭窯跡を改称したものである。

－　参考資料　－

1.　栃木県史資料編考古1（昭和51年　栃木県）

水道山の南麓の小さな谷地に数基の窯跡のあることは，既に田中国男によって略報され，田中はそれが上神主廃寺への供給瓦窯である点を強調している。

調査は昭和37年11月18日より25日までの8日間を要して，2基の瓦窯を発掘調査した。

1号窯は全長約4.5，焚口部幅約0.6，焼成部長約3.7，燃焼部長約1.4メートルの地下式無階無段登り窯である。2号窯もほぼ1号窯と同大のもので，ことに，この2基は焚口部より溝がつくられ，両者が合流するもので，比較的湧水がはげしい点から，排水溝として重要な役割を果たしたものと考えられる。

この窯跡からの遺瓦としては均正唐草文宇瓦，男瓦，女瓦，堤瓦，面戸瓦，須恵器片若干が出土した。女瓦のなかには4点ほど「塩」の文字が記され，当国「塩谷郡」をあらわすもののようであった。

本調査においては発見されなかったが，人名文字瓦の出土があり，それが，上神主廃寺と同類であることは申すまでもない。この瓦窯は下野薬師寺，国分寺，上神主廃寺と密接な関係をもったもので，更に付近には窯跡が数基存在するものと考えられる。調査当時は宇都宮市の郊外であったが，都市化が進み，再調査の必要と，それによる研究結果は古代屋瓦の需給関係をいっそう明確にし得るものと思う。

本瓦窯は8世紀初頭から中葉ごろまで操業していたものと考えられる。

2.　水道山瓦窯跡群（昭和57年　宇都宮市教育委員会）

水道山瓦屋のある丘陵の基盤は長岡層（凝灰岩）と呼ばれ，丘陵北部の長岡には横穴古墳の群在がある。さらに最近北方約1.5㎞の瓦谷町の田川に面した西の丘陵端の欠ノ上に須恵器窯跡が発見された。

このように宇都宮市の北方地域は，奈良時代から平安時代における下野国内における小規模ながらも窯業生産地を形成していた。

水道山瓦窯についての学術的関心はふるく大正時代以降，昭和10年代に及んだ。その後昭和37年に筆者は早稲田大学考古学研究室学生と共に発掘調査を実施した。その結果瓦窯跡２口を検出した。その後この瓦窯跡の所在する谷の奥に日本住宅公団の宅地造成に伴う調整池の設置が計画されることとなり，この地域が永久に水没するため，瓦窯関連遺跡の有無を調査することとなり，昭和52年栃木県文化課の依嘱により筆者が担当者として調査を実施した。その結果，つくりかけの窯１口を検出し，その他の遺構は認め得られなかった。この時期以後，水道山１，２号瓦窯所在地域から谷口にわたる地域に廃土の放棄による埋立が続けられ，１，２号瓦窯跡の埋没も時間の問題と云う状態にいたった。ここにおいて宇都宮市教育委員会は文化庁，栃木県よりの補助を得てステ場並びに周辺に瓦窯の有無の最終調査を実施する計画をたてられ，筆者にその調査を依嘱されたので，筆者は国士館大学考古学研究室の考古学実習を兼ねてこれの現地調査と整理研究を実施した。（中略）

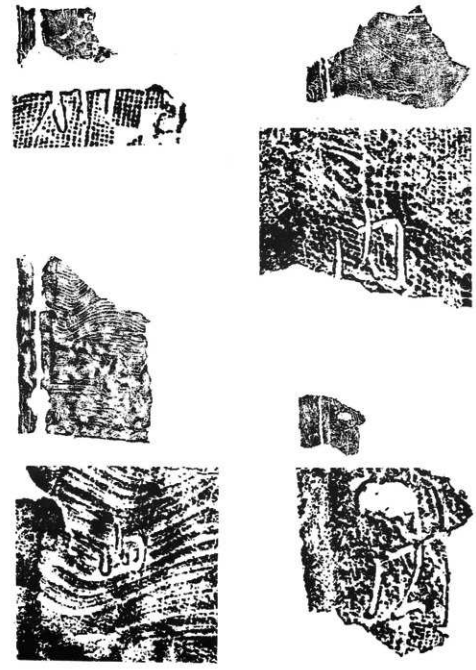
今次の調査では，A・B・C区の３カ所のステ場を確認，1・2号窯跡の西側で新らたに３号窯跡を発見した。これから出土した屋瓦類の総重量は約2,400kgに達し，ステ場での屋瓦量はB・C・A区の順であった。

ステ場はA区が1・2号窯，B・C区が3号窯にともなうものとすることには間違いはないものであろう。

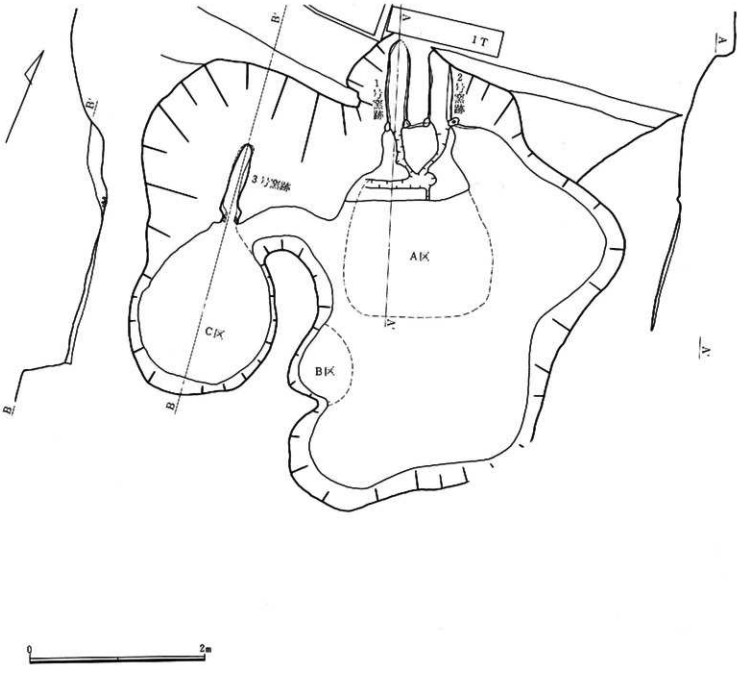
過去における文字瓦の発見地域は，昭和37年度の「塩」は３号窯の東側，昭和52年度の鐙瓦と文字瓦の発見場所は，ステ場A区の下方のC区にまたがる地域のものと考えられる。また，昭和10年代の田中国男氏によって採集されたものは，B区附近におけるものと考えられる。

今回発見の軒先瓦類によって鐙瓦と字瓦の組み合せが判明し，さらに人名，郡名瓦の出土によって，1・2号窯にて薬師寺の屋瓦を焼成し，３号窯において国分寺創建初期と上神主廃寺，多功遺跡の屋瓦を焼成したものであることが判明した。また文字瓦のうち郡名は国分寺用，人名は上神主，多功用であることが明らかとなった。

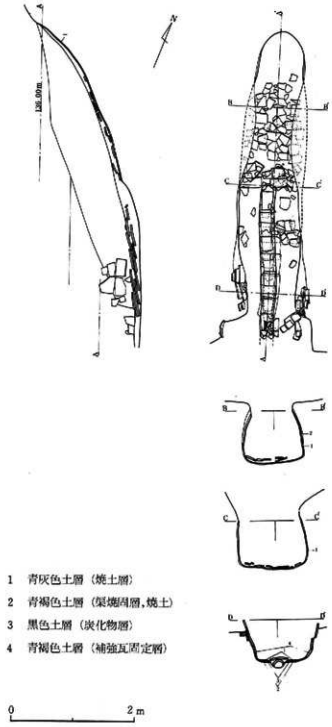
＊文中，筆者とあるのは国士館大学教授　大川　　清氏



郡名瓦　河内の「内」


1T
1号窯跡
2号窯跡
3号窯跡
A区
B区
C区
0
2m

遺構配置図


1 青灰色土層（焼土層）
2 青褐色土層（渠焼固層，焼土）
3 黒色土層（炭化物層）
4 青褐色土層（補強瓦固定層）
0
2 m

3号瓦窯跡

（分布図 75頁・図版305頁）

（66）入 畑 窯 跡 群

種別 窯跡　**時期** 江戸　**現状** 宅地・山林　**所在地** 山本町544−2ほか
遺跡番号 市66 県 −

富士見ケ丘団地南端，丘陵斜面に立地するが団地造成のため半壊している。

現状では，登窯が2基確認でき，周囲の林の中に壁体・灰・粘土状のもの，焼き台，製品のかけらが一面に散在している。

製品には，急須なども見え，器種はバラエティーに富む。茶及び濃緑系の釉が主体を占める。時期は明確にできないが，附近に操業の言い伝えがなく近世あるいはそれ以前の所産と考えられる。

（分布図 75頁・図版305頁）

（67）払 面 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑　**所在地** 山本町443ほか
遺跡番号 市67 県 −

羽黒街道の東丘陵に入りこんだ谷に面した南側斜面に位置する。

遺物の散布は広範囲にわたり，石棒，石鏃，縄文式土器，打製石斧等の出土品や立地環境規模を考えあわせると縄文中期を中心とする所産と考えられる。

（分布図 75頁・図版305頁）

（68）山本山古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 宅地　**所在地** 山本町418ほか
遺跡番号 市68 県 −

南にのびてきた宇都宮丘陵南端近くの丘陵上の緩やかな斜面を利用して立地し，西側を釜川が流れる。

昭和52年2基の発掘調査が行われたが，そのうち1基からはほぼ南地に主軸をとる乱石積みの横穴式石室が検出された。

規模は2基とも径約20m高さ約2mの円墳であり，出土品としては須恵器，直刀，刀子，鉄鏃等がある。

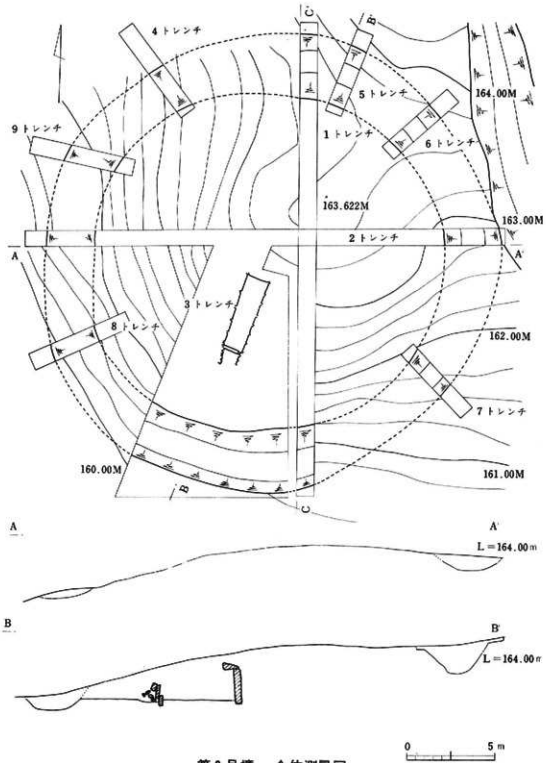
− 参考資料 −

1. 山本山古墳・水道山瓦窯跡発掘調査報告書（昭和54年 栃木県教育委員会）

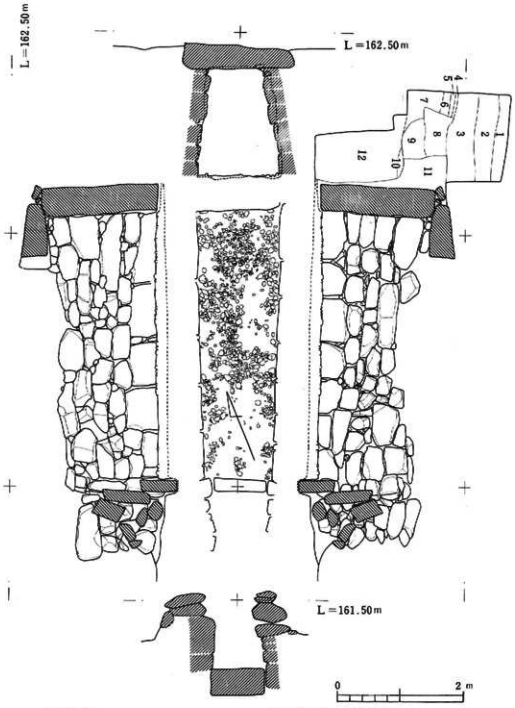
栃木県を代表する鬼怒川は，県北西部の日光連峰に源を発し，河内郡上河内町付近で大きく流れを変えると共に，河幅を広げ県中央部を南流し，肥沃な沖積地を形成している。宇都宮丘陵は鬼怒川によって開析され，鬼怒川西岸に位置し，南北に細長い緩やかな起伏を呈している。

山本山古墳と水道山瓦窯跡は，宇都宮市街地より北へ0.5km，宇都宮市戸祭に所在しており，鬼怒川の支流である田川・釜川に挟まれた宇都宮丘陵南端に位置している。

山本山古墳は丘陵西側斜面の支尾根に位置し，眼下に釜川による沖積地を臨む場所に占地している。そして支尾根沿いに北へ山道が走り，今回発掘対象となった2基の小円墳は，その山道を境にして東西に隣接して所在する。また緩やかな傾斜を示す尾根の地表面には，田原ロームが露出しており，当該地はあまり浸食されていないと思われる。標高は165m前後で，沖積地よりの比高は33mを測る。



第2号墳　全体測量図



1層　表土層
2層　褐色土（ローム粒子・黒色土・凝灰岩ブロック混入）
3層　黄褐色土（ローム・ブロック・ローム粒子多量混入）
4層　〃　〃　（凝灰岩ブロック混入）
5層　黒色土（しまり有り）
6層　暗褐色土（ローム粒子混入）
7層　褐色土（ローム粒子多量混入）
8層　暗褐色土（ロームブロック・ローム粒子混入）
9層　暗褐色土（ロームブロック・ローム粒子少量混入）
10層　暗黒褐色土（ロームブロック少量混入）
11層　褐色土（ロームブロック少量・ローム粒子多量混入）
12層　ローム層

第2号墳　石室実測図

2. 宇都宮市史別巻（昭和５６年　宇都宮市）

墳丘は第１号墳の西側にあり，斜面のやや下方に位置する円墳である。

高さ約1.3m，直径約１４ｍを測るが，第１号墳同様に斜面に構築されているために，盛土が流されているものと思われ，墳頂部が著しく北東方向に偏っている。報告書では，盛土が墳頂部付近より南にしか認められず，北側は旧地表面のみであること，また傾斜の激しくなる西側では盛土が確認できないことなどから，自然地形を巧みに利用した省力化傾向にある墳丘であることを指摘している。

周溝は直径18.8ｍ，幅2.7～3.8ｍ，深さ1.7～0.9ｍを測るが，斜面の下方に位置する西側周溝は不明瞭で，外壁がほとんどみられない。

内部主体は墳丘の中心からやや南西に偏った位置に構築された，半地下式両袖形横穴式石室であり，緑色凝灰岩の削り石積み石室である。天井石は最奥部の１枚のみが遺存している。石室は全長5.5ｍ，玄室長4.25ｍ，羨道長1.25ｍ，奥壁附近の幅1.35ｍ，玄門附近の幅1.1ｍ，羨門附近の幅0.75ｍを測り，長方形に近い形である。石室の主軸はN－２２度２０分－Eをとり，南南西に開口している。

奥壁は緑色凝灰岩の１枚石であり，表面は平滑に仕上げられている。

側壁は緑色凝灰岩（長岡石）削り石（使用石材の石室内側に向く部分のみ平滑にしたもの）の互の目積み（石材を互い違いに積み上げる方法）で，６段に積み上げている。わずかながら持ち送り（上方にいくに従って内側にせり出してくる積み方）がみられる。石材と石材の間隙には，白色粘土を詰めて目張りしている。

玄門は内側に張り出させた両側壁が床面に据えた隅丸長方形の框石を挟み込む形である。框石の上には，長方形のやや大きな切石を乗せて扉石としている。扉壁と接する両側壁には，Ｌ字形の切り込みを入れて嵌合させている。

玄門外側の羨道部は比較的短い。両側壁は緑色凝灰岩割合の乱石積みである。

玄室の床面は小石が敷き詰められているが，羨道部床面にはほとんどみられず地山のままである。

石室の掘り方は，全長6.5ｍ，玄室部幅約６ｍ，羨道部幅約３ｍを測る，不規則な楕円形土壙と思われる。

土壙底面は玄室部ではほぼ平坦であるが，羨道部は周溝に向かって漸次浅くなっている。土壙壁は奥壁部が２段でほぼ垂直であるが，側壁は斜めに掘り込まれている。

出土遺物は直刀・刀子・鉄鏃であり，すべて玄室内からの出土である。ほかに石室に流入堆積した土砂の中から，須恵器甕の口縁部破片が出土している。

（分布図　95頁・図版305頁）

(69) 御蔵山古墳

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　山林・神社
所在地　塙田町５３５ほか　　**遺跡番号**　{市６９ 県２６

県庁北側の丘陵南端部に築造されている。

主軸は，東西にとるが変形が著しく定かではないが二段築成の可能性がある。明治年間県庁建設の際主体部から石棺が検出され，副葬品として青色管玉１０，小玉１２，短剣１等が検出された。

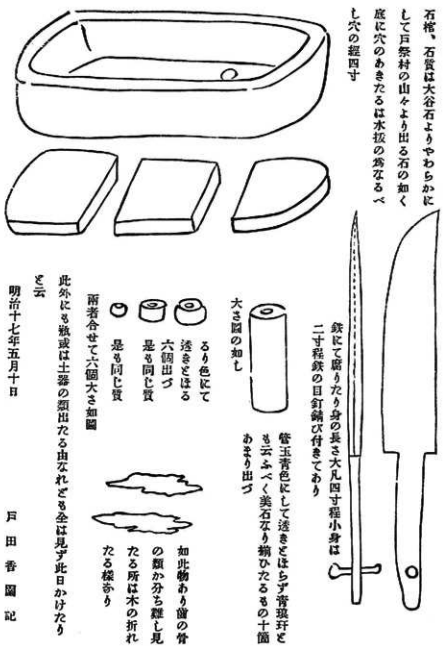
－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻　（昭和54年　宇都宮市）

塙田町内にある本墳は，宇都宮丘陵末端の南側斜面に築造された前方後円墳である。標高約150ｍで西面して築造されている。県庁舎の裏にある。明治17年(1884)の県庁舎建設に際して墳丘をかなり削除しており，保存度はきわめて悪い。この際，墳頂下約１ｍの地点より石棺１，刀子１，管玉１０個，丸玉６個，小玉類１０個が出土している。また円筒埴輪片も多量に出土している。

石棺は砂質凝灰岩製であり，規模は長さ182㎝，幅75.8㎝，高さ５８㎝，厚さ15.2㎝を測る。棺底に径１２㎝の穿孔が行われている。天井石は３枚に分かれている。

刀子は両区（ちょうちも）であり，茎（なかご）には目釘が残る。長さ約18.2㎝を測る。

円筒埴輪で実態のわかるのは，朝顔形円筒埴輪である。突帯は，６本みられる。断面は，台形を呈し，高い。窓は円形であり，射撃場跡古墳出土の埴輪に近似する。



御蔵山古墳出土の遺物(『東京人類学会雑誌』第28号より)

(分布図 74頁・図版305頁)

(70) 堀之内遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 水田・宅地　所在地 岩曽町658-1ほか
遺跡番号 { 市70 / 県 ー }

羽黒街道の東，岩曽町の農家の宅地とこれに接する北側水田で山田川左岸の平坦な台地に立地している。

畑であったころは土・石器がかなり多く散見出来たが，現状は水田と宅地のため表土上での遺物確認は困難である。

(分布図 75頁・図版305頁)

(71) 戸祭兎田遺跡

種別 散布地　時期 古墳　現状 山林　所在地 戸祭町3634ー1ほか
遺跡番号 { 市71 / 県 ー }

競輪場通りの競輪場の反対側の丘陵，栃木県家畜衛生研究所の北側競輪場駐車場(第17駐車場)東側の山林の中に位置している。

傾斜地で遺跡の範囲は定かではないが，駐車場関係の工事中に土師器の完形品数点が出土している。

(分布図 19頁・図版305頁)

(72) 溜山下遺跡

種別 集落跡　時期 平安　現状 畑　所在地 飯山町143ほか
遺跡番号 { 市72 / 県 ー }

高館山地，北端に続く東西丘陵の南向き緩斜面に立地している。

土師器の破片が表土上に散見できるが，本遺跡は平安時代以降と考えられる。

（分布図　24頁・図版305頁）

（73）万城路古墳群

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　山林　　**所在地**　飯山町２３７ほか
遺跡番号｛市７３／県　－

篠井の飯山地区北部の端に立地している。
南北に連なって円墳４基が確認できる。

（分布図　24頁・図版305頁）

（74）中 居 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　古墳～奈良　　**現状**　畑・宅地
所在地　飯山町２２９－１ほか　　**遺跡番号**｛市７４／県　－

高館山地北端に続く，東西丘陵の南向き緩斜面に立地している。
遺跡の表土上には多量の土師器片が散在しており，篠井地区にあっては，有数の土師集落であると考えられる。

（分布図　24頁・図版305頁）

（75）先 道 路 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　古墳　　**現状**　畑　　**所在地**　飯山町４１７ほか
遺跡番号｛市７５／県　－

高館山地北端に続く東西丘陵の南向き緩斜面に立地している。
本遺跡の表土上には，土師器片が散見される。特にはけ目跡が残る和泉期の土師器の破片も見られ貴重な遺跡と考えられる。

（分布図　25頁・図版305頁）

（76）内 出 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　奈良・平安　　**現状**　畑・宅地
所在地　篠井町１５７９－１ほか　　**遺跡番号**｛市７６／県９２

高へら山の南，南向きの緩斜面に立地している。
遺跡のすぐ南を逆川が東流している。表土上に散布している土器が小片のため，明確にし得ないが奈良・平安期の遺跡と考えられる。

（分布図　25頁・図版306頁）

（77）金 山 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　山林　　**所在地**　篠井町１７６３ほか
遺跡番号｛市７７／県　－

高館山地に入りこんだ二つの谷によって挟まれた舌状の東西丘陵上に立地している。
現状は山林となっているが戦時中開墾された地区には，多量の土器石器が散在している。その遺跡は，縄文中期（阿玉台，加曽利ＥⅠ）の土器片及び打製石斧，石皿，磨石等の石器類である。

（分布図　25頁・図版306頁）

（78）中 峰 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　奈良・平安　　**現状**　畑　　**所在地**　篠井町1786ほか
遺跡番号｛市７８／県　－

高館山地より舌状に延びた丘陵の南斜面下に位置し，北に隣接して金山遺跡（市遺跡番号７７）がある。
表土上に奈良時代以降と考えられる土師器片が散在するが，小片のため，時期は定かでない。

（分布図　25頁・図版306頁）

（79）上篠井高尾神社南遺跡

種別　集落跡　　**時期**　平安　　**現状**　山林・荒地　　**所在地**　篠井町1478ほか
遺跡番号　市79　県－

高館山地より舌状に延びた丘陵の西端に位置している。

同じ丘陵上の東に金山遺跡（市遺跡番号77）がある。表土上には，平安時代以降と考えられるかわらけ片，土師器片等の土器片が見られる。

（分布図　25頁・図版306頁）

（80）寿　福　院　跡

種別　寺院跡・高塚　　**時期**　江戸　　**現状**　水田・畑
所在地　篠井町1088-7ほか　　**遺跡番号**　市80　県－

上篠井の丘陵に挟まれた平坦地に位置している。

寺域は定かではないが径約3m，高さ0.5mのまんじゅう形をした塚が残っており，塚の上の墓石に大法師秀戒1不生位安永仁癸巳歳6月初8日，塔には寛永18年3月21日とある。

なお，この寺院は，東海寺の末寺で明治維新における神仏分離で廃寺になった。

（分布図　25頁・図版306頁）

（81）久　保　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良　　**現状**　山林・畑
所在地　篠井町1805ほか　　**遺跡番号**　市81　県94

高館山地から西側に延びる丘陵上に位置している。

第2次世界大戦後の開墾の際縄文式土器片，石斧・石鏃等と土師器片が多量に出土した。

なお，この遺跡は県登録前山遺跡を改称したものである。

（分布図　25頁・図版306頁）

（82）中　坪　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　古墳～平安　　**現状**　畑・宅地
所在地　篠井町831ほか　　**遺跡番号**　市82　県95

南北に延びる高館山地西側の緩い斜面に位置している。

表土上には土師器片が散見できるが破片が小さく遺跡の時期は正確につかめない。しかし，一応古墳時代から奈良・平安に至る遺跡と考えられる。

（分布図　25頁・図版306頁）

（83）加波山北遺跡

種別　集落跡　　**時期**　奈良・平安　　**現状**　畑・山林
所在地　篠井町803ほか　　**遺跡番号**　市83　県－

南北に延びる高館山地の西端にある加波山の北側緩斜面に立地する。

散見できる土師器は，小片のため，時期を明確にしがたいが奈良時代以降の遺跡と考えられる。

（分布図　26頁・図版306頁）

（84）上小池一里塚

種別　一里塚　　**時期**　江戸　　**現状**　宅地　　**所在地**　上小池町391－1ほか
遺跡番号　市84　県－

日光街道沿いの上小池に位置する一里塚である。

かっては街道の両側にあったが，開田により北側の塚は破壊されその痕跡もみとめられない。現存する南側の塚は，高さ約1.8m，径3mである。

（分布図 26頁・図版306頁）

（85）上小池古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 林　**所在地** 上小池町870ほか
遺跡番号 {市85 県 —}

上小池の日光街道をはさんで街道の両側に位置している。

円墳が街道の南側に1基・北側に2基所在し，規模は南側が約径3m高さ0.8m，北側の2基は径5m高さ2mで墳丘を接している。

（分布図 25頁・図版306頁）

（86）篠井金山跡

種別 鉱山跡　**時期** 戦国　**現状** 山林　**所在地** 篠井町822ほか
遺跡番号 {市86 県 —}

榛名山の西側中腹斜面に位置する。

戦国時代から江戸時代にかけて盛んに金の採掘が行われ当時の坑道が残る。明治に至って金山から銅山となり，第2次世界大戦後廃坑になる。

（分布図 26頁・図版306頁）

（87）龍興寺跡

種別 寺院跡　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 上小池町1008ほか
遺跡番号 {市87 県 —}

雷電山の南側の山すそに位置している。

江戸中期に建立されたといわれているが，現在は山林となっており寺域も定かでない。しかし，南側には龍興寺堀が流れ，その北側には墓石，祠などが散在している。

（分布図 26頁・図版306頁）

（88）下ノ内遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 山林　**所在地** 上小池町1802ほか
遺跡番号 {市88 県 —}

北西から南東方向に延びる低台地に立地している。

現在は，山林になっているが縄文時代中期の所産と考えられる土器片・石器を散見することができる。

（分布図 27頁・図版306頁）

（89）曲坂遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 山林・宅地
所在地 篠井町1906−2ほか　**遺跡番号** {市89 県 —}

高館山地に入りこんだほぼ東西の谷の南西向き斜面に立地している。

現在山林となっているが縄文式土器，土師器等が林道造成の際などに出土しているほか，切り通しには土壙もみられる。

（分布図 32頁・図版306頁）

（90）原遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑・宅地　**所在地** 上小池町236-1ほか
遺跡番号 {市90 県 —}

上小池の丘陵端に立地している。

土器の散布状態が薄いので時期を明確にし得ないが，いずれにしても縄文時代の遺跡と考えられる。

（分布図　34頁・図版306頁）

（91）林業センター内遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良・平安　　**現状**　畑
所在地　下小池町２１０－１ほか　　**遺跡番号**｛市 91 / 県 －

下小池の県林業センター内に位置している。

古河遺跡（市遺跡番号９２）が東に近接しており，縄文式土器片・土師器片がセンター内の畑に散在している。

（分布図　34頁・図版306頁）

（92）古　河　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　山林・水田　　**所在地**　篠井町166ほか
遺跡番号｛市 92 / 県 74

田川及び大川に東西を開析された北西から南東にのびる舌状の丘陵南端に位置する。

縄文時代中期（阿玉台，加曽利ＥⅠ）の遺跡であり，昭和４２年開田の際多量の遺物と共に袋状土壙が発見されている。

－　参考資料　－　宇都宮市史第１巻　（昭和５４年　宇都宮市）

篠井町下篠井地内にある古河遺跡は，縄文時代中期の大集落跡として注目されるところである。この篠井町一帯は隣りの飯山町・下小池町と同じように地形の起伏が多いだけに，かなり多くの縄文時代遺跡が分布しているものと思われる。しかし，これまで本市最北部にあるこの地域はほとんど調査が行われず，縄文文化の内容はまったくわかっていない。今後，この地域は重点的に精査を進めなければならないところである。

古河遺跡は田川上流の段丘上に位置するが，かつて開田工事が行われたときに多量の土器や石器が発見された。このとき口径１ｍ余前後の袋状土壙の口部と思われる遺構が１０基位露呈したが，未調査のまま湮滅してしまった。したがって，袋状土壙の形状やこの遺跡の性格については十分にわかってはいないが，出土した土器は中期の阿玉台式・加曽利ＥⅠ式が大部分であるので，この時期の集落跡であることには間違いない。その主体は加曽利ＥⅠ式期であり，石器には石皿と多量の敲石（たたきいし）・磨石・打製石斧などがある。これらの資料は作新学院考古学資料室に保管されている。

（分布図　28頁・図版307頁）

（93）柳　町　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・平安　　**現状**　畑　　**所在地**　篠井町１３１ほか
遺跡番号｛市 93 / 県 －

高館山地の南西に延びる丘陵の南端に位置している。

表土上には，縄文中期及び土師器片が散見できる。

（分布図　34頁・図版307頁）

（94）六本木一里塚

種別　一里塚　　**時期**　江戸　　**現状**　宅地・水田　　**所在地**　石那田町87ほか
遺跡番号｛市 94 / 県 －

日光街道に伴う六本木の一里塚で街道の両側に現存する。

規模は，北側の塚が高さ３ｍ径５ｍ，南は高さ0.５ｍ径２ｍである。

（分布図　34頁・図版307頁）

（95）仲　内　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良・平安　　**現状**　宅地・畑
所在地　石那田町４２３ほか　　**遺跡番号**｛市 95 / 県 －

田川及び大川に東西を開析された台地の南端部に位置する。

遺跡の表土上に散見できる遺物は，縄文式土器，土師器の破片である。

（分布図　34頁・図版307頁）

（96）坊　村　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・平安　　**現状**　宅地・畑
所在地　石那田町９５３ほか　　**遺跡番号**（市９６ 県 －）

半蔵山地の北側を流れる田川によって開析された台地の東端に位置する。

遺跡の表土上に散見できる遺物は，縄文式土器片，土師器片，かわらけ片等である。

（分布図　34頁・図版307頁）

（97）石 那 田 遺 跡

種別　城館跡・集落跡　　**時期**　縄文・戦国　　**現状**　山林
所在地　石那田町９７３ほか　　**遺跡番号**（市９７ 県 －）

古賀志山地の一部である半蔵山の北側，田川の赤堀川に挟まれた段丘上端に立地している。

昭和５０年発掘調査が行われ，中世の館跡縄文時代前期の住居跡，井戸跡，方形遺構，土壙柱穴群などが確認された。

なお，館跡の規模は，東西約９６ｍ，南北５５ｍである。

－　参考資料　－

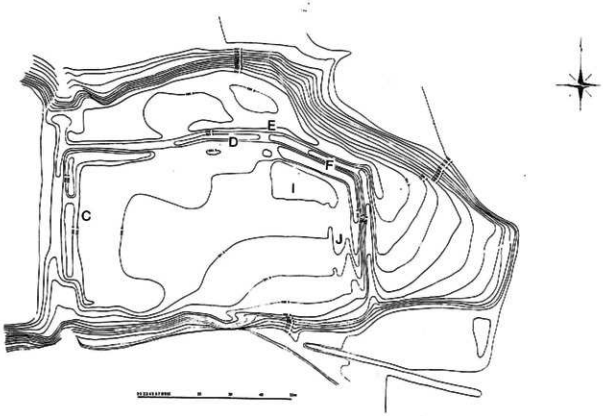
1. 栃木県の中世城館跡（昭和５７年　栃木県教育委員会）

この館は，宇都宮市の北部，古賀志山塊と宇都宮丘陵がもっとも接近した地域の，半島状に突出した台地の尖端に立地している。北に赤堀川，南に田川が東流し，とりわけ田川は館付近で流路を変えて館に接して流れている。東西103ｍ，南北６０ｍの規模を持つ長方形の館で，南は田川の急崖，西・北・東は土塁と堀（幅２ｍ，高さ1.5ｍ）をめぐらし，北東隅（F）が立地条件に応じて，土塁・堀が内側に若干屈曲している。また北側中央部の土塁上（D）が，ふくらみを持ち武者走りとなっている。西（C）と北（E）に土塁の切断面があり，南は架橋，北は土橋で外部に通じている。

昭和４６年，有料道路日光・宇都宮バイパス貫通のため，この館の東北隅の発掘調査が行なわれた。調査の結果，次のことが判明した。

内部の北東部に３０㎝の高さの土壇（I）が築かれ，艮（うしとら）（鬼門）の屋敷神を祭ったと想定され，その前および東側にわたって排水溝（J）が走っている。北の土塁に接して，倉庫跡，ないしは下人住居と想定される一辺２ｍ前後，深さ３０㎝の三つの方形遺構が並んで発見された。これは，北・南にピットがあり，柱を二本建て，屋根をつけていたと思われる。もっとも西の方形遺構の北に接して直径2.2ｍの瓢戸状の井戸があり，埋没された後に大量の土器（かわらけ）が，投棄されていた。これらは一～十二までの墨書の番号をうつ三セットの皿と三この内耳鍋などである。なお内耳鍋の一つは方形遺構から出ている。郭内の東側に二棟の建築遺構（一つは２間×３間）を発掘したが，これは母屋に付属する厨のようなものと考えられ，母屋は未発掘部分にあると思われる。

この館は，天正期の宇都宮氏の家臣小池内蔵助のものと記録されている（「多気山城構出陣人名」）。



石那田館実測図

2. 宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

石那田町台の上に所在する本遺跡は，昭和49年2月から3月にかけて栃木県教育委員会が日光バイパス建設に伴い発掘調査した。橋本澄朗らの調査報文によれば，中世末期の石那田館跡の調査途上において，縄文時代の住居跡が発見されたという。このため橋本澄朗は石那田館跡とわけて，本遺跡を石那田館跡内遺跡とよんでいる。

この遺跡は標高232mで，遺跡の南を流れる田川により開析された沖積面からの比高は約10mで，半島状に突出した段丘上の尖端に位置している。調査は道路建設地内に限られているため，縄文時代の集落跡の規模は不明確であるが，館跡内に設けた各トレンチからわずかではあるが土器片が出土しているため，ある程度の広がりをもった集落跡といえるようである。この調査で検出された住居跡は1軒で，前期の関山式期のものに比定されている。

住居跡は長辺3.2m，短辺2.1mの長方形を呈するものであるが，長辺の中央部がやや膨らみ2.6mを示している。住居跡が検出された面は七本桜軽石層で，覆土は非常に堅く，壁は七本桜軽石層の崩落が著しいためその確認が困難であったが，その高さは30cmである。床面は今市軽石層で，ほぼ中央に不整な楕円形（75×50cm）で10cmほど掘りくぼめた炉跡がある。炉内に炭化物が検出されている。柱穴は北壁近くに1本，南壁近くに2本が確かめられたにすぎない。住居跡内から関山式土器（埼玉県南埼玉郡関山遺跡標式）の破片が出土しているため，この時期の住居跡と思われる。

本遺跡出土の土器は，早期末の茅山式土器（神奈川県横須賀市茅山貝塚標式）の破片若干と関山式土器である。主体土器は関山式であり，本遺跡の主体時期であることを示している。

（分布図　33頁・図版307頁）

（98）岡 坪 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・鎌倉　　**現状**　宅地・畑
所在地　石那田町1512ほか　　**遺跡番号**　市98 / 県 —

田川と赤堀川に南北を開析された丘陵上に立地している。

同じ段丘上で東南東約1kmの所には，石那田遺跡（市遺跡番号97）がある。表土上に縄文中期及び中世の土器片が散見できる。

（分布図　33頁・図版307頁）

（99）原 供 養 塚

種別　供養塚　　**時期**　江戸　　**現状**　水田　　**所在地**　石那田町2016ほか
遺跡番号　市99 / 県 —

田川と日光街道に挟まれた丘陵に位置している。

塚の規模は，高さ1m一辺3mの方形である。塚の頂上には塚石と思われるものが散在し，塚わきには「光明真言供養塔」の銘がある石碑が横たわっている。

（分布図　34頁・図版307頁）

（100）仲 根 供 養 塚

種別　供養塚　　**時期**　江戸　　**現状**　山林　　**所在地**　石那田町1000ほか
遺跡番号　市100 / 県 —

半蔵山の北斜面の登り口に位置する。

直径3m高さ0.8mの円形で「正徳6丙申　奉真読大乗一経一千部供養」の銘がある石塔が建られている。

（分布図　35頁・図版307頁）

（101）桑 原 遺 跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良・平安　　**現状**　畑
所在地　石那田町1311−1ほか　　**遺跡番号**　市101 / 県 —

県道・小来川・文挟・石那田線にそった田川右岸，半蔵山地北向き緩斜面に立地する。

遺跡の表土上には，縄文時前期及び奈良〜平安時代の土師器の破片が散見できる。

（分布図　46頁・図版308頁）

（102）天王寺遺跡

種別　集落跡・寺院跡　　**時期**　縄文・古墳・江戸　　**現状**　畑
所在地　新里町1505の2　　**遺跡番号**｛市102 県 ―

通称新里街道と呼ばれている道路の北側に位置しており，東・北・西三方を山に囲まれている。

遺跡西側を林道が通り，北方山腹を蛇行して徳次郎上地区に通じる。寺院は，江戸時代の初めごろ大阪市天王寺より分院したものと伝えられ，小石ほどの石垣が南西部に残存し更に寺院跡中央部に4個の礎石が見られる。土地の人達は鐘楼堂の礎石であると言っているが，位置から考察して本堂の心礎ではなかろうかと思われる。南側に僧侶のものと思われる墓石数基あり寛政・明和・文化などの記年銘がある。

また附近一帯に縄文，土師，須恵器片の散布を見ることができる。

（分布図　46頁・図版308頁）

（103）柿の上遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良・平安　　**現状**　畑　　**所在地**　新里町507ほか
遺跡番号｛市103 県 ―

栗谷沢ダムの手前，新里街道に沿った南面するなだらかな傾斜地に立地している。

遺跡地は現在畑地になっており南方丘陵は，新里カントリーで遺跡との間には湿田が見られ水田と遺跡地との比高差は6～7mである。

なお，表土上に土師，須恵器の破片及び石鏃等の分布が見られる。

（分布図　48頁・図版308頁）

（104）畑中遺跡

種別　集落跡・高塚　　**時期**　縄文・古墳・江戸　　**現状**　山林・畑
所在地　新里町691－1ほか　　**遺跡番号**｛市104 県 ―

国道氏家・鹿沼293号線沿いの畑中地区の北部丘陵端に立地している。

供養塚と思われる高塚が35基群集しており，塚の規模は平均径3m高さ0.5mである。

また高塚群の西側の畑には土師，須恵器片のほか縄文の土器もわずかながら散見できる。

（分布図　48頁・図版308頁）

（105）雨乞山遺跡

種別　城館跡　　**時期**　鎌倉　　**現状**　山林　　**所在地**　新里町963ほか
遺跡番号｛市105 県 ―

新里丘陵の南端にそびえる標高約333mの雨乞山頂上部は，中世の城跡（見張所跡）と考えられる遺跡がある。

なお，東西の尾根ぞいの道にはそれぞれ数か所にわたって，石積と堀切の痕跡と思われるものが認められる。

（分布図　48頁・図版308頁）

（106）坂下遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　畑　　**所在地**　新里町284ほか
遺跡番号｛市106 県 ―

二ケ山遺跡（市遺跡番号107）西側の低い畑地に位置し，東遺跡は二ケ山遺跡の一角と見るべきかもしれないが，立地状況等から別遺跡とする。

畑地の表土には，縄文土器片及び石器類が散布する。

（分布図　48頁・図版308頁）

（107）二ケ山遺跡

種別　集落跡　**時期**　縄文・奈良・平安　**現状**　畑　**所在地**　新里町182ほか
遺跡番号｛市107 県 －

遺跡は，国道293号線西側にそって南北にのびるゆるやかな南面の台地上に立地する。両側は水田で水田との比高差は約10mほどである。

遺跡地には，縄文・土師・須恵器片及び石鏃が散見する。

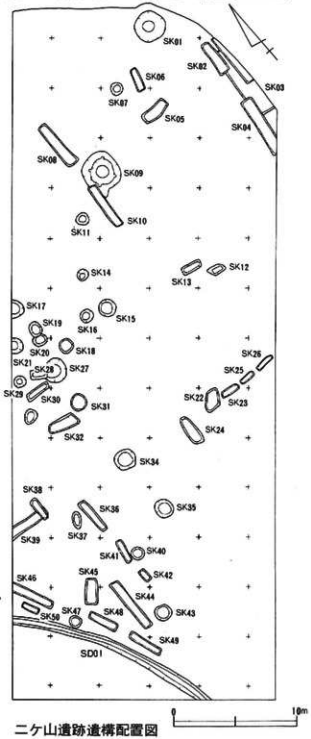
－ 参考資料 － 栃木県埋蔵文化財保護行政年報 （昭和57年 栃木県教育委員会）

二ケ山遺跡は宇都宮市の北西部に位置し，姿川東岸の丘陵一面に土器の縄文時代中期～後期にかけての大集落と考えられている。

一般国道293号線の改良工事路線は南側の一部平坦面を除き丘陵の裾部分を通過するため記録保存調査は最小限にとどめられた。

検出された遺構について整理途中であり，断片的な記述となるが，調査時点で気付いた点を補足として記述しておきたい。

縄文時代中期末～後期の土壙，形状は円形もしくは楕円形を呈するもので，SK11，14，16，17，18，19，20，21，27，29，31，33，34，35，37，40，43，47があげられる。各土壙の確認面からの深さは，ほとんどが40～50cmであり，SK17，21，37がやや深く70～80cmを測る。



二ケ山遺跡遺構配置図

上記した総ての土壙からは少量であるが土器片が出土しており，特にSK18，31から浅鉢の半完形品1点，SK35，43の底面付近からは拳大の礫が大量に出土している。

歴史時代の土壙，方形のプランを呈しやや小形の土壙である。SK05の覆土中より9世紀後半から10世紀前半頃に比定される坏形土器（内面黒色処理，外面に「作」の墨書）が出土している。SK06，12，13，28，22，23，24，25，26，28，30が同類の土壙と思われる。

近世の土壙，方形の平面プランを呈し長径が極端に長い土壙である。SK46，48，49は階段状遺構が付随する。出土遺物は近世の陶器片が若干検出され，時期・遺構の性格は不明であるが，覆土及び構築状況を観察した結果かなり新しい遺構と考えられる。

他の遺構として井戸跡（SK01，09）・溝状遺構（SD01）がある。双方の遺構から検出された遺物はなく時期は不明である。SK09には4本の柱跡が確認され上屋が構築されていたことを示すものである。

簡単に検出された遺構について記述したが今後の整理作業の中で明確にしていきたい。

（分布図　48頁・図版308頁）

（108）茗荷沢遺跡

種別　集落跡　**時期**　縄文・古墳　**現状**　畑　**所在地**　新里町906－1ほか
遺跡番号｛市108 県 －

雨乞山麓に沿った谷状の茗荷沢の中央部に位置する。

本遺跡には，石鏃・磨製石斧・石錐・土器片（縄文，土師，須恵）石槍破片等の遺物の散布が見られる。

（分布図　48頁・図版308頁）

（109）岡崎遺跡

種別　集落跡　　**時期**　古墳～平安　　**現状**　畑　　**所在地**　新里町108ほか
遺跡番号｛市109／県－

山王日枝神社南方に岡崎山といわれる高さ約15ｍの独立した丘陵があり，遺跡は，その丘陵南側山麓に接して位置する。

遺跡地は，畑で南東側の水田との比高差は0.5ｍであり，土師・須恵器片が散見できる。

（分布図　47頁・図版308頁）

（110）安五郎内遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・古墳　　**現状**　水田・畑
所在地　新里町848ほか　　**遺跡番号**｛市110／県－

茗荷沢地内の東西に延びる狭い台地の東部（字安五郎）に位置する。

本遺跡の表土上には，縄文・土師・須恵器片等の遺物を散見することができる。

（分布図　48頁・図版308頁）

（111）藤本館跡

種別　城館跡　　**時期**　室町　　**現状**　宅地　　**所在地**　新里町511－1ほか
遺跡番号｛市111／県－

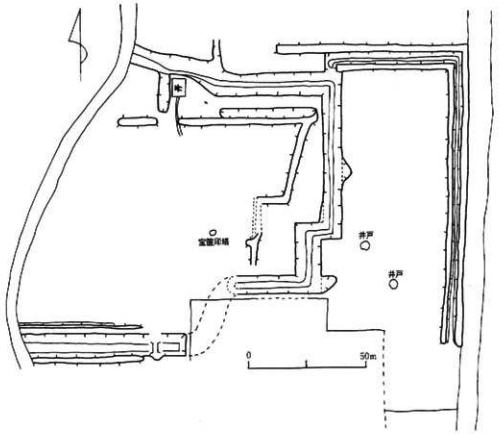
西部に新里丘陵の山波を望む，ほぼ平坦な水田・畑に立地する。

本跡の土塁及び堀は，東南角の一部が破壊されているほかはほぼ原形をとどめている。なお，西側は川を利用して堀がわりにしていたものと思われる。

本跡の築造年代については，定かではないが室町時代と考えられる。

－　参考資料　－　栃木県の中世城館跡　（昭和57年　栃木県教育委員会）

字都宮中心市街地の西方，大谷地域から北へ延びる独立丘陵の北側，田原段丘上に位置する。西側を姿川の支流の川がめぐり，北（73ｍ）・東（90ｍ）・南（110ｍ）に堀を構築して川水を引き入れるようになっていたと考えられる。堀はそれぞれ，幅8～10ｍ，深さ5ｍほどで，東南部に折れをつけている。堀の内側に土塁が築かれている。郭内は「匠内」の屋号を持つ高橋省吾氏の屋敷になっており，また堀の東側は山林を囲んでカギの手に堀と両側の土塁をめぐらし，外郭を形成している。南側は，滝明寺の廃寺跡があり，高橋家の墓地となっている。



高橋城略測図

（分布図　39頁・図版308頁）

（112）大堀館跡１号

種別　城館跡　　時期　戦国　　現状　宅地　　所在地　新里町８３８ほか
遺跡番号｛市 １１２／県 －｝

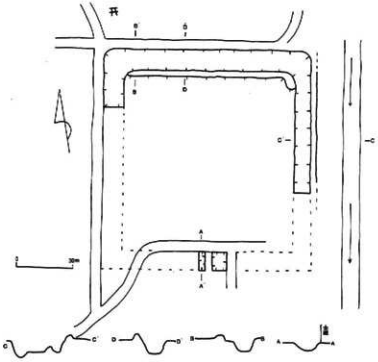
北西に新里丘陵の山波を望むほぼ平坦な水田，畑地帯に位置している。

本跡は，一辺が１００ｍ余のほぼ方形を呈し，すぐ東側を南流する大堀川と接しており，東側及び南側はかなり破壊されているが，ほぼ原形はうかがえる。特に北側濠の残りは，良く立派なものである。濠のすぐ内側は低いが，土塁も築かれている。

なお，本跡が築造されたのは安土桃山時代と考えられる。

－　参考資料　－　栃木県の中世城館跡　（昭和５７年　栃木県教育委員会）

大堀川の西岸に接して立地し，一町四方の規模を持つ方形館跡である。堀は北側に完全に残っていて（Ｂ点上幅１１.３ｍ，底幅４.５ｍ，深さ２.３ｍ），その内側に土塁跡の高まりが見られる。南の道路前にも堀跡があり，大手の土橋と見られる高まりがある。館は「内出（うちで）」の屋号を持つ半田好吉氏の屋敷となっており，半田家は宇都宮氏の家臣と伝承されている。



大堀城略測図

（分布図　49頁・図版308頁）

（113）大堀高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　墓地・山林　　所在地　新里町１４３５ほか
遺跡番号｛市 １１３／県 ４５｝

新里町大堀地区北部の平坦な雑木林とこれに接する共同墓地内に位置する。

高塚１０数基が，かっては点在したが山林が開田のため削平され，現在は，墓地内に４基と墓地南側水田をへだてた雑木林中の１基を残すだけである。

開田削平に際し高塚の１基より五輪塔の頭部が出土している。

なお，この遺跡は県登録大堀古墳群を改称したものである。

（分布図　49頁・図版308頁）

（114）大堀館跡２号

種別　城館跡　　時期　戦国　　現状　宅地　　所在地　新里町１３９２ほか
遺跡番号｛市 １１４／県 －｝

大堀館跡１号（市遺跡番号１１２）の南東に位置している。

本跡の西側は，大堀川をもって濠にあてているが，東側は水田となっている。北・南の濠はほぼ現形をとどめていると思われる。

なお，本跡も大堀館跡１号と同期の安土桃山時代に築造されたと考えられる。

（分布図　66頁・図版308頁）

（115）御　経　塚

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　新里町４６２ほか
遺跡番号｛市 １１５／県 １８｝

国道２９３号線から仁良塚に通じる市道に接した平坦な雑木林中に位置している。

かっては，２５基ほどの塚が点在していたが現在は，５基が確認できるだけである。

なお，この遺跡は県登録御経塚遺跡を改称したものである。

（分布図　66頁・図版308頁）

（116）白岡遺跡

種別　集落跡・高塚　　時期　縄文・江戸　　現状　畑・山林
所在地　新里町328ほか　　遺跡番号｛市 116 県 —｝

新里山麓の山際の西田中地区の最南端部で，桜田地区との境界地点に位置する。

遺跡の現状は畑と山林で，散見できる土器片から考えると縄文中期の遺跡と思われる。

なお，この散布地の東側には琴平神社がありその周辺に供養塚と考えられる塚が１０数基みられる。

（分布図　66頁・図版308頁）

（117）長林寺北遺跡

種別　集落跡・城館跡　　時期　縄文・古墳・戦国　　現状　畑
所在地　岩原町272ほか　　遺跡番号｛市 117 県 80｝

西に国道293号線の東側に広がる通称駒場ヶ原と呼ばれる台地上に立地する。

かっては畑であったが，ほとんど開田され現況は水田となってわずかに畑が残る状態であり，遺物の散布状態は長林寺を中心に散見できるが，寺院裏が特に濃厚である。主な遺物は，縄文・土師器の破片及び紡錘車・石棒破片・打製・磨製・石斧たたき石等の石器類である。

この台地上には，岩原城外堀といわれる幅４～５ｍの空堀と土塁が200ｍほど続いている。

なお，この遺跡は県登録岩原寺院裏遺跡を改称したものである。

（分布図　68頁・図版309頁）

（118）岩原神社西遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田　　所在地　岩原町242ほか
遺跡番号｛市 118 県 81｝

本遺跡は，広大な縄文時代の遺跡である。長林寺北遺跡（市遺跡番号117）の一端を見ることもできる。

岩原神社は，長林寺の東南300ｍほどの台地東側やや低地に西向きに鎮座しており，神社前面の台地が本遺跡で，すべて水田となっている。

（分布図　50頁・図版309頁）

（119）西沢高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　竹林　　所在地　野沢町287ほか
遺跡番号｛市 119 県 —｝

国道119号線沿いの野沢町の真言宗光明寺北側に広がる竹林南端に位置する。

塚は５ｍ～６ｍ間隔で一直線に築かれており，直径約３ｍ高0.5ｍほどで11基が確認できる。

なお，土地の人々はこの塚を念仏塚を呼んでいる。

（分布図　50頁・図版309頁）

（120）御殿場遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　水田　　所在地　野沢町295−2ほか
遺跡番号｛市 120 県 35｝

真言宗光明寺西南角に接して位置している。

現況は，水田となっているが，縄文時代の遺跡であることが遺物によって確認されている。

（分布図　51頁・図版309頁）

（121）仁良塚遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　水田・畑
所在地　宝木本町1769ほか　　遺跡番号｛市 121 県 52

東北西三方を台地に囲まれたコの字状の低地に位置している。
遺跡の現状は，田畑であり表土上に縄文・土師器の破片が散見できる。

（分布図　51頁・図版309頁）

（122）源道寺遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳～平安　　現状　水田・畑
所在地　駒生町3189−1ほか　　遺跡番号｛市 122 県 51

上駒生の通称源道寺と呼ばれている地域の市道西側斜面に立地している。
この斜面は，なだらかで水田地帯に続き斜面上端部と水田面との比高差は約10mである。表土上の遺物としては，縄文・土師・須恵器の破片が見られる。
なお，この遺跡は県登録上駒生遺跡を改称したものである。

（分布図　69頁・図版309頁）

（123）山崎古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　宝木町２丁目978−1ほか
遺跡番号｛市 123 県 44

高速道路西側の水神宮敷地に位置する。
墳丘の一部が削られているが円墳と考えられる。
なお，後世この古墳は墓地とされたらしく，破損した墓石が散乱している。また，北方約２０ｍの地点にもわずかに墳丘の高まりが認められる古墳が１基見られる。
なお，この遺跡は県登録山崎古墳を改称したものである。

（分布図　70頁・図版309頁）

（124）妙吉塚

種別　高塚　　時期　南北朝　　現状　神社　　所在地　上戸祭町333ほか
遺跡番号｛市 124 県 一

本跡は，宅地化が進み民家が建ち並んでいる国道119号線の西側にある高尾神社の境内にある。
塚は，径１２ｍ高さ３ｍの円形でその上には，「至徳四丁卯八月七日聖金剛仏子妙言貞禅」（西面）「大工賈阿」（北面）「大工国行」（南面）の碑文を有する三重の石塔が建てられている。
なお，本跡のすぐ東側には，周辺の人々に妙吉安産子育「高地蔵」と呼ばれる地蔵尊がある。

（分布図　72頁・図版309頁）

（125）宝木古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　一の沢町284ほか
遺跡番号｛市 125 県 一

市街地に位置しているが，現状は畑で地膨状に老梅が残り，高さ４ｍ径２０ｍの規模であった円墳の旧態をしのばせている。
昭和２２年ごろ，農地造成のため削平されてしまったが，明治時代より武具・馬具・渡来銭が出土したといわれている。

（分布図　72頁・図版309頁）

（126）和 尚 塚

種別　高塚　　時期　室町　　現状　宅地　　所在地　戸祭町２丁目４－16
遺跡番号｛市 126／県 —｝

遠勧寺境内にあり，高2.5ｍ１辺３０ｍ四方の方形高塚である。

昭和８年ごろ，納骨堂建設のため高塚頂部を整地した際，石棺・経石・供養碑が出土し一部は当寺院に保存されている。供養碑の碑文からこの塚は，室町時代末期の大和５年１月５日入裡　良訓和尚の埋葬墓であると考えられている。

（分布図　56頁・図版309頁）

（127）戸用地遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　関掘町291−1ほか
遺跡番号｛市 127／県 —｝

豊郷中央小学校の正門前の道路を隔てた西側に位置する。

山田川右岸の平坦地であり，畑に土師器の破片を散見することができる。

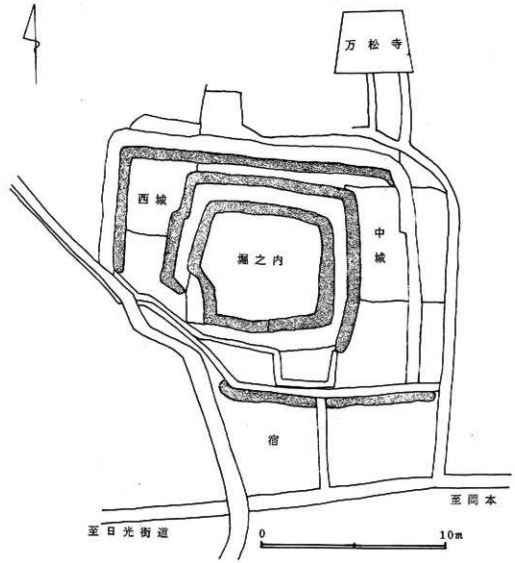
（分布図　55頁・図版309頁）

（128）北 ノ 館 跡

種別　城館跡　　時期　鎌倉　　現状　宅地　　所在地　瓦谷町46ほか
遺跡番号｛市 128／県 —｝

田川左岸，北山霊園の丘陵の南下に位置している。

現在，高さ約２ｍの土塁と堀の一部が残っている。また，城郭内と推定される地区内には堀之内・中城・西城・宿等の家号が残っている。



北ノ館想定図（小堀時蔵原図）

（分布図　61頁・図版309頁）

（129）稲荷後遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　現状 畑・栗林　所在地　古賀志町 2204 ほか
遺跡番号 { 市 129 / 県 —

今市市と古賀志町の境界を流れる白石川の南側で，県道平ヶ崎文挟字都宮線の西側に位置し，東側は，古賀志山がそびえている。

遺跡は，作場道の両側に位置しており，現状は，畑とくり畑であり，表土上に縄文土器片と石器が散見できる。

（分布図　62頁・図版309頁）

（130）入唐沢遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　古賀志町 630 ほか
遺跡番号 { 市 130 / 県 —

古賀志山の南側山麓の台地上に立地し，城山西小学校の西側道路を約 200 m ほど北上した地点である。

現況は，畑となっており，縄文土器の破片が散布している。

（分布図　64頁・図版309頁）

（131）寺東遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　古賀志町 184 ほか
遺跡番号 { 市 131 / 県 —

古賀志山の南側山麓から延びる台地の西側斜面に立地する。

現況は，畑と果樹園であり，表土上に縄文土器片が散見できる。

（分布図　64頁・図版309頁）

（132）前原遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　古賀志町 779 ほか
遺跡番号 { 市 132 / 県 —

古賀志山の西南麓から連なる台地上に立地している。

遺跡地は畑で，表土上に縄文土器の破片が散在している。

（分布図　87頁・図版309頁）

（133）日吉遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　荒地・畑　　所在地　福岡町 1181—4 ほか
遺跡番号 { 市 133 / 県 —

赤川の西岸を南北に延びる低台地の東側の緩やかな斜面に立地している。

現況は，果樹園と土取りをしてローム層が現われている荒れ地であり，土取りの際にできた断面に袋状土拡が２～３基現われており，表土上には縄文土器片と石器が散在している。

（分布図　67頁・図版310頁）

（134）多気城跡

種別　城館跡　時期　鎌倉　　現状　山林　　所在地　田下町 721 ほか
遺跡番号 { 市 134 / 県 —

多気城は，全山急坂険阻な自然の地形を利用して築城された本市を代表する山城である。本丸といわれる山頂部の平坦地と南側中腹に土塁と堀跡更に山麓に段差４m～６m 雛段状の遺構が見られる。また，小字名に城跡，燈籠先御殿などの地名が往時をしのばせる。本城の由緒は定かでないが康平年間に宗円が築城幕下の将を配置したという。また，別に天正１２年北条氏直が攻め寄せた時築城，更に天正１４年北条氏政が攻めて来た時ともいわれているが，いずれも確証はない。

－ 参考資料 －

1. 栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

宇都宮市中心市街地から北東7.5㎞，標高337ｍ，比高197ｍの多気山の山頂部に構築された放射状の連郭式山城である。東麓の多気不動尊から西へ登りつめた山頂，三角点南東部を削平して，北側375ｍ，西側25ｍの土塁を築き（南・東は崖面利用），本丸としている。そこから北，南東，南，南西の四つの方向の尾根線に沿って，それぞれ郭が連続構築されている。

東南尾根は，本丸から500ｍ下った地点から始まり，北・西側をカギの手に土塁で囲んだ四つの方形郭が275ｍにわたって階段状に並んでいる。南尾根は，本丸南直下に28ｍ×18ｍの方形小郭（二の丸か）があり，そこから南方向の斜面の比較的緩やかな傾斜部の各所に半月状の十数か所の帯郭を施している。さらに，本丸から南225ｍの地点から始まる幅10ｍ，南北長さ80ｍの巨大な竪溝の上部は，カギの手に西に曲っている。北尾根は，三角点付近に土塁と堀切があり，さらに北に土塁を築いた郭が続いている。南西の尾根にも遺構があることは確認されているが，調査は完了していない。また，南麓には長大な外構の堀がある。

総じて，現在までに山頂部を中心に南北550ｍの範囲にわたって遺構が確認され，今後の調査によっては，さらにこの範囲は拡大される可能性がある。全体に遺構はよく保存され，規模の大きな連郭式山城の偉容を示している。

この城は，康平6年（1063）　宇都宮宗円が築いたというが，確証はない。文明4年（1472）に多気兵庫守が居住したという記録（『宇都宮家臣記』）があるが，必ずしも確実なものではない。「多気山城構築出陣人名」には，「天正4年（1576）12月2日に着手し，同月25日に落成した」と記されており，恐らくこれが本格的築城のはじまりであろう。宇都宮氏は，平地で防備に困難な宇都宮城に替る第二の本城としてこの城を築き，一族家臣を集住させたものと考えられる。天正12年の北条氏の下野進出の際は，多気，多功，宇都宮の三城に兵力を結集し，14年の再侵入の際も，多気城が目標とされ，東麓の大谷口で合戦が行われている。

慶長2年（1597）宇都宮氏の改易とともに廃城となった。

多気城実測図

2. 宇都宮市史第2巻（昭和56年　宇都宮市）

1. 河内郡田下村古城　　宇都宮弥三郎城跡

山　城

1. 本丸東西六拾間，南北三拾間，
1. 東なたら山，馬よせなし，切きしの所もあり，
1. 西北同断，
1. 大手口南むき也，
1. 本丸より平地迄八町，つゝらをり也口侍屋しき方迄ニ少宛阿リ，

岸　　勘兵衛

慶安四年卯辛三月廿九日
(1371)
景　野　惣兵衛

右之御帳面植田勘助様御取次ニ而筑後様へ
上申候

（分布図　68頁・図版310頁）

（135）佐宗前遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　山林・畑　　所在地　田下町100ほか
遺跡番号｛市 135 県 —

多気山の北東麓にある台地上に立地し，すぐ北東側を姿川が南流している。
現況は，畑と山林であり，土師器と須恵器の破片が散見できる。

（分布図　88頁・図版310頁）

（136）大谷寺洞穴遺跡（国指定特別史跡）

種別　洞穴　　時期　縄文・弥生　　現状　大谷寺境内
所在地　大谷町1198ほか　　遺跡番号｛市 136 県 102

姿川左岸に立地し，標高160mで河床からの比高約4mである。

洞穴は，西南に開口し，その規模は，開口30m奥行13m高さ12mである。昭和40年の発掘の結果，縄文時代の土器（草創期），石器，獣骨，貝，人骨などが発見されている。なお，本遺跡の北東に盗人ヶ入洞穴がある。

なお，この遺跡は県登録大谷寺遺跡を改称したものである。

－　参考資料　－　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

大谷町の天開山大谷寺境内にあるこの洞穴は，間口30，奥行13，高さ12各mの規模で，形状は半球形を呈し，凝灰岩の岩壁には厚肉彫りの本尊千手観音をはじめ釈迦三尊，薬師三尊，阿弥陀三尊の諸像が配され，これらは特別史跡・重要文化財に指定されている。

この洞穴は昭和40年に発掘調査された。洞穴は姿川左岸に立地し，標高160m　河床からの比高約4mを示し，南西に開口している。まがいぶつが彫像されている洞穴が，縄文時代の遺跡であることは古くから知られ，土器・石器・貝殻・獣骨片が出土していた（高橋敬昭「大谷観音の石仏」昭和31年）。

発掘調査によって，縄文時代草創期から晩期，弥生時代中期，歴史時代の遺物が多数発見された。

土　　層	出土遺物(土器)の型式
盛　土（ローム・凝灰岩）	
第1層（黒色腐植土）	歴史時代遺物・弥生土器・縄文土器（早期～晩期）
第1灰層	早　期（茅山式）
第2層（黒褐色腐植土）	早　期（田戸下層式・押型文土器
第2灰層	
第3層（暗褐色腐植土）	草創期（井草式）
第4層（褐色腐植土）	〃　（大谷寺Ⅱ式） 〃　（大谷寺Ⅰ式）
第5層（黄褐色礫土）	草創期（大谷寺Ⅰ式）
第6層（灰黄色砂礫）	無遺物

遺物産出層位の模式図

遺物の産出層位は表に示したとおりである。（中略）

弥生土器は，洞穴内の盛土（ローム，凝灰岩を含む）下の第一層（黒色腐植土）から歴史時代の遺物とともに出土したものである。出土した弥生土器は弥生時代中期のものであり，完形土器一個のほかはすべて破片である。

（分布図　68頁・図版310頁）

（137）瓦作古墳群

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　山林　　**所在地**　大谷町843ほか
遺跡番号｛市 137／県 —

多気山の東麓からなだらかにのびる標高約150mの舌状台地東端に立地する。確認できた古墳は，4基すべて円墳である。規模は，10m～20mで高さが15m～3mほどである。

なお，1基には横穴式石室の一部と思われる凝灰岩が南側に露呈している。

（分布図　88頁・図版310頁）

（138）坂本高塚群

種別　高塚　　**時期**　江戸　　**現状**　山林　　**所在地**　大谷町1119ほか
遺跡番号｛市 138／県 —

姿川左岸の丘陵上に立地し，大谷寺洞穴遺跡（市遺跡番号136）からは南東約350mの地点である。

塚は，丘陵尾根上を縦走するように一列に並んでおり，確認できた数は12基である。大きいもので径15m，小さいものでわずか25mほどである。

（分布図　88頁・図版310頁）

（139）羽黒古墳

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　山林　　**所在地**　大谷町139ほか
遺跡番号｛市 139／県 —

坂本高塚群（市遺跡番号138）の南方約50mほどの地点であり，台地の緩やかな南側斜面上に立地している。

径約19m，高さ約4mの円墳である。

（分布図　69頁・図版310頁）

（140）外和田高塚群

種別　高塚　　**時期**　江戸　　**現状**　山林　　**所在地**　駒生町2616ほか
遺跡番号｛市 140／県 —

駒生地内の山林の中にあり，南側は石材の採石場に接している。

塚は3基あり，1基は盗掘穴が大きく開いておりその土層と墳丘の状態からみて古墳ではないと考えられる。

（分布図　88頁・図版310頁）

（141）向山根遺跡

種別　集落跡　**時期**　古墳～平安　　**現状**　畑　　**所在地**　田野町271ほか
遺跡番号｛市 141／県 —

多気山の南麓から延びる台地上の南端に立地し，城山中学校の南西約300mの地点に位置する。

現況は，畑で東側に広がる水田面からの高さは，約10mほどである。表土上には，土師器と須恵器の破片が散布している。

（分布図　88頁・図版310頁）

（142）境木遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・古墳　　**現状**　畑　　**所在地**　大谷町2012-2ほか
遺跡番号｛市 142／県 —

多気山の南麓から延びる緩やかな台地上に立地し，すぐ北には向山根遺跡（市遺跡番号141）また南東には，宗円塚古墳群（市遺跡番号146）がある。

現況は，畑であり土師器，須恵器，縄文土器の破片が散布している。

（分布図　88頁・図版310頁）

（143）漆久保遺跡

種別　集落跡　**時期**　縄文　**現状**　畑　**所在地**　大谷町1428−1ほか
遺跡番号　市 143　県 83

姿川の西岸台地の東側斜面で，城山中学校の東南約300ｍに位置している。

水田面からは，約10ｍの比高があり現況は，畑となっている。表土上に縄文土器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録大谷火の見西Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図　88頁・図版311頁）

（144）梅林遺跡

種別　集落跡　**時期**　縄文・古墳　**現状**　畑　**所在地**　大谷町1825−2ほか
遺跡番号　市 144　県 —

城山中学校の東側台地上に立地し，すぐ北方には，漆久保遺跡（市遺跡番号143）がある。

西側に広がる水田面からは，約5〜6ｍの比高があり現況は，畑と宅地で表土上には，土師器と縄文土器の破片が散布している。

なお，遺跡は城山中学校の校庭まで延びていたらしく，同校に遺物が保管されている。

（分布図　88頁・図版311頁）

（145）上の原遺跡

種別　集落跡　**時期**　先土器・古墳〜平安　**現状**　畑・宅地
所在地　大谷町1496−1ほか　**遺跡番号**　市 145　県 1

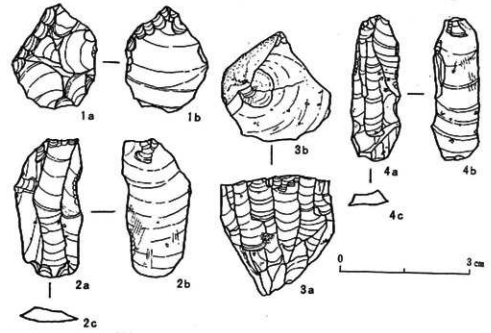
戸室山の北東山麓上に位置し，すぐ東側には姿川が南流している。

遺跡は，戸室公民館の西側から南側にかけての一帯であり現況は，畑と宅地である。表土上には，縄文期の土石器や土師器，須恵器の破片を散見することができる。

− 参考資料 −　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

下荒針町戸室にある本遺跡は，標高220ｍを呈する戸室山の東側台地に位置している。この台地の東側裾部には姿川が南流し，沖積地面からの比高は約30ｍを示す。遺跡一帯は畑地になっており，縄文時代前期から中期にかけての遺物が広範囲にわたって散布している。

旧石器時代の石器は，台地の西端部から発見されているが出土量は少ない。石器はいずれも黒曜石を素材とするものである。中村紀男によれば本遺跡の石器は次のようである。1は幅広い剥片の上部に直角に近い剥離が表裏面より交互に施され，石錐を思わせる。長さ2.4，幅1.8，厚さ0.7各センチである。2は側縁に僅かな加工を施した縦長のブレイドである。これは調整剥離によるもので，打面に細かい調整痕がみられる。長さ3.1，幅1.4，厚さ0.3各センチである。3は石核であり，半円錐形を呈する細石核の形態を示している。四分の一ほど自然面を残し，やや平らな打面には調整痕がみられ，縦形の小剥片を作り出したようすがうかがえる。長さ2.8，幅2.4各センチである。4は縦長のブレイドで，長さ3.2，幅1.0各センチである。これは調整剥離によるもので，打面に細かいリタッチが施されている。



上の原遺跡出土の石器（中村紀男実測）

（分布図　88頁・図版311頁）

（146）宗円塚古墳群

種別　古墳・供養塚　　時期　古墳・江戸　　現状　山林
所在地　下荒針町1829ほか　　遺跡番号 { 市 146 / 県 ― }

戸室山の西麓台地上にあり，上の原古墳群（市遺跡番号148）の所在する台地の続きである。西側に広がる水田面からの比高は，約20mである。

宗円塚は，本古墳群中の南端に位置する円墳である。規模は，径約18m高さ3mで北側がかなり削られている。宗円塚の北方に径5～10m ほどの円墳が，3基築かれている。

なお，その地点からさらに北にのぼると径3～4m高さ1.5m ほどの高塚が，約20基ほど南北にならんでおり供養塚と考えられる。

（分布図　90頁・図版311頁）

（147）羽下薬師堂裏古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　下荒針町2650ほか
遺跡番号 { 市 147 / 県 ― }

多気山南麓から延びる台地の東南端に立地し，すぐ東側を赤川の支流が南流する。

市指定の文化財である薬師如来を安置する羽下薬師堂の裏に築かれている。

円墳で規模は径約9m，高さ1.5m 墳頂部が削られて川原石が散乱しており横穴式石室の石と考えられる。

（分布図　90頁・図版311頁）

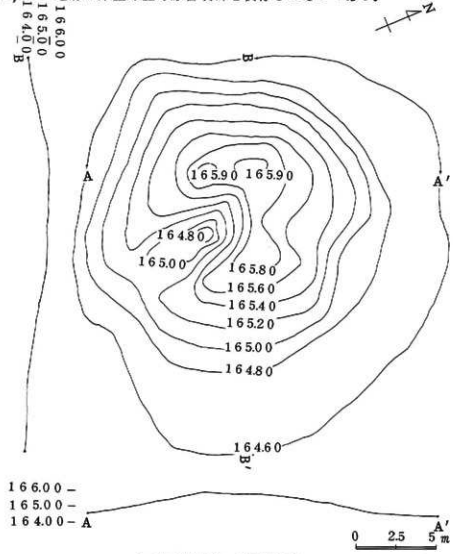
（148）上の原古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林・畑　　所在地　大谷町1730ほか
遺跡番号 { 市 148 / 県 119 }

戸室山の南側に延びる台地上で，東側を姿川が南流する。

南及び東側に広がる水田面からの比高は，15～20mである。確認できた古墳は14基ですべて円墳である。径は，小さいもので5m大きいもので20m ほどである。この古墳群の一部は供養塚の可能性もある。

なお，この遺跡は県登録上野原古墳群を改称したものである。



上の原古墳群1号墳実測図

（分布図　90頁・図版311頁）

（149）中　城　跡

種別　城館跡　　時期　鎌倉　　現状　畑・水田　　所在地　駒生町2112ほか
遺跡番号｛市 149
県 —

能満寺の西側で姿川と鐙川の間に位置し，現況は，田と畑となっている。

一部に，高さ1.5ｍ幅2ｍの土塁が段状に約30ｍほど残っている。堀跡もこの土塁の東側にまだわずかにこん跡をとどめている。当城跡は，多気城の支城で南の北原城と北の多気城の中間に位置していたのでこの名がついたといわれている。また，堀の内，中城などの屋号が残っておりほぼ方形の館であったと考えられる。

（分布図　71頁・図版311頁）

（150）御城跡高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　駒生町844—1ほか
遺跡番号｛市 150
県 —

大谷街道の南側，駒生地内の山林の中に位置している。

塚は，10数基に及びいずれも供養塚と考えられる。塚の大きさは，径2.5～5ｍ高さ0.5～1.2ｍほどである。

（分布図　71頁・図版311頁）

（151）中丸北原遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑　　所在地　駒生町921ほか
遺跡番号｛市 151
県 —

駒生地内の水田面からの比高差5～6ｍの低台地，南西斜面上に立地する。

現況は，畑と水田であり遺跡東から南へ小河川が流れている。表土上には，縄文土器片が，かなり濃厚に散布している。

なお，本遺跡は，昭和56年から栃木県文化振興事業団が「後田遺跡」として発掘調査を実施している。

－　参考資料　－栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和58年栃木県教育委員会）

後田遺跡は，宇都宮市の中心部からではやや西方に位置し，姿川東岸の台地上にある。標高は約134ｍを測る。

整理作業にはまったく手が付けられておらず，断片的な記述となるが調査時点で気付いた点を明記したい。

調査地区は，台地の東部を南北方向に縦断するようにある（調査範囲，南北290ｍ×東西25ｍ）。遺構確認面は，調査区南側で1.5ｍ，中央から北側にかけては1.0～1.2ｍを測る。

○　検出遺構概略

縄文時代竪穴住居跡は，都合9軒検出され，全て円形あるいは楕円形を呈するものである。規模は，長径5ｍ前後を測る。時期は大木8ｂ～掘之内期に比定されるもので，後期の住居跡には方形の石囲炉が定着するようである。

土壙は144基検出された。住居跡の時期より若干遡るものが多く，阿玉台1ｂ期から構築され，大木8ａ及び8ｂ期に最盛段階に入るようである。形状の特徴としては袋状を呈するが，阿玉台期は，オーバーハングが激しく開口部から底面までが浅い。大木8ｂ期には，いわゆるフラスコ状を呈し深さを増すようである。

中・近世の方形竪穴状遺構は，1軒検出されている。南北1.2ｍ×東西2.5ｍの小規模なもので，東西の両壁中央部には柱穴と思われるピットがある。覆土中からは少量であるが内耳土器が検出されている。

中・近世の土壙は，都合154基検出されており，形状は円形を呈するものと方形とがある。円形土壙は，長径1.2ｍ前後，方形土壙は大形のもので0.7ｍ×2.3ｍ，小形のものでは0.5ｍ×0.5ｍ前後を測る。双方とも，確認面からの深さは0.3～1.0ｍである。出土遺物には，土師質土器・内耳土器・古銭及びキセル等がある。

溝状遺構は4条検出された。1号・4号溝は幅2.3ｍ，深さ1.2ｍを測る大形のものであり，2号及び3号はそれより小規模である。出土遺物には，土師質土器・内耳土器及び陶器等がある。調査範囲が道路幅と限定されるため，溝の全容を把握することができなかった。

地下式壙は都合8基検出された。形状は全て円形の竪壙11に対し方形の地下室1のものであり，田中英氏が形態分類されたＡⅠ類－1に属するものと思われる。8基のうち特徴的なもの（142号・206号）を図示した。

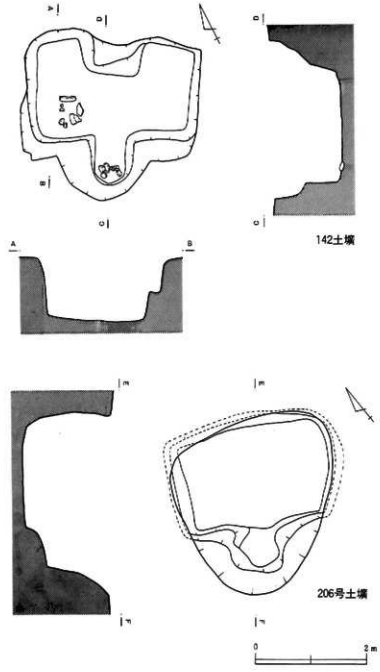
142号土壙，地下室が「凹」状を呈し，東西2.9ｍ，南北1.5ｍを測る。竪壙は階段状を呈し，底面には礫が数個敷かれる。また，竪壙底面は地下室底面と同一

レベルにある。

２０６号土壙，地下室が方形を呈し，東西3.1ｍ・南北2.1ｍを測る。１４２号と同様に，竪壙は階段状を呈すが，壁の立上がりは開口部に近づくに従いロート状に開く。地下室壁の立ち上がりは中位で底面より0.3ｍオーバーハングする。

１４２号土壙内からは，内耳土器１個体分が出土しているが，これは，地下式壙の天井部が崩壊した際に流れこんだ遺物と考えられ，時期を決定付けることはできない。

現在，県内では５遺跡において地下式壙が確認されている（辻の内・乙女不動原亀田・綱板大六天・北の山及び赤塚遺跡）。これらの地下式壙を検討した場合遺跡の中での機能面について結論を出すにはいたらないが，骨・板碑・五輪塔などが出土していることから墳墓としての意味合いが強いと思われる。半田竪三氏によれば「地下式壙は，それだけ単独で検出される例もあるが，多くの場合周辺に同時期の遺構が検出されている。」と指摘された。県内の遺跡もその例外でなく，溝・方形竪穴・土壙等の遺構に伴って検出されている。これらの事例を踏まえ，本遺跡の場合地名（中丸・御城田）及び，今後予定されている第３次調査との関連から検討していきたいと考えている。



後田遺跡１４２・２０６号土壙実測図

（分布図　90頁・図版311頁）

（152）荒針高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　飯田町777ほか
遺跡番号｛市 152　県 —

下荒針町と飯田町の境界に位置し，ほぼ南北に延びる低台地の南斜面上に立地する。

現況は，山林であり道路沿いに3基の高塚がほぼ東西に並んでいる。大きさは，径約4ｍ高さ1ｍ弱であり，塚と塚の間は約12ｍの間隔がある。

（分布図　90頁・図版311頁）

（153）サルボ山高塚群

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　下荒針町2848−2ほか
遺跡番号｛市 153　県 —

大久保から長坂にかけてほぼ南北に連なる台地上に立地する。

すぐ東側を，東北自動車道が南北に通過している。現況は，山林であり供養塚と考えられる2基の高塚が確認でき，両方とも径約4ｍ高さ1.5ｍほどで東西に位置している。

（分布図　90頁・図版311頁）

（154）大久保遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑・果樹園　　所在地　下荒針町2961ほか
遺跡番号｛市 154　県 —

姿川と赤川が合流する地点の西側台地上に立地し，台地南端には，長坂天王寺遺跡（市遺跡番号156）も所在する。

遺跡は，北斜面上に位置し，北東部に広がる水田面との比高は約10〜15ｍである。東北自動車道によって遺跡の一部が切られたがこの際の発掘調査によって縄文時代中期の土器が出土している。

（分布図　90頁・図版311頁）

（155）台耕上遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑・果樹園　　所在地　下荒針町3020ほか
遺跡番号｛市 155　県 41

姿川右岸の台地上に位置し，水田面からの比高は約15〜20ｍほどである。

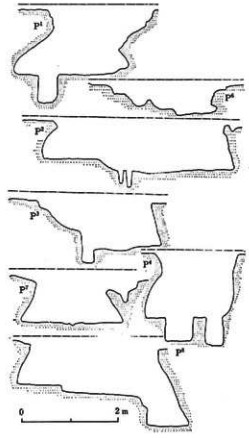
大久保遺跡（市遺跡番号154）の南に続くものであり，東北自動車道関係で発掘が行われた際縄文時代の住居跡1基と土壙9基が確認されると共に中期の土器が出土している。

— 参考資料　—　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

この遺跡は昭和44年から45年にかけて，東北縦貫自動車道建設工事に伴って中村紀男らが発掘した。中村紀男はその後47年に再発掘している。調査範囲は道路建設に伴うものであるため，遺跡の一部を発掘したにすぎない。

調査報文によると，住居跡1軒と土壙9基を確認している。土壙は7基を完掘し，他の2基は未調査である。土壙は袋状を呈するもの6基袋状を呈さないもの1基であった。検出された住居跡は長径3.97ｍ，短径2.84ｍの不整楕円形のプランで，東西に張り出し状のふくらみがある。床面は比較的堅く，ほぼ中央に掘り込み炉がある。壁高は30〜45㎝で，壁近くには6個の柱穴があり，その深さは床面から深いもので48㎝浅いもので26㎝である。周溝は認められない。

住居跡の床面や覆土中からの遺物はきわめて少なく，構築時期を明確にし得ないが，附近の袋状土壙内出土の土器や調査区域内の土器などから判断し，中期の加曽利ＥⅠ式期のものとみてよいだろう。



台耕上遺跡の袋状土壙断面図

（分布図 91頁・図版311頁）

（156）長坂天王寺遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 畑　所在地 下荒針町3918–7ほか
遺跡番号 { 市 156 / 県 31 }

姿川の左岸を南北に延びる低台地のほぼ南端に立地する。

現況は，畑であるが縄文土器片が散布する畑は，比較的急な斜面であり水田面からの比高は，低い所で約10m高い所で約17mである。

なお，この遺跡は県登録天王山遺跡を改称したものである。

（分布図 108頁・図版311頁）

（157）宝性寺跡

種別 寺院跡　時期 江戸　現状 畑　所在地 飯田町497–1ほか
遺跡番号 { 市 157 / 県 — }

飯田地内の台地の南端下に位置し，南側には水田面が広がる。

宝性寺は，約350年前に鹿沼市千渡へ移転のため廃寺となったものといわれる。

なお，台地南端にある神社の裏からは，耕作中に銅印と香炉が出土しており，寺と関係があるものと考えられる。

（分布図 108頁・図版312頁）

（158）高田遺跡

種別 集落跡　時期 縄文・古墳　現状 畑　所在地 飯田町177–1ほか
遺跡番号 { 市 158 / 県 47 }

飯田町を通過する東北自動車道の西側の低台地南端の緩やかな斜面上に立地する。

現況は，畑であり表土上に縄文土器片を中心に土師器片も少量ではあるが散見できる。

（分布図107頁・図版312頁）

（159）筒花高塚群

種別 高塚　時期 江戸　現状 山林　所在地 飯田町83–1ほか
遺跡番号 { 市 159 / 県 — }

鹿沼市との境で千渡山から南南東へ緩やかに延びる台地上の東側斜面に立地する。

雑木林の中にほぼ南北に3基の塚がならんでおり，一基の大きさは，約10mの円形で高さは1m前後である。また，この3基を中心とするようにして周囲に径2m高さ0.5mほどの小高塚が5～6基築かれている。

（分布図 91頁・図版312頁）

（160）鶴田中原遺跡

種別 集落跡　時期 古墳　現状 畑　所在地 鶴田町1124ほか
遺跡番号 { 市 160 / 県 62 }

羽黒山の東方に位置し，南向きの緩やかな斜面に立地する。

表土上の遺物散布範囲は比較的狭いが，甕胴部にハケ目が残る土師器片など量が多く古墳時代前期・中期を中心とする時期の遺跡と考えられる。

なお，この遺跡は県登録羽黒山東遺跡を改称したものである。

（分布図 91頁・図版312頁）

（161）羽黒下団地遺跡

種別 集落跡　時期 縄文　現状 宅地　所在地 鶴田町1742–3ほか
遺跡番号 { 市 161 / 県 61 }

羽黒山神社の南に位置している。

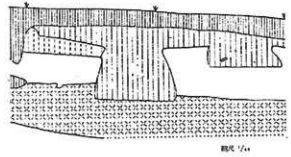
団地造成の際，約10個の縄文期の袋状土壙群が発見された。土壙の大きさは，口径0.8～1.5m底径1.5～2m，深さ0.5～1mほどで底面に小ピットを設けたものも

あった。現在は，ほとんどが宅地になってしまったが山林部分に遺跡が広がっている可能性が大きい。

－ 参考資料 － 宇都宮市史第１巻（昭和５４年 宇都宮市）

本遺跡は昭和４３年ごろ宅地造成によって山裾が削られ発見されたもので，標高１００ｍ遺跡をとりまく宝木面からの比高は約２０ｍを記録し，西方約120ｍの地には姿川が南流している。

羽黒山神社附近は基盤が主として第三系堆積岩類よりなる丘陵地帯の一部を占め，遺跡が発見された露頭の断面をみると，岩盤が約１ｍ位みられる。丘陵が削られた約７０ｍの断面には１０基の袋状土壙が確認された。土壙の大きさは口径 0.8～1.5ｍ底径 1.5～2.0ｍ深さ 0.5～1ｍのものであり，これらの土壙の中には底面に小ピットを設けたものもある。



羽黒下団地遺跡の袋状土壙断面図

土壙内から検出された土器は，中期の阿玉台式，加曽利ＥⅠ式に比定されるものであるから，本遺跡が中期前半のものであることは明らかである。この時期は袋状土壙が構築された最盛期であり，他の遺跡の調査例からみて数十または百余個の土壙が群在するのが一般的である。集落内に貯蔵用の土壙として設けられたものである。

（分布図 93頁・図版312頁）

（162）長峰遺跡

種別 集落跡 時期 縄文・奈良・平安 現状 山林・畑・宅地
所在地 鶴田町 1659－3 ほか 遺跡番号 { 市 162 / 県 84

羽黒山より南に延びる丘陵の東側斜面に立地している。

一部山林が残っているが宅地化が進んでいる。表土上の縄文式土器片，土師器片が散見できるほか石器類も発見されている。

なお，この遺跡は県登録羽黒下団地Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図 93頁・図版312頁）

（163）亀が窪古墳群

種別 古墳 時期 古墳 現状 山林・栗林 所在地 鶴田町 1649 ほか
遺跡番号 { 市 163 / 県 －

姿川左岸の南北に延びる丘陵上に立地している。

尾根に４基の円墳が点在しているが，１基は封土が削平され石室の石材と考えられる凝灰岩が近くに散在している。なお，削平の際直刀・須恵器片等が出土している。

他の３基の円墳の規模は，径約２１ｍ高さ３ｍ，径１３ｍ高さ 1.5ｍ，径１３.５ｍ高さ２ｍである。

（分布図 93頁・図版312頁）

（164）上欠団地遺跡

種別 集落跡 時期 縄文 現状 宅地・山林 所在地 上欠町 1219 ほか
遺跡番号 { 市 164 / 県 －

姿川右岸の丘陵上の平坦面に立地している。

住宅団地造成のため，県教委が主体となって記録保存調査がなされた。その結果，縄文期の住居跡２５，配石遺構２，袋状土壙１２０余基が検出された。

遺物は，縄文式土器・打製石斧・石皿・磨石・石鏃・耳栓・有孔硬玉・土製小円板等と土師器も出土している。

－ 参考資料 － （宇都宮市史第１巻 昭和５４年 宇都宮市）

この遺跡は上欠町地内の台地上にある縄文時代中期から後期にわたる集落跡である。ここは大部分山林で一部が畑地であったが，宅地造成にともなう記録保存のための調査を県教育委員会が主体となって実施した。発掘調査は昭和５２年から開始され，５３年秋の現在も進められている。海老原郁雄らによるこれまでに判明した遺跡の概要は次のようである。

遺跡は姿川の開析低地西側を画する南北に延びる丘陵－低地部からの比高約４０ｍ－上の平坦面にあり，この平坦面ではほぼ中央部の南へ舌状に展開する通称「亀の甲」とよばれる高台部分に占地している。丘陵の西側麓には豊富な湧水

池があってサギ草などが自生する湿沢となっている。未開発部分には雑木の疎林が広がり，小鳥のさえずりとともに季節の山菜も採れる従前の自然が残っている。

昭和52年，第1期造成区が遺跡の北半部にあたるため，その範囲確認の調査を行ったところ，丘陵中央部から西縁部にかけて約1.2万平方mの範囲に住居跡・袋状土壙などが密集していることがわかった。53年からは道路敷部分を優先し調査中であるが，未造成の遺跡南半部にも遺構密集範囲が及んでいるものとみられ，縄文中期の遺跡としては典型的な定形集落の例といえる。

遺物の包含層は黒色腐植土で，上層は黝黒色，下層は黒褐色でそれぞれ20～30㎝であり，下層の方がしまっている。次の漸移層をへて，黄色の粒状パミスを混えた褐色ローム層が続く。遺物の遺存度は良好であるが，縄文時代の生活面が黒色土の下層上半部にあったため，遺棄された河原石・土器片などが，住居跡や袋状土壙などの掘り込み面と一諸にあるため，遺構の確認や遺物の時期的な分離が著しく困難となっている。

これまでに発見された遺構は，住居跡25軒，配石遺構2基，袋状土壙120余基で，甕棺を含む埋め甕が10個ほどある。遺物では中期の加曽利ＥⅠ式・Ⅱ式・Ⅲ式や後期の称名寺式などの膨大な土器片と，分銅形の打製石斧・石皿・磨石・石鏃などの石器，特殊なものとしては有孔硬玉・耳栓・スタンプ型石器・無数の土製小円版などがある。また，中期末の注口土器や有孔鍔付土器片，把手付き石槍なども出土している。

遺物のなかで特に注目されることは，100以上の多量の打製石斧が出土していることである。これらの形状や大小はさまざまであるが，いずれも粗製で破損しているものが多い。中期後半において打製石斧が多量に消費される特別な事情があったのかも知れない。また，土器破片を円形に研磨して仕上げた土製小円版の多出も注目される。これらは直径3～4㎝で，土器片の廃物を利用し量産されている。目下のところ小円版の用途は不明であるが，多量の出土は「量的な使用」を検討する材量といえよう。

発見された住居跡は円形または方形の石囲炉をもつがいずれも中規模以下である。そしてこれらの炉は単式であり，県北の横沢遺跡（西那須野町）の住居跡にみられる複式炉とは著しく対照的である。つまり，県北の場合は福島県地方との関連が強く複式炉が一般的であるのに，本市の上欠団地遺跡を含めた県南の炉は単式であり，これは南関東との関連を示している。住居跡の炉にみられるこの違いは，土器の文様にもみられ，中期なかばの土器が県北の那須地方にあっては，東北地方の大木様式の影響を強くうけているのに対し，字都宮以南の土器は南関東地方の要素を多く含んでいるのである。

なお，食糧を貯蔵するための土壙は，他の中期遺跡と同様に多数発見されたが，袋状土壙の典型的なものをここに示しておこう。それは土壙の開口部の確認面は黒土の下層上半部である。底面の南東隅には小ピットがみられる。

上欠団地遺跡は宅造工事に伴う調査で発見されたものであるが，中期から後期初頭にかけた集落跡として注目されよう。特に住居跡と袋状土壙群とのあり方，住居の建て替えなどを知る重要な鍵をにぎっているものと思われる。

（分布図109頁・図版312頁）

（165）初網遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　畑・田　　所在地　上欠町1062ほか
遺跡番号｛市 165 / 県 33

姿川左岸の微高地に立地している。

表土上の遺物量が多く，石鏃・土偶・独鈷石・土錘・縄文土器等の破片が散布している。

－ 参考資料 －　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

標高120m，附近の水田面からの比高はおよそ4mという低台地に位置し，姿川右岸にある縄文時代中期から晩期にわたる遺跡である。かっては畑地一帯に土器や石器が散在し，農道わきには炉の囲石と思われる焼けた河原石がみられた。

遺物の出土する範囲がかなり広いので，大きな集落跡とみられる。土器には中期の加曽利ＥⅠ・Ⅱ式，後期の堀之内Ⅰ式，加曽利ＢⅠ・Ⅱ式，晩期の安行Ⅲa式などに比定されるものがあり（第77図・78図），石器はきわめて豊富で，これまでに石鏃，石錐，石錘，打製石斧，磨製石斧，石皿，凹石，敲石などが出土している。また，有孔の土製円版が出土している。この有孔土製円版は氏家町勝山遺跡で，晩期の大洞C₂式の土器にともなって出土しているので，その形状の類似したところから晩期の遺物と考えられるものである。紡錘車として使われたものであろうか。この初網遺跡の西方にあたる台地上に，高尾神遺跡とよばれる中期の集落跡があり，北方には長坂南遺跡がある。

（分布図109頁・図版312頁）

（166）高尾神遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文　　現状　宅地・山林
所在地　上欠町880—2ほか　　遺跡番号（市 166 県 —）

姿川右岸の丘陵上に立地し，丘陵西を武子川が南流している。

昭和49年10月から50年3月にかけて発掘調査され，縄文中期の住居跡19基，袋状土壙11基などが検出された。

出土遺物の主なものは，縄文式土器・石鏃・磨製石斧・石匙・石錘・石皿・敲石・磨石・凹石等である。

— 参考資料 —　栃木県史資料編考古（昭和51年　栃木県）

宇都宮市街地と鹿沼市街地との間には約7キロに及ぶ標高150m内外の台地が南北に長く起伏している。

高尾神遺跡の所在する台地は東側に存在し，鹿沼市西久保付近の標高約260mの丘陵地より南へ派生する標高130m前後の台地上にある。付近の水田面との比高は12mで東側に姿川，西側には姿川に合流する武子川が流れている。

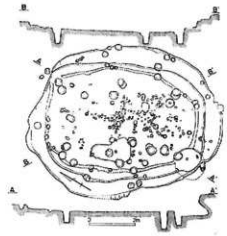
本遺跡は，昭和49年10月より50年3月にわたり，日本窯業史研究所が主体となり調査を実施し，台地平坦部より東側斜面にかけ縄文時代中期の竪穴式住居跡，袋状土壙，土壙などの遺構を検出した。

竪穴式住居跡は，19軒が確認されいずれもローム層を掘り込んで構築されていた。平面プランは楕円形13軒，隅丸方形3軒，円形3軒であり楕円形プランが主流を占めている。楕円形は平均6×4mの大きさで内壁付近に周溝を配するものと周溝をもたないものとがある。炉跡は床面中央付近にわずかに焼土がみられるだけである。隅丸方形は平均6×4mでやはり炉跡は床面中央付近に床面が若干焼けているのみである。円形は直径4m前後で床面中央付近に径20cm内外の拡がりに焼土が検出されている。本遺跡の炉跡はいずれも石囲，埋ガメなどの付設はみとめられなかった。遺物は，床面よりほとんど検出されず埋積土中より土器片，石器など多く出土した。

袋状土壙は11基が確認され，いずれも群在せず各住居跡付近に点在していた。埋積土中には炭化物が含まれているものが多く，また埋積土中に完形土器を出土するものが3基存在した。

土壙は，円形平面で浅いもの，円形平面ですり鉢状のもの，楕円形平面で深いものに大別し得た。そのほかに直径30cm内外の穴が多数点在している。

出土遺物は，阿玉台・加曽利EⅠ式土器が多く出土した。石器類は，石鏃，石斧（打製，磨製），石皿，敲石，磨石，凹石，石匕，石錐などが出土した。



高尾神遺跡住居跡

高尾神遺跡出土の土器

（分布図 93頁・図版313頁）

（167）富士山台遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　山林・畑
所在地　上欠町1127ほか　　遺跡番号｛市 167 県 —

姿川右岸の丘陵上に立地し，同一丘陵上北側には，上欠団地内遺跡（市遺跡番号164）がある。

畑中より，縄文土器片・須恵器片・土師器片等が検出されるが，山林中に遺跡が広がるもようで規模は，明確にし得ない。

（分布図126頁・図版313頁）

（168）亀岡坪遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑　　所在地　上欠町649—2ほか
遺跡番号｛市 168 県 271

姿川右岸の上欠地内丘陵上に位置している。

遺跡の表土上に須恵器・土師器の小破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録杳掛北遺跡を改称したものである。

（分布図126頁・図版313頁）

（169）杳掛遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑　　所在地　上欠町526—1ほか
遺跡番号｛市 169 県 270

東を姿川，西を武子川によって開析された南北に延びる丘陵に入りこんだ谷に向かう南向きの緩斜面に立地している。

遺跡の表土上には，須恵器，土師器の破片が散見できる。

（分布図126頁・図版313頁）

（170）亀岡前古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　宅地・水田・山林
所在地　上欠町825ほか　　遺跡番号｛市 170 県 272

姿川右岸の丘陵上に立地し，現在5基の円墳が残る。

1基は，径約7m高さ2mほどで，他の4基は，径6～7m高さ0.3～1mである。

なお，この遺跡は県登録杳掛古墳を改称したものである。

（分布図126頁・図版313頁）

（171）定使古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　宅地　　所在地　上欠町674—4ほか
遺跡番号｛市 171 県 —

姿川右岸の丘陵の南東向き緩斜面に立地する。

直径12.5m高さ1mの円墳で小祠がまつられている。

（分布図110頁・図版313頁）

（172）植の内古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　下砥上町1259—1ほか
遺跡番号｛市 172 県 —

姿川左岸の徹高地に立地する円墳である。

楡木街道沿いの星の宮神社の南側の雑木林の中に位置し，規模は，径約11m高さ2.5mほどである。

（分布図110頁・図版313頁）

（173）聖山公園遺跡

種別　古墳・集落跡・経塚　　時期　縄文・古墳・室町
現状　山林　　所在地　上欠町296ほか　　遺跡番号｛市 173 県 274, 275, 276, 277

姿川右岸の台地上に立地している。

この台地上に墓地公園が造成されることになり，昭和５７年から５カ年計画で宇都宮市教育委員会が主体となって発掘調査を実施中である。

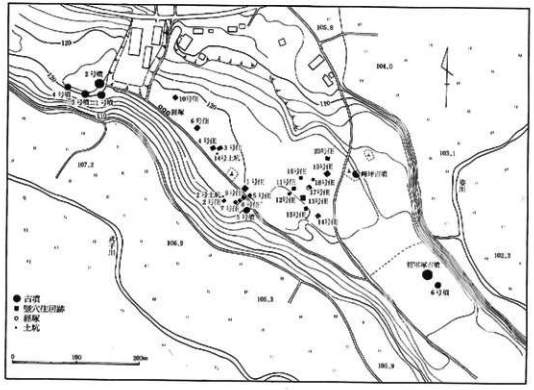
なお，本遺跡は県登録中坪遺跡，根古屋遺跡，峰坪古墳を統合したものである。

－　参考資料　－

1. 聖山公園遺跡発掘調査見学会資料４（昭和５８年　宇都宮市教育委員会）

発掘調査は，２年目に入り，今年もすでに予定の半分が過ぎました。

今までに発掘したものは，古墳４基（うち１基は，周溝だけを調査），竪穴式住居跡２０軒（うち５軒は，現在調査中），縄文時代の土壙１基，土坑２０数基，溝状遺構数状，それに室町時代の終りごろと思われる経塚３基です。

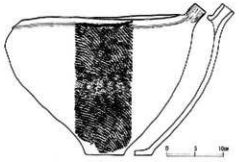


調査した主な遺構

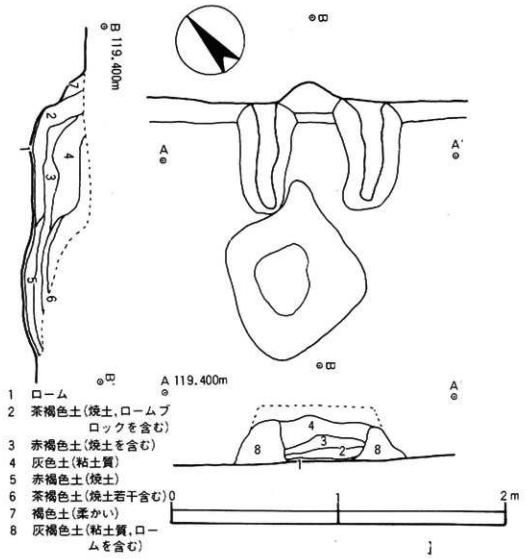
2. 聖山公園遺跡概報１（昭和５８年　宇都宮市教育委員会）

本遺跡のある上欠町は宇都宮市北西部の山地帯から南へ広がる鹿沼台地の南端部にあたり，南西方へは姿川をはさんで宇都宮西部台地，さらには田川によってつくられる沖積低地へと続いている。

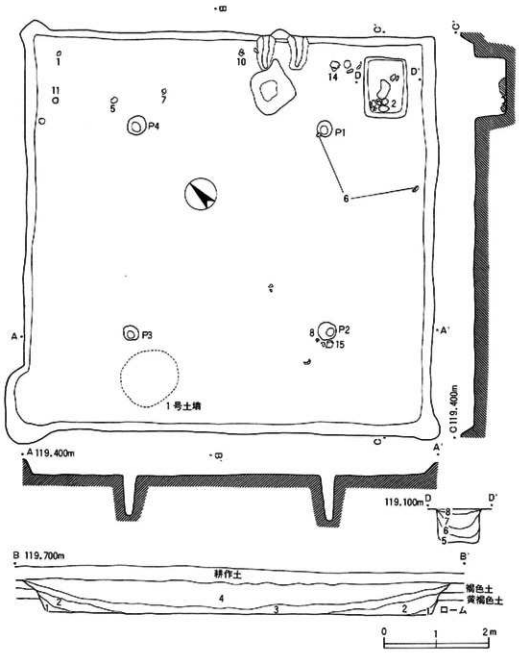
遺跡地を載せる台地は，北西から南東へ細長く延びるものであり，その幅は遺跡地北西部付近で約３００m，南東部へ向かうに従って狭まり約１５０mとなっている。この台地は，遺跡地南東部から，さらに南東へ約３００m 延びて終っている。台地上には最も広いところで幅150m前後の平坦面をつくり，両側斜面へとつながっている。斜面は南西側が緩く，北東側は比較的急である。台地両側には，南西側に武子川，北東側に姿川がそれぞれ南流しており，この両河川によってつくられた低地面が広がっている。台地上平坦部の標高が１２０m前後，南西側低地面の標高が１０５～１０６m，北東側低地面の標高が１０２～１０３mであり，南西側低地面がやや高くなっている。台地上と低地面の比高差は，平均して15.6mである。



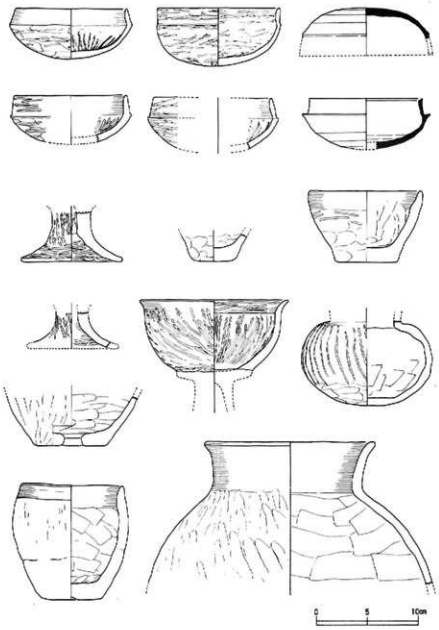
１号土壙出土縄文式土器実測図



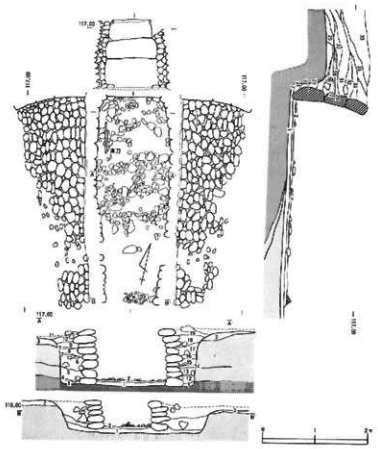
1号住居跡カマド実測図



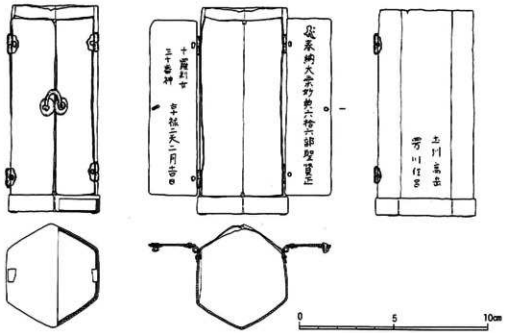
1号住居跡実測図



1号住居跡出土土器実測図



1号墳石室実測図



2号経塚出土経筒実測図

は直刀1振とガラス小玉4個，前庭部からは土師器1点を検出した。2号墳は1号墳の北方約20mに位置し，台地上部の平坦面に立地する。直径約25mの円墳である。内部主体は木棺を直葬したと思われる長方形土壙であり，鉄器（鉄斧か？）の副葬がみられた。また，墳丘南側裾部より祭祀に使用されたと思われる土器群（土師器坏9点，須恵器碗1点）を検出した。なお，この土器群中の土師器坏2点は，底部が穿孔されている。

集落　今年度検出した10軒の竪穴住居跡は総て古墳時代後期に属するものである。位置的にはそのほとんどが台地南側の縁辺部に集中しており，本台地上におりる該時期集落の立地（占地）状況の一端が窺える。また竪穴住居跡の規模は，一辺3m程のものから一辺8m余りもあるものと様々であるが，恐らくは同時期の単位集落内での大小差ということであり，興味深い問題を含んでいるものと思われる。出土遺物は土師器が中心であるが，該時期としては県内でも非常に類例の少ない須恵器も2点（蓋と坏身）検出している。この須恵器は，陶邑編年のI期後半段階に比定できるものと思われるものであり，伴出する土師器および竪穴住居跡の年代を決めるのに重要な資料となる。

経塚　遺跡内を通る山道沿いに並ぶ3基の経塚の調査を行ったが，中央に位置する2号塚より経筒を検出した。2号経塚は径5.5m高さ0.7mの円形塚であり，経筒はこの頂上部で深さ15cmの所より出土した。経筒は六角柱状を呈し側面観音開きという非常に特異な型式である。大きさは高さ11cm，底径5cmであり，銅板製で金鍍金の痕跡がみられる。なお，側面扉の内面に享禄2年（西暦1529年）の年号が刻まれている。

3.　栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和58年　栃木県教育委員会）

本遺跡の調査は，五ヶ年計画で行う予定であり，本年はその初年度にあたる。

本年度の調査では，⑦で記したように各時代にわたる多種多様な遺構・遺物を検出することができた。ここでは古墳・集落跡および経塚の3点についてそれぞれの特徴を簡単にまとめておくことにする。

古墳　本遺跡内には円墳が5基確認されたが，このうち2基（1・2号墳）が公園への導入路造成地内にあたるため調査を行った。1号墳は台地の南斜面上に立地する所謂「山寄せ」型の円墳であり，直径は約23mを測る。内部主体は胴張りを有する横穴式石室である（第19図）。両側壁には川原石，奥壁には凝灰岩の切り石，天井には流紋岩の自然石をそれぞれ使用している。なお，石室内から

（分布図110頁・図版314頁）

（174）宿坪遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　畑・水田
所在地　下延上町998−1ほか　　遺跡番号（市 174 県 269）

姿川左岸の低台地，日光線の南側に隣接している。

ほとんどが，開田されているが一部残る畑中から縄文土器，土師器，須恵器の破片が散見できる。

なお，この遺跡に県登録下延上北遺跡を改称したものである。

（分布図110頁・図版314頁）

（175）稲荷古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　上欠町718−1ほか
遺跡番号｛市 175／県 —｝

姿川右岸の台地上，南北に延びる舌状台地の南部に位置する。

前方後円墳1基と円墳3基からなる古墳群で前方後円墳の規模は，全長約35m後円部高さ2.5mで円墳は，径10m前後高さ1mほどである。

（分布図　93頁・図版314頁）

（176）観音塚古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　鶴田町1495ほか
遺跡番号｛市 176／県 —｝

姿川第二小の北に隣接，周囲を団地に囲まれた平坦地に位置する。

塚は，南北14m東西8m高さ2mほどで，千手観音像をまつっている。

（分布図110頁・図版314頁）

（177）根古屋遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　畑・水田
所在地　上欠町170ほか　　遺跡番号｛市 177／県 275｝

姿川及び武子川に両側から開析された舌状にのびる台地の南端近くに立地する。

聖山公園遺跡（市遺跡番号173）が北に隣接しており，表土上に縄文土器，須恵器の破片が散見できる。

— 参考資料 —　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

出土遺物には石器類として石鏃・打製石斧・磨製石斧・石錘・敲石・磨石などがあり，土製品としては土偶の脚部破片と土錘がみられ，土器は後期の堀之内Ⅰ式・Ⅱ式・加曽利B式・安行Ⅰ式・Ⅱ式と晩期の安行Ⅲa式と粗製土器が多出している。とくに安行Ⅰ式に比定されるものには好資料がみられる。

安行Ⅰ式の土器には精製と粗製のものとがあるが，精製土器の文様は帯縄文であるのに対して粗製土器は紐線文である。根小屋遺跡で採集されたものは主に精製土器であるが，雑片として紐線文の粗製土器もある。図示した中にみられる安行Ⅰ式土器は，口縁が波状を呈し，扇形の把手がつき縦長の瘤と磨消縄文か沈線で縄文が帯状にのこるのが特徴的である。この土器の分布は本市全域にみられ，栃木県下の各地の遺跡から出土している。これに対して安行Ⅱ式土器の出土量は少ない。

（分布図110頁・図版314頁）

（178）並塚遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑・宅地
所在地　下砥上町1512−1ほか　　遺跡番号｛市 178／県 263｝

姿川の支流である鶴田川の西側低台地に立地している。

遺跡地の表土上には，土師器片が散布している。

なお，この遺跡は県登録並塚戦場遺跡を改称したものである。

（分布図　97頁・図版314頁）

（179）不動前3丁目遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑・宅地
所在地　不動前3丁目3番827−1ほか　　遺跡番号｛市 179／県 196｝

田川右岸の台地上田川沿いの水田面との比高差約10mに立地している。

住宅地の中に残る畑に土師器片が散布する。

なお，この遺跡は県登録出口遺跡を改称したものである。

（分布図114頁・図版314頁）

（180）不動前5丁目遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑・宅地
所在地　不動前5丁目1番743−4ほか　　遺跡番号 { 市 180 / 県 197 }

田川右岸の台地上で南を日光線に接して位置している。
表土上に土師器の小片が散布する。
なお，この遺跡は県登録不動前南遺跡を改称したものである。

（分布図114頁・図版314頁）

（181）陽南1丁目遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良〜鎌倉　　現状　畑・宅地
所在地　陽南1丁目2番691ほか　　遺跡番号 { 市 181 / 県 199 }

田川右岸の台地上に立地している。
宅地化が著しい地区でわずかに残る畑中より土師器片が散見でき，奈良・平安時代以降もひきつづき集落が営まれたと考えられる遺跡である。
なお，この遺跡は県登録富士重工診療所東遺跡を改称したものである。

（分布図111頁・図版315頁）

（182）ガンセンター東遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑・宅地
所在地　陽南3丁目12番914−137ほか　　遺跡番号 { 市 182 / 県 231 }

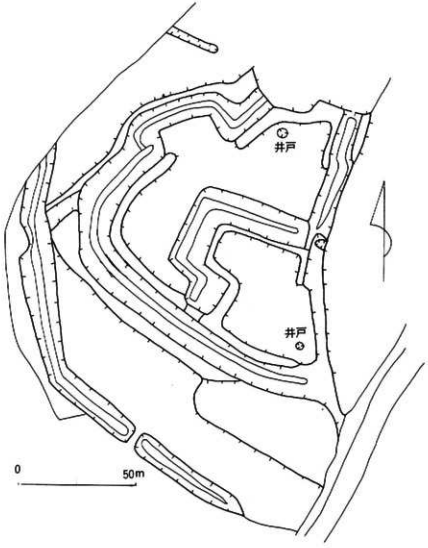
田川及び姿川に挟まれた南北に延びる台地上に立地している。
附近は，宅地化が進みわずかに残る畑に土師器片の散布がみられる。
なお，この遺跡は県登録宮原町遺跡を改称したものである。

（分布図110頁・図版315頁）

（183）犬飼城跡

種別　城館跡　　時期　室町　　現状　山林　　所在地　上欠町39ほか
遺跡番号 { 市 183 / 県 — }

根古屋城ともいう。東に姿川，西に武子川が流れ，その中間を南北に延びる舌状台地の南端に立地している。
深い空堀と土塁など室町期城郭の遺構を良くとどめている。
— 参考資料 —　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）
姿川は武子川の合流点の北，この二つの川にはさまれた丘陵の南端に立地している。本丸は，その東側，姿川の形成した急崖（比高約15m）を利用し，一部土塁を施し，一段低くなった所に堀り切りと武者走りをつけている。本丸の北・西は土塁とその外側の堀（上幅18m，底幅3.5〜5.5m，深約5m）を，折れ・ひずみをつけてめぐらし，二の丸と区分している。本丸・二の丸を含めて，その南・西・北・東側に大構えの堀（上幅12m，底幅2〜3m，深3〜5m）をめぐらし，その両岸に土塁（一部なし）を構築している。その西北部分に二の丸の張り出し部があり，堀と土塁は屈曲している。北側の堀の一部は破壊・削平されて水田になっているが，低い地割で遺構が確認できる。
外構えは，南側の堀と北西部の堀切りによってなされ，南側には広く細長い外郭が形成されており，大手の入口は土橋で外に通じている。外郭と二の丸・本丸との連絡は，二の丸・本丸を区分する堀の南端の土塁の一部を削平し，ここから架橋して行ったようである。本丸・二の丸にそれぞれ井戸跡の凹みがあり，西の隅に櫓台跡の高台がある。宇都宮市内の城の中で，大規模でしかも保存状態がよい。なお，この城から丘陵尾根伝いに鹿沼に通じる古道がある。宇都宮領の西南の有力支城と考えられるが，詳細は不明である。



犬飼城略測図

（分布図110頁・図版315頁）

（184）主計内遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良・平安　**現状** 畑　**所在地** 下砥上町564ほか
遺跡番号 市 184 / 県 268

下砥上愛宕塚古墳（市遺跡番号185）の西側から北側にかけての遺跡で姿川左岸の丘陵上に立地している。

表土上に土師器片を散見できる。

なお，この遺跡は県登録砥上神社西遺跡を改称したものである。

（分布図110頁・図版315頁）

（185）下砥上愛宕塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社　**所在地** 下砥上町470ほか
遺跡番号 市 185 / 県 21・267

姿川左岸の低丘陵上に立地している。

古墳の規模は，直径約25m高さ5mで現状から判断すると円墳と考えられる。

墳丘南面に奥壁幅185cm高さ190cm長さ365cmの玄室を持つ凝灰岩切石積みの横穴式石室が開口している。

なお，墳丘上は，下砥上の鎮守になっている。

－ 参考資料 －　宇都宮市史別巻（昭和56年　宇都宮市）

本墳は直径約24.5m，高さ約5mの円墳である。墳頂部は直径約5mの平坦地になっており，小社砥上山神社が祀られている。墳丘には埴輪・葺石等の外部施設は認められない。また南側裾部には神社の拝殿が建てられており，このために裾部は若干削平されている。周溝の痕跡は，確認できない。

内部主体は，南面する切石截組み積み両袖形横穴式石室であり，墳丘の下から三分の一ほどの位置に開口している。奥壁は，墳丘の中心から著しく南に寄った所に置かれている。石室は全長4.85mである。

玄室は奥壁幅1.85m，前壁幅1.8m，長さ3.65mである。奥壁は，比較的大きな凝灰岩切石の一段積みである。両側壁は最下段に大形の切石とやや大きな切石を据え，その上に比較的大きな切石を二段に積み上げている。最下段の石はほぼ

垂直に掘えられているが，上段の石はやや内傾させて積み上げられている。玄門は側壁に組み込まれた切石の上に，天井石に組み込まれた楣石が乗せられている。

床の框石は，堆積した流入土のために不明である。玄門は幅約60㎝である。羨道は短かく，長さ1.3ｍである。羨道の側壁はやや小形の凝灰岩が四段に積まれているが，玄室に用いたような整美な切石ではなく，表面のみが整えられたもので，多角形である。羨門は，石室前面に建てられた拝殿のために，毀されたようであり，詳細は不明である。

玄室側壁の石材の使用状況は，喜連川町早乙台古墳・芳賀町苅生田古墳・同町二子塚西古墳・市貝町石下第14号墳・益子町小宅東古墳などに共通するが，玄門は壬生町車塚古墳・南河内町御鷲山古墳などの例に近似している。車塚古墳は玄門の外側にまで大形切石の一枚石が使用されており，本墳の羨道部とは大きく異なっている。

羨道の状況は，河原石の小口積み羨道と推定される石橋愛宕塚古墳に近いものと考えられよう。

（分布図110頁・図版315頁）

（186）ひのき内遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　畑・山林
所在地　下砥上町312−1ほか　　遺跡番号｛市 186 県 266｝

姿川中央小の北側に位置し，姿川左岸の低台地上に立地する。

西側に下砥上古墳群（市遺跡番号187）に接し，表土上に縄文土器・土師器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録姿川中央小北遺跡の一部である。

（分布図112頁・図版315頁）

（187）下砥上古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　校庭・神社・山林
所在地　下砥上町124ほか　　遺跡番号｛市 187 県 88・264・266｝

姿川左岸の低台地上に立地する円墳群である。

3基の円墳のうち鶴塚は著名であり，その規模は径約19ｍ高さ2.5ｍで墳頂に祠がある。他の2基は，原形が破損しており特に姿川中央小内の古墳は，墳丘が完全に取り去られ，天井石が露出している。

なお，この遺跡は県登録姿川中央小敷地内古墳と姿川中央小南古墳と姿川中央小北遺跡を併合したものである。

（分布図112頁・図版315頁）

（188）下欠北原遺跡

種別　集落跡　　時期　奈良・平安　　現状　畑　　所在地　下欠町604ほか
遺跡番号｛市 188 県 288｝

姿川及び武子川の合流地点の西側に位置する南北に延びる低台地上に立地している。

表土上に土師器が散見できる。

なお，この遺跡は県登録北原遺跡を改称したものである。

（分布図112頁・図版315頁）

（189）下砥上下の内遺跡

種別　集落跡・古墳　　時期　縄文・古墳　現状　畑　所在地　下砥上町15ほか
遺跡番号｛市 189 県 ―｝

姿川左岸低台地上の南傾斜地に立地している。

表土上に縄文土器片が散布している。また，墳丘を削平された古墳1基が遺跡地

内に所在している。

（分布図112頁・図版315頁）

（190）西の内遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 畑
所在地 西川田町387–4ほか　**遺跡番号** { 市 190 / 県 250・251・252・256

姿川左岸の低台地上に立地している。
表土上には，縄文土器・土師器の破片が散在している。
なお，この遺跡は県登録寺畑遺跡と寺畑南遺跡と姿川第一小北遺跡と合の畑遺跡を併合したものである。

（分布図144頁・図版315頁）

（191）大明神遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑　**所在地** 鷲谷町48–1ほか
遺跡番号 { 市 191 / 県 290

鷲谷地内の西向きの非常に緩やかな斜面に立地している。
表土上に土師器片が散在している。
なお，この遺跡は県登録本郷道下Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図129頁・図版315頁）

（192）亀塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 水田・山林　**所在地** 下欠町24ほか
遺跡番号 { 市 192 / 県 20

姿川右岸の水田中に位置している。
前方部墳丘は削平され現在，後円部のみが残る前方後円墳である。石室の一部が露呈している。石室内からは，馬具・鉄等が検出され，墳丘からは円筒埴輪・須恵器大甕が出土している。

（分布図128頁・図版315頁）

（193）辻の内遺跡

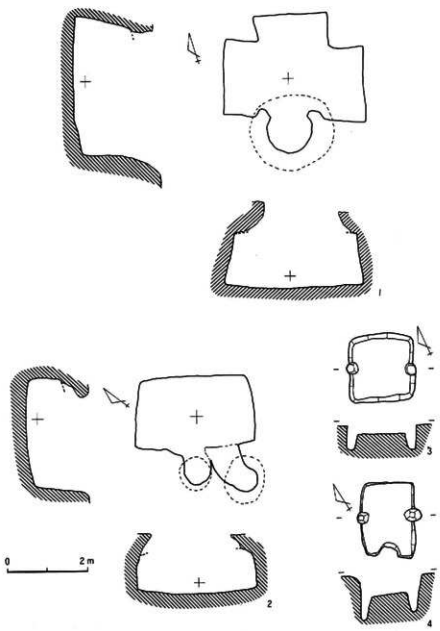
種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 畑・水田
所在地 西川田町183–2ほか　**遺跡番号** { 市 193 / 県 249

姿川左岸の低台地上及び西向き緩斜面に立地している。
表土上に，縄文土器（中期）土師器の破片が散布している。
なお，この遺跡は県登録西川田Ⅱ遺跡を改称したものである。
－ 参考資料 － 栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和54年 栃木県教育委員会）

中世集落を形成するのは，掘立柱建物（ピット群）・井戸跡・方形竪穴遺構・墓・土壙である。

掘立柱建物は，桁行3間，梁間1間（7×3.5ｍ）で，主軸はS－52°－E，柱穴は直径約30㎝，深さ約45㎝の円筒形である。他にも同様の掘り方ピットや，重複するものがある。これらのつながりは確認できなかったが，建物の存在さらに建替えがあったことは十分に考えられる。遺物には，ピット中より出土した土師質土器が数個ある。

井戸は13基確認され，そのうち10基がピット群中にある。上部がロート状に開くものとそうでないものがある。出土遺物には，内耳鍋・陶器甕（常滑）・石臼・土師質土器・須恵器甕の破片がある。



辻の内遺跡の土壙（ 1.　1号地下式壙　2.　3号地下式壙　3・4.　方形竪穴）

（分布図144頁・図版315頁）

（194）萩 山 遺 跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　鶯谷町909ほか
遺跡番号｛市194 県293

鶯宮神社の南西に位置し，北向きの微高地緩斜面に立地する。
表土上に，坏・甕・高坏など土師器の破片が多数散布している。
なお，この遺跡は県登録本郷道上Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図128頁・図版315頁）

（195）廐 久 保 遺 跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑　　所在地　鶯谷町8－2ほか
遺跡番号｛市195 県294

姿川右岸に沿って延びる台地の東向き緩斜面に立地している。
斜面の下を姿川が南流し，表土上には，縄文土器片・石鏃及び土師器片・石製模造品などが散在している。
なお，この遺跡は県登録鶯谷南遺跡を改称したものである。

（分布図129頁・図版315頁）

（196）塚山古墳群（県指定）

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林・畑
所在地　西川田町1663－1ほか　　遺跡番号｛市196 県19

総合運動公園から舌状に延びた台地の南端に立地している。
現在，前方後円墳である塚山古墳（全長約95ｍ）そのほぼ西方に帆立貝式前方後円墳である塚山西古墳（全長約63ｍ）その南に隣接して塚山南古墳（全長約60ｍ）の3基が現存する。

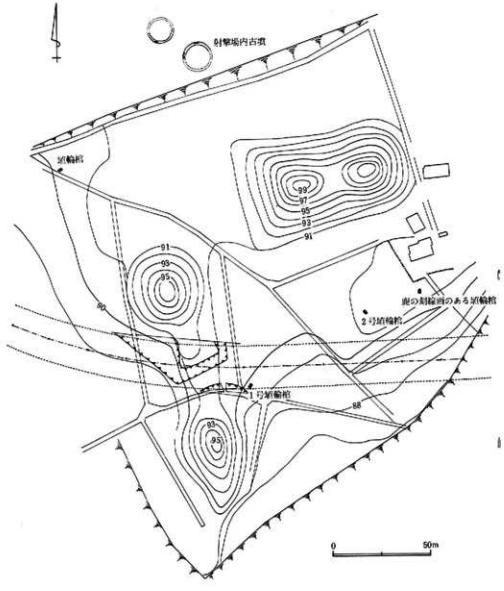
－ 参考資料 －

1. 塚山古墳群（昭和54年　栃木県教育委員会）

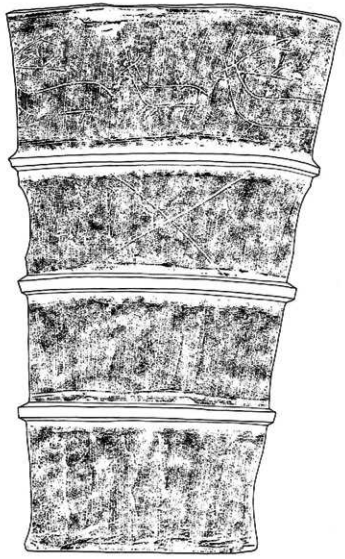
本古墳群は宇都宮市の中心から南へ約6.5㎞の地点の宇都宮市西川田町東原1663番地に所在する。地形的に見ると，宇都宮市の北西部から石橋町～小山市まで続き関東ロームが厚く堆積する台地である宇都宮西部台地（宝木段丘面）上に立地することになる。この台地は東を南流する田川と西を南流する姿川とに挟まれた地域であり，本古墳群の所在する地点で台地の幅は約4㎞，標高は90mを測する。また本古墳群から田川までは東へ約2.5㎞，姿川までは西へ約2.5㎞であり，両河川の中間地点に位置することになる。

本古墳群周辺の微地形をみて，気づくことは，宇都宮西部台地上を数条の小河川が南流しており，大きなものは自衛隊航空基地と総合運動公園の間を流れる西川田東谷田用水である。この河川は宇都宮の市街地の西部を流れる新川の末流であり，河川の狭い流域の低地は水田として利用されている。その東側を流れるのが総合運動公園内の池から流れる小河川であり，本古墳群の東～南に続く水田地域を形成している。この水田の最大幅は150ｍを測し，以前は兵庫塚沼と呼ばれていた地域と思われる。この沼は江戸時代までは常時水を湛えていたが，明治時代になり次第に沼は埋まり，明治時代末期に湿原化したといわれている。最近まで，その名残りと思われる声の類が見られたが，現在は全て埋立てられ新興住宅地化している。

本古墳群の西側は水田及び湿地となっている。本古墳群をとりまく地理的環境は総合運動公園から続く舌状台地の南端にあたり標高は90ｍ前後。その周囲は標高86ｍ～87ｍの低湿地であり，古墳時代に水田として利用した可能性も考えられる。



遺構分布図



0 10cm

鹿の線刻のある埴輪

2. 栃木県史資料編考古Ⅰ（昭和51年　栃木県）

塚山古墳は，宇都宮総合グラウンド射撃場の南に突き出る舌状台地上に所在する。射撃場に最も近く塚山古墳（古くは兵庫塚と呼ばれた）が位置し，その西南に接近して塚山西古墳があり，更にその南に続いて塚山南古墳がある。3基ともそれぞれの県の指定史跡となっている。航空写真で見ると，以前はあたかも塚山古墳を囲む形で，上記の二古墳のほかに更に2基の前方後円墳，4基の円墳が所在していたことが，地表面に残る痕跡から察知できる。

塚山古墳は西面する前方後円墳である。全長およそ93m，後円部の直径48.4m高さ7.5m，前方部の幅55.4m，高さ8mo。周溝は逆盾形をなし，後円部の東側裾部とその周濠が道路で断ち切られているほかは保存のよい古墳である。

塚山西古墳は東南面する牛塚型帆立貝式前方後円墳であって，全長推定58m，後円部の直径40m，高さ5mで，截頭円錐形を呈している。後円部側面の北半は墳頂近くまで栗畑となっている。前方部は畑地に開墾されたためかなり形が崩れている。現状では後円部との接続点での高さはおよそ1m余，先端部に向ってなだらかな傾斜を見せている。先端部の幅は発掘調査によらない限り不明である。本古墳からは以前円筒埴輪が出土しており，今もなお墳丘周辺に破片が散在している。

塚山南古墳は前者と同形式のものであるが，向きを南にとっている。全長は推定約60m，後円部の直径40m，高さ7m，前方部は前者と同様開墾されているが，後円部との接続点での高さは約3mで，先端部に向ってなだらかな傾斜を見せている。

航空写真によると，塚山古墳の前方部前端の周濠が，塚山南古墳の後円部東側の周濠を切っており，塚山西古墳の前方部前端の周濠が，塚山南古墳の後円部北側の周濠を切っているかのように見られるが，最近4号国道より総合グラウンドへ通じる道路の敷設にともなって緊急調査が実施された結果，塚山西古墳の周濠を切ってないことが判明した。

（分布図129頁・図版316頁）

（197）旭ケ丘団地北遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 宅地・畑
所在地 兵庫塚町309－3ほか　**遺跡番号** { 市 197 / 県 66

兵庫塚地内の微高地旭が丘団地内に位置している。
ほとんどが宅地化してしまったが，一部残る畑中に縄文土器片が散布している。
なお，この遺跡は県登録旭マーケット前遺跡を改称したものである。

（分布図131頁・図版316頁）

（198）旭ケ丘団地遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 宅地・畑
所在地 兵庫塚町164－28ほか　**遺跡番号** { 市 198 / 県 68

総合運動公園の南側，旭ケ丘団地の南端近くの低台地上に立地している。
ほとんどが宅地造成され，その造成地に縄文式土器が散布している。

（分布図130頁・図版316頁）

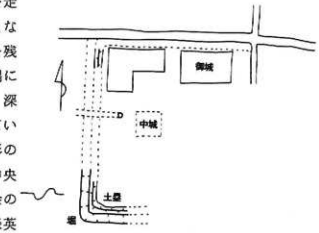
（199）樋 口 城 跡

種別 城館跡　**時期** 室町　**現状** 宅地　**所在地** 幕田町262－6ほか
遺跡番号 { 市 199 / 県 －

幕田地内に所在する中世の城館である。
現在は，城の南西端と思われる部分に長さ6ｍ，高さ2ｍほどの土塁と深さ0.8ｍ，幅3ｍほどの空掘が残されるにすぎない。
なお，築城年代は明らかでないが貞応元年には，樋口主計頭が城主であったという伝承がある。

－ 参考資料 －　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

この館は，姿川西岸の段丘面に立地し，栃木街道が西400ｍのところを走っている。増山民江氏他の屋敷地となっており，御城・中城などの地名を残している。西北部に土塁，南西の隅に土塁（幅4ｍ）・堀（幅7～8ｍ，深さ3ｍ）の一部を残すのみとなっているが，東西56ｍ，南北73ｍの方形の館跡と推定される。なお館の西側中央深さ1.5～2ｍの所に，広さ6畳余の地下式遺構がある。また館南の大森英昌氏宅内にもこのような遺構が3～4か所ある。



樋口城見取図

（分布図 63頁・図版316頁）

（200）権現山高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 古賀志町680ほか
遺跡番号 { 市 200 / 県 －

城山西小学校の南西の山林中に位置している。
山道の東側に2基，西側に10基の高塚がある。塚の大きさは，直径6.5ｍ，高さ1.5ｍを最大として，ほぼ東西に並んでいる。塚の状況からみて供養塚と考えられる。

（分布図 92頁・図版316頁）

（201）鶴田西の宮遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑　**所在地** 鶴田町3629－2ほか
遺跡番号 { 市 201 / 県 － }

作新学院の西側の住宅地域に位置している。

表土上に縄文土器片の散布を確認できるのは，植木畑になっているわずかな面積である。

（分布図129頁・図版316頁）

（202）陽南市場南遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳・奈良　**現状** 畑
所在地 雀宮町1665－14ほか　**遺跡番号** { 市 202 / 県 － }

県営運動公園の南側を通る外環状線の北側塚山古墳群（市遺跡番号196）の東側に隣接して位置する。

現況は，畑で表土上に土師・須恵・滑石模造品が散見できる。

（分布図129頁・図版316頁）

（203）若松原遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文～古墳　**現状** 畑
所在地 雀宮町1118－1ほか　**遺跡番号** { 市 203 / 県 － }

二軒屋遺跡（市遺跡番号205）北側，道路を隔て隣接している。

現況は，畑地で縄文・弥生・土師・須恵の土器片が散布し，さらに滑石模造品が散在している。

（分布図129頁・図版316頁）

（204）一向寺別院付近遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳　**現状** 畑　**所在地** 雀宮町1665－3ほか
遺跡番号 { 市 204 / 県 217 }

陽南市場南遺跡（市遺跡番号202）の南側に位置する。

一向寺別院附近を中心として，かなり広い範囲に遺物が散在している。現況は，畑と田地で平坦地，宅地化が進んでいるが，表土上に縄文・弥生・土師等の土器片が散在している。

当遺跡は，二軒屋遺跡（市遺跡番号205）を中心とする大遺跡群の一角と考えることもできる。

なお，この遺跡は県登録兵庫塚遺跡を改称したものである。

（分布図129頁・図版316頁）

（205）二軒屋遺跡

種別 集落跡　**時期** 弥生・古墳　**現状** 畑・宅地
所在地 雀宮町1117－5ほか　**遺跡番号** { 市 205 / 県 70 }

雀宮町中原地区にある弥生時代後期の遺跡でかっては，畑地・山林であったが現在は，急激に宅地化されつつある。

二軒屋遺跡出土の土器は，標式土器になっている。二軒屋式土器の特徴は，深鉢形，壺形を呈し，文様は斜縄文・羽状縄文が発達し，ほかに櫛描文や簾状文がみられる。羽状縄文は，異条斜縄文とも呼ばれる。底部には，木葉痕・布目痕・網代痕などがみられる。

－ 参考資料 －　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

雀宮町中原にある弥生時代後期の遺跡で，二軒屋式土器の標式となったところである。昭和30年代ころまでは畑地・山林と一部宅地程度であったが，今はほとんど住宅が建ち並び，二軒屋遺跡の位置を確認することが困難になりつつある。

本遺跡は寺内武夫と篠崎善之助らが調査し，その調査結果について「下野中原遺跡調査概報」（『考古学』第10巻第10号，昭和14年）と題し発表している。二軒屋とは寺内武夫，篠崎善之助が全く便宜的に付した名称であって地名ではない。

中原地内のうち，根本明知宅に通ずる道路以西で，倉井佰任所有の宅地にいたる範囲の，弥生土器の出土地域をさしている。土器の型式名は杉原荘介が，昭和13年に東京考古学会東京第3回例会に発表して以来付されたものである。なお発掘調査は昭和13年に行われた。二軒屋遺跡は北関東における弥生時代後期の標式遺跡となって今に至っているので，ここに寺内，篠崎両名の報告した一部と杉原荘介の当時における見解を次に引用してみたい（（）は塙注）。

寺内武夫・篠崎善之助と二軒屋遺跡

"中原遺跡（二軒屋遺跡のこと）は，先史時代から原始時代（原史時代）に渡り，その範囲も広大な台地上の綜合遺跡であるが，現在知る範囲で弥生式を主として出土する地点は根本氏宅に通ずる道路以西倉井氏宅地，中原1,117の4番地で他の地域は未開墾の地多き為明瞭でないが，遺跡の全般に亘って多少出土するらしく，現在小地域に限って取扱うことの不可能の状態にあるが，便宜上この地点を二軒屋遺跡と仮称しておく。

遺物としては土器が存するだけであり，石器その他の伴出遺物は現在の處明らかでない。以下土器に就いて述べよう。

私達は遺跡そのものの調査に依り，又他遺跡出土資料に依って本遺跡の弥生式土器には，地域的，層位的な差異なき同一文化の所産である事を確認した。即ち本遺跡出土の弥生式土器は一様式に属するものである。以下本遺跡出土々器の形態，文様に就て記述しよう。

形態を知り得るものはA坑（Aグリット）出土の深鉢形土器1個が発掘されてゐるに過ぎず他は全部破片である。依って既に知られ，而も同一様相を示すと推察する常陸紅葉，同富間，下総須和田等，又山内清男先生の御好意に依って拝見させて戴いた常陸出土のもの等から類推して考察を進める"として，器形・器肉，土質・焼成，器面・文様などについて詳述している。昭和14年ころの調査報文としては，立派な考察であり，今でもその価値は失われていない。

杉原荘介の二軒屋式土器

杉原荘介は「北関東に於ける後期弥生式文化に就いて」（『考古学』第10巻第10号，昭和14年）の論文で，二軒屋式土器について次のような見解を発表している。"私が本型式の土器を始めて注意したのは昭和5年，下総・須和田遺跡の調査を開始して直後であって，南関東に於ては特異の土器として，その後専らこの型式の土器の源流を求めてゐたのであるが，昨年8月（昭和13年のこと）篠崎・寺内の両君と倶に下野中原遺跡の中，二軒屋遺跡の調査をする機会を得て，本地域にその分布の主要地を持つことを知ったのである。（中略）私は本型式土器出土の集落遺跡として，二軒屋遺跡を調査する機会を得て後，篠崎・寺内の両君と相談の結果，本型式土器を遺跡名をとって二軒屋式土器とし，昨年11月本会（東京考古学会のこと）東京第3回例会の折発表した處である。"

"二軒屋式土器には，私の現在までの経験では未だに石器を伴出した例を知らない。（中略）北関東にはこの遺跡の分布が相当密で，二軒屋式土器が後期弥生式土器の主体をなすものではないかと思ふ。"とのべ，二軒屋式土器の分布が，下野を中心に常陸・磐城・下総・武蔵の広範囲にわたるが，下野・常陸が分布圏の主要地であり，下総・武蔵は出土状態からみて末梢的のものとしている。さらに樽式（群馬県樽遺跡標式）と二軒屋式土器との関係や，北関東と南関東両地域との対比を行っている。

杉原荘介らの調査研究によって，二軒屋式土器の編年的位置づけや特徴などは，昭和13～14年ごろにほぼ確立し，この型式名はいまに至っている。

二軒屋遺跡の遺物としては，土器が存在するだけで，石器その他の伴出遺物は不明である。寺内武夫，篠崎善之助両名の調査報文によると，本遺跡出土の二軒屋式土器の器形は，深鉢形，壺形を呈するようであるが，破片のみでその識別は困難であるという。製法は輪積みによるものである。

口縁部にはほとんど縄文が施され，口唇上にまで及んでいるものが多い。なかには口縁部を磨消したものがある。縄文はすべて斜縄文で右傾または左傾している。これらの縄文は羽状縄文をなすのが常で，そのまま頸部に至っているもの，段または一種の隆起帯で頸部と境するものとがある。段は1段，2段あるいは3段をなすものがあり，これらの段には多く縄文による刻み目（擬似縄文）を有し，また一定間隔下に棱状突起を1または2個ずつ配したものがある。

頸部は縄文，無文のもの，櫛目文を施したものなどがあるが，櫛目文を施したものがその主体をなしている。櫛目文は4～9本の施文工具によるもので，6～7本のものが通例である。これらの文様は波状文，直線文，簾状文を主とする単純なものである。直線文はゆるいカーブをもったもの，弧状をなすものがある。また直線文は横位のほか縦に6～7本を界線として，その間に直線文を配して両者の組合せによる巧みな文様帯を構成するものもある。界線外に同心円弧文をなす例がある。これはきわめて稀で例外であろう。なお，櫛状の工具による文様構成をなすものは，櫛目文による平行直線文界線から，また平行曲折線文，簾状文から直接に再び胴部以下の縄文へとかえるのが原則のようである。

胴部は少数の櫛目文を除いて，その主体をなすものは羽状縄文であり，二軒屋式土器の特徴をよく示すものである。この羽状縄文を山内清男は異条斜縄文とよんで

いる。この異条斜縄文は施文工具それ自身の差異－繊維の大小，巻き方－及び施文技術の差異によって縄文を異にするが，いずれも異条斜縄文を構成することは同じである。寺内，篠崎の両名は調査報文の中で，異条斜縄文を二つに分類した。一つは各条間の間隔がきわめて狭く，介在する縄文が非常に不鮮明であるもの，二は各条間の間隔が広まり，介在する縄文がきわめて明瞭なものとである。

胴部下半から底部への連絡，きわめて顕著な張り出しをもって外曲し「く」字形をなすものが普通であるが，なかにはゆるいカーブをもって外曲し著しい張り出しをもたないものもある。これは非常に稀のようである。底部は平底で一般に薄く厚いものは少ない。また木葉痕のあるものが多く出土し，布目痕や網代痕を残すものもある。

以上のような特徴をもった土器が，二軒屋式土器の標式遺跡となった本遺跡出土の土器である。寺内武夫，篠崎善之助両名が発掘した遺物は，今どこに存するのか不詳である。その後に発見された遺物は宇都宮大学資料室と作新学院考古学資料室に保管されている。

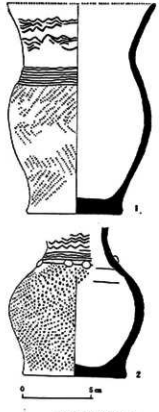

二軒屋遺跡出土の土器

図１・２は宇都宮大学所蔵のものである。１は口径10.5，器高15.0，底径6.8各センチで，口頸部には櫛目文が描かれ，頸部と胴部境には８条の沈線がめぐっている。胴部以下に羽状縄文がみられる。２は口頸部が欠損している壷形土器で，底部7.4，胴部最大径9.6，現存高11.0各センチである。頸部には櫛目文と肩部に円形ボタン状の浮文が付されている。胴部に羽状縄文が発達している。

第162図は完形品を除いた破片は作新学院考古学資料室所蔵のもので，口頸部の一部を残すもの以外はすべて破片であるが，底部に木葉痕のあるものと布目痕を残すものとがある。口頸部の一部を残す土器は，口縁部を無文とし，頸部との境には隆起させたところに指頭圧痕を施している。口縁部を無文帯にしている例は非常に少なく，針ケ谷町上坪（かみつぼ）遺跡や他市町村では柳久保（やなぎくぼ）遺跡（真岡市）などに若干みられる程度である。頸部には櫛目文が施されているが，この文様は細かく繊細な山形を呈し，一定の間隔をおいて数条の縦線を施している。胴部以下は羽状縄文となっている。

先に触れたように，二軒屋遺跡の周辺は宅地化が進み，附近に分布していた弥生時代後期の遺跡はほとんど湮滅してしまったといえる。

（分布図131頁・図版317頁）

（206）西原北遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文～古墳　　現状　畑
所在地　雀宮町1115－2ほか　　遺跡番号｛市206 県69

若松原中学校の北側に接して位置する。

宅地化が著しく住宅街となりつつあるがわずかに残る畑には，縄文・土師器片と共に滑石模造品が散見できる。

二軒屋遺跡（市遺跡番号205）南側に立地し，若松原遺跡（市遺跡番号203）とともに，二軒屋遺跡を中心にした縄文・弥生・古墳期の大遺跡の一角と考えることもできる。

なお，この遺跡は県登録西原遺跡を改称したものである。

（分布図138頁・図版317頁）

（207）留西遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　雀宮町1,080－43ほか
遺跡番号｛市207 県208

国道４号線の西側の平坦な畑に位置しており，東側に小川が南流し，周辺は住宅地化しつつある。遺跡の表土上に，土師器を散見できる。

なお，この遺跡は県登録本田技研南遺跡を改称したものである。

（分布図131頁・図版317頁）

（208）十里木古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 宅地　**所在地** 雀宮町226－1ほか
遺跡番号 {市 208 / 県 25}

国道4号線の西側に接する青柳家の宅地内に位置する。

現況は，玄室部の石棹石組が残るだけであるが，前方後円墳であったと考えられる。石室の構造は大谷石の切石積で鏡石は1枚，側壁は両側とも2枚で小石がはめ込まれ，一枚の天上石を支えている。天上石の上部の中心は高く作られ半円状をしている。

（分布図134頁・図版317頁）

（209）綾女塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 宅地　**所在地** 雀宮町125－18ほか
遺跡番号 {市 209 / 県 24}

本古墳は，東北本線雀宮駅の北方に位置する。

明治17年鉄道敷設によって墳丘の一部が削平された。その後明治28年雀宮駅開設に当たり，墳丘の3分の2ほどが削平され，大正元年の複線化に際して墳丘のすべてが削平された。

本古墳は，南面する前方後円墳であったが規模は，不明である。

なお，明治17年の削平の際に東側くびれ部から女子人物埴輪2体が出土している。また，明治28年の工事の際には，石室が検出されたが詳細は不明である。

－参考資料－　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

綾女（あやめ）塚古墳は，東北本線雀宮駅の北方約327m（『考古界』第1篇第9号，「古墳に於ける埴輪土偶埋没の位置」によると，雀宮駅の北方約5～6町となっている）にあったが，明治17年（1884）3月の，日本鉄道株式会社の線路施設工事によって，墳丘の一部が削平された。その後，明治28年（1895）1月の雀宮駅停車場開設に当たり，墳丘の東側3分の1ほどが削平され，大正元年（1912）10月の複線工事に際して，墳丘のすべてが削平された。

綾女塚古墳は，南面する前方後円墳であったが，規模は不明である。

明治17年の削平の際に，東側くびれ部から，女子人物埴輪2体が出土している。また，明治28年の工事の際には，石室が検出されたが，詳細は不明である。

明治31年（1898）8月発行の，『考古学会雑誌』第2篇第4号所収の「下野国河内郡アヤメ塚の埴輪土偶」によると，出土した女子人物埴輪のうちの1体は，腰部以下と首が欠損し，現存高48.4センチを測る。襟には三角形の刻みがあり，胸には紐が垂れている。腰には，帯と思われる二条の線があり，その下に「∧∧」形の線刻がある。

他の1体は，ほぼ完形である。この人物埴輪は，頭髪と着衣が，きわめて特徴的に表現されている。頭髪は，分銅形の粘土板を，後頭部に貼り付けることによって，髷の中央を紐で結んだ島田髷風の頭髪を表現している。着衣は，首から腰までである。襟の形は，まるく切り取った形の盤領（あてくび）である。前は，左前に合わせて，胸と胴の二か所を紐で結んでいる。結び目は，二つの輪とその間から垂れた2本の紐端によって表現されている。また，着衣の前，襟から裾にかけて三角形の線刻が縦に配列されている。この部分は，彩色されている。そのほか，首には小さな円形の粘土板を多数貼り付けて，首飾りを表現し，両耳には環状の耳飾りも下げている。

両者とも，古墳時代の女子の装束を知る上での，かっこうの資料である。

（分布図135頁・図版317頁）

（210）赤沢高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 中島町775ほか
遺跡番号 {市 210 / 県 262}

平坦な林地と畑の相互する旧上三川街道沿いの西側に位置する。

雑木林の中で南北に2基の高塚がみられるが，立地状況から考えて供養塚と思われる。

なお，この遺跡は県登録中島古墳群を改称したものである。

（分布図135頁・図版317頁）

（211）芋 内 遺 跡

種別 集落跡　時期 奈良　現状 畑　所在地 中島町643ほか
遺跡番号 { 市211 / 県 － }

主要地方道宇都宮結城線の東方の神社を中心にして立地している。
遺跡の表土上に土師器の破片が散布しているが時期は奈良時代と考えられる。

（分布図134頁・図版317頁）

（212）雀宮東浦遺跡

種別 散布地　時期 奈良　現状 畑　所在地 雀宮町329－13ほか
遺跡番号 { 市212 / 県180 }

東北本線と新幹線との間に位置している。
現況は，畑で宅地化が進んでいるが，遺跡の表土上には奈良期と考えられる土師器と須恵器の破片が散見できる。
なお，この遺跡は県登録雀宮駅東遺跡を改称したものである。

（分布図134頁・図版317頁）

（213）雀宮駅東遺跡

種別 集落跡　時期 奈良　現状 畑　所在地 雀宮町401－2ほか
遺跡番号 { 市213 / 県181 }

雀宮駅の東側段丘の東縁に新幹線をはさんで位置する。
遺跡の表土上には，奈良期と考えられる土師器の破片が散布している。
なお，この遺跡は県登録雀宮駅裏遺跡を改称したものである。

（分布図134頁・図版317頁）

（214）牛塚東遺跡

種別 集落跡　時期 奈良　現状 畑　所在地 雀宮町444－2ほか
遺跡番号 { 市214 / 県183 }

牛塚古墳（市遺跡番号221）の東側の新幹線沿いに位置する。
現況は，畑であり附近の水田との比高差は約4mである。東西100m，南北300mの範囲に遺物の散布，表土上には，奈良期と考えられる土師器の破片が散在する。

（分布図130頁・図版317頁）

（215）上 坪 遺 跡

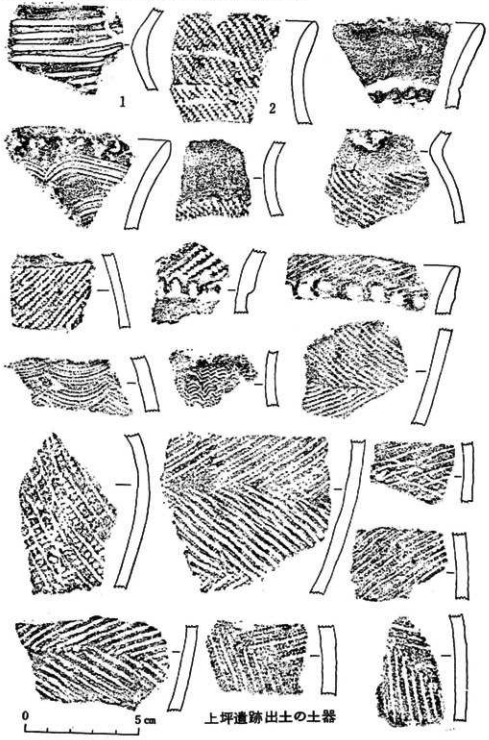
種別 集落跡　時期 弥生～奈良　現状 水田・畑
所在地 針ケ谷町1,257ほか　遺跡番号 { 市215 / 県245 }

針ケ谷町内を通る県道安塚雀宮線の道路の北側の南北に続く低台地上に立地する。
当遺跡の東西両側は，低い水田となっており比高差は約3mである。現況は，梨畑と水田であり遺物の多くは，故野沢岩蔵氏（幕田町）が所有していた。また同氏は，昭和23年10月に本遺跡城試掘を行い，二軒屋式土器，土師器，須恵器などを検出している。

－ 参考資料 －　宇都宮市史第1巻（昭和54年 宇都宮市）

本市針ケ谷地内の上坪，中坪附近には，弥生土器片が多数散布していることは，昭和6年以来野沢岩蔵によって注目され，野沢は「有史以前の針ケ谷」（『下野史談』第16巻22号）の中で，弥生土器について紹介している。
上坪遺跡は東武宇都宮線安塚駅の北東部に位置し，姿川の左岸低台地上にある。ここは現在畑地と宅地になっている。野沢は昭和23年11月に本遺跡の試掘を行い，ここに示した二軒屋式土器片のほか土師器，須恵器などを発見している。試掘結果については「針ケ谷上坪弥生式土器」（『下野史談』第26巻第2号）と題し発表している。
図の1は頸部破片であるが，二軒屋式の土器とは異なった文様が施されており，沈線を横走させている。この沈線文は中期のものとは異質のものであるので，後期に

位置づけられるものであるが類例は発見されていない。2は縄文を器全面に斜走させたもので，器形は口縁部が外反する壺形土器と思われるが，二軒屋式より一時期古い後期初頭に編年される。これは埼玉県北半部に分布する吉ケ谷式土器に似たものであり，近年この種の土器は県内では芳賀町東秋場，真岡市井頭，南河内町薬師寺南，国分寺町紫の諸遺跡などで検出されている。



上坪遺跡出土の土器

（分布図130頁・図版317頁）

（216）上坪新田遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文～奈良　**現状** 畑
所在地 針ケ谷町520ほか　**遺跡番号** {市216 県224，228

住宅が建ち並び都市化が進むほぼ平坦な畑に位置している。

西側は，なだらかな傾斜となり南北に帯状に続く水田に接し，この水田を隔て上坪遺跡（市遺跡番号215）と対する遺跡の表土上に縄文・弥生・土師器の破片が散布している。

なお，この遺跡は県登録中坪北遺跡と上坪東遺跡を併合したものである。

（分布図145頁・図版317頁）

（217）熊野神社南遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良　**現状** 畑　**所在地** 針ケ谷町1052ほか
遺跡番号 {市217 県242，243

針ケ谷町の熊野神社の南の平坦地に位置する。

遺跡の表土上に土師器と須恵器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録下幕田遺跡と熊野神社南遺跡を併合したものである。

（分布図145頁・図版317頁）

（218）立海道遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳・奈良　**現状** 畑　**所在地** 針ケ谷町985ほか
遺跡番号 {市218 県244

4号国道から安塚に通じる路線の南側に接した平坦な畑に位置する。

なお，この遺跡は県登録下幕田北遺跡を改称したものである。

（分布図145頁・図版318頁）

（219）見 明 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・弥生・奈良　**現状** 畑・墓地
所在地 針ケ谷町911－2ほか　**遺跡番号** { 市219 / 県227

東側に低水田が南北に続き，東は赤岩遺跡（市遺跡番号227）に接する平坦な畑に位置している。

遺跡内に朝日霊園があり，表土上に縄文・弥生・土師・須恵器の破片が散布している。

なお，この遺跡は県登録中坪Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図146頁・図版318頁）

（220）二 子 塚 古 墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 針ケ谷町410－19ほか
遺跡番号 { 市220 / 県216

雀宮中学校の西側に位置する。

東西に通る道路のため古墳の中央部が削平され，前方部と後円部が二つに分断されている。

前方後円部とも現況は，雑木林であり規模は全長約45m，高さ3mである。後円部の西側の一部は，削平され民家の駐車場となっている。

なお，この遺跡は県登録双子塚古墳の一部である。

（分布図148頁・図版318頁）

（221）牛 塚 古 墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 墓地　**所在地** 新富町17番ほか
遺跡番号 { 市221 / 県23

田川の右岸の標高85mの台地縁辺部に立地しており，雀宮駅の南方に位置する。

文政7年，明治10年，昭和44年の3度調査が行われた。遺物は，明治10年の調査の際に掘り出されて国立博物館に収蔵された。墳丘は，さきの2度の調査でほぼ完全に破壊された。墳形は前方後円墳で全長56.7m，後円部径39m，前方部長さ17.7m，前方部前面幅17.7mである。後円部径に比べ前方部が著しく短かい帆立貝式の古墳である。なお，主な出土品は変形獣形鏡，五鈴五獣鏡，四鈴鏡，鈴釧，鈴杏葉，直刀柄，勾玉，管玉，小玉，丸玉等である。

－ 参考資料 －

1. 雀宮牛塚古墳（昭和44年 宇都宮市教育委員会）

発掘調査は古墳の現状からみて，内部主体及び副葬品の検出には全く期待が持てず，円筒埴輪列等もその存在が危ぶまれたので，調査の目的を墳丘平面形の復元一本にしぼり，日程の前半を前方部の検出に，後半を後円部の調査にあてた。

(1) 前方部の調査

前方部が南面して築造されたとみられる墳丘は，後円部の南側から削平されていて，くびれ部，前方部及びこの部分の外側にある周溝はその痕跡が全くなく，しかも戦時中軍需工場建設の厄にあって，地面はすべてレベルになっている。

削平された土地の大部分は家と宅地になり，家屋のほかに各種の小屋や垣根，庭が錯綜して，トレンチの設定は思うにまかせず，またトレンチの拡大も必要最小限度にとどめた。

トレンチの設定は，前方部前縁及び周溝前縁の検出を目的とする南北に長い中央の第1トレンチから開始し，予定の前半期間中と後半期の一部で13本のトレンチを掘り上げ，前方部西南隅角と周溝の西南隅角を確かめる拡張部を設けた。

前方部の長さは後円部の残存部分及びこの部分の周溝に比較して，著しく短かいことが判明した。また地形が東下りでもなく，基盤層であるローム層の上面もほぼ水平であるのにかかわらず，ロームに掘り込まれた周溝は東側が深く，西側が浅く掘られている。

この現象は前方部前面の周溝が東西で著しい対称をなす。周溝の前縁東南隅角付近では，周溝の掘り込みがロームの上面から55～65センチ，表土上面からでは80～90センチに及ぶが，同西南隅角付近の掘り込みはローム上面から35～40センチ，周溝の前縁部ではローム上面から35センチの掘り込みである。

同じように前方部東側の周溝では，ローム上面から約60センチほど掘り込まれている。

前方部の築土はすべて失われており，結局ロームに掘り込まれた周溝の内縁で位置を決定するほかはなかった。前方部前縁は一応全部検出できたが，崩壊の部分があってやや湾曲し，東南隅角は削られていて，この部分は側面と前縁の線から推定の点を求めた。このようにして求められた前方部前縁の幅は凡そ17.7m強である。

周溝の前縁は，1，5，7，8トレンチの落ち込みを連ねると弱い弧状をなすことが分った。この湾曲を無視して，前縁の両隅角から直線の距離を測ると凡そ35.5mとなり，前方部前縁のほぼ2倍の長さである。

前方部封土両側の検出は庭の植込みや私道をさけて東側に4トレンチ，西側に14，15，16トレンチを設けて調査した。国鉄東北線の鉄道敷に接した東側はすべての点で保存がよく，4トレンチで前方部の側面と周溝が検出できた。西側に軍需工場の建物跡のためか掘り込みが多く，これに円筒埴輪やガラス，石炭が投げ込まれていて側面の線は明確にならなかった。

前方部西南隅角から側面にのびる線と，西側に設けられたトレンチでは側面の方向が一致せず，隅角からの線を追求しようとしても，植込みと私道に阻まれてトレンチを設けることができなかった。従って前方部西側の側面の線は，東側面の線を前方部前縁の中点から求められた封土の中軸線から折り返すほかに方法がなかった。

前方部の大体の位置と，周溝の関係が明らかになるにつれて，墳丘の片寄りが判然としてきた。簡単にいえば，前方部の西と東では周溝の幅が異なり，前方部前縁の線と周溝前縁の線が平行の関係にならないというわけで，周溝に対して封土がゆがんだ位置にあると判明したわけである。

前方部東南隅角から周溝東縁までの距離が7.4m，同西南隅角から周溝西縁までの距離が12.1mで，西側が東側よりも4.7mほど長くなっている。即ち前方部が東にゆがんだ形でつくられていたわけである。

周溝トレンチのうち，6，9，13トレンチでは，周溝の外側に幅50～60センチ，深さ15センチほどの周溝が発見された。この周溝の外側は周庭帯になるので，この関係の遺構か或いは古墳築造の縄張りの跡かとも考えられるが，同巧のものは前面及び西側の周溝では全く検出されていないので，ここでは溝のあった事実だけを記しておく。

周溝の中からは若干の遺物が出土している。1，2トレンチでは前方部の前縁に接して円筒埴輪片が発見され，6トレンチでは周溝内に堆積した黒土層の中からは新しい時期の土師器が出土した。1，8，9トレンチではそれぞれ1カ所ずつ周溝の底面上に炭，灰，獣骨片，貝片がひとかたまりになって発見された。発見の層序が深い位置だけに，何か想像をめぐらしたくなる遺物である。

(2) 後円部の調査

墳頂が分断されているとはいえ，後円部の裾野から周溝は，外見的にはいかにも原形を保っているかに見えた。前方部検出の困難さに比較すれば，後円部の原形追求は容易に行えるものと当初は考えていた。このため周溝の外縁検出に10トレンチ，墳丘裾部の検出に11，12トレンチ，墳頂の確認に小トレンチを設けて一気に外形検出の要所を押えにかかった。

周溝の外縁を調査した10トレンチは大体予想した通り，現状で遺存している周溝外縁の線がそのまま周溝本来の外縁であると断定できた。墳丘の裾部に円筒埴輪片が散出するにもかかわらず，一向に姿を現わさなかった。表土にほとんどなく，ロームを混じた築土が厚く重なっていたが，この築土が非常に脆弱でしかも粗い粒状を呈し，極端にいえばボタ山の堆積に似て，掘ればざくざくと崩れ流れる状態であった。これは古墳本来の築土ではないと判断した。墳頂部も全く同じで，粒度の粗い築土がただ重なっているに過ぎなかった。

各トレンチの所見を総合して，墳丘の形をした現状の後円部は，一度破壊した築土を再び盛り上げたものであると考えざるをえなくなった。こうなると時間をかけて測量した等高線も全く無意味であり，これをもとに断面形を作図することも勿論無意味である。残された調査法は，墳丘を基盤層まで大きく切断し，断面観察によって墳丘本来の形を復元するしかなかった。墳丘の南側は垂直に近く切断されて，すぐ下に家がある。調査中に築土が崩壊する危険性もあるので，トレンチは墳丘の中心部に推定される地点を北に外して東西方向の17トレンチを設け，T字形に南北方向の18トレンチを組んで重機械を使用し，墳丘を切断した。

切断の結果事前に考えていた通り，内部主体を推定させる遺構，遺物は全く検出されなかった。墳丘の切断面は第3図1（東－西），同2（南－北）に示す通りで，最下層はローム，その上は黒色土層で自然層である。円塚古墳本来の築土はこの上にのった縦線の部分だけで，最も厚く残っていた個所で厚さ1.5mに過ぎなかった。この上の土層はすべて古墳を破壊した後に，崩土をもう一度積み重ねたものである。後円部に接する周溝の内縁も，18トレンチの断面が示すように4mも埋められて本来の形は崩壊土の下にかくされていた。

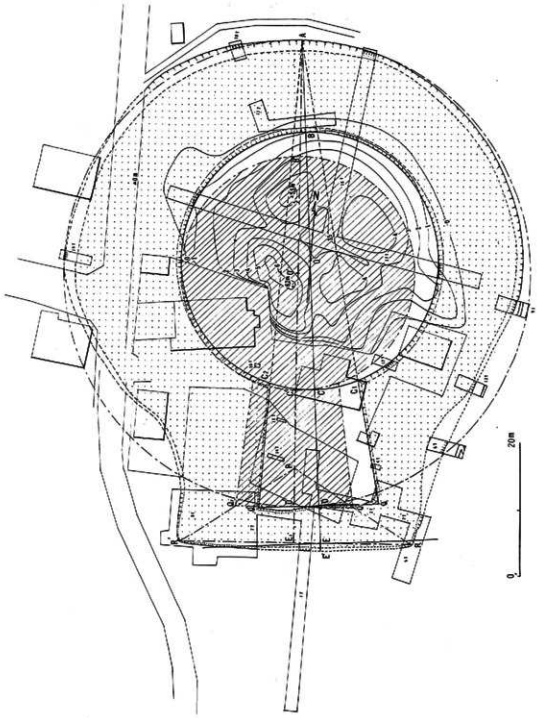
切断調査によって検出された後円部の外縁と，東側くびれ部に近い12トレンチで検出した外縁の4点を連ねるとほぼ完全な円形になり，後円部外周は直

径33mほどの円であると判明した。

周溝は西側に19トレンチを設けて発掘した結果，前方部の場合と同じく東側が狭く，西側に広くなっていることが明らかになった。

発掘調査で明らかになった墳丘の再築を検討してみると，土の始末の仕方に2通りあることが分る。即ち第1回目は後円部を平坦にするほど削り，その後に再びこの土を盛り上げて墳丘を大体原形にもどした工事で，第2回目は遺物を取るだけの目的で墳丘に十文字の大トレンチを設け，土を墳丘の外に排出したまま放置したもので，この土の状態が第2図の現状実測図になっているわけである。

さきに触れた通り，牛塚古墳が過去2回の発掘を受けているとするならば，第1回目は恐らく文政7年のものであろうし，第2回目は明治10年のものと考えてよさそうである。それにしても文政7年の発掘は非常に大がかりなものであったと思われるが，それにもまして墳丘を原形にもどす作業は発掘以上に大変な仕事であったと考えてよい。



牛塚古墳墳丘実測図

2. 栃木県史（昭和51年　栃木県）

鬼怒川流域の地域にある牛塚型の帆立貝式古墳である。田川の沖積地に面する標高85mの宝木台地の東縁に近い位置を占めている。古墳は国鉄東北本線の鉄道線路敷に接しており，雀宮駅の南方1.2キロの地点にある。この古墳の周囲にかって5，6基の小円墳があったが，今では東側に1基残っているにすぎなく，消滅した古墳に関するデーターも残っていない。

牛塚古墳は文政7（1824）年と，明治10（1877）年の2度発掘され，その後戦時中に前方部が工場敷地として削平されてしまい，昭和44年に墳形の図上復元のため第3回目の発掘調査を行った。

墳丘の全長は56.7m，後円部の直径が39m，前方部の幅17.7m，周溝は完全な帆立貝式で，この平面形は円周の一部に長方形の張出しがつく形である。

明治10年の発掘で出土した遺物が東京国立博物館に収蔵されている。内容は画文帯神獣鏡1，変形獣形鏡1，五鈴五獣鏡1，四鈴鏡3，鈴杏葉3，環鈴1，轡1，短甲片4，鈴釧1，勾玉12，管玉6，丸玉5，金銅張り耳飾2その他となっている。内部主体は木棺の破片が出土しているので，木棺直葬と思われる。

鏡のうち画文帯神獣鏡は舶載鏡で，同笵鏡が熊本県江田船山古墳以下9面あり，最近，和歌山県でも出土したと伝えられる。内区の外縁にある半円方形帯の方区は4文字ずつの銘がある。銘の文字は合計56字で，銘文は次のように判読される。

「吾作明竟　幽凍三商　配像萬彊　統徳序道　敬奉賢良　□刻無紀　白牙尊樂　衆□主陽　聖徳光明　富貴安樂　子孫番昌　學者高遷　士爵公卿　其師命長」

変形獣形鏡，鈴鏡は仿製鏡で，鏡背の文様は便化が著しく，特に四面の鈴鏡は鋳上りがよくない。馬具と環鈴は注意すべき出土品である。轡は大形のf字形鏡板の外側で，銜と引手が連結する型式である。鈴杏葉は五鈴を付した剣菱形の鋳造品であり，環鈴は大形で，鈴が内環に喰い込む六世紀型の鋳銅製品である。短甲片は三角板鋲留の新しい型式のものである。以上の資料から，本古墳の年代は，五世紀と六世紀の交から，六世紀前半の中ごろまでと想定される。

（分布図149頁・図版318頁）

（222）桜稲荷古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　東谷町896－2ほか
遺跡番号｛市222 県261

旧上三川街道に沿って続く水田と畑の相互する東谷町地内に立地する。

円墳で規模は直径約8m，高さ1mであり，墳丘の上に稲荷神社が鎮座している。

（分布図149頁・図版318頁）

（223）杉村遺跡

種別　集落跡・高塚　　時期　奈良・江戸　　現状　畑
所在地　東谷町916ほか　　遺跡番号｛市223 県－

上三川町に接する東谷町地内の大字杉村に位置する。

現況は畑で，表土上に土師器が散見できる。

なお，東側の山林の中に高塚が1基みられるが，与ほど削られており土層の状況から供養塚と考えられる。

（分布図148頁・図版318頁）

（224）双子塚古墳

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　東谷町499－1ほか
遺跡番号｛市224 県170

県立宇都宮南高等学校校庭の南側に位置する。

本来は，西面する前方後円墳であったが，前方部は明治24年（1891）の小学校建設に伴って削平され，現在は，後円部のみが残る。直径約18m，高さ4mである。

現在墳頂部に三ケ月様と千勝様がまつられている。

（分布図146頁・図版318頁）

（225）天狗原雀宮中前遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文～古墳　　現状　畑・山林
所在地　雀宮町1010－1ほか　　遺跡番号｛市225 県220

雀宮中学校の南側に接して東西に通る道路の南に位置する。

現況は，平坦な畑地であり表土上には縄文式土器，二軒屋式土器，土師器等の破片が散布している。

なお，この遺跡は県登録天狗原遺跡を改称したものである。

－　参考資料　－　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

雀宮町の天狗原（てんぐばら）にある後期の遺跡で，二軒屋遺跡（二軒屋式土器の標式遺跡）の南東約800mのところに位置し，国道4号線の雀宮から安塚（壬生町）に通ずる道路の南側にあって，現在は畑地と宅地になっている。本遺跡の発見は古く，すでに「下野中原遺跡調査概報」（『考古学』第10巻第10号，昭和14年）の中に附近の遺跡として紹介されている。これによると旧雀宮村雀宮にあって通称「天狗原開墾畑地」と称されていたことがわかる。

天狗原遺跡出土の遺物は野沢岩蔵が採集されて所蔵し，いまは野沢彰が継承して保存している。二軒屋遺跡出土の遺物がどこに保管されているのか不詳の現在，野沢彰が所蔵されている天狗原遺跡の土器は，二軒屋式土器の文様を知る上にきわめて重要な資料といえる。ただ残念なのはすべて破片であるため，器形が甕形土器か壺形土器，深鉢形土器なのか判別困難なものが多いことである。

天狗原遺跡出土の土器底部

（分布図146頁・図版318頁）

（226）島の前遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳・奈良　　現状　畑
所在地　針ケ谷町350ほか　　遺跡番号｛市226 県214，215

雀宮中学の南西部に位置する。

現況は，平坦な畑と水田であるが附近は宅地化が進んでいる。表土上に縄文及び土師器の破片が散在している。

なお，この遺跡は県登録石川遺跡と雀宮中南遺跡を併合したものである。

（分布図146頁・図版318頁）

（227）赤岩遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑
所在地　針ケ谷町371－2ほか　　遺跡番号｛市227 県226

針ケ谷地内の平坦な畑に位置する。

西側は，段丘状で三ツ矢遺跡（市遺跡番号229）並木遺跡（市遺跡番号228）へと続き，表土上には縄文，弥生，土師器の破片がみられる。

なお，この遺跡は県登録中坪(Ⅱ)遺跡を改称したものである。

（分布図145頁・図版318頁）

（228）並木遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳・奈良　　現状　畑
所在地　針ケ谷町844ほか　　遺跡番号｛市228 県241

針ケ谷町中坪の南北に通じる道路を境に西側に広がる地域で平坦な畑と開田地域に位置する。

道路東側は，三ツ矢遺跡（市遺跡番号229）であり，表土上に縄文と土師器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録下幕田南遺跡を改称したものである。

（分布図145頁・図版318頁）

（229）三ツ矢遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良　**現状** 畑　**所在地** 針ケ谷町807ほか
遺跡番号 市229 県238

西側を石橋町と境を接し，東に沢地状の水田が南北に続く畑に位置する。
表土上には，縄文・土師器の破片が散在している。
なお，この遺跡は県登録中坪南遺跡を改称したものである。

（分布図146頁・図版318頁）

（230）石川坪遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良　**現状** 畑　**所在地** 針ケ谷町227ほか
遺跡番号 市230 県212

石橋町と境を接する石川坪東南側に広がる台地上に立地する。
一部水田も見られるが，大部分は畑で表土上に縄文・土師器の破片が散在している。
なお，この遺跡は県登録上原団地南遺跡を改称したものである。
－ 参考資料 －　宇都宮市史第1巻（昭和54年 宇都宮市）
針ケ谷町にある縄文時代中期から晩期にわたる遺跡である。この遺跡は田川低地と姿川低地とのあいだに展開する宇都宮西台地上に位置するが，子細にみると低台地の舌状部にあたり，標高90m，附近の低地からの比高は約2mである。遺跡は広範囲にわたり畑地・宅地になっている。
この遺跡は昭和初年に野沢岩蔵によって注目され，針ケ谷遺跡とよばれていたが，針ケ谷町には上坪，中坪，石川坪（下坪）などにそれぞれ遺跡があるので，石川坪遺跡という名称で統一しておきたい。しかし針ケ谷の名は古くから用いられ，中央学界からも注視されていたことは八木奘三郎著『考古学』（明治37年）に針ケ谷の石棒が紹介され，また八幡一郎は「奥羽文化南漸資料」（『考古学』第1巻第1号，昭和5年）のなかで針ケ谷出土の晩期土器をとりあげている。野沢は「有史以前の針ケ谷」（『下野史談』昭和13～14年）と題して本遺跡出土の遺物を詳細に発表している。これによると石器には石鏃，石錐，石錘，スクレイパー，打製石斧，石皿，凹石，敲石，砥石，石棒，独鈷石，石臼，石剣などがあり，土器以外の土製品には土偶，土版，土鐸などが出土している。
土器は中期から晩期にわたる数多くの型式がみられ，中期の加曽利E式（Ⅰ式～Ⅲ式），後期の称名寺式，堀之内式（Ⅰ式・Ⅱ式），加曽利B式（Ⅰ式・Ⅱ式），安行Ⅰ式，安行Ⅱ式，晩期の安行Ⅲ式，大洞B－C式，C_1式，C_2式などが網羅される。とくにあとに示す安行Ⅰ式は，口縁部の一部と底部がわずかに欠けているが逸品であり，南関東出土のものと大差がないものである。
野沢の収集したこれらの資料は，一括して宇都宮市指定の文化財として保存されている。ほかにも針ケ谷周辺の好資料が多数ある。

（分布図146頁・図版318頁）

（231）赤土山遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良　**現状** 畑　**所在地** 南町10番21号ほか
遺跡番号 市231 県210，211

雀宮南小学校西のなだらかな西南傾斜の畑に位置する。
附近は，住宅地としているがわずかに残る畑には縄文土器の破片が散見できる。
なお，この遺跡は県登録下原遺跡と富士見団地北遺跡を併合したものである。

（分布図146頁・図版319頁）

（232）富士見団地北遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑
所在地 富士見町580－3ほか　**遺跡番号** 市232 県211

赤土山遺跡（市遺跡番号231）の南側一帯の台地上に位置する。

住宅街として開発されている遺跡の表土上には，縄文・土師器の破片が散在している。

なお，この遺跡は県登録富士見団地北遺跡の一部である。

（分布図148頁・図版319頁）

（233）宇都宮機器南遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳　**現状** 畑　**所在地** 下横田町848ほか
遺跡番号 { 市233 / 県184

東北本線の東側の段丘上に立地し，宇都宮機器の南に位置する。

現況は，畑で土師器と須恵器の破片が散見できる。

（分布図148頁・図版319頁）

（234）多功神塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 畑　**所在地** 茂原町1106ほか
遺跡番号 { 市234 / 県185

茂原団地最北端に位置する植木畑の中に直径約16m，高さ2mと共同墓地に直径約9m，高さ1.5mの2基の円墳がある。前者は，墳頂が削平されておりその上に多功神をまつっており，後者も北から北西部にかけて墳丘が削られている。

この古墳の周辺の畑に土師器の破片を散見することができる。

なお，この遺跡は県登録茂原多功神塚古墳群を改称したものである。

（分布図149頁・図版319頁）

（235）笹塚古墳（県指定）

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 水田　**所在地** 東谷町414ほか
遺跡番号 { 市235 / 県22

田川の左岸段丘上の標高約80mに立地する。

墳丘は，全長約100mの前方後円墳で後円部裾が若干削平されている。後円部は，直径63m，高さ10.5m，前方部は幅48m，高さ9mであり主軸でほぼ東西である。

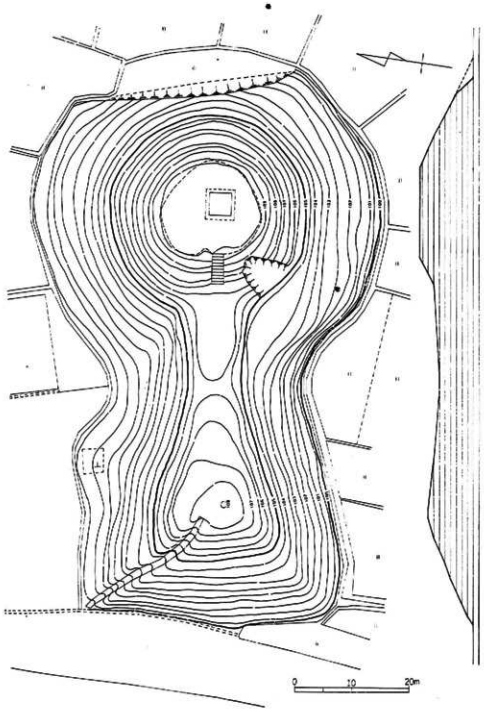
後円部墳頂部が削平されて薬師堂が建てられているが，周溝の跡も水田の畦畔でよく保存されており，典型的な中期型の大前方後円墳である。

－ 参考資料 －　栃木県史資料編考古（昭和51年　栃木県）

本古墳は，宇都宮市街地から上三川町に至る県道を，東谷十字路からわずか南に進んだ道路脇に位置し，西側を約700m隔てて南流する田川の左岸段丘上にある。市内最大の中期型の前方後円墳で，県指定の史跡である。

西面する墳丘の復元全長は約100m，後円部の直径74m，高さ9.5m，前方部の幅44m，高さ5.5m。墳丘はおい茂る樹木に覆われて外からの眺めはきかない。後円部の墳頂は頂平されて西向きに薬師堂が建ち，同じく東側の裾部はかなり削られて水田となる。堂正面の石段の南脇には，盗掘と思われる跡が大穴となって残っている。周濠の跡は水田になっているが，畦畔の形から逆盾形の周濠が回っていたことがわかる。

本古墳の周辺には数基の古墳が群在し，東谷古墳群を形成している。すなわち本古墳の南に近く円墳鶴舞塚がある。墳丘の西側面は県道に断ち切られ，南側面は削平されて宅地となっている。東谷十字路脇に二子塚がある。もとは西面する前方後円墳であったが，明治24年小学校の敷地となって，前方部が崩され，後円部のみ現存している。笹塚古墳の東方水田を隔てて，二段築成の円墳松の塚があり，更にその東には円墳権現塚がある。



笹塚古墳墳丘実測図

（分布図149頁・図版319頁）

（236）車塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 東谷町21ほか
遺跡番号 { 市236 / 県 91

笹塚古墳（市遺跡番号235）東南の雑木林に位置している。
5基の円墳が所在し，一番大きな車塚古墳は直径約35m，高さ6mである。
なお，この遺跡は県登録東谷古墳群の一部である。

（分布図149頁・図版319頁）

（237）原古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 墓地・畑　**所在地** 東谷町135ほか
遺跡番号 { 市237 / 県 91

古来から東谷十塚と呼ばれる東谷の古墳群の一部である。
原古墳群は，共同墓地内の2基の円墳からなり規模は直径約20m，高さ3mと直径16m，高さ2mである。
なお，この遺跡は県登録東谷古墳群の一部である。

（分布図149頁・図版319頁）

（238）権現塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 畑　**所在地** 東谷町170ほか
遺跡番号 { 市238 / 県 91

古来から東谷十塚と呼ばれる東谷古墳群の一部である。
権現塚古墳群は，直径約30m，高さ5mの円墳である権現塚ともう1基の円墳からなっている。
なお，この遺跡は県登録東谷古墳群の一部である。

（分布図149頁・図版319頁）

（239）松の塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 水田　**所在地** 東谷町200ほか
遺跡番号 {市239 県91}

古来から東谷十塚と呼ばれる東谷の古墳群の一部である。

笹塚古墳（市遺跡番号235）の南東に位置する円墳で周囲は水田である。墳丘は，二段に築造されているが，墳丘裾の一部が削平され水田になっている。墳丘の径は約50mで若干東西に長く西側には，周溝の一部が畦畔として弧状に残っている。

なお，この遺跡は県登録東谷古墳群の一部である。

（分布図149頁・図版319頁）

（240）鶴舞塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 宅地・水田　**所在地** 東谷町407－1ほか
遺跡番号 {市240 県91}

東谷町の笹塚古墳（市遺跡番号235）の南に隣接して位置する円墳であり，鶴蒔塚とも呼ばれている。

笹塚古墳と同様に南流する田川の左岸段丘上に立地する。墳丘の西側約¼は県道，南側約½が人家によって削平されている。周溝は，現在水田化されているが約10mの周溝の状況が畦畔によく残っている。昭和58年度，本墳の発掘調査を行い，整理作業中である。

なお，この遺跡は県登録東谷古墳群の一部である。

－ 参考資料 －　宇都宮市史第1巻（昭和54年 宇都宮市）

笹塚古墳の南約50mに位置する円墳である。笹塚古墳と同様に南流する田川の左岸段丘上に立地する。標高は約80mである。

墳丘の西側約4分の1は県道宇都宮－上三川線によって削平され，南側約3分の1が人家によって削平されている。削平の際に鉄片が少量出土したと言うが，実体は不明である。断面観察では内部主体は確認されないが，横穴式石室ではないと推定される。

周湟は現在水田化されており，周湟の状況は畦畔によく残るが，それによると幅約10mの周湟が，隣接する笹塚古墳前方部の南側周湟を一部切っている状態が観察できる。このことから見て笹塚古墳より後に築造されたのではないかと思われる。

（分布図148頁・図版319頁）

（241）権現山北遺跡

種別 集落跡　**時期** 旧石器・弥生・古墳～平安　**現状** 畑・水田
所在地 茂原町261ほか　**遺跡番号** {市241 県187}

茂原町字花欠の小台地上に立地する。

この小台地は，権現山古墳群（市遺跡番号242）を含む北部一帯に広がり標高約83mである。東方を田川が南流しており，その氾濫原との比高は約5mである。

この小台地全般から弥生式土器や土師器を散見することができる。出土遺物よりこの小台地の遺跡は，弥生時代中期から奈良・平安時代の大集落であったと考えられる。なお，当遺跡の北東部は昭和52年（1977年）宇都宮市教委が主体となり宇都宮大学考古学研究会が発掘調査した結果，竪穴式住居跡18基，土壙17基が検出された。出土遺物は．石製模造品，鉄器，古代須恵器等がみられた。また，旧石器時代の石器も出土している。

－ 参考資料 －

1. 権現山北遺跡（昭和54年 宇都宮市教育委員会）

今回の発掘調査は，権現山古墳の北方に広くひろがる権現山北遺跡のうち，開田により消滅することになった北東端の一角（60m×40m）を対象としたが，約2000㎡の小範囲に竪穴住居址18，土壙19，溝状遺構3の遺構が検出された。それに伴って多くの土師器・須恵器・石製模造品などが出土した。また遺構は検出されなかったが，先土器時代の石器や縄文式土器・弥生式土器が採集されており，発掘地区周辺におそらくはそれぞれの時代の遺構が遺存しているものと思われ，権現山北遺跡は，先土器時代から平安時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であると推測される。

検出された遺構・遺物の特徴的な点をいくつか列記してまとめとしたい。

発掘によって検出された住居址18軒は，五領期1（8号）和泉期8（1・2・5・6・7・11・14・18号）鬼高期6（4・9・10・12・13・16号）国分期2（3・17号）不明1（15号）に区分されるが，このうち2・4・5・7・9・12・13・14・16号址

は焼失家屋であり，丁度半数の９基が火災に遭遇したことになる。また発掘区の西側や南側の隣接地区からも表土を少し掘りかえすとかなり多くの炭化木が出土することから，台地上の集落の大半が何回にもわたって類焼したことが知られる。本遺跡の立地する低台地上からは東方はるかに筑波山を，北西方のかなたに男体山を見ることができ，目をさえぎるものがないが，同時に風当りも強く，一軒で失火をおこせば忽ち集落の大半が類焼したであろうことは容易に想像される。集落間の争いによる焼失，あるいはアイヌの風習のように病死者が出ると自ら火をつけるなどの理由も考えられるが，立地条件からみて自然の影響が大きいといってよいのではなかろうか。

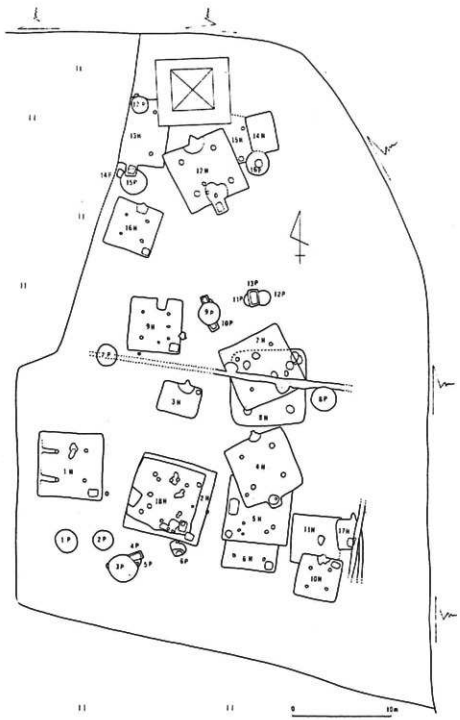
住居址は和泉期のものが８軒でもっとも多い。一般に和泉期の集落の特徴として，①和泉期だけの単純遺跡が多い。②前後の時期の集落が存在するのに和泉期の住居址のみ欠落する遺跡が多い。③大規模集落があまり認められない。④和泉期の住居址どうしの切り合い関係はあまりみられないなどの現象が指摘されているが，本遺跡の和泉期のものはやや趣を異にする。①と②とは関連をもつ現象であるが，すでに「Ⅱ．遺構と遺物」の章で明らかにされたように，本遺跡では五領－和泉－鬼高と集落の連続性が認められ，①・②の特徴とは異なる。③については，発掘地区が遺跡全体からみれば北東部の一角に限られていることや，和泉期のものも２期以上に細分されることなどから明言はしがたいが，検出された住居址群のうち和泉期のものが約半数を占めていることから，同期にかなりの集落が営まれたことを推測することも可能であろう。④については，2号址と18号址５号址と６号址の間にそれぞれ重複や切り合い関係が認められ，これまた和泉期の一般的特徴とは異なる。和泉期の一般的特徴を高橋一夫は「五領期において，生産に対して人口が飽和状態に達し，和泉期には生産性を高める農業技術や農具を持ちえず，周辺におそらく世帯を単位として分散（分村）していった。」結果生じたものと考えたが，本遺跡のように４つの特徴の範疇に入らないものについても「広大なバックマーシュを持ち，人口が増加すればさらにそれに対して生産を上げられるところでは分村の必要もなく，大規模な集落の維持ができたのであろう」と示唆に富んだ指摘をしている。本遺跡の存在する低台地の周囲は水田の好適地が広がり，弥生時代以来連続して農耕が営まれ鬼高期まで分村することはなかったものと思われる。ただ今回の発掘によって真間期の住居址が一軒も検出されず，表面採集によっても同期の土器が認められないことは注目される。発掘区域を拡張すれば検出される可能性もあるが，移住したことも考えられる。本遺跡の北東約１㎞のあたりは律令制下に条里がしかれたことが知られており，真間期には風当りが強く火災に遭いやすい台地上から，新たに整備された水田の近くの微高地に移住したのかもしれない。今後の検討課題である。

和泉期について多いのは鬼高期のもので６軒をかぞえる。このうち特に注目されるのは４号住居址である。火災に遭い，とるものもとりあえず避難したのであろうか，常住の生活をそのまま示すかのように，日常雑器である大量の土師器が散乱することなく，当時置かれてあった位置・状態のまま検出された。祭具である石製模造品も土器群からは離れた位置から２０個以上も出土し，鉄鏃・鉄鎌など，鉄製品も３点を数える。一般に焼失住居址からは遺物が多く出土するが，４号址は特に顕著で同期の他の住居址との格差は大きい。大家族の家父長の住居であったことをおもわせる。本址は竪穴住居内での日常生活の状況を示す好資料というだけでなく，当時の家族関係を示唆する重要な資料といえるであろう。

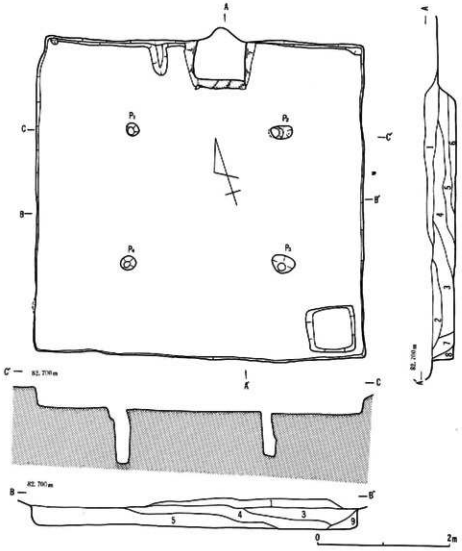
本遺跡を特徴づける遺物としては滑石製の石製模造品がある。住居址１８軒のうち１０軒から出土している。内わけは和泉期６軒，鬼高期２軒，国分期２軒である。とくに多いのは和泉期で，検出された住居址８軒のうち６軒（1・2・5・6・11・18号）から出土している。これに対して鬼高期には６軒のうち２軒（４・１２号）から出土しただけである。ただ検出された遺物の量からみれば，和泉期に比して鬼高期の場合は，４号址から２０個以上，１２号址からも１３個というように大量に出土していることが特徴である。屋内祭祀を反映する石製模造品が，本遺跡の周辺雀宮一帯からかなり採集されることは古くから知られているところであるが，今回の発掘結果から石製模造品の使用の推移をたどれば，和泉期後半に多くの個々の住居が個別に屋内に石製模造品を保有し，鬼高期になると，少数の大量に保有する住居と多くの全く保有しない住居とにわかれるようである。住居址出土の石製模造品についてはすでにいくつかのすぐれた研究があり，高橋一夫は，「和泉・鬼高期に家父長層の竪穴から出土し，鬼高Ⅱ式期に減少し，真間期に消滅する。」とし，鬼高Ⅱ式期における減少の原因を開発などによる地縁的な村落の形成とそれに伴う村社の発生とに求めた。一般に和泉Ⅱ式期から鬼高Ⅰ式期にかけての時期に最盛期があり，真間期にはほぼ消滅することはよく知られることであるが，今回の発掘結果からみると，鬼高Ⅱ式期に該当する４号址から最も多く出土しており，鬼高Ⅱ式期に減少するとはいいがたい。本遺跡の場合，高橋の指摘する「開発などによる地縁的村落の形成」は北東にひろがる条里の存在からみて真間期以降のこととする方が妥当であろう。本来支配者階級の独占的な呪具であった鏡・玉・剣が，滑石製の小形模造品であるとはいえ，被支配者階級の住居に保有されるようになったのは，古墳時代の社会の中での大きな変化であ

ることはまちがいないが，模造品減少の時期のずれは，地域により社会の発展のずれがあることを反映しているのであろう。なお，国分期とみられる２軒の竪穴（３・１７号）からも石製模造品が出土しているが，両住居址に伴うものかどうかは不明である。

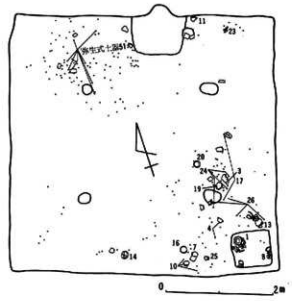
住居址出土の遺物でもっとも量の多いのは土器であるが，そのうち特に注目されるのは16号住居址出土の須恵器と17号住居址出土の土師器である。前者は形態・焼成からみて恐らく畿内からはこばれてきたものと思われる。後者は坏の外面に「大大上轉念念右」とも見える意味不明の７文字の墨書がある。かつて秋田城址でも須恵器の高台付坏の内面に「念」の字を含む７字の墨書がみられたとのことである。本遺跡のものは，赤外線フィルムで撮影し，赤外線テレビでも観察したが文字そのものは明確にはならず，習書によるものか呪的なものか或いは他の意図によって書かれたのかすべて不明である。今後の検討に俟ちたい。



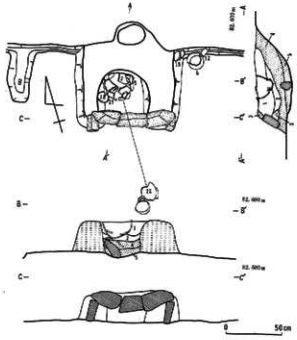
発掘調査区域内遺構分布図



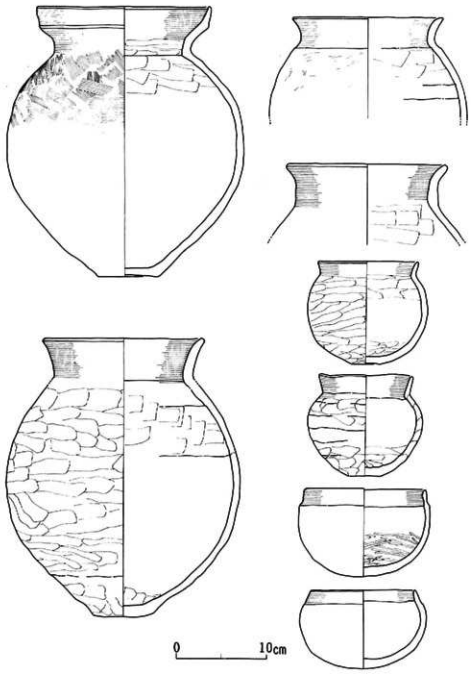
16号住居址実測図



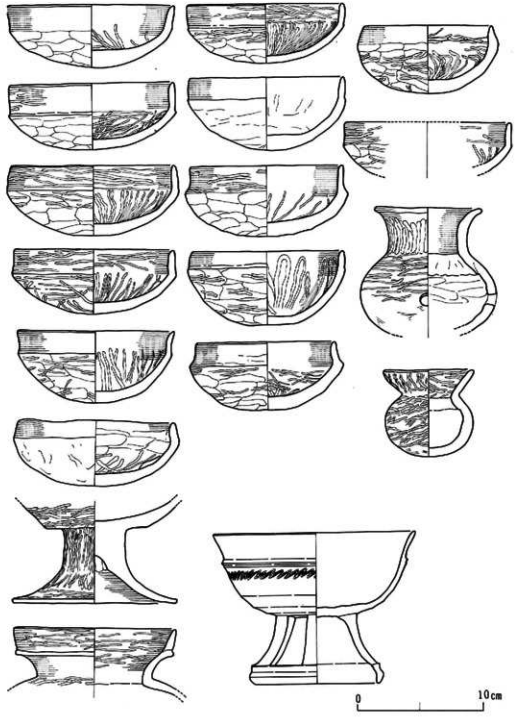
16号住居址遺物出土状態実測図



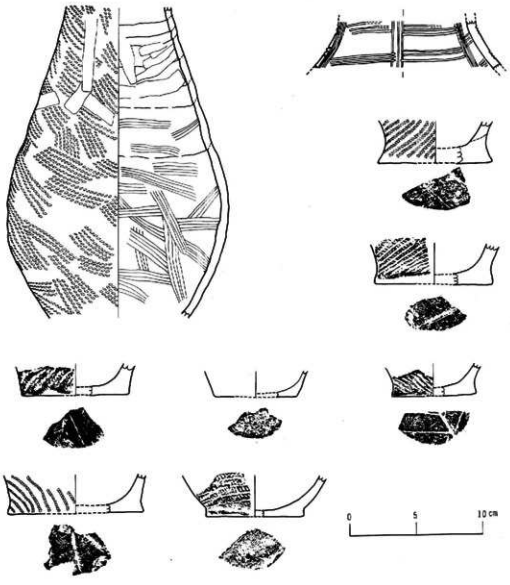
16号住居址カマド実測図



16号住居址出土土器実測図



16号住居址出土土器実測図



弥生式土器拓影図

2. 宇都宮市史別巻（昭和56年　宇都宮市）

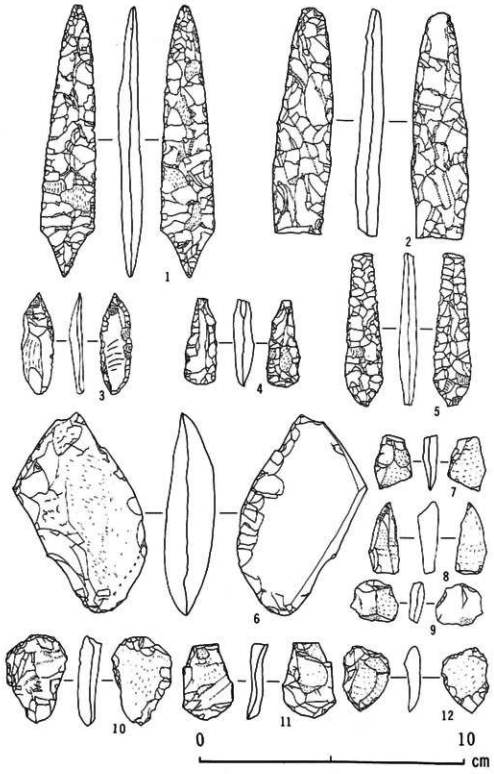
茂原町内の権現山北遺跡は，昭和52年に宇都宮市教育委員会が主体となり，宇都宮大学考古学研究会が発掘調査した。遺跡の主要な時期は古墳時代中期・後期であるが，旧石器時代の石器や弥生時代中期・後期の土器も出土しているので，ここに新資料として実測図・拓影図を示しておきたい。

報文『権現山北遺跡』（久保哲三編，昭和54年，宇都宮市教育委員会）の中で，五十嵐利勝は「権現山北遺跡採集の石器について」と題し，第1図に示した旧石器12例を紹介している。五十嵐によればこれらの石器は山崎芳家が大部分採集されたものであるが，1は山崎義一，3・5は故山崎茂吉，6は五十嵐が採集されたものである。すべて表面採集の資料であるので，石器の産出層位は不明であるが，旧石器時代の資料として列挙されているので，以下報文によって略記しておきたい。

1は長さ10.35センチ，最大幅2.05センチ，厚さ7.9ミリで，両面とも押圧剥離がなされている有舌尖頭器である。石質は流紋岩である。2は上・下端が欠損した有舌尖頭器で，現存長さ8.6センチ，最大幅2.14センチ，厚さ8.8ミリで，両面とも押圧剥離がなされ，石質はチャートである。3は長さ3.73センチ，最大幅1.13センチ，厚さ5ミリで，石質はチャートである。これは尖頭器またはスクレイパーの機能をもった石器である。4は上端がわずかに欠損しているが，現存長さ3.3センチ，最大幅1.2センチ，厚さ8ミリで，石質はチャートである。錐または尖頭器に類した機能をもつ石器であるというが，錐とした方がよいかもしれない。5は1・2と同様に有舌尖頭器であるが，上端部が欠損しており，現存長さ5.84センチ，最大幅1.4センチ，厚さ6.8ミリで，両面とも押圧剥離がなされている。石質は流紋岩である。

6は掻器の一種であり，全体的に雑な作りで，長さ7.62センチ，最大幅4.34センチ，厚さ1.9センチである。一面の一方に幅広い剥離が施されている。石質は砂岩である。7〜11は剥片の一部に細かい剥離が認められる。8は錐であろう。10は剥片を加工した石器で，石質は流紋岩である。12は小さなスクレイパーの機能をもった石器である。

以上は旧石器時代の石器について，五十嵐の記述を参考にして略記したが，石器の形態から推察すると，本市史第1巻記載の瑞穂野団地・上の原・雀宮の諸遺跡出土のものとほぼ類似したものが認められるので，田原ローム層又は宝木ローム層最上部の産出層位と思われる。芹沢長介（東北大教授）の旧石器時代の編年によれば，晩期旧石器時代（中石器時代）に属するものであろう。



採集石器実測図

本遺跡からは縄文土器片や石鏃・石匙なども若干出土している。ほかに弥生時代中期・後期の土器が出土している。報文によると，中期の野沢Ⅰ式以降，後期の二軒屋式に至る土器が出土しているというが，拓影図でみる限りでは野沢Ⅱ式以降の中期土器と後期後半の二軒屋式土器が主体である。

（分布図148頁・図版320頁）

（242）権現山古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 茂原町311ほか

遺跡番号 { 市 242 / 県 8

権現山古墳は，宝木段丘縁辺の標高82mのところに立地する前方後円墳である。

墳丘の東側は，約3mの比高差をもって田川の沖積地に接する。墳丘の全長は約60mで，前方部幅約21m，高さ約3m，後円部径約40m，高さ5.6mである。現在，墳丘の東側裾は人家によってわずかに崩され，また，後円部のくびれ部寄りの部分が大きく削り取られているが，西側は周溝の残存状態も良好である。後円部墳頂には，神社が建てられている。

また，北方の雑木林の中に直径約18m，高さ3mの円墳がみられる。

なお，この遺跡は県登録権現山古墳を改称したものである。

（分布図148頁・図版320頁）

（243）茂原北原遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良　**現状** 畑　**所在地** 茂原町898－1ほか

遺跡番号 { 市 243 / 県 194

西側に隣接して新幹線が通る平坦な畑作地帯に位置する。

東方には，権現山古墳群（市遺跡番号242）がある。表土上には，土師・須恵器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録北原遺跡を改称したものである。

（分布図146頁・図版320頁）

（244）富士見向山遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳・奈良　**現状** 畑　**所在地** 針ケ谷町7ほか
遺跡番号 {市244 / 県212}

東西をそれぞれ南流する姿川と田川に挟まれた字都宮西部台地上に立地する。

当遺跡一帯は，なだらかな台地の西斜面で標高は約81mである。また，台地の西側に広がる水田面からの比高は5～6mである。現況は，畑であり表土上には土師器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録上原団地南遺跡を改称したものである。

（分布図150頁・図版320頁）

（245）西の前遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良　**現状** 畑　**所在地** 茂原町852ほか
遺跡番号 {市245 / 県191}

西側に接して新幹線が通る畑地に位置する。

遺跡東側は，水田で10m近い段差をもつ段丘上である。表土上には，土師器の破片が散在する。

なお，この遺跡は県登録西之前遺跡を改称したものである。

（分布図150頁・図版320頁）

（246）大日塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 茂原町401－2ほか
遺跡番号 {市246 / 県189}

茂原町内にあり，愛宕塚古墳群（市遺跡番号247）の北側に隣接している前方後円墳である。

墳丘の北側は，約3mの落差をもって権現山古墳群（市遺跡番号242）の所在する台地が北に延びている。東側は，約7mの差をもって田川の沖積地に接している。墳丘の主軸は，ほぼ東西であり前方部を西に向けている。墳丘の全長約40m，前方部幅3.3m，高さ1.3m，後円部は直径約28m，高さ5mであり，後円部が前方部に比べてやや高い。後円部墳頂には，現在小祠が祭られている。

なお，本墳の前方部前面にはかって円墳が存在し，そこから鋳銅製の銅鏃が出土している。

また，昭和58年8月の久保哲三氏（専修大学教授）の周溝確認調査の結果，本墳は愛宕塚古墳同様前方後方墳であることが確認された。

－ 参考資料 －　峰考古第3号（昭和56年　宇都宮大学考古学研究会）

本古墳はN－65°－Eに主軸を置きほぼ西面する小型の古墳である。古墳の南側及び北西側は整地されているが，墳丘と北側は雑木に覆われている。墳頂には現在小祠が祀られており後円部南側裾から祠にかけて参道による若干の変形が加えられている。南側くびれ部に造り出しのようなコンター線を描いているが，これが造り出しか後世の改変によるものかは発掘して周溝を検出しなければ断定できない。また後円部北側斜面には2つの土取り穴があるが，その他の保存状態は良い。

墳丘の規模を実測値で表わすと，全長38.5m，後円部径約24m，前方部幅約14m，標高は前方部86.437m，後円部88.503mで両者の比高は約2mである。前方部が未発達でかなり低く，古式の様相を呈する。

平面図をみると前方後方墳の可能性も考えられる。小型の古墳であり墳丘測量のみでは旧状を把握しにくいが，後円(方)部の東・南・北側それぞれが直線的なコンターを描いている。特に中段から裾部のコンターはむしろ前方後方墳的であり，南東コーナーでは方墳特有の稜が認められる。

尚，埴輪・葺石・周溝などの外部施設については今回の調査では確認できなかった。周溝に関しては古墳の南側をブルドーザーにより整地したとき，周溝らしきプランは確認されなかったということで，周溝を伴わなかったか，あるいは伴ったとしてもごく小規模のものであったと思われる。

（分布図150頁・図版320頁）

（247）愛宕塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 茂原町412ほか
遺跡番号 { 市247 / 県 － }

愛宕塚古墳は，茂原町内にあり東側は，田川によって形成された広大な沖積地が広がっている。沖積地面までの比高差は約8mである。形は，南面する前方後方墳である。全長は約48mである。前方部は幅約19m，高さ1.6m，後方部は，南北27m，東西22m，高さ4.3mである。前方部と後方部の高さの差は，約2.7mで前方部がかなり低い前期型前方後方墳であり，昭和52年3月から53年5月まで宇都宮大学考古学研究会によって発掘調査が行われた。

調査により主体部は，後方部にあり縦9m，横4m，深さ1.5mの掘り方の底面に掘られた。縦6.3m，横1m，深さ0.5mの土壙であることが確認された。また出土遺物は，面径7.5cmの小形仿製鏡1面，長さ1.5cmの管玉5個，ガラス製小玉3個，鉄鏃3本などである。周溝内の出土遺物は，五領期に属する壺形土器である。

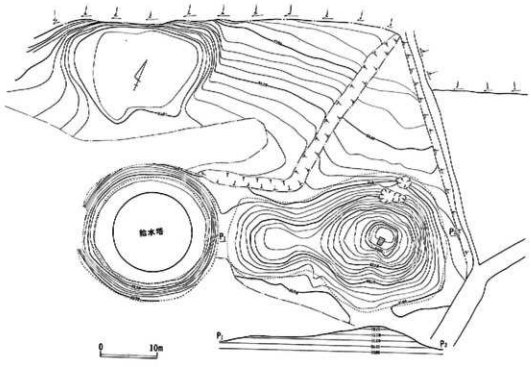
なお，前方部から少し離れて径約12m，高さ1.5mの規模の円墳が2基所在する。

－ 参考資料 －　栃木県史資料編考古1（昭和51年　栃木県）

鬼怒川流域の地域にある前方後方墳で，すぐ北に帆立貝式古墳の大日塚古墳，やや離れて同町御飯山に前方後円墳の権現山古墳があり，南方に上三川町上神主古墳群，下神主古墳群が続く。上神主廃寺は本古墳の南方に隣接しており，古墳群のある西方の台地上は，大きな土師集落跡となっている。本古墳も他の古墳群と同じように宝木台地に築造されたもので，縁辺に近く，標高は約80mである。

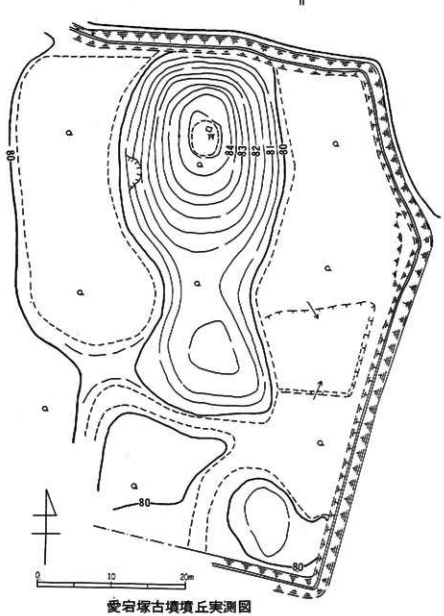
墳丘は南面しており，全長は約50m，後方部は縦長の平面形をなし，長辺は27m，短辺は22m，同高さは約4.25mで，四辺のうち後部の辺は明確である。墳頂部平坦面は後方部と同じく矩形を呈し，長辺は6.2m，短辺は4.4mとなっている。前方部の幅は19mで，後方部の短辺と同じ長さである。前方部はよくのび，かつ低い。高さは1.6m前後である。周濠は墳丘からやや離れた位置にあり，後方部を除いて保存がよい。周濠と墳丘との間に距離のあるのは，基壇を持つ前方後円墳の平面企画が，ここにも採用されたものと思われる。

なお，本古墳の北に隣接する大日塚古墳の前方部付近にあった小円墳から，鋳銅製の銅鏃が1個発見されている。長さは5.9cm，身の中央を中心に，四方に稜が立っている。銅鏃の年代は4世紀後半から5世紀後半ごろまでといわれ，この付近の古墳の古さに一つのてがかりをあたえてくれる。



大日塚古墳墳丘測量図

愛宕塚古墳は概観で述べたとおり，鬼怒川流域にまとまった古墳の中の，いわば異形古墳である。鬼怒川流域の地域には，通常の形態の大形前方後円墳が多いが，この間に，この異形である帆立貝式古墳が介在している。本古墳の周囲で挙げれば，大日塚古墳，雀宮牛塚古墳，上神主古墳群の１基が，いずれも帆立貝式古墳である。こうした中に，前方後方墳の墳形をもつ愛宕塚古墳が位置することは，この形態の古墳が，この地域ではいまのところただ１例であり，しかも，図示のとおり古式の墳形である点を勘案すると，古代初頭における東国開拓の波の一部が，本地域にも到来していたように思われる。



愛宕塚古墳墳丘実測図

（分布図150頁・図版320頁）

（248）愛宕塚東遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳・奈良　**現状** 畑
所在地 茂原町423ほか　**遺跡番号** 市248 県190

本遺跡は，愛宕塚古墳群（市遺跡番号247）の東側に位置している。

広大に開けた沖積地面までの比高差は約８ｍである。表土上には，土師器の破片が散在しており弥生後期から古墳時代以降にわたる集落跡と考えられる。

なお，この遺跡は県登録愛宕塚横遺跡を改称したものである。

（分布図150頁・図版321頁）

（249）前畑遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良　**現状** 畑
所在地 茂原町790ほか　**遺跡番号** 市249 県117

新幹線の東方段丘の東縁に位置している。

遺跡の北方には，西の前遺跡（市遺跡番号245）があり，東側の水田との比高差は約２ｍである。表土上には，土師器と須恵器の破片が散在している。

（分布図150頁・図版321頁）

（250）小蓋遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良　**現状** 畑
所在地 茂原町527ほか　**遺跡番号** 市250 県193

愛宕塚古墳群（市遺跡番号247）の南西畑作地帯に位置する。

遺跡の表土上には，土師器の破片を散見することができる。西方100ｍは水田である。遺物の散布は少ない。

（分布図150頁・図版321頁）

（251）江 面 遺 跡

種別 集落跡 **時期** 奈良 **現状** 畑
所在地 茂原町450ほか **遺跡番号** { 市251 / 県192

愛宕塚古墳群（市遺跡番号247）の南方に位置しており同古墳群と同じ段丘上に立地する。

東側は，広大に開けた沖積地で比高差は約8mであり，本遺跡に接して茂原観音（市指定文化財）を安置する御堂がある。現況は，畑であり，表土上には土師器の破片が散在している。

（分布図150頁・図版321頁）

（252）上神主廃寺跡

種別 寺院跡 **時期** 奈良・平安 **現状** 水田
所在地 茂原町593ほか **遺跡番号** { 市252 / 県90

上三川町上神主と宇都宮市茂原町との境にある寺院跡で茂原廃寺跡ともいわれている。

現況は，宇都宮市側は水田，上三川側は山林となっている。出土している古瓦から創建は7世紀末で，盛期は奈良時代から平安時代にかけての8～9世紀，遺構は大部分が破壊されて，伽藍配置は不詳である。

宇都宮市側の古瓦は，水田に改田する時，上三川町側の山林に捨てたとのことである。なお，瓦は，宇都宮市水道山瓦窯で生産された古瓦の中には，多数の人名瓦が発見されており，一部は，本市の二荒山神社が所有している。

－ 参考資料 － 宇都宮市史第1巻（昭和54年 宇都宮市）

宇都宮市茂原町と上三川町上神主との境にある上神主廃寺跡は，茂原廃寺跡とも呼ばれ，奈良時代から平安時代にかけての寺院跡であり河内郡の郡寺としての性格をもつものと思われる。この廃寺跡からは人名瓦がこれまで多数出土しているために，しばしば盗掘がなされ，いまは遺構の大部分が破壊され，いまではわずかに山林や畑に凝灰岩片が散乱し，畦畔にわずかに版築がみられるにすぎない。このため，いかなる伽藍配置であったか，しかもその範囲は全くわからない。ただ古瓦の散布状況からみてさほど大きな寺院ではないといえる。

大和久震平によれば，この廃寺跡から古瓦のうち，軒丸瓦には二種類があり，一つは山田寺式（奈良県山田寺出土瓦様式）の文様で，重圏文縁に内区が素弁単弁八葉蓮華文となるもの，もう一つは鋸歯文縁で外区は珠文，内区には複弁八葉蓮華文を配するもの（大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』）である。軒平瓦は中心飾の唐草が下になった均正唐草文で，笵は一葉ではなく数期に分けられるようである。

この寺院の創建は7世紀末で，盛期は8世紀に及ぶものであろう。詳しくは発掘調査がなされていないので明らかでないが，いずれにしても奈良時代から平安時代にわたる寺院跡であることには間違いない。

ところでこの寺院跡からは，これまでに多数の人名瓦が出土し，これらは個人所有となって分散してしまっている。比較的多く所蔵されているのは本市二荒山神社である。

（分布図114頁・図版321頁）

（253）本村上野遺跡

種別 集落跡・古墳 **時期** 弥生・古墳 **現状** 畑
所在地 川田町44ほか **遺跡番号** { 市253 / 県172・173・174

田川の右岸段丘上に位置し，すぐ西側には東北本線が南北に通っており東に広がる水田面からの比高は約7～8mである。

現況は，畑地でゆるやかに東へ傾斜している。表土上には，縄文・土師・須恵器の破片などが散布している。

土器散布地内に2基の円墳が存在しており，2基とも径20m前後，高さ2～3mの円墳であり，1基の墳頂には墓地が，他の1基は神社が建立されているが，この円墳の南半分は大きく盗掘されている。

なお，この遺跡は県登録上野古墳と本村古墳と東川田遺跡を併合したものである。

－参考資料－ 宇都宮市史第1巻（昭和54年 宇都宮市）

川田町にあるこの遺跡は，田中国男によって注目されたものである。田川の右岸台地上に位置し，標高110メートル，田川附近の沖積地面からの比高は6～7メートルである。土器片は今でもわずかながら散布し畑地になっている。

田中は『考古学』第10巻第2号（昭和14年）に，本遺跡を次のように紹介している。（）は筆者注。

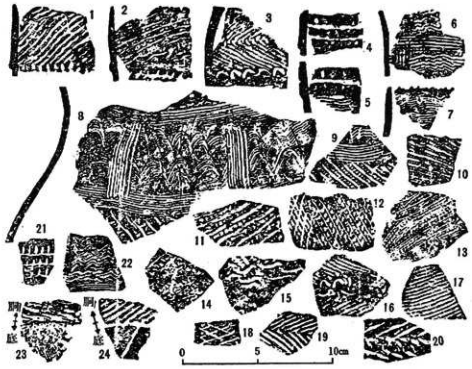
遺跡の地点は下野国河内郡雀宮村大字東河田（東川田）小字本村1368番地である。即ち地図を開いて見ると宇都宮方面から南下した110メートル等高線が東河田本村で西に曲る附近に相当する。東方は40メートルにして崖下数メートルに田川（鬼怒川支流）を望み，南は緩かな谷になっている。土器の出土範囲は直径20メートル位の円形をなしていて，その外の地点には稀である。（中略）私の発見した土器は非常な数であるが，表面採集によったので破片のみで完全なものはない。伴出品としては土製紡錘車1個を発見したが，石器類は未だ1個も注意してゐない。

この記述は弥生時代後期の二軒屋式土器を出土する遺跡を正しく記している。確かに，東川田遺跡の場合に二軒屋式土器を出土する範囲は決して広くない。恐らく数軒が存在する集落跡であろう。本遺跡は田中が探訪された昭和13～14年ころと変っていない。宅地造成がなされていないからである。

先に触れたように今でも破片が散布しているが，田中が採集された土器片以上のものは出土していないので，ここでは田中の報文によって多少語句なり表現をかえて，本遺跡出土の土器（図）について記してみたい。

口縁部は，2，3のものを除けば口唇上に刻み目があり，文様は斜縄文・羽状縄文が主であるが櫛目文のものもある。前者は甕形土器（1・2），後者は壺形土器（6・7）である。4・5のように口唇部に圧痕ある数条の突帯をめぐらすものがある。また口頸部境には刻み目を付した段があり（1・2），これは他の二軒屋式期の遺跡にもみられる。

胴部は甕形土器にあっては斜縄文や羽状縄文が全面に施されているが，壺形土器では胴部上半に櫛目文を施し甕形土器の文様と同じである。上半にみられる櫛目文は，はじめ7～9条の櫛目文を横走させ，次に波状または山形状に施文し，最後に縦に直接的に施文するという順序をとっている。22などは櫛目文を細かに施したものである。底部には木葉痕，布目痕がみられ，中には二例ほど無文のものがあるという。非常に類例の少ないものといえる。



東川田遺跡出土の土器
（田中国男「宇都宮郊外東河田の弥生式土器」『考古学』第10巻第2号より）

（分布図115頁・図版321頁）

（254）十ケ屋敷遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳～平安　　現状　畑
所在地　平松本町767－1　　遺跡番号｛市254 県153

三豊製作所のすぐ北側に位置し，遺跡は緩やかな東斜面に位置する。

現況は，畑地で土師器片が散布している。東側が湿地帯となっており沼などもある。周囲は，ほとんどが宅地となっている。

なお，この遺跡は県登録平松本町遺跡を改称したものである。

（分布図114頁・図版321頁）

（255）西原境遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳～平安　**現状** 畑
所在地 川田町1351ほか　**遺跡番号** { 市255 / 県300

田川の右岸に位置し，東に広がる水田面から5～6ｍの比高差を有する段丘上に立地する。

遺跡のすぐ西側には，東北線が通っており周囲の宅地化もかなり進んでいる。現況は，畑地であり土師器や縄文土器の破片が散見できる。

なお，この遺跡は県登録川田南遺跡を改称したものである。

（分布図113頁・図版321頁）

（256）雷電山遺跡

種別 古墳・集落跡・城館跡　**時期** 古墳・戦国　**現状** 畑
所在地 江曽島3丁目754－1　**遺跡番号** { 市256 / 県279

宮の原から江曽島に延びる低台地上の南端に立地する。

現況は，畑地であり南東に広がる水田面から3～4ｍほどの比高差をもつ，表土上に古墳時代中期～後期にかけての土師器片が多数散布している。

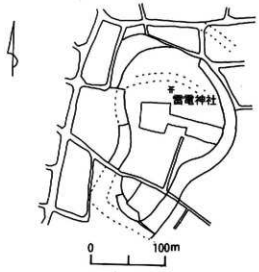
未確認ながらこの遺跡全体が全長230ｍの巨大な前方後円墳の可能性が考えられている。

また，中世ここに江曽島城が築城されている。

なお，この遺跡は県登録江曽島Ⅰ遺跡を改称したものである。

－ 参考資料 －

1. 栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）
225ｍの長さの墳丘を持つ大前方後円墳の雷電山古墳の上に築かれた城である。古墳の周濠（幅19.5～21.5ｍ）をそのまま城郭の堀に利用していたと考えられる。外堀もあったが消滅し，内堀の周濠も南と西側では消滅しつつある。宇都宮氏の家臣江曽島氏の城と伝承されている。



江曽島城略測図

2. 宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）
雷電山古墳は，東武江曽島駅の東南東700ｍで，国道4号線と県道宇都宮栃木線を結ぶ通称江曽島街道の南400ｍの地点にある大前方後円墳である。

本墳の東約1.5キロには田川が，また西方約1.8キロには姿川がそれぞれ南流している。この田川と姿川にはさまれた地域には，多数の舌状台地が発達しており，本墳は，その中の台地の南端部に位置している。古墳の東側と西側は，沖積低地である。東側の沖積地は現在水田として利用されているが，西側は宅地化されて住宅密集地になっている。

古墳は舌状台地の南端部を切断し，前方後円形に整形した上に墳丘を造ったものと思われる。

封土は，江戸時代末期・明治時代初期・大正3年ごろ・昭和40年ごろの4回にわたって削平されたために，現在はほとんど失われている。しかし，前方部および東半部は，前方後円形によく残っている。また，墳丘の東側および後円部の北側も，航空写真の観察によってわずかに古墳の旧状を知ることができる。

墳丘は現存する部分で，全長230ｍ，後円部径126ｍ，前方部幅76ｍを測り，後円部に対して前方部の開きの少ない柄鏡型前方後円墳である。

周濠は，二重周濠と思われる。墳丘の東側には周濠の状態が畦畔としてよく残っている。畦畔の観察によると，内側の周濠も外側の周濠も，ともにほぼ墳丘に沿って回っていることが知られている。また内側の周濠と外側の周濠の間の畦畔は，約3ｍの幅をもち，道路として使用されており，周堤があったものと思われる。後円部東側での周濠の幅は，内側が約33ｍ外側が約24ｍを測る。

地主安野又兵衛によれば，本墳からは多量の滑石製模造品が，大正10年（1921）ごろに出土したということである。その一部は，現在，東京国立博物館および天理参考館に収蔵されている。出土した滑石製模造品は，短甲・斧・鎌・刀子・鏡・有孔円板・剣などがある。

一般に滑石製模造品の盛行期は，5世紀前半代と考えらてるいる。栃木県においては，竪穴式石室から三角板革綴短甲・袋状鉄斧・鍬などが出土したことから，5世紀前半代と考えられる佐野市八幡山古墳（円墳）からは，滑石製模造品は出土しておらず，滑石製模造品の盛行する以前のものと思われ，雷電山古墳に先行する時期と考えられる。

後述する笹塚古墳は，宇都宮市の南部の田川の右岸段丘上にある。全長約100mの大形前方後円墳である。前方部が比較的発達しており，典型的な中期型前方後円墳である。墳丘からは，横はけ・方形透孔・高い突帯などを有する円筒埴輪片が採集されており，川西宏幸の円筒埴輪の編年によれば，5世紀後半に位置付けられている。雷電山古墳は，前方部の開きがほとんどなく，柄鏡型であることから考えて，前方部が未発達の段階であり，笹塚古墳に先行するものと思われる。

つまり雷電山古墳は，佐野市八幡山古墳と笹塚古墳の間，ほぼ，5世紀中葉ごろに位置付けることができよう。

（分布図113頁・図版321頁）

（257）並松遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 江曽島町1057ほか　**遺跡番号** 市257 県280

宮の原から南に延びる低台地の南端に位置する。

南に広がる水田面とは，約2mの比高差を有する。現況は，畑地となっているがすぐ北まで宅地化がされている。表土上に，土師器・須恵器などの破片が散在している。

なお，この遺跡は県登録江曽島Ⅱ遺跡を改称したものである。

（分布図116頁・図版321頁）

（258）江曽島北原遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 江曽島町1324－19ほか　**遺跡番号** 市258 県202

横川西小学校の北北西の低台地上に立地し，周囲は既に宅地となっている。

現況は，畑地となっており土師器片が散布しているが周囲は宅地化が著しい。

なお，この遺跡は県登録飛行場北遺跡を改称したものである。

（分布図113頁・図版321頁）

（259）関道遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～奈良　**現状** 畑・水田
所在地 江曽島町1152ほか　**遺跡番号** 市259 県－

田川の右岸で南北に延びる台地の南端部に位置している。

南に広がる水田面からの比高は，5～6mである。現況は，水田と畑であり土師器や須恵器片が散布している。

（分布図113頁・図版321頁）

（260）おしめ尽遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 江曽島町124ほか　**遺跡番号** 市260 県－

西田川の右岸，低台地上に位置し，東側に広がる水田面からの比高は約3mである。

東斜面となっており周囲はほとんど宅地と化している。現況は，畑地で土師器や須恵器の破片が散布している。

（分布図116頁・図版321頁）

（261）大山祇神社古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社
所在地 上横田町707ほか　**遺跡番号** {市 261 / 県 11}

田川の右岸段丘東端に位置しており水田面からの比高は，5～6ｍである。

現況は，大山祇神社の境内となっており墳頂に祠が鎮座する。墳形は，円墳であり径約30ｍ，高さ4ｍで，周囲はかなり宅地化が進んでいる。

なお，この遺跡は県登録大日塚古墳群を改称したものである。

（分布図116頁・図版321頁）

（262）大房林遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 上横田町828－4ほか　**遺跡番号** {市 262 / 県 176}

田川の右岸段丘上に位置し，東側に広がる水田面からの比高は5～6ｍである。

東斜面となっておりすぐ東側に小川が南流している。現在，黒後建設事務所の周囲は畑となっているが，かなりの速度で宅地化が進んでいる。表土上に土師器片が散布している。

なお，この遺跡は大房林南遺跡を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（263）下栗大塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林
所在地 下栗町1382ほか　**遺跡番号** {市 263 / 県 13}

田川の左岸の水田の中に位置している。

本墳は，円墳であり径約30ｍ，高さ7ｍである。周囲は四方とも水田であり，墳丘は山林となっている。なお，本墳の東方に径7ｍ，高さ2ｍほどの小円墳が存在している。

（分布図117頁・図版322頁）

（264）大塚神社古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社
所在地 下栗町1099－1ほか　**遺跡番号** {市 264 / 県 152}

むなせ川のすぐ右岸に位置する。周囲は，ほとんど水田であり本遺跡も水田面と同じくらいの高さに立地する。現況は，神社の境内となっており墳頂に祠が座する。径16ｍ，現存高2.5ｍ，ほどの円墳である。なお，この北方約20ｍほどの地点にもう1基円墳が存在するが同墳は，道路により北半分が，削り取られている。規模は，径11ｍ，高さ1.5ｍほどである。

なお，この遺跡は県登録大塚古墳群を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（265）追金仏遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑
所在地 下栗町804－1ほか　**遺跡番号** {市 265 / 県 146}

三豊製作所の南方に位置し，西側には水田が広がっている。

水田面からの比高は，2ｍ前後である。現況は，畑となっているが周囲は宅地化が進んでいる。表土上には，土師器，須恵器及び縄文土器の破片などが散在している。

なお，この遺跡は県登録三豊南遺跡を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（266）大久保台山遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 下栗町536ほか　**遺跡番号** { 市266 / 県148

江川の右岸台地上に立地し，東側の水田面からは4～5mの比高であり，遺跡の立地する台地はなだらかな東面する斜面となっている。

現況は，畑地となっており土師器・須恵器などの破片が散布している。なお，東側水田を挟んで対岸の台地には，天王山古墳群（市遺跡番号267）が位置している。

なお，この遺跡は県登録下栗本町遺跡を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（267）天王山古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林
所在地 下栗本町744－1ほか　**遺跡番号** { 市267 / 県155

江川の右岸低台地上に位置し，西側の水田面からの比高は約3mである。現況は，山林になっており天王山古墳を中心に3基の円墳が存在している。天王山古墳は，径27m，高さ6mで墳頂には，祠が座している。この南西に2基の小円墳が並んでいるが，大きさは2基とも径10m前後高さ1mほどである。

なお，この遺跡は県登録下栗本町東古墳群を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（268）東原古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林
所在地 下栗町740ほか　**遺跡番号** { 市268 / 県12

江川の右岸段丘上に位置し，すぐ西側には水田が南北に延びている。

本古墳が，位置する所はこの水田面から4～5mの比高差を有する。本古墳は，主軸を南北にとる前方後円墳であり前方部は南面している。全長約30m，後円部径16m，前方部幅18.5m，後円部高約3mである。なお，後円部東側でくびれに近い部分が大きく盗掘を受けている。

なお，この遺跡は県登録天王原古墳群を改称したものである。

（分布図117頁・図版322頁）

（269）さるやま城遺跡

種別 古墳・城館跡　**時期** 古墳・鎌倉　**現状** 山林
所在地 下栗町571ほか　**遺跡番号** { 市269 / 県156

猿山城は，江川の右岸に立地する平城で西側及び南側の外堀がよく残っている。南側の堀は江川に続いており東の外堀は，江川を利用したものと考えられる。残っている外堀から推定すると本城跡は300m四方ぐらいの規模になると考えられる。なお，城内にも何条かの土塁や堀が確認できる。

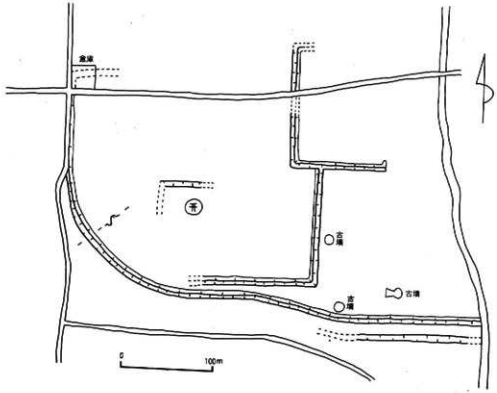
この城内に古墳群が所在しており，前方後円墳1基，円墳10基ほどが存在している。築城の時に故意に残したものと思われるが，特に外堀ぞいに円墳が残されているのが注目される。前方後円墳は，本郷山古墳と呼ばれており埴輪（円筒形）が出土している。

なお，この遺跡は県登録さるやま東古墳群を改称したものである。

－ 参考資料 －　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

宇都宮市中心部の東南，鬼怒川と田川にはさまれた低台地上に立地し，南流する小水系の船付川を利用してその西岸に築かれた平城である。古墳の密集する15haほどの山林中に，古墳の墳丘の裾を利用したりして構築されている。

南北140m，東西93mほどの本丸と見られる方形の郭があり，土塁・堀が西・南部をめぐっている。その外側に西南部を土塁・堀，東部を船付川によって外郭が形成され，その中もカギの手の土塁・堀によっていくつかに区画されている。「宇都宮興廃記」に，結城政朝が明応9年（1500）に侵入し，宇都宮忠綱と猿山に合戦したと記されているが，この時にこの城があったか否かは明らかでない。



猿山城略測図

（分布図133頁・図版322頁）

(270) 南 原 古 墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** さるやま町1199−38ほか
遺跡番号 { 市270 / 県165

むなせ川の左岸より約200ｍの地点であり，水田面とほぼ同じ比高の平地に立地する。

現況は，山林となっておりその周囲は，ほとんどが水田である。円墳であり径25ｍ，高さ2ｍほどであるが，南側が大きく削平されている。

なお，この遺跡は県登録下桑島町飛地古墳を改称したものである。

（分布図135頁・図版322頁）

(271) 西刑部西原遺跡

種別 集落跡・高塚　**時期** 古墳〜平安　**現状** 畑
所在地 西刑部2718−14ほか　**遺跡番号** { 市271 / 県167・168

むなせ川の左岸の西側の水田面とは2ｍほどの比高差を有する段丘上に位置する。

現況は，畑地となっており土師器片が散布している。また本遺跡の南端には，径10ｍ，高さ2ｍほどの小高塚が1基存在している。

なお，この遺跡は県登録平塚西遺跡と平塚飛地古墳を併合したものである。

（分布図120頁・図版322頁）

(272) 柿 木 坂 遺 跡

種別 集落跡・古墳　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑・山林
所在地 上桑島町657ほか　**遺跡番号** { 市272 / 県 −

鬼怒川右岸の南北に延びる段丘の東端部近くに立地する。

本遺跡は，縄文期の集落と古墳2基が所在する複合遺跡である。古墳の1基は径約15ｍ，高さ2.5ｍの円墳状を呈する前方後円墳であったらしく一部その痕跡をとどめる。他の1基は約29.5ｍ，高さ1ｍの円墳で現在，畑中の地脹となっており，この古墳を中心とした畑中に縄文中期（加曽利ＥⅠ）の所産と思われる土器片が多量に散在している。

（分布図136頁・図版322頁）

（273）根本西台古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 宅地・山林
所在地 西刑部町2500ほか　**遺跡番号** { 市 273 / 県 — }

南北に延びる丘陵の東端近く，瑞穂野中学校の北に位置する。

円墳群で宅地造成のための1基は墳丘を削平されてしまった。もう1基は，径6m，高さ0.5mの円墳で他にも横穴石室の側壁と思われる川原石が露呈しているものが残っている。

（分布図136頁・図版322頁）

（274）根本遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑・墓地
所在地 下桑島町647ほか　**遺跡番号** { 市 274 / 県 — }

鬼怒川西岸の沖積地瑞穂野北小の西の微高地に立地する。

現在は，大部分が開田されてしまったが一部残る畑中及び墓地から石器類・縄文式土器の破片等が散在している。

（分布図136頁・図版322頁）

（275）飯塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林
所在地 上桑島町1114－1ほか　**遺跡番号** { 市 275 / 県 — }

瑞穂野中学校南の南北に延びる丘陵の東端に立地している。

規模は，全長約33m，後円径22m，高さ4m，前方部幅24m，高さ4mの南向きの前方後円墳で前方部西側が削平されている。以前くびれ部附近に横穴式石室が開口していたというが現在は，確認できない。墳形から考えると古墳時代後期の所産と考えられる。

（分布図138頁・図版322頁）

（276）飯塚山古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 畑・山林
所在地 西刑部町1160ほか　**遺跡番号** { 市 276 / 県 — }

南北に延びる丘陵の東端近くに立地し，飯塚古墳（市遺跡番号275）の南方に位置する。

現状は，径21m，高さ3mほどの円墳状になっているが，前方後円墳の可能性もある。

（分布図138頁・図版322頁）

（277）大関台遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良・平安　**現状** 畑
所在地 西刑部町2061－10ほか　**遺跡番号** { 市 277 / 県 158・163 }

瑞穂野団地の南端近くの台地に立地する。

表土上に散布する土器からすると奈良・平安時代を中心とする時期の所産と考えられる。

なお，この遺跡は県登録大関西遺跡と横山建設横遺跡を併合したものである。

（分布図138頁・図版322頁）

（278）大関高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 田
所在地 西刑部町2032ほか　**遺跡番号** { 市 278 / 県 — }

瑞穂野団地の南端の台地上に所在する。

塚は2基で，1基は径約6m，高さ1.5m，他の1基は，径9m，高さ2mで松2本が植えられている。二つとも頂部がへこみ，まわりの土をよせたようである。直径の割に高さがあることを特徴とする。古墳とも供養塚とも確定する要素は，少な

いが封上の様子等から古墳の可能性は少ない。

（分布図138頁・図版323頁）

（279）平塚原根岸遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑
所在地 平塚町158ほか　**遺跡番号** { 市279 / 県143

南北に延びる瑞穂野団地の台地の東側に立地している。

東側に沖積地が広がり西側を江川が南流する。表土上に散在する土師器片（高坏脚部，甕）須恵器片などから判断すると古墳時代中期を中心として奈良・平安時代に至る時期の所産と考えられる。

なお，この遺跡は県登録平塚原遺跡を改称したものである。

（分布図 80頁・図版323頁）

（280）平 出 城 跡

種別 城館跡　**時期** 室町　**現状** 宅地　**所在地** 平出町1512ほか
遺跡番号 { 市280 / 県 －

鬼怒川西岸の沖積低地と現在平出工業団地が造成されている低台地面の接点に立地している。

城館の規模は，50ｍ四方程度と考えられ西北隅，東北隅に土塁（幅4ｍ，高さ2～2.5ｍ）と掘（幅4ｍ，深さ1.8ｍ）が残され，その中央に掘切り，土橋と考えられる遺構も認められる。

－ 参考資料 －　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

この館は，鬼怒川西岸の沖積低地と現在平出工業団地が造成されている低台地面の接点に立地している。御城の屋号を持つ高橋宏氏宅の北に，西北隅，北・東北隅に土塁（幅4ｍ，高さ2～2.5ｍ）と掘（幅4ｍ，深さ1.8ｍ）が残され，その中央に掘切・土橋が認められる。ほぼ50ｍ四方の館跡と考えられ，これを御城として，外郭もあり，北に中城，東北に北城などの遺構が明治期まではあったと伝えられており，現在は地名を残すのみとなっている。北城に接して光琳寺がある。字都宮氏の家臣，鈴木，平出，平石などの諸士が在城したと伝承されている。

（分布図 99頁・図版323頁）

（281）免の内台古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 平出町4106ほか
遺跡番号 { 市281 / 県 －

工業団地排水浄化場東側の山林に位置しているが，附近は開発が進んでいる。

古墳の形状は，円墳で規模は径約10ｍ，高さ1ｍである。

（分布図101頁・図版323頁）

（282）山下台高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 下平出町1019－1ほか
遺跡番号 { 市282 / 県 －

字大工学部東南の共同墓地北側雑木林に位置する。

円形高塚2基両高塚共径約6ｍ，高さ0.5ｍで供養塚と考えられる。

（分布図118頁・図版323頁）

（283）三日月神社古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 石井町3253ほか
遺跡番号 { 市283 / 県284

鬼怒川右岸の低台地上に立地する。

現状は，円墳で墳頂に東面して三日月神社が鎮座するが，かっては前方後円墳（帆立貝式）であったが前方部が削平されたとの伝承がある。規模は，高さ約4ｍ，

径23mである。

（分布図118頁・図版323頁）

（284）三日月神社南古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林・墓地　**所在地** 石井町3295ほか
遺跡番号 { 市284 / 県285

三日月神社古墳（市遺跡番号283）の南側に位置する。舌状台地上に南北に並ぶ5基の円墳群で，土地の人達は土塚と呼んでいる。規模は，それぞれ高さ約0.5m，径13m，高さ0.5m，径13m，高さ3m，径24.5m，高さ0.5m，径13mである。他の1基の規模は確認できない。

（分布図118頁・図版323頁）

（285）久部浅間山古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 石井町3226ほか
遺跡番号 { 市285 / 県138

鬼怒川右岸の低台地上，新4号国道沿い東側に位置する。

形は，よく整った前方後円墳で中軸線約50m，前方部が低平で古式の様相を持つ前方後円墳である。

なお，この遺跡は県登録久部台浅間山古墳群を改称したものである。

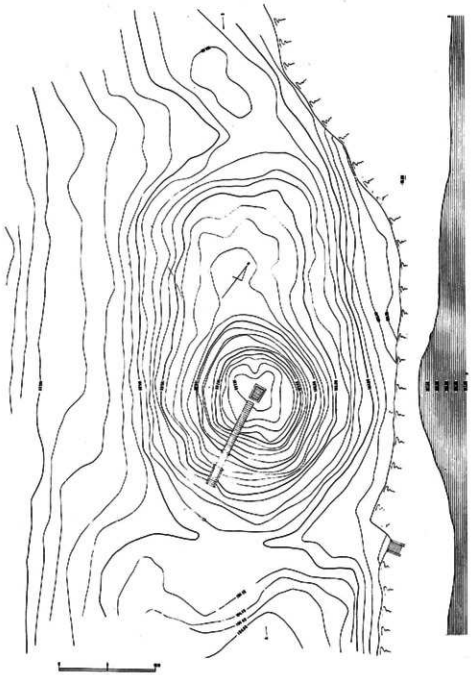
－ 参考資料 －

1. 蜂考古第1号 （昭和52年 宇都宮大学考古学研究会）

本墳は崖に接して築造されており墳丘の北東は裾部が直ぐ崖の様に傾斜してその下は宅地となっている。南東部は北東部に比べなだらかに傾斜し水田にいたる。

墳丘は北西から南東に主軸を置き北西に面する小形の前方後円墳である。規模を法量的に表わすと，墳丘の裾が明確でなく測点の設定が困難であったが，全長約32.5m，後円部径約20m，前方部幅約16m，くびれ部幅約13.5m，後円部標高107.85m，前方部標高103.65mとなり，相方の比高4.20mとなる。後円部墳頂には石の祠が建てられており若干削平されている。測量図に表わされているように前方部が若干削られ，多量の腐植土が堆積していてある程度の変形が考えられるが，前方部が未発達である。

埴輪，周溝等の外部施設は，確認できなかった。墳丘は現在スギ林となっているためかなりの腐植土が堆積しているためである。外部施設の有無は本格的な調査を待たなければ確かなことは言えない。また主体部探索のためくびれ部および後円部附近をボーリング調査したがそれらしきものは確認できなかった。内部主体は石室ではない可能性が強い。



久部台古墳群地形図

2. 宇都宮市史第1巻 （昭和54年 宇都宮市）

本古墳は石井町の南流する鬼怒川右岸，標高約103ｍ の河岸段丘上に立地する。鬼怒川の西約1.5キロの地点に位置する前方後円墳である。本墳は愛宕塚古墳（前方後円墳）とともに久部台古墳群に含まれるものである。墳丘は台地に平行して構築されており，北東側は約3ｍの差をもって鬼怒川の沖積地に接し，南西側もゆるやかに傾斜して水田面に至る。

本墳は全長32.5ｍの小形の前方後円墳である。主軸をＮ－43度－Ｅにとり，前方部を北西に向けている。後円部直径約20ｍ，高さ約0.65ｍである。前方部は約16ｍ，高さ約4.9ｍであり，後円部の高さが前方部を大きく上回っている。また前方部の開きも後円部径に比べて少ない。

後円部墳頂は若干の削平を受けており，現在小祠が建てられている。墳丘を含めた周辺は現在杉林になっている。

内部主体は不明である。また葺石，埴輪などの外部施設も確認されていない。

（分布図118頁・図版323頁）

（286）久部愛宕塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 石井町3203－1ほか
遺跡番号 { 市286 / 県7，139

鬼怒川右岸低台地上新4号国道の東南に立地する。

愛宕塚古墳は，南面する前方後円墳で規模は，幅軸線約46ｍ，後円部高さ6ｍである。他に，径約17ｍ，高さ1ｍの円墳がある。

なお，この遺跡は県登録久部台古墳と浅間山古墳を併合したものである。

－ 参考資料 －　猿山遺跡付久部台古墳群（昭和56年 栃木県教育委員会）

栃木県の中央を流れる鬼怒川は，県北西部の日光連山にその源を発し，河内郡上河内村北部でいままで東流していた流れを大きく南流し，流れを変えるとともに，一段と大河の様相を呈し，その西側には肥沃な沖積地は一大穀倉地帯としての基盤を形成している。

古墳群の所在する宇都宮市東部は，この鬼怒川と市街地東縁を南流する田川による侵食作用と西部山地の火山活動の相互作用により，河岸段丘として形成された南北に細長く延びる岡本台地上に位置している。

久部台古墳群は，この岡本台地の東崖線に沿い占地し，東側の沖積地を形成した鬼怒川まで２㎞の距離を持つ。さらに東方には宝積寺台地をながめることができる。久部台古墳群の位置する標高は１０２m～１０３m前後で，沖積地からの比高４～５mを測る。（中略）

１号墳について

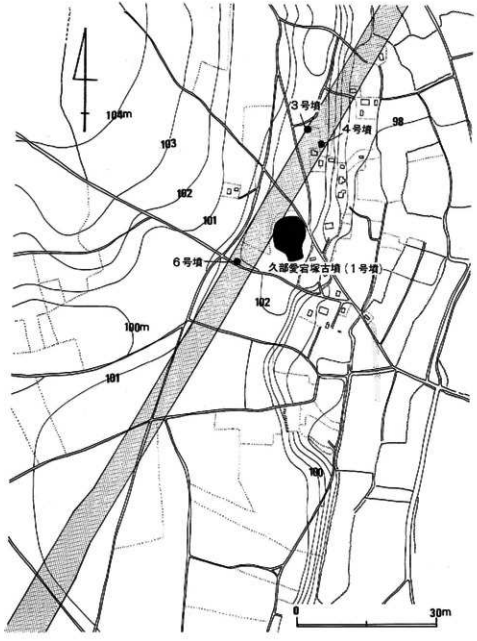
調査が，墳丘測量と周溝の一部のみ調査という状況のためその知りえた事実は最小限であるが，まず墳丘は帆立前方後円墳で，前方部は高い後円部より急激に高さを減じており，後円部径よりも前方部幅は狭まくなっている。また周溝は後円部西側でいままでの深さが減じ，浅くなり途切れる様な状況を示す。出土遺物は周溝内より若干の埴輪片が認められただけである。

以上が１号墳で知り得た事実であるが，この１号墳と非常によく似た平面形をもつ古墳としては県内では下都賀郡壬生町の国指定史跡牛塚古墳，宇都宮市雀宮の雀宮牛塚古墳①，宇都宮市西川田町所在の塚山西古墳②，塚山南古墳などが知られている。特に発掘調査のおこなわれた雀宮牛塚古墳は墳形が全長５６.７m，後円部径３９m，前方部長１７.７m，前方部幅１７.７mで，前方部幅は後円部径½以下を計測する。さらに塚山西古墳も墳形が６４m，後円部径４６m，前方部長１８m，前方部幅２２mでやはり前方部幅が後円部径の½以下を計測する。

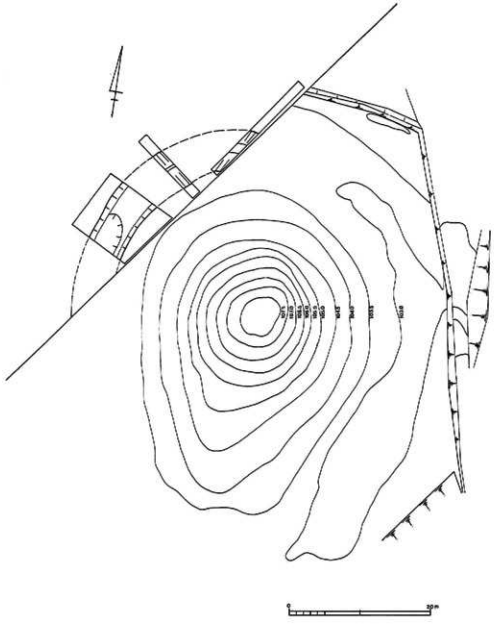
これらの古墳はそれぞれ雀宮牛塚古墳から５世紀後半，塚山西古墳が６世紀前葉の時間を与えられている。１号墳もこれらの古墳とともに規模・形状・埴輪の出土などとを考えるに，本古墳もその時間的位置を５世紀後半から６世紀前半にもとめることは可能と考えられる。

３・４・６号墳について

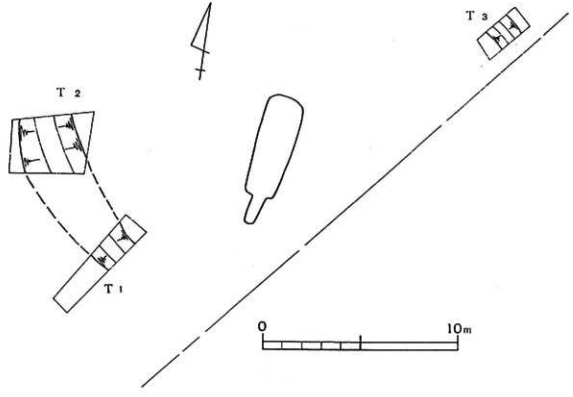
３・４・６号墳はいずれも径２０m前後の小型の円墳であり，現状では墳丘は認められなかったが，構築時にはわずかではあるがマウンドをもっていたと考えられる。さらに石室が旧地表下に埋設される状態を呈するのを特徴としている。この旧地表下に埋設される石室については，県内でも多数の調査例③が知られており，いずれも７世紀代に位置づけられている。今回調査した３基の円墳も現状では墳丘が判別できないものであり，内部主体が旧地表下に入り込むなど終末期的な退化現象としてとらえることができる。これらのことを考え合せるに本古墳３基の円墳は７世紀後半から８世紀にかけての時期に構築されたものと考えることができる。



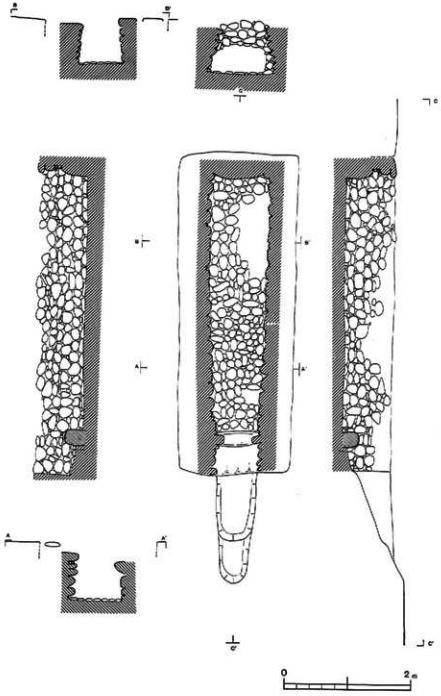
久部台古墳群地形図



1号墳（久部愛宕塚古墳）墳丘測量図



4 号 墳 全 体 図



4号墳石室

（分布図118頁・図版323頁）

（287）石 井 城 跡

種別 城館跡　**時期** 室町　**現状** 宅地　**所在地** 石井町1721ほか
遺跡番号 { 市 287 / 県 一

南流する鬼怒川の右岸，沖積地面に位置している。

水田化され，土塁の一部は見られるが，ほとんど城郭の痕跡はなく古城内・蔵ノ内・馬場先・堀ノ内・相曽口などの地名を残すのみとなっている。

（分布図120頁・図版323頁）

（288）石井久保田古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 石井町912ほか
遺跡番号 { 市 288 / 県 64・286

鬼怒川右岸の低台地上に立地する古墳群である。

3基の古墳が，所在しており前方後円墳が中軸線約32m後円部径18.5m 高さ3m前方部幅13.5m高さ1m。円墳が径9m高さ0.5mで大きな盗掘穴がある。もう1基は，円墳か前方後円墳か不明であるが，径12m高さ0.5mである。

なお，この遺跡は県登録久保田古墳群と久保田古墳を併合したものである。

（分布図 59頁・図版323頁）

（289）古坂峯高塚

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 板戸町1711ほか
遺跡番号 { 市 289 / 県 一

鬼怒川左岸段丘西端に立地する。

径5m高さ1.5mほどの円状の塚であるが，現況からでは古墳とも供養塚とも判断できない。

（分布図 82頁・図版323頁）

（290）中 丸 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑・山林　**所在地** 板戸町3420ほか
遺跡番号 市 290 / 県 —

宝積寺段丘上に入り込む小谷の東側丘陵上に立地する。

同じ丘陵上で南方に山田遺跡（市遺跡番号292）がある。現在は，ほとんど遺物が見当たらないが，かって打製石斧が出土したということであり，周りの山林中に遺跡が広がっている可能性が大きい。

（分布図 81頁・図版323頁）

（291）板戸愛宕塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 畑・竹林　**所在地** 板戸町2215ほか
遺跡番号 市 291 / 県 103

鬼怒川左岸丘陵上に立地し，清原北小学校の南東に位置する。

群中最大規模の愛宕塚（愛宕山）は，径約26ｍ高さ5ｍの円墳である。他に3基の古墳が所在するがいずれも墳丘等が削平されている。

なお，この遺跡は県登録板戸東古墳を改称したものである。

（分布図 82頁・図版323頁）

（292）山 田 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 水田・畑
所在地 板戸町3463ほか　**遺跡番号** 市 292 / 県 —

宝積寺段丘にほぼ南北に入り込む小谷の東側の西向き緩斜面及び一部沖積地上に立地する。

表土上に縄文式土器，土師器の破片等が散在している。

（分布図 82頁・図版324頁）

（293）不動上供養塚

種別 供養塚　**時期** 江戸　**現状** 畑　**所在地** 板戸町3620−1ほか
遺跡番号 市 293 / 県 —

板戸愛宕塚古墳（市遺跡番号291）のすぐ南に位置する。

塚の規模は，径約6ｍ高さ1ｍで附近に五輪塔及び自然石碑がある。

（分布図 82頁・図版324頁）

（294）不動山古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 板戸町3630ほか
遺跡番号 市 294 / 県 —

台地上の平坦地に立地し，現状は，栗林と雑木林になっている。

2基の円墳が，所在するが2基とも中央部に大きな盗掘穴と考えられる掘り込みがある。北に位置する古墳は，墳側を一面にたたき整形した跡が認められるほか1ｍほどの自然石が立ち，その附近は玉石が散乱している。

なお，附近栗林などに縄文中期の土器片が散在しており，古墳群と縄文遺跡の複合遺跡の可能性もある。

（分布図 82頁・図版324頁）

（295）不 動 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑・山林　**所在地** 板戸町3660ほか
遺跡番号 市 295 / 県 —

鬼怒川左岸，宝積寺段丘に入り込む谷の西側丘陵ほぼ東向き緩斜面に立地する。

現状は，植木畑で表土上に縄文土器片及び石器類が散在している。

（分布図 81頁・図版324頁）

（296）日陰坂上古墳群

種別 古墳　時期 古墳　現状 栗林　所在地 板戸町1839ほか
遺跡番号 { 市 296 / 県 — }

鬼怒川左岸丘陵上西端に立地する。

2基の円墳が所在し，1基は径約8.5ｍ高さ1.5ｍで他の1基は，径6.5ｍ高さ1.5ｍである。

なお，本古墳群の南側にビタラ塚とよばれる塚があり，附近開田の際には多数の玉石が出土したとのことであった。

（分布図 83頁・図版324頁）

（297）鎮守林西遺跡

種別 集落跡　時期 縄文・奈良・平安　現状 畑 所在地 刈沼町552—1ほか
遺跡番号 { 市 297 / 県 104 }

鬼怒川左岸の宝積寺段丘に入り込む谷にむかった東むき緩斜面に立地する。

本遺跡の南西には，満美穴古墳群（市遺跡番号300）南東には，向原遺跡（市遺跡番号299）がある。表土上には，縄文土器片・土師器片が散在している。

なお，この遺跡は県登録北屋敷遺跡を改称したものである。

（分布図 83頁・図版324頁）

（298）淡 路 城 跡

種別 城館跡　時期 室町　現状 宅地　所在地 刈沼町469ほか
遺跡番号 { 市 298 / 県 — }

南流する鬼怒川の東岸の舌状台地に立地している。

本城跡は，二重の堀を持っていたが外堀は，消滅し東西200ｍ南北115ｍの長さのカギの手の土塁を伴う内堀（幅4ｍ深2.5ｍ）が残っている。

なお，城の名称は戦国時代宇都宮氏の家臣直井淡路守の居城と伝えられていることによる。

（分布図 83頁・図版324頁）

（299）向 原 遺 跡

種別 集落跡　時期 奈良・平安　現状 畑　所在地 刈沼町298—4ほか
遺跡番号 { 市 299 / 県 60 }

南北に延びる丘陵の西端西向きの緩斜面に立地する。

水田面との比高差は，約5ｍで表土上に土師器の破片が散布している。

なお，この遺跡は県登録刈沼遺跡を改称したものである。

（分布図103頁・図版324頁）

（300）満美穴古墳群

種別 古墳　時期 古墳　現状 山林　所在地 満美穴町476ほか
遺跡番号 { 市 300 / 県 107 }

鬼怒川左岸の宝積寺段丘上に立地する円墳群で，現在4基が残る。

規模は，径5～8ｍ高さは0.5～1ｍである。1基は，確認できず半壊しているが内部主体らしいものは旧地表下にはいりこむ横穴式石室の形態が考えられる。

（分布図103頁・図版324頁）

（301）赤高地遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・古墳　　現状　畑・栗林
所在地　刈沼町482−1ほか　　遺跡番号 { 市 301 / 県 299

南北に延びる丘陵の西端に立地し，西及び南向き緩斜面におびただしい量の土石器片の散布がみられる。

縄文時代を中心とする時期の所産であるが，土師器片の中にはS字状口縁台付甕の破片や折りかえし口縁の壺の破片と思われるものがあり古墳時代前期の集落と重複すると考えられる。

フレークが多数検出される点に注目される遺跡である。

なお，この遺跡は県登録刈沼遺跡を改称したものである。

− 参考資料 −　　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

遺跡は水田に面して西傾斜する台地上にあるが，今は畑地・宅地となっている。

遺跡の東北側は山林であるが，近年宅地造成が進み，いずれ破壊湮滅してしまう遺跡の一つであろう。

遺物の散在範囲は畑地・宅地附近に限られているが，山林地域にも及んでいるかも知れない。これまでに発見された遺物には土器，石器類があるが，土器は後期の堀之内Ⅰ・Ⅱ式，加曽利BⅠ・Ⅱ式，安行Ⅰ式，晩期の安行Ⅲa式，大洞C_1式，C_2式などである（第79図・80図）晩期は大洞C_2式が主体であり，これには粗製土器が伴出している。石器には石鏃，打製石斧，磨製石斧，石錐，石錘磨石，敲石，多孔石，石匙などがあり，その種類は豊富である。

（分布図103頁・図版324頁）

（302）同慶寺館跡

種別　城館跡　　時期　室町　　現状　寺院境内　　所在地　竹下町1107ほか
遺跡番号 { 市 302 / 県 ― }

鬼怒川左岸の宝積寺段丘西端に位置する。

同慶寺は，単に芳賀氏の菩提寺というだけにとどまらず土塁，堀が一部に現存することから城館としての役割をもっていたと考えられる。

− 参考資料 −　　飛山城跡（昭和52年　宇都宮市教育委員会）

同慶寺は他の寺院と異なり，本来の寺院としての性格のほかに飛山城の支城としての機能を果たした観がある。つまり内城，外堀より成り，内城だけでも20町歩に及んでいた。これに二重の堀がめぐり，その外に空堀や動使門も認められる。その門跡近くにある井戸は飛山城に通ずるという伝説がある。伝説は所詮伝説であるが，同慶寺が牙城である飛山城とは分離できない関係にあったことを示すものとして注目しなければならない。寺内には飛山城，同慶寺を築いた高俊以下の墓（清原氏累代の墓碑14基）があり，五輪塔は原形を保っているとはいえないが，宇都宮市指定の文化財となっている。

（分布図105頁・図版324頁）

（303）竹下浅間山古墳（市指定）

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　宅地　　所在地　竹下町1100−5ほか
遺跡番号 { 市 303 / 県 106 }

鬼怒川左岸，宝積寺段丘の西端部の丘陵上に築造された西面する前方後円墳である。

全長52.5m後円部径41mの基壇の上に全長42m後円部径24m前方部幅8〜10mの墳丘がのっていたことが調査により判明すると共に頭椎太刀・馬具のほか多数の副葬品が出土した。内部主体は旧地表下の横穴式石室で本県の終末期の様相がみられる。

なお，この遺跡は県登録上竹下古墳を改称したものである。

− 参考資料 −

竹下浅間山古墳（昭和51年　宇都宮市教育委員会）

1. 本墳は鬼怒川の左岸段丘上の雑木と孟宗竹の林に囲まれ，保存状態のよい古墳であったということであったが，調査時点では削平された畑地の中央に硬砂岩の大きな一枚石の奥壁の頭が見える状態であった。

本墳の地形上の立地は，東側が高く，西及び北に向って緩傾斜してゆくため，墳丘の土量を西〜北へ押出して平坦化していた。このため東側はローム面をカットした状態であり後円部の周溝が確認できる状態であったので，前方部を中心に周溝調査を行い，墳丘形を求めることにした。

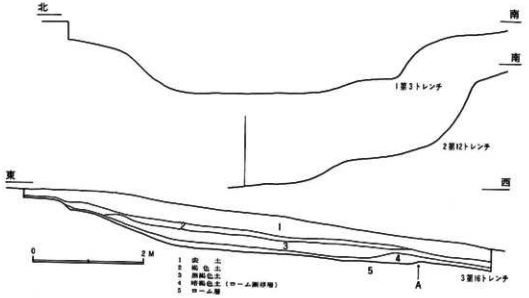
まず，墓道があると思われる地点に長さ20m，巾1.5mで第1トレンチを設定し，続いて東側に巾1.5mで第2，第3トレンチを入れた。この地域が最もよ

く周溝が残っている部分であり，第３トレンチで見ると周溝幅は6.2ｍ，深さは1.2ｍ，周濠外壁は約40°の傾斜度をもって周濠底に落込むのに対し，周濠内壁は約55°の急傾斜度で周濠底に落込み，この部分で幅約60㎝の平坦面を作り，再び15°の緩傾斜で約15㎝程深くなり周濠底の中央部へと続く。この第１～第３トレンチの調査により，この地域が墳丘南側の後円部から前方部にかけての部分，クビレ部であり，このクビレ部分に墓道が接続することが判明した。

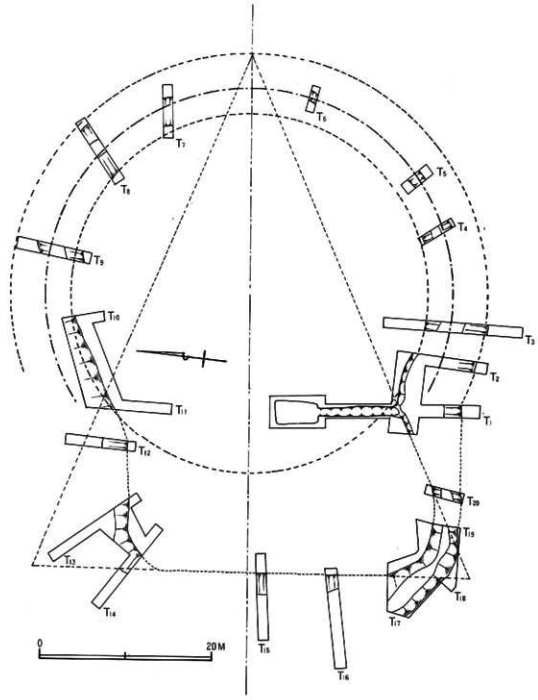
これに対し，前方部は南西隅角部に向うに従って周濠幅も狭く，深さも浅くなる。第２０トレンチでは周濠幅約３ｍ，深さ７０㎝，第１７～１９トレンチの隅角部では周濠幅約４ｍ，深さ５０～６０㎝となる。前方部前の周濠は第１６トレンチでわかるように，前方部前縁から約２５㎝の部分は約40°の傾斜度で深さ２０㎝まで落込み，若干の平坦面を作り，さらに幅1.6ｍまでは約20°の傾斜度で落込み，若干の傾斜度をもつ平坦面へと続いている。

しかし，周濠外縁への立上りは認められず，そのまま鬼怒川の段丘崖へと続いてしまう。あえて，立上りとするならば前方部前縁から6.5ｍの地点（Ａ点）に，わずかに認められる程度である。

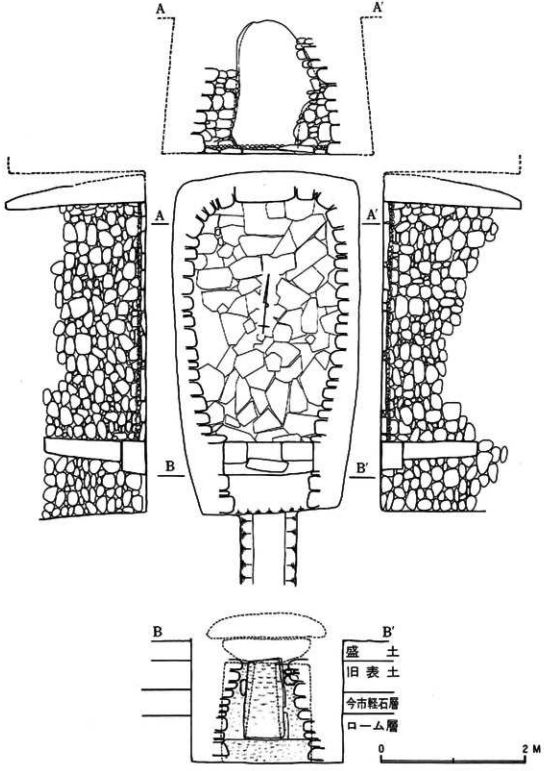
前方部北側縁部から後円部にかけては第９～第１４トレンチまでを入れて調査した結果，墳丘からの落込みと，それに続く平坦面は確認できたが，周濠外縁への立上りを確認することはできなかった。つまり，周濠外縁と考えられる地点は孟宗竹の繁る急斜面の崖となってしまい周濠はなかったとの結論に達した。



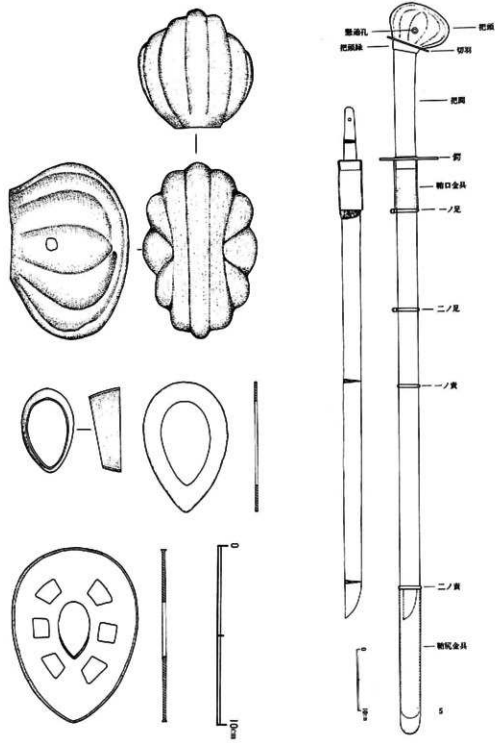
周濠内トレンチ断面図



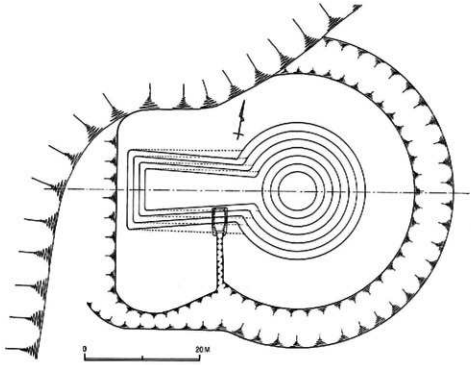
墳丘全測図



浅間山古墳の石室実測図



頭椎大刀実測図



墳丘推定復元図

2. 宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

調査の結果，墳丘は主軸をN－84度－Eにとる。全長52.5m，後円部径41m，前方部長11.5m，前方部幅43m，くびれ部幅33mである。前方部長は短いが幅は後円部径を上回る。

これらの結果は昭和47年の分布調査の際の数値と大きく異なることから考えて，本墳は周湟の内側に幅広いテラスを設け，その内側に墳丘を構築したものと考えられる。

周湟は墳丘の西側から北西側にかけての部分を除いて全周している。周湟は前方部隅角部に行くにしたがって狭くなるため，鍵穴状を呈する。規模は後円部南側で幅6.2m，深さ1.2～1.4mを測り，湟底より若干上には幅60cmほどのテラスを有する。前方部は南西隅角に向かうにしたがって幅・深さともに小さくなる。周湟幅は約3～4m，深さ50～70cmとなる。後円部東側においても同様であるが，後円部北側では再び幅広くなる。

内部主体はくびれ部にある段張りを持つ両袖形の横穴式石室であり，長軸4.8m，奥壁附近の最大幅2.6m，前壁幅1.9m，深さ1.54mの断面八字形を呈する土壙の内部に造られている。

石室は全長4.4mで，主軸をN－5.1度－Eにとり，南に開口している。

玄室は，全長3.4m，奥壁幅1.55m，最大幅1.95m，玄門部1.15mである。天井石は不整形の硬砂岩を5枚使用している。奥壁は硬砂岩の1枚岩である。側壁は河原石の小口積みで二列に積まれており，強い持ち送りがみられる。河原石の間にはローム土が目張りとして使用されている。床面はローム面上に軟らかい粘板岩質のものを張り，その上に奥壁寄りには円礫と荒砂を，玄門附近では河原石を敷いている。玄室床面は羨道床面より低くなっている。玄門部は間仕切り石，袖石，扉石に軟質凝灰岩の切石を使用し，楣石に硬砂岩の割石を使用している。

間仕切り石は両端を側石に入れ込み，その上に袖石を乗せ，袖石の上に楣石を置いている。扉石は玄門の外側で間仕切り石の上に立てられている。

羨道部の側壁は，河原石の小口積みで，比較的強い持ち送りがみられる。床面は扁平な河原石が敷かれている。規模はきわめて小さく，長さ56cm，幅1.16cmである。床面は墓道底面よりも40cmほど低くつくられている。

羨道の外には周湟までの間に地山を掘り込んだ墓道がみられる。墓道の長さは4.8mであり，断面は逆台形を呈する。旧表土からの深さは推定1.3mである。床面は周湟底面よりわずかに高く，羨道床面と同高である。

追物は勾玉・耳環・石突・鉾の責金具・鉄具が，玄室床面から，直刀・鞘尻金具・鉄具・勾玉・小玉・須恵器大甕破片が墓道上面から，緑金具・切羽・鉾身・轡・雲珠が墓道の東壁上からそれぞれ出土した。

頭椎太刀柄頭は，厚さ1mmの銅板を打ち出し法で畦目を浮き出させたもの2枚を竪畦目が4本，横畦目が左右2本つけられている。両側面中央には懸通孔があけてあるが，緑金具は消失している。

（分布図105頁・図版325頁）

（304）飛山城跡（国指定）

種別 城館跡　**時期** 室町　**現状** 山林　**所在地** 竹下町393−6ほか

遺跡番号 { 市 304 / 県 − }

鬼怒川左岸沿いの段丘上に立地する。

飛山城跡は，自然の地形を利用し深い空掘と土塁を二重にめぐらし，外敵の侵入に備えた中世の平山城の様式を伝えており，城の周囲にめぐらされた内堀には，通路と考えられる「土橋」外堀に面した土塁には，数か所突出部がみられ「物見櫓」の跡が残存している。

− 参考資料 −

1. 飛山城跡（昭和52年　宇都宮市教育委員会）

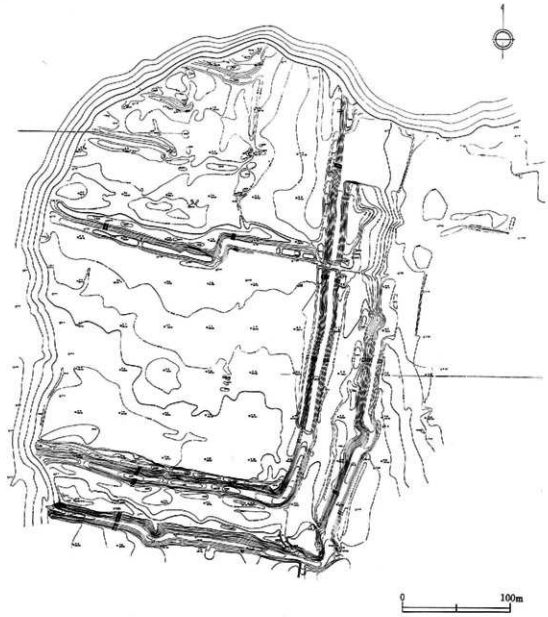
飛山城跡の調査は，城跡東北部の内堀，外堀が以前に栗林造成のため破壊されたため，築城時の堀と土塁の規模を知るために実施されたものである。

調査にあたっては，文化庁，栃木県教育委員会文化課と連絡をとりながら，将来破壊個所の復原と国指定範囲内とを考慮して作業を進めた。発掘期間は昭和51年12月26日〜52年3月4日であるが，これを二期に分けて調査した。（中略）

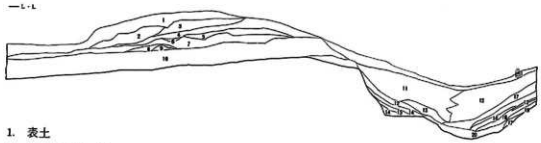
調査の経過は概略次の通りである。

昭和51年12月下旬から1月中旬にかけて，栗林造成によって破壊された内堀，土塁の南側断面を整備し，土層の観察を容易にするための作業を行い，破壊によって埋没した外堀に直交する幅2m，長さ8mのトレンチ（第1トレンチ）を設定し調査を進めた。また破壊された土塁の北側断面を整備して土層状況を調べる。発掘後，土塁，堀のセクションを実測し，発掘部分の測量，写真撮影並びに埋めもどし作業を行う。

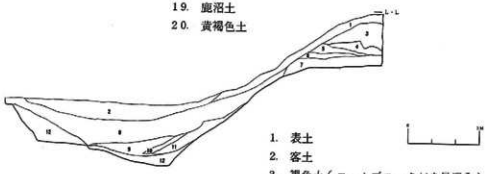
昭和52年 2月下旬から3月上旬にかけては，先に設定した第1トレンチの北方約20mの地点に，幅2m，長さ20mの第2トレンチを堀に直交する形で設定し，発掘調査を進める。発掘後，トレンチの平板実測と内堀内部のセクション，第3土塁の実測並びに埋めもどしを行い，予定の調査はすべて完了した。



飛山城実測図



1. 表土
2. ロームブロック
3. 黒色土（ロームロック・鹿沼土の混合）
4. 黄褐色土
5. 鹿沼土
6. 黒褐土
7. ローム魂
8. 黒色土
9. ロームブロック
10. 黒色土（旧表土）
11. 黄褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）
12. 黒色土（ローム粒・ロームブロック混入）
13. ロームブロック・ローム粒の混合
14. 黄褐色土（鹿沼土と褐色土の混合）
15. 鹿沼土
16. ロームブロック（小）とローム粒の混合
17. 黒色土
18. ローム粒
19. 鹿沼土
20. 黄褐色土



1. 表土
2. 客土
3. 褐色土（ロームブロックが少量混入）
4. ロームブロック
5. 褐色土（ローム粒が混入）
6. 褐色土とロームブロックの混合
7. 黒色土（旧表土）
8. 褐色土
9. 褐色土とロームブロックの混合
10. 黒色土
11. 黄褐色土（褐色・ローム粒・鹿沼土の混合）
12. ロームブロック

堀および土塁セクション図

2. 栃木県の中世城館（昭和57年　栃木県教育委員会）

この城は，宇都宮市中心部（宇都宮城跡）から東へ7㎞，鬼怒川東岸，真岡台地の北西端に突出した段丘に立地し，城の北・西面は鬼怒川の浸食によって，比高20mの断崖となっている。真岡台地に続く東・南面は平坦地となっており，この面を二重の堀と土塁が囲み，東西330ｍ，南北450ｍの長方形をなしていたと考えられる。しかし，西北部の一部が，鬼怒川の浸食によって若干崩されている。東側には真岡に通じる県道が南北に走っている。

全体が雑木林，栗林および一部畑となっており，面積は約12 haに及ぶ。城の保存状態は良好である。堀および土塁は，内堀と外堀を二重にめぐらし，内堀の内部は，東西の逆乙字型の堀・土塁によって二分されている。北半分は本丸と考えられ，その内部にも三筋の浅い堀が残存し，さらに内郭を構成したようである。

内堀の深さは6.5ｍ，幅（両側土塁上端部）17ｍの大きなもので，外堀はさらに規模が大きい。内堀には，南側に三か所，東側に四か所の土橋がある。とりわけ，東側中央部の土橋は，城の大手にあたり，見事なもので，内側土塁の両側も土盛りを高くし，城門を構築していたようである。この大手の道は東の畑を貫いて走る古道となり，同慶寺に通じている。逆乙字型の堀にも三か所の土橋があり，大手の土橋と直角に接して，南北両郭間の土橋がある。

外堀は，北西部が内堀の東側の一部とともに崩されている。南側に二か所，東南側に二か所の櫓台跡が堀に突出してあり，とりわけ東南隅の櫓台跡は大きな構築となっている。

この城は，清党（清原姓）の芳賀氏が築城したもので，南北朝時代には，常陸の北畠親房の南朝方に対して，北朝宇都宮氏の拠点としての役割を果し，南軍の攻撃の対象となっており，飛山城あるいは「鐘山」として史料に出現する（結城古文書写など）。芳賀氏は，宇都宮氏より養子が入り，宇都宮氏と同族関係にあり，芳賀高名（禅可）は宇都宮氏綱を補佐して，14世紀中葉に宇都宮氏の勢力を増大させ，上野・越後の守護職を獲得し，子息をそれぞれの守護代としている。天文期には，一時宇都宮氏との対立関係にあった時もあるが，総じて宇都宮氏との密接な関係にあり，飛山城は芳賀氏の本城として，南北朝以後，東の那須氏に対する防衛拠点であった。

同慶寺跡は，芳賀氏の菩提所として，歴代の五輪塔14基がある。この城は，一部発掘調査が行われ，昭和52年，国指定史跡となった。

（分布図105頁・図版325頁）

（305）竹下遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑　**所在地** 竹下町712ほか
遺跡番号 { 市305 / 県3

鬼怒川左岸丘陵上に立地し，飛山城跡の南東方に位置する。

昭和28年の調査の際，袋状土壙と堀之内式期の平地住居跡が検出され袋状土壙内からは，ほぼ完形の加曽利ＥⅠ式深鉢形土器3個体が出土している。土師器は，少ないが「く」の字状口縁をもちハケ目を残すものがあることから古墳時代と縄文時代中期を中心とする時期の遺跡と考えられる。

なお，この遺跡は県登録飛山遺跡を改称したものである。

－ 参考資料 －　宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

この遺跡は昭和28年秋に宇都宮大学史学教室が発掘調査したが，短期間であったため試掘の域を脱していない。調査した個所は南に傾斜する台地の頂上近くであり，表土（耕作土）よりローム層までは非常に浅く40～50㎝である。耕作によって包含されていた遺物はかなり露呈し，昭和28年ごろは土器，石器類が散在していた。調査範囲が小規模であったので十分な成果はなかったが，柱穴様のピットが7個検出され，土器片の多出などから住居跡と認定され，当時これを平地住居跡とよんだ。土器は後期の堀之内Ⅰ式（千葉県市川市堀之内貝塚標式）に比定されるところから，この時期の遺構であることは確かである。

この遺構の近くには，60余の大小の河原石によって配石された組石が発見された。組石は幅1.25ｍ，長さ2.5ｍの範囲にみられ，ほぼ南北に並び，この遺構附近からは，多数の土器片と石器が検出された。土器は堀之内Ⅰ式，Ⅱ式，加曽利ＢⅠ式（千葉県千葉市加曽利貝塚標式）に該当するものであり，石器は石鏃，打製石斧，磨製石斧，敲石，石錘などである。遺構の構築時期は土器の出土状態から堀之内Ⅱ式か加曽利ＢⅠ式と推定された。

先に触れた住居跡と認定されたところからは，底部欠損の堀之内Ⅰ式土器が胴部以下をローム層に掘り込んで埋められた状態で発見されている。底部は故意に欠いたようである。この土器は胎土焼成が不良で，粟文の幅広い口縁部と櫛目文による胴部のみを残し，口縁部には四個の把手が付され，口径32㎝，残存高さ42㎝の粗製土器である。

また住居跡の北側からは，袋状土壙が発見された。当時この種の性格が不明であったので，黒色腐植土を掘り下げ，地表下77㎝のところから加曽利ＥⅠ式土器3個体と骨片を検出し，袋状土壙を完掘することなく終った。つまり土器の出土状態に異常を認めながらも，土壙を完掘することなく土器をとり上げる作業に終始した。今になってこの土器の出土状況と腐植土の充填度合を検討したとき，これは明らかに袋状土壙であったことは明瞭である。ここに示した3個の土器はこの土壙から掘り上げた加曽利ＥⅠ式である。これらの土器はいずれも少量の雲母を混入しており，焼成は普通である。

（分布図105頁・図版325頁）

（306）千波ケ原遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑・宅地
所在地 竹下町1412ほか　**遺跡番号** { 市306 / 県 －

宝積寺段丘に南北に入り込む谷の東側丘陵西端近くに立地し，水田面との比高差は約10ｍ表土上には，縄文式土器片を主体としてハケ目を残した土師器片が散見できる。

（分布図122頁・図版325頁）

（307）鎚山東原遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 畑
所在地 鎚山町191－1ほか　**遺跡番号** { 市307 / 県 －

鬼怒川左岸丘陵を開析して南流する小河川の東側丘陵上で清原中学校の南側に位置する。表土上には，縄文式土器片・土師器片・須恵器片等が散在している。

（分布図106頁・図版325頁）

（308）氷室中の島遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 畑

所在地 氷室町1781–1ほか　**遺跡番号** { 市308 / 県98

宝積寺段丘の東端で東側に小谷が入り込む地形に立地する。

畑中の表土には，縄文式土器片とわずかに土師器片も散見できる。縄文土器片の中には，Ｅ字文を持つ破片もみられ，晩期を中心とする時期の所産と考えられる。

なお，この遺跡は県登録中之島遺跡を改称したものである。

（分布図123頁・図版325頁）

（309）免の内遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・古墳　**現状** 畑・宅地

所在地 氷室町1012–1ほか　**遺跡番号** { 市309 / 県97

宝積寺段丘に南北に入り込む谷の東側に立地する。

南方には，臼内遺跡（市遺跡番号310）がある。表土上には，縄文土器片と土師器片が散在し土師器は，ハケ目を残しその特徴から古墳時代の所産と考えられる。

なお，この遺跡は県登録臼内遺跡を改称したものである。

（分布図123頁・図版326頁）

（310）臼内遺跡

種別 集落跡　**時期** 縄文・奈良・平安　**現状** 畑

所在地 氷室町705–8ほか　**遺跡番号** { 市310 / 県 –

七ケ字用水が流れる宝積寺段丘に南北に入り込む谷の東側，西向き緩斜面に立地する。宅地化が著しいが，一部残る畑中に縄文土器・土師器・須恵器の破片が散在する。

（分布図125頁・図版326頁）

（311）大杉神社古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社　**所在地** 氷室町1671–3ほか

遺跡番号 { 市311 / 県 –

中合西遺跡（市遺跡番号312）西北側，大杉神社境内に位置する。

墳丘上に小さい祠が２・３社鎮座する。形状は，円墳で規模は径約６ｍ，高さ１ｍである。

（分布図125頁・図版326頁）

（312）中台西遺跡

種別 集落跡　**時期** 弥生・奈良・平安　**現状** 畑

所在地 氷室町1667–2ほか　**遺跡番号** { 市312 / 県96

宝積寺段丘に南北に入り込む開析谷に向かう東向き緩斜面に立地する。

遺跡の表土上には，弥生・土師・須恵器の破片がわずかであるが散見できる。

なお，この遺跡は県登録中妻遺跡を改称したものである。

（分布図125頁・図版326頁）

（313）氷室中妻遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳～平安　**現状** 畑　**所在地** 氷室町1093ほか
遺跡番号 { 市313 / 県 ―

宝積寺段丘の東端近くに立地し，すぐ東を芳賀町と境を接する地点に位置する。
古墳時代の所産と思われる土師器片が多く散在し，ハケ目を残す甕，頸部にきざみのある凸帯をめぐらす壺形土器の破片などを含んでいる。

（分布図125頁・図版326頁）

（314）中台東古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 氷室町544ほか
遺跡番号 { 市314 / 県 ―

宝積寺段丘に位置する円墳で，規模は径約8 m高さ1.5 m。
墳頂部に御宮が鎮座する。

（分布図125頁・図版326頁）

（315）東中台遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良・平安　**現状** 畑　**所在地** 氷室町1118―2ほか
遺跡番号 { 市315 / 県110

宝積寺段丘（真岡台地）の東端近くに立地する。
道路を挟んで西側には，中台東古墳（市遺跡番号314）がある。表土上に須恵器片が多く散在するほか土師器片も散見できる。
なお，この遺跡は県登録中台東遺跡を改称したものである。

（分布図125頁・図版326頁）

（316）土　堂　塚

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 畑・山林　**所在地** 氷室町1141ほか
遺跡番号 { 市316 / 県 ―

宝積寺段丘の東端近くに立地する。
径10 m 高さ0.5 mほどの地膨れが認められるが，南半分の雑木林中の部分は削平されている。かって佐藤行哉氏が調査し，古墳でないと確認されたといわれている。

（分布図125頁・図版326頁）

（317）中台遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳　**現状** 畑　**所在地** 氷室町429―1ほか
遺跡番号 { 市317 / 県 ―

宝積寺段丘に南北に入いり込む谷の東側緩斜面に立地する。
表土上には，土師器片がかなり多く散在しその特徴より古墳時代の所産と考えられる。

（分布図125頁・図版326頁）

（318）中台高塚

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 氷室町1596―1ほか
遺跡番号 { 市318 / 県112

清原東小の南，石塚団地入り口附近の山林中に位置する。
円形の塚で規模は径約5 m高さ1.5 mである。
なお，この遺跡は県登録中台古墳を改称したものである。

（分布図125頁・図版326頁）

（319）おひじり塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 氷室町1599–10ほか
遺跡番号 { 市319 / 県114

宝積寺段丘の東に立地する円墳で規模は径約10m 高さ2mである。
盗掘穴があり，頂部に祠が鎮座している。

（分布図124頁・図版326頁）

（320）千波稲荷神社古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社　**所在地** 氷室町2922ほか
遺跡番号 { 市320 / 県 —

宝積寺段丘の東に立地する円墳で規模は径約15m 高さ0.5mである。
本墳は，神社及び耕地化により墳丘の削平が著しい。

（分布図125頁・図版326頁）

（321）小松原遺跡

種別 集落跡　**時期** 古墳　**現状** 山林・畑　**所在地** 氷室町328ほか
遺跡番号 { 市321 / 県 —

宝積寺段丘の東端近くの緩斜面に立地する。
遺跡の表土上に散在する土師器片の中にS字状口縁台付甕の破片が多数みられる。

（分布図141頁・図版326頁）

（322）妙音寺高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 氷室町1242ほか
遺跡番号 { 市322 / 県111

宝積寺段丘の尾根上に位置する。
円形の塚3基が所在し，いずれも径約5m高さ1mほどである。
なお，この遺跡は県登録明音寺古墳群を改称したものである。

（分布図124頁・図版326頁）

（323）中極高塚群

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 上篭谷町1100ほか
遺跡番号 { 市323 / 県127

鬼怒川左岸丘陵が小川により東西を開析されてできた舌状の丘陵の南端近くに立地する。
10基ほどが近接して群在しており，規模は径6m高さ1.5mほどのものから径8m高さ2mほどのものまであり，径のわりに高さがある特徴をもつ。古墳とは考えられず供養塚等の可能性が大きいと考えられる。
なお，この遺跡は県登録東田古墳の一部である。

（分布図124頁・図版326頁）

（324）東　田　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文　　**現状**　畑　　**所在地**　上籠谷町1039
遺跡番号｛市 324 県 122

鬼怒川左岸の雑木林に位置する。
東側は，東面した傾斜で南北帯状の湿田に接する。表土上には，縄文土師器の破片が散在している。
なお，この遺跡は県登録東田遺跡の一部である。

（分布図124頁・図版326頁）

（325）シドミ久保遺跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・古墳　　**現状**　畑　　**所在地**　上籠谷町723−2ほか
遺跡番号｛市 325 県 −

鬼怒川左岸に立地し，現況が雑木林と畑になっている。
遺跡は，西面した傾斜地に位置し湿田をへだて東田遺跡に対している。表土上には，縄文土器片・土師器片が散在している。

（分布図124頁・図版327頁）

（326）西原庚申塚群

種別　庚申塚　　**時期**　江戸　　**現状**　畑　　**所在地**　上籠谷町2035ほか
遺跡番号｛市 326 県 −

清原南小学校南側の畑の中に位置する。
2基の塚があり，規模は，径約6.5ｍ高さ1.2ｍで塚の上には，石造りの庚申塔がまつられており，他の1基は，直径約5ｍ高さ1ｍである。

（分布図124頁・図版327頁）

（327）上籠谷笹塚古墳

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　畑　　**所在地**　上籠谷町1596ほか
遺跡番号｛市 327 県 135

鬼怒川左岸丘陵上に位置している。
畑で墳丘が削平されているため現状は，1辺5.5ｍ高さ1.5ｍの方形の塚となっているが，築造当時は，円墳であったと考えられる。
なお，この遺跡は県登録笹塚古墳を改称したものである。

（分布図124頁・図版327頁）

（328）西　向　遺　跡

種別　集落跡　　**時期**　縄文・奈良・平安　　**現状**　畑
所在地　上籠谷町1597ほか　　**遺跡番号**｛市 328 県 123

鬼怒川左岸丘陵を開析して，南流する小川の東側丘陵上に立地する。
表土上には，縄文土器・磨製石斧（長さ11㎝幅3.5㎝）土師器・須恵器の破片が散布している。
北側に隣接して上籠谷笹塚古墳（市遺跡番号327）がある。

（分布図140頁・図版327頁）

（329）上籠谷和尚塚

種別　高塚　　時期　江戸　　現状　畑　　所在地　上籠谷町1779ほか
遺跡番号｛市329 県133

鬼怒川左岸丘陵上に位置する。
四方を削り取られ形が整っていないが，塚の規模は径約10ｍ高さ2.5ｍである。
なお，この遺跡は県登録和尚塚古墳を改称したものである。

（分布図140頁・図版327頁）

（330）小泉庚申塚群

種別　庚申塚　　時期　江戸　　現状　山林　　所在地　上籠谷町1794ほか
遺跡番号｛市330 県－

鬼怒川左岸丘陵上に位置する。
現在7基確認でき，最大規模の塚は，径8.5ｍ 高さ2ｍである。

（分布図140頁・図版327頁）

（331）下西原遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　畑
所在地　上籠谷町3183ほか　遺跡番号｛市331 県565

鬼怒川左岸丘陵西端近くに立地する。
東側を南原用水が流れ，宅地化が進行している。表土上には，縄文土器・磨製石斧・土師器・須恵器の破片及び石器類が散在している。
なお，この遺跡は県登録西が原遺跡と下河原遺跡を併合したものである。

（分布図140頁・図版327頁）

（332）下上遺跡

種別　集落跡　　時期　縄文・奈良・平安　　現状　畑
所在地　上籠谷町204ほか　遺跡番号｛市332 県131・132

鬼怒川左岸丘陵を開析して南流する小川の東側丘陵上に立地する。
西側水田面との比高は，約10ｍであり，表土上に多数の土器片が散布する。土師器・須恵器は，非常に少なく縄文時代を中心とする時期の所産と考えられる。畑のあちこちに土をふるった時に出たと思われる土器片が，ひとかたまりになって放置されている。
なお，この遺跡は県登録松原遺跡と本田遺跡を併合したものである。

（分布図140頁・図版327頁）

（333）無宗古墳群

種別　古墳　　時期　古墳　　現状　山林　　所在地　上籠谷町104ほか
遺跡番号｛市333 県－

下上遺跡（市遺跡番号332）の東側雑木林中に立地する。
円墳2基で，規模は径約6ｍ高さ0.5ｍと径8ｍ高さ1.5ｍである。

（分布図141頁・図版327頁）

（334）星の宮遺跡

種別　集落跡　　時期　古墳　　現状　畑　　所在地　氷室町58ほか
遺跡番号｛市334 県－

宝積寺段丘の東端近くに立地し，段丘にほぼ南北に入り込む谷の西側に位置す

る。

甕形土器のハケ目の特徴などから古墳時代前期及び中期を中心とする時期の所産と考えられる。

（分布図 34頁・図版327頁）

（335）電 気 堀 跡

種別 堀跡　**時期** 明治～昭和　**現状** 用水堀　**所在地** 石那田町451ほか
遺跡番号 { 市 335 / 県 － }

石那田の仲内地区に位置する。

小規模ながら水力発電を行うための人口堀であり田川から水を引いている。

なお，発電は昭和初期廃止された。

（分布図 30頁・図版327頁）

（336）宝 木 用 水 堰

種別 堰跡　**時期** 江戸　**現状** 堰　**所在地** 徳次郎町2608－1
遺跡番号 { 市 336 / 県 － }

日光街道の徳次郎町内智賀都神社の東側に位置している。

田川に堰を築き取水する計画は，文政8年に宇都宮藩によって計画されたが実現せず嘉永5年に二宮尊徳の設計によって再度着工したが完成せず安政5年にようやく通水した。

堰は徳次郎地内にあるが，主に西原10か新田村を潤し，後世西原10か新田を宝木と総称したことから宝木堰と呼ばれている。

（分布図 36頁・図版327頁）

（337）妙哲禅師の墓（県指定）

種別 墓地　**時期** 室町　**現状** 墓地　**所在地** 徳次郎町1862ほか
遺跡番号 { 市 337 / 県 － }

伝法寺の裏山の中腹に位置する。

室町時代に伝法寺を開山した妙哲禅師の卵塔形の墓石である。

（分布図 40頁・図版327頁）

（338）下横倉念仏塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 下横倉町636ほか
遺跡番号 { 市 338 / 県 － }

田川の左岸台地上に位置する円墳で墳丘の規模は径約14ｍ高さ約3ｍである。

なお，この円墳を土地の人は単に念仏塚と呼んでいる。

（分布図 39頁・図版327頁）

（339）大堀供養塚群

種別 供養塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 新里町523－1ほか
遺跡番号 { 市 339 / 県 － }

新里の大堀地区の平地に位置している。

円形の塚で15基確認でき，規模は，平均径2～3ｍ高さ0.5ｍほどである。

（分布図 66頁・図版327頁）

（340）滝 明 寺 跡

種別 寺院跡　**時期** 江戸　**現状** 墓地　**所在地** 新里町509–1 ほか
遺跡番号 { 市 340 / 県 — }

藤本館跡（市遺跡番号111）の南に隣接して位置する。
規模は，南北約30m，東西20m屋形型墓石10数基が墓地部分に現存する。
なお，明治初期廃寺になるに及び寺宝は，多気山に寄進したといわれている。

（分布図 56頁・図版327頁）

（341）川俣大塚古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 神社　**所在地** 川俣町192 ほか
遺跡番号 { 市 341 / 県 — }

河内町と宇都宮市にまたがる山田川左岸の低地に立地している。
前方後円墳で，全長約80m，後円部径50m，高さ5m前方部がやや短かく約30mで後円部頂が削平されて神社が建立されている。

（分布図 55頁・図版328頁）

（342）谷口山権現南供養塚群

種別 供養塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 長岡町1236 ほか
遺跡番号 { 市 342 / 県 — }

田川右岸沿いの南北に延びる丘陵の尾根上に立地している。
南北約100mに及んでおり，径4～5m，高さ0.5～1mの塚が約12基一列に並んでいる。

（分布図 52頁・図版328頁）

（343）権現山供養塚群

種別 供養塚　**時期** 江戸　**現状** 山林　**所在地** 長岡町337 ほか
遺跡番号 { 市 343 / 県 — }

大塚古墳（市遺跡番号57）の北，長岡街道を越えた北西から南東に延びる丘陵の尾根上に位置する。
径4～10m，高さ1m前後の高塚が数基並んでいる。

（分布図 75頁・図版328頁）

（344）戸祭山兜塚古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 戸祭町2680–3 ほか
遺跡番号 { 市 344 / 県 — }

戸祭の南北に延びる台地の南端から尾根上に位置する。
円墳6基が散在する後期の古墳群で兜塚は，径約30m，高さ5mで他のものも比較的大きな円墳で，主体部は横穴式石室を伴うと考えられる。

（分布図 95頁・図版328頁）

（345）祥雲寺境内古墳

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 墓地　**所在地** 東戸祭1丁目1番16号
遺跡番号 { 市 345 / 県 — }

戸祭の西方に延びる舌状台地の先端部に位置する祥雲寺境内に所在する。
前方後円墳で規模は，全長約40m，後円部高さ6m，前方部高さ5mである。前方部は，西面しており前方部南隅に石材が露出している。

（分布図　95頁・図版328頁）

（346）宇都宮タワー前古墳

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　公園　　**所在地**　八幡山公園内
塙田5丁目1番ほか
遺跡番号　市 346　県 —

八幡山の南斜面上に立地している。

墳形は，定かではないが円墳と考えられ横穴式石室の天井部が露出している。石室の規模は，全長約5.2m，幅1.2mやや胴張りで，凝灰岩の切り石を使用している。

（分布図　76頁・図版328頁）

（347）御　上　人　塚

種別　高塚　　**時期**　江戸　　**現状**　宅地　　**所在地**　今泉町387—3ほか
遺跡番号　市 347　県 —

市街地北東の住宅街に位置する。

1辺約20m，高さ約1.5mの方形の塚で南面が一部削平されている。江戸時代後期～末期の塚と考えられる。

（分布図　95頁・図版328頁）

（348）樋爪氏の墓（市指定）

種別　墓石　　**時期**　鎌倉　　**現状**　神社
所在地　大通り5—3—10ほか　　**遺跡番号**　市 348　県 —

市街地の通称上河原と称される地区の三峯神社の堂内に安置されている2基の墓石である。

鎌倉期の五輪塔といわれており，奥州平泉の藤原氏の一族樋爪氏の墓と伝えられている。

（分布図　95頁・図版328頁）

（349）おしどり塚

種別　塚跡　　**時期**　鎌倉　　**現状**　宅地　　**所在地**　一番町1—11
遺跡番号　市 349　県 —

鎌倉時代に無住法師によって書かれた「沙石集」によって紹介された物語の塚跡である。

塚の遺跡は，おしどり塚児童公園の東北隅にあり附近は花木，石等によって整備されているほか，塚の由来を記した碑も建てられている。

内容は，求喰川を舞台とした一つがいのおしどりと猟師のいきさつと建碑に至る経過を記している。なお，この碑が建てられたのは明治27年である。

（分布図　97頁・図版328頁）

（350）宇都宮城跡

種別　城館跡　　**時期**　鎌倉～江戸　　**現状**　宅地　　**所在地**　本丸町1番ほか
遺跡番号　市 350　県 —

市街地の南部に位置する。

中世宇都宮氏の居館として築城し，近世に至って一大城郭となったが現在は，本丸跡にかすかに城の名残りをとどめるにすぎない。

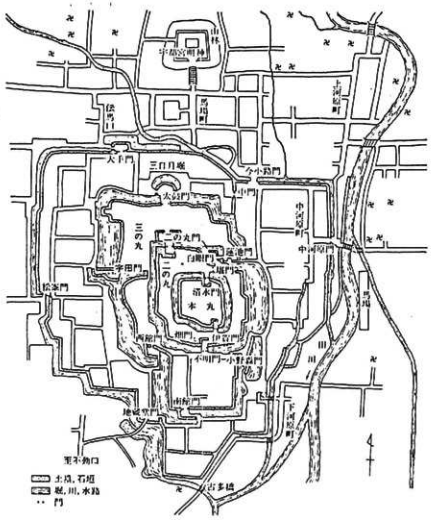
— 参考資料 —　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

田川の西岸に立地する平城で，宇都宮（うつのみや）社惣検校で鎌倉幕府の有力御家人宇都宮氏の館（おそらく二の丸の規模）に繩張りを拡張して，城郭化したものと考えられる。すなわち，南北朝時代を出発点とし，戦国時代には三の丸ほどの規模の城郭となり，元和5～8年（1619～22）の宇都宮藩本多正純の大改築によって，南北900m，

東西850mに及ぶ巨大な近世城郭に変貌をとげた。

北の二荒山神社（宇都社）と城郭は馬場道でつながり，東側を北から宿（田川の東岸，今泉町付近か），上河原，中河原，小田橋（古多橋）の各宿を連ねて鎌倉～奥州道が通っていた（宇都宮家式条）。そして小田橋に駅があった。

廃藩置県後，城跡は分割売却され，破壊と埋立てが進み，その跡に現在の宇都宮の中心市街地が形成され，わずかに残った本丸の一部も近年公園造成のため破壊され，土塁の一部を残すのみとなった。城の景観を残しつつ，都市計画を進めることの出来なかったことは，大へん残念である。



松平忠弘時代（寛文8年～天和元年）の宇都宮城図
（「栃木県史」付録より）二の丸以内はその他絵図により補正

（分布図 97頁・図版328頁）

（351）戸田氏の墓所

種別 墓地　**時期** 戦国～明治　**現状** 史跡地
所在地 花房本町2番ほか　**遺跡番号** { 市 351 / 県 － }

南西部の市街地に位置している。

現在墓域は，東西15m，南北50mであるがかっては広大な宇都宮城主戸田氏の菩提寺英巌寺の一角であった。墓地には，墓石3基と墓誌1基が建立されている。

（分布図 97頁・図版328頁）

（352）蒲生君平勅旌碑

種別 石碑　**時期** 明治　**現状** 史跡地　**所在地** 花房3丁目3番ほか
遺跡番号 { 市 352 / 県 － }

市街地の南西端でかっての宇都宮城下の南出入口に位置している。

直方体の碑が建立されている敷地は，東西15m，南北20mである。

（分布図 97頁・図版328頁）

（353）旭 陵 遺 跡

種別 集落跡　**時期** 縄文　**現状** 畑　**所在地** 西原町188–3ほか
遺跡番号 { 市 353 / 県 36 }

田川の右岸台地上に位置する。

昭和57年の発掘調査の結果，石器類多数と縄文土器が出土した。

なお，本遺跡は県登録陽南荘附近遺跡を改称したものである。

－ 参考資料 －

1. 旭陵遺跡　（昭和57年　宇都宮市教育委員会）

本遺跡は以前から縄文時代を中心とした遺跡として確認されており，発掘調査前の表面観察においても，多数の縄文式土器片を採集している。

このため，発掘調査を行うことによって縄文時代に関する何らかの遺構が検出できるものと期待された。

しかし，調査の結果，縄文時代もしくは古代に関すると思われる遺構の検出は一つもなく，中世以降の所産とみられる溝やピット，また，農作業で使用されたと思われる土坑などが検出された。（中略）

縄文時代に関する遺構は確認できなかったが，各トレンチの耕作土中からは，多数の縄文式土器片や石器類が出土している。

後世の溝状遺構・土坑，さらに農作業における深い耕作などが原因で，縄文時代の遺構は破壊され，土器・石器などが耕作中に散乱する結果となったものと考えられる。

旭陵遺跡出土縄文式土器

2. 宇都宮市史第1巻（昭和54年　宇都宮市）

本遺跡は宇都宮市街地の南端に位置し，標高110m 附近の沖積地面からの比高約8mで，田川の右岸台地上に立地する。中・後期にみられる典型的な遺跡立地を呈している。

本遺跡の主体時期は後期初頭の堀之内Ⅰ式であるが，中期の加曽利ＥⅠ・Ⅱ・Ⅲ式も出土し，後期の加曽利ＢⅠ式，安行Ⅰ式などの土器も出土している石器には石鏃，打製石斧，磨製石斧，敲石，磨石，石錘などがある。

この遺跡はもと畑地であったが，今は宅地造成がすすみ遺物を容易に採集できなくなっている。また昭和30年代に畑地耕作中，河原石を一面に敷いた炉をもった住居跡が発見されたという。おそらく敷石住居であったろう。堀之内Ⅰ式期に該当する遺構のようである。

（分布図137頁・図版329頁）

（354）小原高尾神社古墳

種別　古墳　　**時期**　古墳　　**現状**　山林　　**所在地**　上桑島町868ほか

遺跡番号　市 354　県 －

鬼怒川右岸，沖積低地に立地している。

前方後円墳で規模は，全長約35m，後円部高さ2.5m，前方部高さ2.5mである後円部頂上に高尾神社が鎮座している。

（分布図137頁・図版329頁）

（355）桑　島　城　跡

種別　城館跡　　**時期**　鎌倉　　**現状**　宅地・水田　　**所在地**　上桑島町787ほか

遺跡番号　市 355　県 －

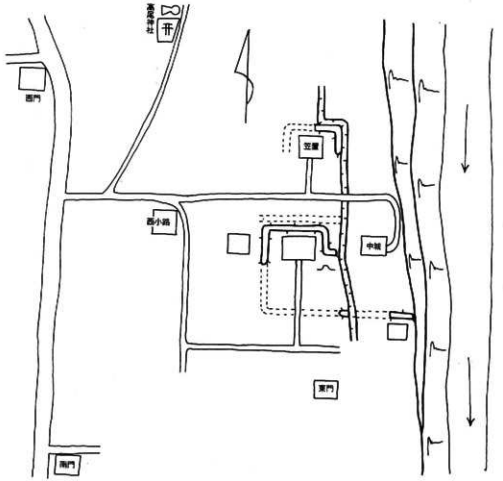
鬼怒川西岸，沖積低地に立地している中世の館跡である。

規模は，東西約50m，南北約60mで北側に土塁一部が残っているが堀は，消失している。

なお，附近に中城，笠置，西小路，東門，南門，西門などの地名が残っている。

－　参考資料　－　　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

現在では鬼怒川の流路は東に500mと隔たっているが，数十年前までは河道に接して館跡があった。この館跡は，県道（下岡本～上三川）の東，鰐渕ヨオ氏宅を囲んで，北側53mにわたって土塁がみられ，その北に堀があったといわれるが現在は消失している。南側は土塁・堀とも消滅している。北方，笠置といわれる地に土塁の一部，東には中城の地名が残されており，外郭を形成したものと考えられる。その外，政所，西小路，東の門，西の門，南の門などの小字が残されており，城館の規模を推定する手懸りとなっている。



桑島城見取図

（分布図139頁・図版329頁）

（356）刑部城跡（市指定）

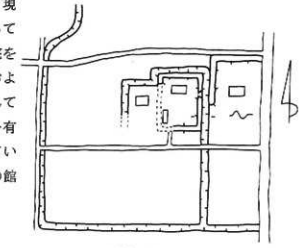
種別 城館跡　**時期** 鎌倉　**現状** 宅地　**所在地** 東刑部町528−1ほか
遺跡番号 { 市 356 / 県 − }

鬼怒川西岸，沖積低地に立地する中世の館跡である。

規模は，東西約42m，南北約95mで土塁（幅2.0m，高さ0.8m）と堀（幅9m，深さ2m）も一部に残っている。

− 参考資料 −　栃木県の中世城館跡（昭和57年　栃木県教育委員会）

鬼怒川西岸，沖積低地面に立地し，現在東に県道（下岡本〜上三川）が走っている。館主の子孫と称する刑部嘉氏宅を中心に，土塁（幅2m，高さ80cm）および水堀（幅9m，深2m）をめぐらしている。東西42m，南北95mの規模を有し，西側の部分の土塁・堀は消失している。宇都宮氏の家臣横田（刑部）氏の館跡と伝えられている。



刑部城見取図

（分布図103頁・図版329頁）

（357）どどづか高塚

種別 高塚　**時期** 江戸　**現状** 竹林　**所在地** 道場宿町27ほか
遺跡番号 { 市 357 / 県 6 }

鬼怒川左岸の段丘に立地している。

清原中央小学校東門前の高さ約3mのまんじゅう形の塚である。

なお，この遺跡は県登録大塚古墳を改称したものである。

（分布図130頁・図版329頁）

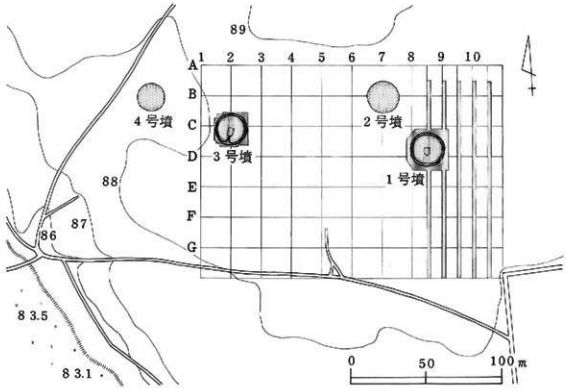
（358）針ケ谷新田古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 針ケ谷町583の1ほか
遺跡番号 { 市 358 / 県 − }

本古墳群は，東川田川と西田川に挟まれた南北に延びる台地上に立地する。周辺の標高は89mから90mであり，緩やかな西斜面となっている。西側沖積地面との比高差は，3〜4mである。

現存する古墳は，みな円墳であり，4基が確認される。規模は，いずれも直径15m前後，高さ1m前後である。

このうち2基の古墳（1号墳，2号墳）は，昭和58年に小学校建設のために発掘調査が行われた。いずれも横穴式石室を持つ古墳であり，土師器，須恵器，直刀等が出土した。



第3図　針ケ谷新田古墳群全体図

（分布図130頁・図版329頁）

（359）幕田古墳群

種別 古墳　**時期** 古墳　**現状** 山林　**所在地** 幕田町1341ほか
遺跡番号 { 市359 / 県 － }

本古墳群は，姿川の左岸台地上に立地する。本古墳群の東方0.7㎞，谷を挟んだ向い側の台地には，針ケ谷新田古墳群が所在している。

現状は雑木林であり，現在10基の円墳が確認できる。規模はやや大小の差があり，大きいもので直径20ｍ，高さ1.5ｍ，小さいもので直径10ｍ前後，高さ0.5ｍほどの規模である。

古墳の周辺から，須恵器片などが表採できる。

（分布図133頁・図版329頁）

（360）猿山遺跡

種別 集落跡　**時期** 奈良・平安　**現状** 宅地
所在地 西刑部町2691−2ほか　**遺跡番号** { 市360 / 県 － }

田川と鬼怒川に挟まれた絹島段丘上に位置する集落遺跡である。

本遺跡は，瑞穂野団地遺跡（市遺跡番号361）と連続するものであり，昭和49・50・53年と3次にわたって栃木県教育委員会によって発掘調査が実施されている。

－ 参考資料 －

1. さるやまA遺跡　（昭和53年　栃木県教育委員会）

猿山遺跡は奈良〜平安時代（真間，国分期）の集落址であり，本住宅団地に東接する新4号国道建設用地内からは50軒近い住居址が発見されている。

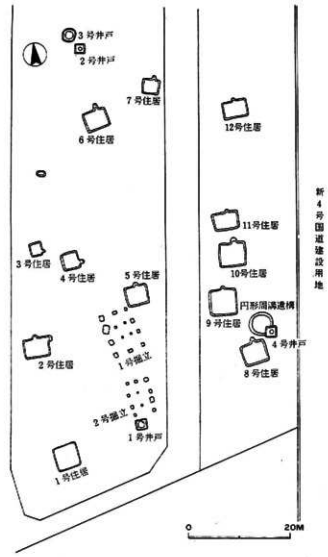
住宅団地内の遺跡は猿山A遺跡として調査を実施したのであるが，すでに造成工事は終了し，住宅が北側から建設されている段階であるため，遺跡として残されている2区域を東区，西区と分けて調査を行なった。

その結果，西区には2棟の掘立遺構と7軒の住居址と3基の井戸跡が発見されている。

住居址は1号は構築途中で放棄，2号は2度拡張，3号，4号，7号は小形の住居址で掘込みの外側に柱穴があるものである。

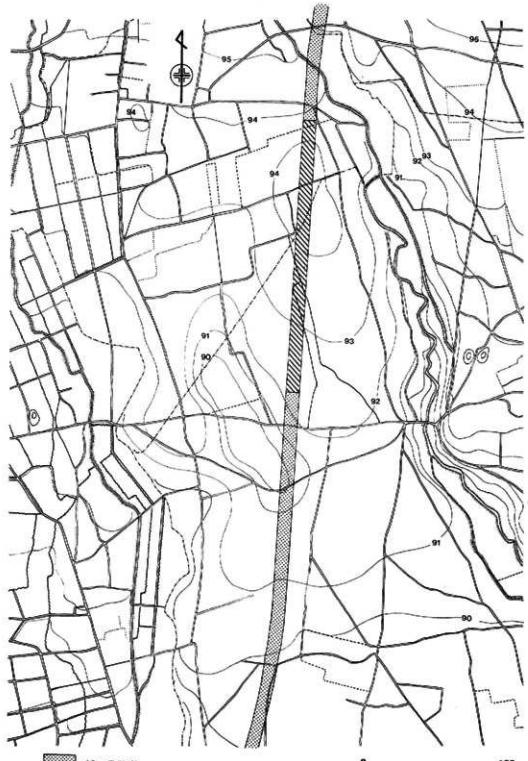
隣接して構築されている2号，3号井戸跡と掘立遺構は構築法が異っており構築時期に差があるとも考えられる。

東区からは住居址5軒と井戸跡1基が発見されている。住居址は同一方向を向き，北カマドであり，12号住居址を除く各住居址には主柱穴4穴がある。4号井戸跡は2号井戸跡と同じ構築法であった。

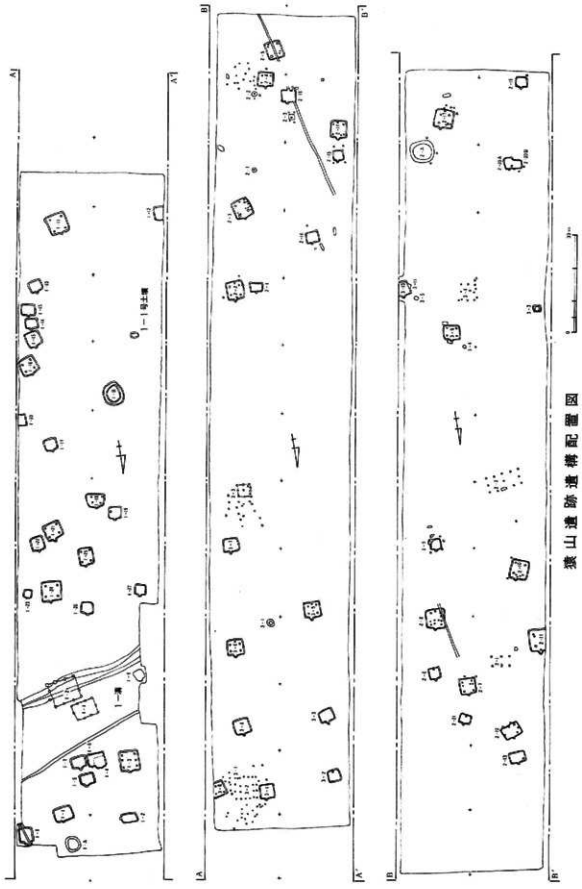


2. 猿山遺跡付久部台古墳群 （昭和56年 栃木県教育委員会）

今回の調査は第1次を昭和49年，第2次を昭和50年，第3次を昭和53年におこなうというコマ切れの調査となってしまったが，総数61軒の住居跡と溝，掘立柱建物跡，井戸跡，円形周溝遺構などの遺構が検出されている。これらの遺構は大略奈良時代後半から平安時代初期にかけて栄えた集落跡とすることができる。これらのうち，猿山遺跡と瑞穂野工業団地遺跡，猿山A遺跡を加えた検出住居跡数は102軒を数える。しかし，未調査部分も残っていることなどを考えるに，数量的に150軒前後の集落を考えることができるのではないかと思われる。この調査された宇都宮市下栗町，猿山町所在の猿山遺跡の東，南には現在も刑部の地名の町内があり，この附近が当時河内郡刑部郷であった可能性も指摘できる。この様に奈良時代から平安時代にかけての集落をほぼ全面に近い調査がなされたものに，県内では真岡市井頭遺跡がある。この井頭遺跡の成立については，芳賀郡衙の建立（整備）に際しての関係が考えられている。この観点から当猿山遺跡をみてみると，井頭遺跡における遺構（住居跡）毎の重複，住居跡の大小，遺物量の少なさなどかなりの共通する部分をもつ。とすれば井頭遺跡と芳賀郡衙の関係を考えるに猿山遺跡についても同様な理解の仕方を与えることはあながち無理とは考えられないといえる。その場合に考えられるものとして，猿山遺跡の南の約13㎞に所在する下野薬師寺と上神主廃寺の存在を無視することはできないものと言える。下野薬師寺の創建に関しては諸説のあるところであるが，8世紀後半には戒壇が設定されたと考えられている時期であり，下野薬師寺の盛期でもある。この下野薬師寺の状況と関連すべき点があったと推察されるのである。さらに上神主廃寺跡については近年河内郡の郡衙との指摘も一部にあり，下野薬師寺との関連以上にその関連性が強いものであったものといえるのではないか。



猿山遺跡地形図



猿山遺跡遺構配置図

（分布図136頁・図版330頁）

（361）瑞穂野団地遺跡

種別　集落跡・古墳　　**時期**　旧石器～古墳　　**現状**　宅地

所在地　瑞穂3丁目3−1ほか　　**遺跡番号**｛市361 県 −

鬼怒川右岸の宝木段丘上に立地し，現在は瑞穂野団地となっている。

本遺跡は，縄文から古墳時代にかけての集落跡で，昭和48年，遺跡の一部を発掘したところ，旧石器や弥生後期の住居跡も検出された。現在，円墳2基が残っている。

− 参考資料 −

1. 宇都宮市瑞穂野団地遺跡　（昭和53年　宇都宮市教育委員会）

瑞穂野工業住宅団地内遺跡の発掘調査は，昭和48(1973)年8月20日から9月11日（うち3日間除く）と10月6日から10月20日の計35日間に亘って実施した。この団地造成地は段丘東側にあたり，遺構の分布はそのほぼ全面にあるものと考えられたが，調査期間・費用等に制限があり，発掘調査は部分的な範囲でしか実施し得なかった。

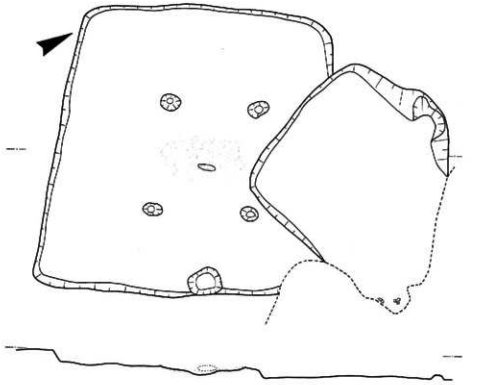
7月27日～29日，造成地内の三地点（それぞれA～C地点とした）を試掘し，その結果A地点（図上）からは何等の検出物はなく，B地点において竪穴遺構1基（現北地区1号址），C地点において同じく1基（現南地区1号址）が検出された。B地点は本報告文中においては北地区（住宅団地予定地）に含まれ，C地点は南地区内（工業団地予定地）に含まれる。発掘調査は両地区とも前述の諸制約のため，機械力を導入しての表土排除から始めなくてはならないので，検出される遺構の性格と遺跡全体の大まかな性格を把えることを主旨として行なった。最終的に調査し得た面積は北地区で約9,600㎡，南地区で約2,800㎡であった。

北地区の調査は8月20日～9月11日（うち3日間を除く）及び10月6日～10月11日の26日間に亘った。表土排除の段階で，総計26址の竪穴遺構を確認したが，竪穴の平面形が長方形と正方形を呈するものの2種あり，また散布する土器片（土師器・須恵器）から少なくとも二時期に亘る住居址群であると判断された。更にこの住居址群には相互に重複するものがなかったので，床土排除にあたっては，後々の住居址の時期判断のため，検出遺物がそれぞれに伴うか否かの区別，各々の遺構に属する諸特徴等を明確に把むことを重要視した。その結果は後述し

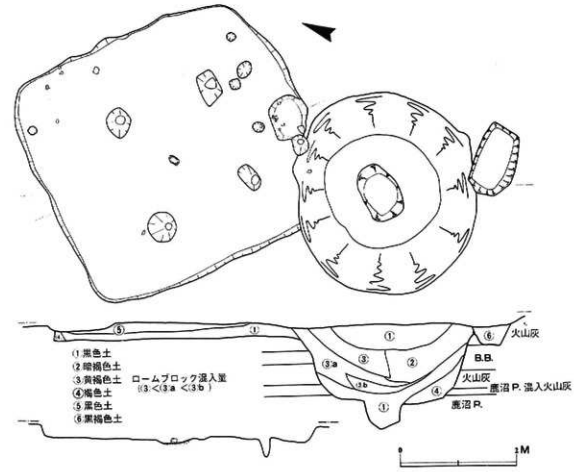
た通りである。

南地区の調査は10月10日～10月20日の11日間実施し，総計10址の遺構を検出した。南地区には北地区と異なり，相互に重複するものが数個所あったので，それらの遺構間には少なくとも一本の断面図用畔を残しながら調査した。また南地区には性格不明の円形遺構が確認されたが，これらの埋積土は非常に厚いため遺構を二分割して調査した。結果は後述の通りである。

再記するが，発掘調査し得た区域は両地区とも段丘の縁辺に近い部分でしかない。発掘調査終了後しばらくして現地を踏査したところ，造成予定地内には数多くの竪穴の分布が見られた。その正確な数値は示すことはできないが，この数多くの竪穴の存在と，それに対して調査し得た遺構数の少なさを思う時，今悔悟の念を生じて止まない。この造成地は現在瑞穂野工業住宅団地と命名され，種々の建造物が進出しつつあるが，場所によっては比較的保存の良い地区がある。これらが何らかの形で再度の調査がなされることを期待するものである。



南地区5号・6号住居址



南地区2号住居址，4号円形有段遺構

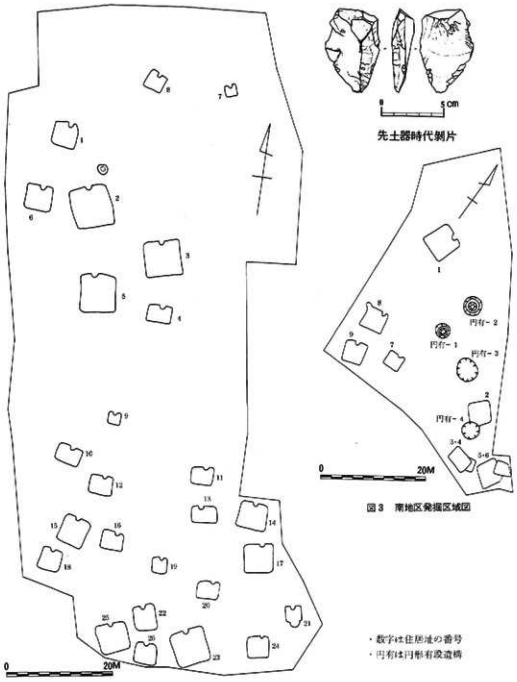


図3　南地区発掘区域図

北地区発掘区域図

2. 宇都宮市史第1巻　（昭和54年　宇都宮市）

西刑部町瑞穂野団地内にある本遺跡は，縄文時代から土師時代にかけた集落跡と重複している。昭和48の夏に宇都宮市教育委員会が主体となり，宇都宮大学考古学研究会によって発掘調査されている。

この遺跡は，鬼怒川に注ぐ船付川の右岸，宝木段丘上に位置している。遺跡の主体時期は土師時代であり，南北に延びた段丘上約1㎞余にわたって土師器片が散布している。このため調査は3地区（A・B・C）に分けて行われたが，旧石器時代の石器が出土したのは，遺跡の最南端にあたるC地区である。石器はC地区南東隅近くに存在した直径3ｍ，深さ2ｍの平面が円形で，断面が円錐形を呈する土壙の壁から検出されたものである。

この石器は剝片（石塊または石核から剝がされた石片）で，長さ6.5㎝，最大幅4.3㎝，最大厚さ1.8㎝のもので，剝離面には凸面を残し，打撃面と剝離面との角度は約125度である。先端近くには僅かに再調整と思われる小さな剝離があり，両側が鋭利であるので，刃器として使用されたのであろう。石質は白色の流文岩である。（中略）

弥生時代の住居跡が発見されたのは，本遺跡の最南端に位置するC地区の南東隅である。住居跡は2軒発見されたが，いずれも土師時代の住居跡や平面が円形で断面が円錐形を示す有段土壙と切り合っていた。

Ⅶ 遺跡地及び出土品図版

1 目　　次

(1) 大網西の内遺跡・大網堂峯遺跡・大網導専内遺跡・牛沢古墳・
安養院跡・門前遺跡・堀の内城跡・田中堀の内遺跡 …… 299
(2) 屋敷裏遺跡・岡平遺跡・向前遺跡・高谷内遺跡・延命寺跡・
田中山口遺跡・御城山遺跡・御城山古墳群 …… 299
(3) 徳次郎城跡・田中定済遺跡・西根遺跡・鎌掘館跡・中妻遺跡・
東原遺跡・中妻寺跡・高谷林一里塚 …… 300
(4) 下横倉城跡・下横倉遺跡・下横倉寺跡・下金井遺跡・
野沢北遺跡・野沢遺跡 …… 300
(5) 野沢遺跡・野沢石塚遺跡・宮内坪裏山遺跡・念仏塚遺跡・
寺山供養塚群・星の宮神社裏遺跡・千貫坊遺跡 …… 301
(6) 大久保牛塚・桜畑遺跡・欠の上遺跡・瓦塚日満北久保遺跡・
立野高塚群・曽理部羅遺跡 …… 301
(7) 上の台遺跡・北山古墳群・園堀土用地遺跡・野沢向内遺跡・
上戸桑一里塚・宇都宮ゴルフ場遺跡 …… 302
(8) 北原遺跡・上戸際中ノ島遺跡・道半塚供養塚群・百穴裏遺跡・
長岡百穴・瓦塚古墳群・谷口山古墳群 …… 302
(9) 三本松遺跡・大塚古墳・大ジノ古墳群・松ケ丘遺跡・長山供養塚群・
前坂供養塚群・諸ケ入供養塚群・田向遺跡 …… 303
(10) 田向遺跡・根河原瓦窯跡群 …… 303
(11) 水道山瓦窯跡群 …… 304
(12) 入畑窯跡群・払面遺跡・山本山古墳群 …… 305
(13) 御蔵山古墳・堀之内遺跡・戸際兎田遺跡・溜山下遺跡・万城路古墳群・
中居遺跡・先道路遺跡・内出遺跡 …… 305
(14) 金山遺跡・中峰遺跡・上篠井高尾神社南遺跡・寿福院跡・久保遺跡・
中坪遺跡・加波山北遺跡・上小池一里塚 …… 306
(15) 上小池古墳群・篠井金山跡・龍興寺跡・下ノ内遺跡・曲坂遺跡・
原遺跡・林業センター内遺跡・古河遺跡 …… 306
(16) 柳町遺跡・六本木一里塚・仲内遺跡・坊村遺跡・石那田遺跡 …… 307
(17) 石那田遺跡・岡坪遺跡・原供養塚・仲根供養塚・桑原遺跡 …… 307
(18) 天王寺遺跡・柿の上遺跡・畑中遺跡・雨乞山遺跡・坂下遺跡・
二ケ山遺跡・茗荷沢遺跡・岡崎遺跡 …… 308
(19) 安五郎内遺跡・藤本館跡・大堀館跡1号・大堀高塚群・大堀館
跡2号・御経塚・白岡遺跡・長林寺北遺跡 …… 308
(20) 岩原神社西遺跡・西沢高塚群・御殿場遺跡・仁良塚遺跡・
源道寺遺跡・山崎古墳群・妙吉塚・宝木古墳 …… 309
(21) 和尚塚・戸用地遺跡・北ノ館跡・稲荷後遺跡・入唐沢遺跡・
寺東遺跡・前原遺跡・日吉遺跡 …… 309
(22) 多気城跡・佐宗前遺跡・大谷寺洞穴遺跡 …… 310
(23) 瓦作古墳群・坂本高塚群・羽黒古墳・外和田高塚群・向山根遺跡・
境木遺跡・漆久保遺跡 …… 310
(24) 梅林遺跡・上の原遺跡・宗円塚古墳群・羽下薬師堂裏古墳・
上の原古墳群・中城跡・御城跡高塚群・中丸北原遺跡 …… 311
(25) 荒針高塚群・サルボ山高塚群・大久保遺跡・台耕上遺跡・
長坂天王寺遺跡・宝性寺跡 …… 311
(26) 高田遺跡・筒花高塚群・鶴田中原遺跡・羽黒下団地遺跡・
長峰遺跡・亀が窪古墳群・上欠団地遺跡 …… 312
(27) 初網遺跡・高尾神遺跡 …… 312
(28) 富士山台遺跡・亀岡坪遺跡・沓掛遺跡・亀岡前古墳群・定使古墳・
植の内古墳・聖山公園遺跡 …… 313
(29) 聖山公園遺跡 …… 313
(30) 聖山公園遺跡・宿坪遺跡・稲荷古墳群・観音塚古墳・根古屋遺跡 …… 314
(31) 根古屋遺跡・並塚遺跡・不動前3丁目遺跡・不動前5丁目遺跡
陽南1丁目遺跡 …… 314
(32) ガンセンター東遺跡・犬飼城跡・主計内遺跡・下砥上愛宕塚古墳・
ひのき内遺跡・下砥上古墳群・下欠北原遺跡・下砥上下の内遺跡
…… 315
(33) 西の内遺跡・大明神遺跡・亀塚古墳・辻の内遺跡・萩山遺跡・
鹿久保遺跡・塚山古墳群 …… 315
(34) 塚山古墳群・旭ケ丘団地北遺跡・旭ケ丘団地遺跡 …… 316
(35) 樋口城跡・権現山高塚群・鶴田西の宮遺跡・陽南市場南遺跡・
若松原遺跡・一向寺別院付近遺跡・二軒屋遺跡 …… 316
(36) 二軒屋遺跡・西原北遺跡・留西遺跡・十里木古墳・綾女塚古墳・
赤沢高塚群・芋内遺跡 …… 317

(37) 雀宮東浦遺跡・雀宮駅東遺跡・牛塚東遺跡・上坪遺跡・
上坪新田遺跡・熊野神社南遺跡・立海道遺跡 …… 317
(38) 見明遺跡・二子塚古墳・牛塚古墳・桜稲荷古墳・杉村遺跡 …… 318
(39) 双子塚古墳・天狗原雀宮中前遺跡・島の前遺跡・赤岩遺跡・
並木遺跡・三ツ矢遺跡・石川坪遺跡・赤土山遺跡 …… 318
(40) 富士見団地北遺跡・宇都宮機器南遺跡・多功神塚古墳群・笹塚古墳・
車塚古墳群・原古墳群・権現塚古墳群・松の塚古墳 …… 319
(41) 鶴舞塚古墳・権現山北遺跡 …… 319
(42) 権現山北遺跡 …… 320
(43) 権現山古墳群・茂原北原遺跡・富士見向山遺跡・西の前遺跡・
大日塚古墳・愛宕塚古墳群・愛宕塚東遺跡 …… 320
(44) 前畑遺跡・小薹遺跡・江面遺跡・上神主廃寺跡・本村上野遺跡
十ケ屋敷遺跡・西原境遺跡 …… 321
(45) 雷電山遺跡・並松遺跡・江曽島北原遺跡・関道遺跡・おしめ尽遺跡
大山祇神社古墳・大房林遺跡 …… 321
(46) 下栗大塚古墳群・大塚神社古墳群・追金仏遺跡・大久保台山遺跡・
天王山古墳群・東原古墳・さるやま城遺跡・南原古墳…… 322
(47) 西刑部西原遺跡・柿木坂遺跡・根本西台古墳群・根本遺跡・
飯塚古墳・飯塚山古墳・大関台遺跡・大関高塚群 …… 322
(48) 平塚原根岸遺跡・平出城跡・免の内台古墳・山下台高塚群・
三日月神社古墳・三日月神社南古墳群・久部浅間山古墳・久部
愛宕塚古墳群…… 323
(49) 久部愛宕塚古墳群・石井城跡・石井久保田古墳群・古坂峯高塚・
中丸遺跡・板戸愛宕塚古墳群・山田遺跡…… 323
(50) 不動上供養塚・不動山古墳群・不動遺跡・日陰坂上古墳群・
鎮守林西遺跡・淡路城跡・向原遺跡・満美穴古墳群 …… 324
(51) 赤高地遺跡・同慶寺館跡・竹下浅間山古墳…… 324
(52) 竹下浅間山古墳・飛山城跡…… 325
(53) 竹下遺跡・千波ケ原遺跡・鐘山東原遺跡・氷室中の島遺跡・
免の内遺跡 …… 325
(54) 臼内遺跡・大杉神社古墳・中台西遺跡・氷室中妻遺跡・
中台東古墳・東中台遺跡・土堂塚・中台遺跡 …… 326
(55) 中台高塚・おひじり塚古墳・千波稲荷神社古墳・小松原遺跡・
妙音寺高塚群・中極高塚群・東田遺跡・シドミ久保遺跡…… 326
(56) 西原庚申塚群・上籠谷笹塚古墳・西向遺跡・上籠谷和尚塚・
小泉庚申塚群・下西原遺跡・下上遺跡・無宗古墳群 …… 327
(57) 星の宮遺跡・電気掘跡・宝木用水堰・妙哲禅師の墓・
下横倉念仏塚古墳・大堀供養塚群・滝明寺跡・川俣大塚古墳 …… 327
(58) 谷口山権現南供養塚群・権現山供養塚群・戸際山兜塚古墳群・
祥雲寺境内古墳・宇都宮タワー前古墳・御上人塚・樋爪氏の墓・
おしどり塚…… 328
(59) 宇都宮城跡・戸田氏の墓所・蒲生君平勅旌碑・旭陵遺跡…… 328
(60) 小原高尾神社古墳・桑島城跡・刑部城跡・どどづか高塚・
針ケ谷新田古墳群 …… 329
(61) 針ケ谷新田古墳群・幕田古墳群・猿山遺跡…… 329
(62) 瑞穂野団地遺跡 …… 330

2 例　　言

(1) 本図版の掲載順序は，市遺跡番号の順とした。

(2) 本図版に掲載した「表採土器」のうち土器片及び「表採石器」は，当教育委員会が保管している。

(3) 本図版のうち①～⑮と記るした写真は，既刊の書籍からの転載で，書籍名は次のとおりである。

① 栃木県史資料編考古1，昭和51年，栃木県
② 宇都宮市史第1巻原始古代編，昭和54年，宇都宮市
③ 山本山古墳・水道山瓦窯跡発掘調査報告書，昭和54年,栃木県教育委員会
④ 水道山瓦窯跡群，昭和57年，宇都宮市教育委員会
⑤ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和57年，栃木県教育委員会
⑥ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和58年，栃木県教育委員会
⑦ 栃木県埋蔵文化財保護行政年報，昭和54年，栃木県教育委員会
⑧ 塚山古墳群，昭和54年，栃木県教育委員会
⑨ 雀宮牛塚古墳，昭和44年，宇都宮市教育委員会
⑩ 権現山北遺跡，昭和54年，宇都宮市教育委員会
⑪ 栃木県の中世城館跡，昭和57年，栃木県教育委員会
⑫ 猿山遺跡・付久部台古墳群，昭和56年，栃木県教育委員会
⑬ 竹下浅間山古墳，昭和51年，宇都宮市教育委員会
⑭ 旭陵遺跡，昭和57年，宇都宮市教育委員会
⑮ 宇都宮市瑞穂野団地遺跡，昭和53年，宇都宮市教育委員会